BACK TO THE BIBLE

GEORGE McCREADY PRICE

一宮政吉譯

科学と聖書信仰

東洋宣敎會出版部

原著者ジョージ・マックレディ・プライス學士は現今亞米利加に於ける小壯學者の錚々たる一人であつて、一切の僞科學、僞哲學、僞宗教に對抗して張れる堂々たる論陣の第一戰に立てる神の闘將である。本書の外「地質學基本」「天地創成に關する新說」「神の二書」其他の著あり、何れも好評嘖々たるものである。

God left free the will; for what obeys
Reason is free, and reason he made right;-
But bid her well be ware, and still erect,
Lest by some fair-appearing good surprised,
She dictate false, and misinform the will,
To do what God expressly hath forbid.

——"Paradise Lost," IX, 351—356.

神は意志に自由を許した。自由とは理性に從ふもの、そして理性は正しく造られた。併し、神は之に警戒し、常に眞直たれよ。然らずば、何か立派に、善良げに見ゆるものに瞞されて、汝は意志に間違つた命令さ誤謬を齎らせ、神の明かに禁じ給ふた事を爲さしめんさするに至らんと。

『失樂園』第九節三五一——三五六行

著者の序言

本書の標題『新宗教改革』(The New Protestantism) なる語の説明は本書の態度の梗概として役立つであらう。

我等の熟知せる新教主義 (Protestantism) 即ち古き新教主義は人間生活の各方面、即ち智的、宗教的、社會的全般を壓迫せし暴壓に反抗して掲げられし獨立宣言であつた。今日我等は別種類の暴壓の下に投ぜられた、羅馬舊教のそれに對して、余は之を似面非科學主義と名づくる所のものである。第十六世紀の改革者等の面せし問題は聖書を教會的傳説に對抗して擁護する事であつた。第二十世紀の改革者等の當面せる問題は、その隷屬者の人數と赫々たる人名の催眠術とによつて已に倨傲、獨斷的となれる所謂科學に對抗して、卑しめられ輕んぜられて居る

聖書の權威を擁護して立つ事である。
著者及び著者の代表する人々の考はこうである。近代の基督者は基督教の教理と、基督教の基礎とせる歷史的事實とを生物學の言語に譯さんと務めて（譯者いふ。發生學的進化論的に說明せんとした事）ノースチシズム(Gnosticism)及び新プラトー哲學（Neo-Platonism）の方法をもはや長い間試みて來た。そして此方法の逆轉せる新-新敎主義(Neo-Protestantism)の方法は順序上次に來るべきものであつて少くとも試むべき價値ありと信ずるのである。妥協的なるあらゆる方法が試みられたが然も其結果は恒に相も變らず失敗と混亂に終つた。何故も一度聖書を十六世紀の人々が取扱つた如くに取扱はないのであるか？　何故創造と洪水の記事を額面通りに取つて、而して後に通俗な進化論哲學の主張を、何等の妥協なしに、初代基督敎主義の光によつて檢査しないのであるか？

現時の急迫せる要求に應じて基督教基本的眞理の完全なる再說を試みたる近代的書物は幾つあるか殆んど皆無といふ狀態である。然し眞實に神の權威ある言として今なほ聖書を其心底に抱擁せる人々の數は、それが文學世界に於て惹きし注意の僅少なるに比して比較にならない程大である、そして此書物の著された目的は其等の極端なる保守派とも呼ばるべき多數の人々の意見を發表したに過ぎないのである。玆に提唱せる基本的立脚點は全文明世界に亘つて敎養ある幾千萬人の抱擁せる意見と全然一致せるものたるをいふは決して過言ではない。是等の人士は現代の要求に關し明白なる閃光を感受せるものであつて、今や大なる世界的改革が、宗敎の第一にして且基本的眞理即ち我等の造物主に對する關係、及び彼の我等に對する關係を中心として惹起せられんとせるを認めて居るのである。此書は是等人士の未だ公式化せられざる思想の發表である。

聖書の權威を擁護して立つ事である。

著者及び著者の代表する人々の考はこうである。近代の基督者は基督教の教理と、基督教の基礎とせる歷史的事實とを生物學の言語に譯さんと務めて（譯者いふ。發生學的進化論的に說明せんとした事）ノースチシズム（Gnosticism）及び新プラトー哲學（Neo-Platonism）の方法をもはや長い間試みて來た。そして此方法の逆轉せる新-新敎主義（Neo-Protestantism）の方法は順序上次に來るべきものであつて少くとも試むべき價値ありと信ずるのである。妥協的なるあらゆる方法が試みられたが然も其結果は恒に相も變らず失敗と混亂に終つた。何故も一度聖書を十六世紀の人々が取扱つた如くに取扱はないのであるか？　何故創造と洪水の記事を額面通りに取つて、而して後に通俗な進化論哲學の主張を、何等の妥協なしに、初代基督教主義の光によつて檢査しないのであるか？

現時の急迫せる要求に應じて基督教基本的眞理の完全なる再說を試みたる近代的書物は幾つあるか殆んど皆無といふ狀態である。然し眞實に神の權威ある言として今なほ聖書を其心底に抱擁せる人々の數は、それが文學世界に於て惹きし注意の僅少なるに比して比較にならない程大である、そして此書物の著された目的は其等の極端なる保守派とも呼ばるべき多數の人々の意見を發表したに過ぎないのである。玆に提唱せる基本的立脚點は全文明世界に亘つて敎養ある幾千萬人の抱擁せる意見と全然一致せるものたるをいふは決して過言ではない。是等の人士は現代の要求に關し明白なる閃光を感受せるものであつて、今や大なる世界的改革が、宗敎の第一にして且基本的眞理即ち我等の造物主に對する關係、及び彼の我等に對する關係を中心として惹起せられんとせるを認めて居るのである。此書は是等人士の未だ公式化せられざる思想の發表である。

是等の新宗敎改革者に由つて用ゐらるゝ科學的論據は勿論こゝでは其梗概に止まるのであつて、其詳細は宜しく本著者の他の著作に就て視らるべきである。

米國カリフオルニヤ洲
パシフキツク、ユニオン大學にて

著　者

序

基督教は昔時より今日に至るまで、聖書の權威を以て立て來たものである。腐敗せる羅馬天主教は聖書よりも法王の教權に重をおくやうになつた。これに反抗して起つたものは新教主義である。この聖書信仰は遂に教權主義に打勝つた。今度は新なる教敵が顯はれた。それは科學萬能を唱ふる智權主義である。如何なる者もその前に兜を脫がねばならないやうな勢である。これは遠慮なく聖書に切込んで來た。狼狽の餘りこれと妥協したるものは聖書の高等批評家や、近世主義である。其結果基督教會の信仰はこれが爲に蹴散らされ、見る影もない狀態に陷つた。

此慘狀を見て猛然と立上つたものは聖書信仰の一隊である。どこまでも聖書神

言一點張で戰ふた。今や全世界を通じて此戰爭は實に激烈である。其餘波が我國にも押寄せて居る。されば日本敎化の爲に油斷すべからざる時である。此時に際し戰友一宮兄は極めて鋭利なる武器である本書を飜譯せられた　これによりて我等純福音信者は百萬の援兵を得たよりも心强く思ふて居る次第である今は聖書に歸れとの叫聲が頻に唱へられて居る時である。新プロテスタンチズムが起らねばならぬ時になつた。されば本書は必ず多の人々を光明に導き、科學といふ假面を被つて弱き信者を脅かすサタンの化の皮を引剝ぐに最も良きものであると信ずるものである。

千九百二十七年三月宗敎法案に反對の眞最中

中　田　重　治

例　言

一、シカゴ大學教授ウヰルキンソン博士は本書を評していふた、

『余は卿の書を表紙から表紙まで讀んだ。斯するうちに余は滿足、賞讃、歡喜、感謝の念で一杯になつた。此は實に偉大なる著である。神は驚くべく卿を祝して之を書かしめ給ふた。…………

現時の要求にかくも正確且有効に適應せる書を神學書中他に見出さないのである。此書に示されたる著者の智的且靈的洞察は眞に驚嘆に値するものがあり之に加ふるに問題の取扱に必要なる哲學的及び科學的準備を著者は十分に具備せるを見るのである。…………』

一、本書の趣旨及び目的は本書自らをして語らしむべきであるが、余は著者

の眞に預言者的洞察を先づ知つて、後全體を熟讀するを以て一層有益たるべきを思ひ、讀者に先づ最後の第十、十一、十二章を閲讀せられん事を薦めたいのである。

一、本書の代表する思想は英米の宗教界及び思想界に一大波紋を生せしめつゝあるものであつて、進化論及び其を基礎とせる僞科學と僞宗教とに對する挑戰として、今や全基督教國(クリステンドム)を二分しつゝあるものである。

一、本書の標題は "Back to the Bible"『聖書に歸れ』、

或は "Neo-Protestantism"『新-新教主義』

といふのであるが、本書の内容より之を『科學と聖書信仰』と譯者が勝手に變更した事を斷つておくものである。

目次

附　錄

科學と聖書信仰

ジョージ・マックレディ・プライス著
(George Macready Price.)
一宮政吉譯

第一章　新宗教改革

"Mock on, mock on, Voltaire, Rousseau!
Mock on, mock on, tis all in vain!
You throw the dust against the wind,
And the wind blows it back again."

——William Blake.

嘲ろべし、宜しく嘲ろべし、ヴォルテイヤよ、ルーソーよ!、　嘲るべし、宜しく嘲るべし、
然し凡ては無益だぞ!　貴君等は塵を風に向つて投げて居る、　しかし風は塵を吹き返す
ばかりなんだ。　ウヰリアム、ブレーキ

一

亞米利加、大英國、及び其殖民地の英語國民は疑もなく地上に勃興し繁榮する事を許されたる最高の帝國を形成せるものといふ事が出來る。地の四隅にまで我等は我等の習慣、我等の法律、我等の社會的且宗教的理想を携へて行つた。全世界の人口の三分の一以上と其富の優に二分の一以上は我等の指揮と支配に委ねられ、世界は文明と非文明とを問はず、教育、道德及び宗教に關する萬般の事に於て其模範と理想を我等に向つて要求するやうに大體成つて來ておるのである。

是は理由なき事ではない、過去三百年間我等は開かれたる（オープン）聖書（バイブル）の民であつたのである。希伯來民族の排棄せられて以後、主として我等に聖書の保管が委托せられたといふ事は決して輕い責任ではない。第十六世紀の宗教改革以後、全人類世界に聖書を印刷、頒布するに由り、聖書の宗教を擁立し且傳播する上にアングローサクソン民族は

他の凡ての民族を一つに合せたよりも、より大なる貢献をなした事は否まれない事實である。簡單にいへば、英語國民は新教主義（Protestantism）の具體化せるもの、聖書の宗教が民族の上に如何なる感化を與ふるかといふ事の活ける例證として認めらるべきである。

國際關係の緊張せる今日の狀態に於て、國民と國民との不快なる比較論は勿論避くべきである、がしかし此の數百年に亘つて我等が神の御言に對して採りし態度の故を以て、國家的運命を掌握し給ふ絕對の主權者は、アングローサクソン民族をして泰西文明の傘下に來りし非基督敎民族の上に大感化を有する事を許し給ふたのである。英語聖書の國語が世界商業の言語となり、英語國民の科學的發見と工業的發明とが全世界に喧傳せらるゝに至つたのは決して偶然の出來事ではないのである。

されど僅か此の數十年の間に重大なる變動が生じた。其の突發的なるとその範圍の宏大なるとに於ては、此變動は人類歷史に嘗て其比を見ないのである。此變動及び其

源因と結果とを研究せんとするのは本書の目的である。

二

前節に逃し變動の由つて以て起りし源因に一言、言及しおく事は其變動の中に含まるゝ主義を諒解する上に我等を助くるものである。聖書を神の權威ある言、人類に超自然的に與へられたる默示と信ずる者の觀察點より事態を論ずれば、先に擧げし變動は背教を持來する爲に惡の靈が代々使ひ來つた所の慣用手段、即ち人生の指導として神の言以外の他のものを採用せしむる事に起因して居るのである。

例を擧ぐれば、宇宙と其起源に關して全く變つた考が今日文明世界の殆んど凡ての大學に於て教へられておる。聖書の天地創造説は力を極めて排斥せられ、其を排斥する結果福音的基督教の基礎的眞理は拒否せられ、其結果聖書は生ける神の默示として は何等の眞實の價値なきものとせられて來たのである。印度教（Hinduism）の哲學と

殆んど區別し得ないやうは汎神敎的哲學が今日急速なる速度を以て英語國民の宗敎に取つて代りつゝあるのであつて、その避くべからざる結果として既に道德的及び政治的理想と、人々の社交的及び家庭的慣習に於て著しき廢頽的傾向が認めらるゝに至つたのである。

否、此變動は啻に英語國民に限られてない。既に歐州の各國民と、日本及び急激に覺醒し來つた支那にまで傳染して居るのである。されど此變動に對する責任は聖書を世界に傳播する上にあれ程貢献した民族の直接負ふべきものである。たとへ獨逸が近世唯理論(Rationalism)の本場であるといはれ、亦其國民が殆んど擧げてダルウィン說の殘忍なる倫理觀を最も完全に受容れた事は事實なりといへ。我等の忘れてはならない事は『一樣性說』(Doctrine of Uniformity　譯者註、之は千八百三十年にライエルが「地質學の原則」なる書物を著して、地殼の變遷は決して一時に起つたものでなく、幾千萬年の間に漸々進化したものだと論じ、以來數多の學者が編み出した所の地層の

順序と其年代に關する臆說である。）を始稱したライエル（Lyell 一七九七―一八七五年）と生物學的進化論を唱道したダルウィン（Darwin 一八〇九―一八八二）とは共に英國人であつた事と、我等が論じて居る大變動の根底に之等の二觀念が横はつて居るといふ事である。

之等の事相は何の前兆であるか。斯の如き過激にして廣範圍なる變動の結果如何。吾人のそれを好むと然らざるとに關せず、亦はそれが善を齎らすと信ずるか或は惡を齎らすと信ずるかに係らず、人々の智的及び宗敎的信念に於ける之等の革命的變動は周知の事實であつて、若し何等かの方法に依つて吾人が現狀態の評價と將來に對する豫想とを下し得るとせば斯る研究は確かに思慮ある人々の注意を要求するに足る最も緊要なる研究の一である。

三

人智が暗黑時代の眠より覺醒せし時、そこに彼の前に展げられたる神の二つの書物記されし言と自然の書、のあるを發見した。兩者とも熱心に研究せられた、そして前者（聖書）の眞理が後者（自然）の研究に對し指導的位地を許容せられし限は、即ち聖書が神の、より彪大にして一層不明瞭なる書（自然）より來る道德的及び宗教的教訓に對する鍵（自然の事實に對する鍵でなく、事實より來る教訓に對する鍵）として其の特有の感化を許容せられし限は、人類は此等の二大默示を理解する上に迅速なる進步を遂げた。罪惡の障礙なかりせば自然界は今も尙神の品性とその律法とを完全に默示するものであらう。亦若し我等の能力に罪惡の曇らし迷はす感化がなかつたならば、我等は今も雲霧に、貝殼に、岩石に、天父の愛の御言を讀む事は易々たるものであつたであらう。されど自然は毒せられ、多の點に於て曲げられ歪められて來た、それで今は正確に造物主を表示する事をせず、同時に人間の理性も惡の遺傳的且つ習慣的傾向のために壓せられて、それ自身に於ては我等が有する記錄を正解する爲に信賴

し難きものとなつた。されば天の神は其憐に由り、人生の智的、道徳的、及び宗教的各方面に於ける指針として書き記されたる默示を我等に與へ給ふた。そして聖書を斯の如き指針として終始一貫、變らざる個人及び國民は恒に繁盛と成功とを以て祝福せられたのである。

すべて教師たる者は、その生徒に幾許を教義的に與へ、幾許を生徒自身をして發見せしむるために遺すべきかを決定する事は大切である。自ら發見せし眞理は最も強く心底に印銘せられるものであるが、然し眞理を發見するために費す所の努力に對し、斯くして得られる所の利益が比例にならない程僅少ではならぬ。其と同様に、大教師なる神が人類の教育を企つるに當つて、彼は同一の問題に直面せられたのである。幾許を我等に告ぐべきか、幾許を我等自身の發見に托すべきか。聖書に於て我等は彼が我等に告ぐべく決定せられた分を有ち、自然界と個人的及び國民的經驗とに於て我等は彼が我等自身をして發見せしむべく決定せられた分を有つのである。然し或者は彼

がその教科書に於て餘り僅かしか告げなかつたと苦情を言ひ、亦或者は餘り告げ過ぎたと不平を言ふ――此の人々は實驗室で一切自分で實驗し且つ發見しなければ滿足が出來ないのである。なほ他の者等は教科書と自分等の實驗室の手帳に控へたる結果とが一致しないといふて呟く。亦或者はもつと極端な迷論を吐いて、元來その教科書(聖書)は我等の實驗室の作業に於て我等を助くるために書かれたものでない――換言すれば聖書は科學を教ふるために決して書かれたのではないといふ。一般的傾向は人々が漸次的且つ無意識的に天地創成に關する此の新智識を、實際の創造の根本的眞理を不分明にするが如き方法で用ゐ始めたのである。吾人の感覺の使用に由つて發見せらるる所の自然界の大事實は、歸納的論理によつて一定の結論を形成するために材料(data データ)を吾人に提供す。そして吾人がその問題に關する一切の材料を有する問題にのみ吾人の結論を限定し、且つ其結論とそれが思想の他の部門とに對する關係を完全に諒解するならば、吾人の結論はこゝに始めて三段論法の權威と價値とを有するも

のとなるのである。他の言を以て之をいへば、吾人が吾人の有する材料（data）の制限を越えて其範圍外の結論に飛ばざる以上、吾人の到達する結果は論理的に且つ科學的に確實なるものである。然るに實際吾人が宇宙に關して有する材料（データ）は、無數の分離せる小群より成つて居り、之等は相互間に何等の認め得べき聯絡なく、ただ言語の懸橋によつて人爲的に聯絡せられてあるのみである、されど之等の感覺的智識より得る如何なる結論よりも遙かに高く且つ廣きものは默示の大なる靈的眞理――たとへば創造及び贖罪の如き――である。そして之等の靈的眞理は我等が自然の書を探究して得るすべての結論を形成し且つ導く上に、恒に指導的立場を與へられねばならぬものである。之等の靈的眞理を最高法院とし試驗石として如何なる新觀念をも檢査すべきであつて、我等は自然界より拾集せし碎片的にして曖昧なる證據に基ける實驗室の記錄に對し、それが人生の教科書として神より賜ふたる默示の、遙かに一層確實なる、遙かにより善く證明せられたる、遙かに一層容易に理解せらるる眞理と根本的に

相異せる場合、我等は其實驗室の記錄を疑ふ權利を十分に有するものである。

正確なる歸納的論法は大なる價値がある。それは人智の發達に於て主要なる位地を占むるものであり、亦神が我等をして智識を獲得せしむる爲の方法の一として與へられたものである。されど單に物理學的及び生物學的材料（データ）の上に根據を置く所の歸納的論法よりは一層高き光がある、――即ち凡ての自然界が其下に來つて輝らさるる所の光で、此光は記されたる神の言よりいで來るもの、亦時には×神の靈（みたま）の探海燈（サーチライト）に由つて靈に閃入せらるるものである。（×註、之は時々間違へらるるが「直覺」とは異なれり）それで我等が感覺又は歸納的論法に依つて發見する所の自然界の智識が、我等の足を神の眞理の大殿堂に向けしむるために使用せらるるか、或は信仰に對する幇助として用ゐらるるならば、それは正當な道に使用せられたのである。然し乍ら此の自然界より拾集せし碎片的智識のみを用ゐ、科學的探究の複雜迷路に於て吾人を指導するために與へられたる默示のより高き光を無視して、宇宙の全哲學を組織せんとする

が如き愚擧に出んか、其時には之等の似而非科學的方法は迷想妄念となり畏となり、斯くて僅少なる限られたる材料(データ)より偶發的に形成せる「絕對的」或は宇宙的結論はつねに、起源(オリヂン)、義務(デューテイ)、及び運命(デスチニー)の最大問題に關しては欺瞞的のものとなる事が發見せらるのである。

然しこの一世紀間ほどに之等の似而非科學的方法が神の二書——自然と默示——を研究する上に大に幅を利かして來たのであつて、今や殆んど一般的となつたのである。之が代表的なる一例は聖書研究に應用せられたる所謂「高等批評」なるものである。自然科學に於ては「純粹科學的方法」なる傲慢な、しかも人を迷はす名稱を取つて現はれたものである。されど此の兩者とも同じ誤謬を犯して居る。それは何ぞといふに兩者とも己が研究と實驗室より、神の靈を排斥し、自然と聖書との默示を單に人間的唯理的方法にて、しかも眞理の完き智識に至るべき途を永久に塞ぐが如き多の制限を前以て置き列べながら、研究せんと企てて居るのである。聖書及び歷史批評學の畑に

於て此方法は其結果として、奇跡の可能性と奇跡の記事の効力、預言の事實と預言の記事の効力とを無視し或は否定するに至つたので、短かく言へば基督敎會が恒に諒解し來りしが如き意味に於ける、神的默示の眞實を否定するのである。自然科學にありては此方法は結果として「一樣性說（ユニフォーミチー）」と進化論とを產出した。そして其等學說の本質は、過去の或時期に於て實際の劃期的なる創造があつた事を否定し、今我等の世界に起りつゝある現象が過去に於て起りし一切を測量する尺度であるとなし、實の處、現在植物、動物及び岩石に起りつゝありといふ變化は、過去にあつたと同樣な創造の一部であるといふのである。「繼續的創造」なる矛盾せる名稱が此槪念をいひ表はすために時々用ゐらる。斯くて之等の僞の硏究法を以て創世記より馬拉基書に、馬太傳より默示錄に行けども、そこに何等の攝理と預言の蹟を見出さないのである。亦物理學と天文學より、生物學と地質學とに案內せられるが、そこにも何等の奇跡の這入る餘地、祈禱の必要、創造の記錄、神的仲保者、贖罪主の必要を見出さないのである。

眞理の探究に於て斯の如き拘束の下に自縄自縛を甘んじ乍ら、しかも自らは正確なる論理を辿れる者だと主張せるを聞くは甚だ諒解に苦しむ所である。かの哲學者の王と稱ばるるサー・アイザック・ニウトンは永い前に彼が嚆(はじ)めて近世の科學的研究法を世に發表した時に、さきに述し研究法の制限を指摘したのであつた。彼は示して言ふた解析或は歸納は現象より原理に進み、『結果より源因に、特殊的源因より一層一般的源因に遡り、遂に最も普遍的源因に達して議論は終る』と。そして彼は注意して次の事を指摘した、即ち自然界に於ける個々別々の探究は之を或點まで進めたならば、必ず『最も普遍的』源因、即ち宇宙の創造者であり且保持者である者に到達すべきであると。彼はいふた『自然哲學に於て、現象より神に歸納するは理性に適へる事である』（原理論第三卷）"Principia." lib. III）ベーコンも亦殆んど同樣な事をいふた、普遍的智識の大本と貯藏所より碎片的に特殊の科學を引出す行爲を彼は「智識の邪魔物」の中に數へたのである。彼特有の面白い言で彼はその當時よりも今は遥かに一般的と

なれる方法の甚だ狹隘にして制限せられたる性質を解說した、『余は時々、最も深遠な學者振つた人々が或る特殊なる議論を取扱ふに當り、恰も間に合せに井戸から釣瓶で水を汲むやうな眞似をして居るのを見る、然し其議論の源泉には達して居ないやうに見えるのである』と("Interpretation of Nature," I, 380, 53)

されど近代の所謂科學及び哲學の半可通者輩は之等眞の歸納的科學の開祖であり泰斗たる人々の賢明なる忠告を無視して、聖書と自然の書を取扱ふ彼等の方法が唯一萬能であつて、その自ら作りし籬の中にある小天地に於て、一切の現象を自ら完全に解析し說明して過たずと誇張するのである。そして彼等は井中の蛙で、外部智識の淵源より何等の助を求めんとはせず、否自己の關係せる小天地以外には何物もあらざるが如く考へて居るのである。之は科學的專門、分科の極端なる結果である。

されど我等の有する智識の範圍內に於ける一切の事實より正直にベーコン式に歸納して、ニウトン及びベーコンが暗示せる如く、普遍的結論を呼起し、そして其が現行

の說に大なる不安を與ふる時、それが彼等のいふ『非科學的』『非論理的』となるのである。進化論が今全地を占領して居るのであつて、之は動かさるる事を欲しない。されぱたゞ一個の生物學者に過ぎないハックスレー(Huxley)が地質學や萬物の起源について喋々しても、其は全く論理的であるとせられ、亦一個の生物學者たるヘッケル(Haeckel)が『地質學的時代』を通じて生命の種々なる形體が現はれし正確なる順序を記述し『宇宙の謎』に對する彼の解決が無謬なるを斷言しても、それは科學的であるとせられた。そして又今論じて居るやうな意味に於ては全然科學者でなかつたスペンサー(Spencer)が地質學や生物學につきて長つたらしく記述し、その過去、現在、未來に亘れる宇宙の綜合哲學を編出す事は全く哲學的であるとせられたのである。然し今日若し我等が自然に關する遙かに增大せる智識を有せるにもかゝはらず、一朝自然界の全部に對する測定を下さんと試むるか、或は全體に對する總括的觀察より敎訓を得んと試むるか、然らば其が如何に緻密にして完全の方法を以て試みられたにして

も、直に專門學者等は一人一人起ちて抗議を持出だすのである。各々專門の顯微鏡的保藏物には觸れて吳れるなといふ、そして我等を呼ぶに、己が範圍を守らざる科學的犯罪人の名を以てするのである。『一體、君は誰だ？　地球の何處を發掘して見たんだね？　若し君が宇宙の此部分について何かいひ度いならば、正規の手順を踏んで、官憲を通じておいでなさい』と。

斯くて、自然界の普遍的觀察は現在廣く信奉せられて居る所の多の觀念に必ず打擊を與ふる事となるのであるが、しかも科學が今や權威(オーソリチー)の要素となつて居るのであつて何人も自然を廣義に觀察し、或は我等の有する智識の範圍內に於ける自然界の凡ての事實の總和より普遍的歸納を引出す事は許されてゐないのである。若し之を犯す者は科學界より破門の浮目に遭はねばならぬ現狀である。

言を換へていへば、專問的學問が全地面を先取して仕舞ふた、そして各自の地所に標木を立てて『個人の所有地、入るべからず』として、全體の測量を拒んで居るので

ある。科學者等は一種の道徳法を編出して、森林全體の觀察を禁じ、各人は自己の鼻先にある一本の特別の木にのみ其觀察を限るべき事とす、と定めて居るのである。

然し之等の鼹鼠(もぐらもち)のやうな目をした先生達が、智識の全原野を先買したわけではあるまい。顯微鏡と試驗管と測斜器と他の精密な器械だけが宇宙の大問題を考究するために我等の使用し得る手段ではない。我等の能力の範圍內の如何なる手段に由るとも、たゞ自然界の呈供する事實のみにては、到底我等の自然と自然の神とに對する關係を廣義に究める事が出來ない。從つて其結論に基いて、我等の義務を定め、我等の起源と運命とを指示する事は出來ないのである。此の計算に於ては餘程大切な澤山な要素が除外せられて居る。我等の感覺は正確に見、感じ、聞くやうに訓練せられざれば、殆んどつねに我等を欺き、我等をペテンにかけるものである、之は皆熟く知つて居る事柄である。事實は右側から來れる音響を左側に聞く事があり、知らない土地で太陽が北より登るもののやうに言ひ張つたりする事がある。我等の住める地球は宇宙間の

一固定點の如く感じられるが、實は空間を恐ろしい速力で走つて居るのみならず、それ自身赤道では一時間一千哩の速さで回轉して居るのである。それと同じ樣に、我等の理性は我等の有する最も高尙な才能の一ではあるが、義務と運命に關する問題の案內者としては、それ自身のみでは安全、且十分なものといふ事が出來ない。人智の測り知る可らざるもの、人間理性の說明し得ざるものがあるのである。罪の毒は我等の肉體的組織と共に我等の知性にまで及んで居る。盲人は繪畫を理解し得ず、聾者は音樂を鑑賞する事が出來ない。パスカルの言ふた如く『理性の最後の發見は理性を超越せる無限の事物の存在を知る事である』そして起源、(Origin) 義務、(Duty) 運命 (Destiny) の大問題は知性の銳敏、感覺的觀察の正確に因るよりも、寧ろ天父に對する心情の正直さと忠實とに因つて解決せらるるものである。我等の知性も其の正道を越え行かざるためには神的照明を必要とす、そして此の目的の爲に神は我等に書き錄されたる神の言を賜ふたのである。

されど此の長年の間新教世界は聖書を以て、自然の書の研究に於ける指針として用ゐなかつた。彼等は物質的法則よりはより高き、より明白なる、そしてより大切なる靈的法則のあるといふ事實を無視した。スピイヤース(Spiros)に於ける抗議書に記名せし者、或はメイフラウアー號(the "Mayflower")にて出帆せし人々の子孫等が非科學的だと思はるる事の怖ろしさに、顯微鏡と試驗管と測斜器との手段で獲た所の長つたらしい迷蒙な理窟と不確實な材料とに對する信仰に、何等の取調もせずに大急ぎで降伏して行つた、しかも其等の手段方法で獲た結論には道德的頽廢の因子が含まれてあり、亦それらの結論が宗教改革者等、使徒等及びキリスト御自身の教へた所の基本的教理に悉く明かに相背致せるにもかゝはらず、彼等はそれらの結論を無條件で受容れたのである。

所謂、科學的理論の炬火的閃光に眩惑せられたる新教教會は、聖書が流行の生物學說や地質學說の肩を持たないとて、天よりの光なる聖書に對し不平を言ひ、果ては近

年に至つて、其新教の教祖等が用ゐたやうな方法で聖書を用ゐる事を止め、科學の流行說と調和さすためであつて神學を全部新しく書き更へんと始めたのである。新教主義（プロテスタンチズム）は聖書が、然り聖書のみが凡ての道德的及び宗教的の信仰と實行とに關する我等の指針であると宣告した故を以て、其存在の理由と其名を得たものであるに關らず、近代に至つて聖書の起源に關する歷史的教說を否定し、斯て所謂近代科學の教のために聖書を投擲せんとするに至つたのである。

新教教會（プロテスタントチヤーチ）は其年少氣鋭の時に於ては年を經た教會傳說に大膽に反抗し、聖書を擁護したのであつた。がしかし其の成年時に達したる今、證明し得ざる科學の獨斷說に對して一も二もなく降服して仕舞ふた。確かに第二の宗教改革、舊時の新教主義（プロテスタンチズム）の復興（リバイバル）が起らねばならぬ時である。

第十六世紀の改革者の當面せし問題は、教會傳說對聖書であつた。第二十世紀の新（ネオ）新教主義者（プロテスタント）に對する問題は、その隷屬者の人數と赫々たる人名の催眠術とによつて已

に倨傲獨斷的となれる所謂科學、及び之に加ふるに科學の支持を誓へる世界の教育組織を相手取つて、卑しめられ輕んぜられたる聖書の權威を擁立する事である。

四

斯の如きは、基督教會の前途に橫はれる問題であり、且爭鬪であるのである。そして之は只に英語國民（世界に廣く散布せられたりと雖も）に限られてない。此問題、此爭鬪は其範圍に於て絕對に世界大である、其結果を明瞭に描寫せる聖書の預言の一句を借りていへば『諸族、諸音、諸民、諸國』は之に卷き込まれるのである。

そして見ゆる目を持ち、悟り得る心を持てる人々にとりて、現代の最も著しき不思議なる現象の一は、今日の凡ての世界的大勢力が諸共に一方の側に列を作りつゝあつて、之等が意識的にか或は無意識的にか、兎も角も一個の共同目的のため共に相結び合つて來た事である。といふ意味は、現代の大運動である、例へば所謂新思想（new

thought）新神學、近代主義、社會主義、靈道、（Spiritism）敎會聯盟、及び世界聯盟（此等は主として進化論を受容れし結果惹起されたる宇宙と宗敎とに對する變更せられたる觀念の上に立てる主義、信念である）などの事を考へると、最も著しき不思議なる事象の一は、之等の諸種の運動が一見何等の聯絡なく、時には互に相背致せる如く見え乍ら、事實は彼等が意識的に或は無意識的に一の共同目的のため相偕に働き合ふて居る事、一の共同的決勝點に向つて共に推寄せて居る事である。

斯て其影響を被れるは歴史的大宗敎の中で新敎敎會（プロテスタンチズム）のみではない。近代主義（モダーニズム）は法王の回章（註、ロマ法王より諸僧正に對する）にもかゝはらず、羅馬敎會の中に醱酵しつゝあり、其と平行して猶太敎の中にも、亦は回々敎、佛敎、儒敎の中にも同樣な自由主義の運動が起つて居る。同じ不思議なる勢力に皷吹せられて今迄は智的に最も停滯して居つた民族までが、急に目を醒してみんなと同列に立上り、一緒になつて熱心に同じ方向指して進み出したのである。

全世界が其方向に動き出したやうに見える所の共同決勝點は宗教では『人道主義』(Humanism) 或は『人道教』(Religion of Humanity) とも稱すべきものである。政治では其は世界國家 ((the World State) 或は世界聯盟 (the Federation of the World) である。工業及び商業では其は所謂『基督教』社會主義の勝利となるか、或は合同資本の合同の勝利となるかは少しく不確實である。――之は『我等が合同資本團を如何にせんとするか』と問ふか、或は『合同資本團が我等を如何にせんとするか』と問ふのと、其問の出し方に因つて決定するのである。羅馬舊教にあらはれし如く、大統一化を近代主義者等は夢想して居るのである。新教教會の多數は、前に個人の改心、罪よりの救のため献げし時間と注意を、今や社會的及び政治的改革の如き出沒變幻定りなき事柄のために用ゐて居るのであつて、之等の改革は『社會的正義』『基督教的市民』『國家的改革』などのお題目を唱へて、國家と國政を半宗教的なるものとせんとの努力である。之は亦科學や哲學や教育や文學に從事し、しかも實業や政治や宗教の

實際的活動に觸れて居ない所の所謂智識階級に屬する人々に取つては、この人類が向つて進みつつある共同の決勝點こそは種(スピシース)の進化に於ける次の階段であつて、之は多分戰爭の廢止、民主主義(デモクラシー)の擴張と充實、靈的世界の秘密が科學的探究に由つて開かるる事に由つて實現するものと考へて居るのである。

五

人類の全歷史に於て現代の狀態と比較し得る時期はたゞ一つあつた。聖書の記事によれば洪水後、主は人類が地の四方に散る事を欲せられた、然し此の御心が無視せられた。大多數は彼等の集團が一體と固められ、人類の成長と共に成長し、遂に全地を併呑するが如き政府を作らんと目論んだ。バベルの塔の建築は神の定め給ふたる分散を防がんとの明かなる目的に出でたのであつた。――『斯して我等……全地の表面に散ることを免れんと』(創十一ノ四)

若し此普遍的聯盟の計畫が許されたものとせば、世界は其幼時に於て道德頽敗し、來らんとする世々の時代に對し其背德を繼續せしめた事であらう。されど主は自ら手を下して、此の世界聯盟即ち人類結合の最初の畫策を破壞し、以て一大普遍的背教が世界を支配するに由なからしめ給ふたのである。實に背教は間もなく殆んど世界的となつたが、然し不幸中の幸福は當時既に、人類の種族間に言語的及び地理的障壁が立てられてあつた爲め、之等の散在せる種族は此後絕えて統一化せらるる事なくして今日に至つたのである。それがため全世界に暴威を逞ふするが如き大背教は起らなかつた、そのお蔭で神の眞理は最暗黑時代に於ても邊陬の地に其生命を保つて來たのである。

されど鐵道と汽船、印刷、電信、電話の近代は之等の言語的また地理的の境界線を事實に於て撤廢し、世界を大なる一社會と化し、人は皆互に隣人となり、全人類は恰も一國語の民の如く速かに一單位となりつゝあるのである。

只々それのみならず、人類はその一なる事を強く自覺して來た、そして最近の世界戰爭の恐畏よりの反動として、人々は『人類の連帶責任』(Solidarity of man) といふ事を熱心に唱道するやうになつた、此言は永い間或る俗的哲學者等の十八番の標語となつておつた『四海兄弟』(brotherhood of man) といふ言より余程意味が廣いのである。此の近代觀念は聯合せる人類と、其一致の努力に適合し、人間の傲慢と眞神を忘却する精神とに調和せる宇宙的宗教とを意味するものである。人間は宗教的動物であり、世界的國家には世界的宗教が伴なふ。斯の如き宗教が現に我等の眼前に形成せられ且成長しつゝあるではないか? 即ち現今流行の進化論哲學に調和せしめんため改造せられつゝある基督教がそれである。結果は世界國家 (the World State) と變性基督教なる一宗教——人道主義、或は人道教とである。

若し許容したならば個人の自由は粉碎せられ福音の計畫が失敗に歸する故を以て、神は其智慧に循ひかの最初の大背教と世界聯盟を破壞なし給ふた。

神の計畫は『期至りて成就するのである。神は人類に最後の機會を與へて、人は何を爲し得るか、人間連帶（human solidarity）の自然の結果は如何なるものたる可きかを示さんとして居給ふのである。世の終に於て、人間の活動と發明が其全力を傾倒し盡し、その誇れる文明の最頂點（クライマクス）に達せし時、そして遂に更生せざる人類の聯盟が成就せし時、神は天使等と他の世界の住民等の前に人間は神を離れて何を爲し得るか亦何を爲さんとするかを示さんとて、此の永く中絶せしバベルの計畫を再興せしめ人をして其欲する所をなさしめ給ふのである。そして昔の如くヱホバ言ひたまふ『視よ民は一つにして皆一つの言語を用ふ、今既に此を爲し始めたり、然れば凡て其爲さんと圖維る事は禁止め得られざるべし』（創十一ノ六）

若しも舊式の基督教が眞實であり、聖書が眞實天の神よりの默示であるならば、聖書が此の現狀と其結果に關し眞實の預言的描寫を爲して居ないと考へるは正しい事であるか？　之に對する答として斷言し得る事は、世界が辿りつゝある道程と其が先を

急ぎつゝある決勝點は實に驚くばかり正確に聖書に闘引して預告せられあつて、聖書の神より出でたる證據としては之以上強固なるものはないといふ事が出來るのである。そして現在の如き、各方面より困惑的且又誘惑的聲の聞ゆる間にありて敎會の最良の指針として之等の預言を用ゐる事をせざる基督敎は、到底聖書に對する忠實を永く維持する事は覺束なくなり、亦新約の寸方に適せる敎會としての靈的一致を保つ事は出來なくなるものである。

我等を離れて天に昇りし主の御歸(おかへり)こそは代々の敎會の希望であつた。キリストの文字通の再臨は聖經記者の最も情熱的法悦を燃やさしめたのみならず、主が行き給ひし後陰翳なる時代にありて土牢内の殉敎者等を慰め、亦卑しめられたる改革的說敎者等を鼓舞せしは此の希望であつた。最近に至つて、此の敎理がすさまじい勢で復興し來り、凡ての福音主義的敎會に行亘り熱心なる人士は『此時代に於て全世界に福音を』("the evangelization of the world in this generation")といふ共同標語の下に靈的には

一齊に起上つて來たのである。斯の如きは支那や印度や阿弗利加等の國々に昔ながらの福音を宣傳し、救主の愛を告げつゝある幾千の宣教師等の希望であり且奬勵的動機である、そして同じ希望が故國に止りて「綱を掴まへ」て居る幾千幾萬の心中に燃えて居るのである。そして明白なる事は之等の人士は今もなほ聖書を割引なしに信じて居り、懷疑者の大群の喧ましき主張に對して自己の信仰を放擲せないのである。凡ての福音主義的教會に亘りて散在せる之等の舊式基督教の代表者等――彼等は外部的には一致してゐないが、しかし聖書を神の權威の言と信ずる共同信仰に固く立てる人々――余は彼等をこゝで新新教主義者（Neo-Protestants）と命名したい――は近代の大背教に反抗して立てる者たる事を本書を通じて述べて居るのである。

上述せる如く聖書は時代の現狀につき、神の永遠の眞理の觀察點より此の背教の特色を種々預言的に描寫せるのであつて、其最も鮮かなる描寫の一は、『批評學者』が特に不信用ならしめんと謀つて居る如く見ゆる書なる、彼得後書の中にあるのである。

『汝等まづ知れ、末の世には嘲ける者嘲笑をもて來り、おのが慾に隨ひて歩み、かつ言はん「主の來りたまふ約束は何處にありや、先祖たちの眠りしのち萬のもの開闢の初と等しくして變らざるなり」と、彼らは殊更に次の事を知らざるなり、即ち古へ神の言によりて天あり、地は水より出で水によりて成立ちしが、その時の世は之により水に淹れて滅びたり。されど同じ御言によりて今の天と地とは蓄へられ、火にて燒かれん爲に敬虔ならぬ人々の審判と滅亡との日まで保たるるなり』(彼後三。三―七)

此の驚くべき預言の幾つかの點は特別に注意する價値がある。

一、之は『末の世』に關する記事で、主の再臨の約束を嘲笑する人々は、古への世が洪水で滅されたる事を殊更に知るを拒むとあり、實に現代の立場と符節を合する如く適應して居るのである。後に見る如く、進化論の現在の立場は、世界的洪水なるものは決してなかつたといふ永い間地質學で稱へ來つた所の學說に其根據を置けるものである。世界的洪水を信ずる事と地質學の現行の學說を信ずる事は兩立しない、一が

立てば他は必ず倒れるのである。そして現行の地質學は進化論の基礎學說であつて、進化論はキリストの文字通の再臨と地が火を以て淨めらるゝとの聖書のいふ『福なる望』をして不用ならしめ、亦不可信たるものとなすのである。

二、之等の嘲笑者は確に『一樣性論者』(Uniformitarians)である、彼等は論じていふ『先祖たちの眠りしのち萬のもの開闢の初と等しくして變らざるなり』と。此言のうちには『先祖たち』の時代には人々が無智であつたためそんな事を信じたかも知れぬが、彼等が眠りしのち我等は一層啓蒙せられて來たといふ意を含んで居る。亦注意すべきは此劃一論は創造の結末にまでゞなく『創造の始』に及んで居る事である。斯の如く創造そのものも劃一的計畫の中に含められてあつて、創造と第二次的源因による世界の永續との間の區別が全く除去せられてあるのである。今日の進化論者と彼等特有の議論的方法が約二千年前の默示に出つて斯くも正確鮮明に描かれてあるとは驚くべき事である。

聖書の他部分に於てキリスト再臨の直前に於ける人間歴史と其事業の最頂點（クライマックス）、人事の奇妙なる怖るべき終末が非常に鮮明に描寫せられてあるのである。

其中のたゞ一つを擧ぐれば默示錄第十三章に於て、法王政治の永い勝利の支配の後に、それと同樣に不寬容にして世界的範圍の一勢力が起り、全世界に同樣の權を振ふに至る事が示されてある。『先の獸の凡ての權威を彼の前にて行ひ』とあるのである。

此の新しき世界的勢力は宗敎、實業、政治的權力、及び科學的智識の廣大にして不思議なる結合である、即ち

一、之は其時代の宗敎的禮拜の上に絕對權を取るのである『地と地に住む者とをして先の獸（法王政治）を拜せしむ』而して人々を惑して造らしめたる『獸の像を拜せぬ者をことごとく殺さしむ』

二、世界の全實業と經濟機關とを絕對に支配し、近代の方法なる世界的不買同盟（ボーイコット）を用ゐて其命令を强制せんとするのである。其命令に最も忠實に服從する者にあらず

ば誰も『賣買』するを許さず。

三、同時に之は全世界の國民的或は政治的機關を完全に掌握するのである。『先の獸の凡ての權威を彼の前にて行ふ』そして先の獸の權威は『もろもろの族、民、國語、國を掌る』ものであつた。亦其方法に於て民主政治的（デモクラチック）のものである。人々は惑され『彼等』が先の獸の像を造るといはれてある。

四、最後に注意すべき事は、此終末時の世界的勢力は自然界の勢力に關する驚くべき智識を有せる事である。一見奇跡的支配を自然の上に行ひ、此自然の智識と支配とを世界的範圍に活用して全人類を惑はし、彼等をして造物主に對する眞の禮拜より誘惑し去らんとするのである。『また大なる徵をおこなひ、人々の前にて火を天より降らせ、其徵をもて地に住める者どもを惑す』

そして凡て此の宗教、實業（經濟）、政治、加ふるに科學的不思議と徵とを以てしたる勢力は其性質に於いて全然非基督教的である。此事は同じ預言の補修的部分に於

て主は『もろもろの國、族、國語、民』に向ひ『汝ら天と地と海と水の源泉とを造り給ひし者を拜せよ』と宣し給ふによつて明かである。

斯の如き御言は進化論の時代たる現代に對し特に適當なる且又時宜に適へるものたるを認めねばならぬ。のみならず『獸と其像とを拜する』者等に對する最も怖るべき威嚇があたへられてあるのである。斯て造物主を禮拜する事が、普遍的僞宗教組織と化したる世的勢力を禮拜する事と對照せられてあり、遂に之等の世的勢力に抵抗して造物主の禮拜を固持する所の人々は羔羊と偕にシオンの山に勝利と榮光の中に立せられたるを見るのである。（默十五。二）彼等は彼等を奴隷とし滅さんとせる世界大の組織と團結に對し勝を得た人々である。

此の預言的描寫の實現を完成するために言へば、現代に於てもなほ基督教の種々なる團體の中に散在して、此近代的バールに膝を屈せざる七千人に幾倍せる保守派の大群がある事は實に注意すべきである。背教は未だ十分に發展して居らず、死刑を以て

其服從と禮拜とを强ふるといふまでには權威を持つて居ない。それで兩者の間の距離が未だ左程明かでない。されどやがて間もなく造物主たる眞神の禮拜者に對し、『わが民よ、かれの罪に干らず、彼の苦難を共に受けざらんため、その中より出でよ』との（默十八ノ四）召集令が鳴り響くのである。そして最後の危機（クライシス）が臨む時に當りても天地の造主たる大神の凡ての信者等は、神に逆ふて立てられし之等の勢力に對し最後まで反抗し續ける事であろう。

讀者よ、若し諸兄姉がなほも神と其言とに對する信仰を固持し、其衷に此の新教主義（プロテスタンチズム）の新精神の欝勃として湧上るを感ずるならば、卿等は此殘餘（のこり）の民に屬する徒であつて我等の甦り、昇天し、やがて來らんとせる救主の古い古い福音を宣傳する人々である。そして今は『反動家』だとか『時代後れ』だとかいふて嘲笑罵詈せらるるとも、やがて卿等は其頂に父の御名を頂きて主と偕にシオンの山に立たせらるるのである。

此の最後の新教主義（プロテスタンチズム）こそ最終の改革である。我等の先祖は其の信仰と實行との唯一

の法典として聖書を、然り聖書のみを抱懐した。若し我等その子孫として先祖の名を辱しめざらんとせば、我等は今日世界の教育界の大組織を侵略し、現代の學問と智識はすべて其味方であると誇れる常勝軍の如き顏せる背教に挑戰して、飽くまでも聖書を固守せねばならぬ。

されど感謝すべきは、神のより大なる書なる自然が我等の前に展開せられてあり、我等は其中に神の書き記されし言の記錄の驚くべき保證を發見し得る事である。斯て我等の敵は同じ事を語る所の神の二書に依つて駁撃せらるるのである。

第二章　主觀的及び客觀的方法

"Error arises……from the commutation of what is subjective witr what is objective in thought." ——Sir William Hamilton.

【誤謬は思想上主觀的なるものを客觀的なるものと採り違へる事より生ず】

サー、ウヰリアム、ハミルトン

一

卿は望遠鏡を取り、其の廣い端を目に當てゝ、卿の隣に立てる人を眺めた事があるか？　どんなに小さく、亦どんなに遠く見えたか！　實際は手を延せば屆く所に居る其人に、長距離を歩かねば行けぬやうに見えたのである。此の奇妙なる視錯覺はどうして起つたのであるか？――たゞ善き器械を間違つた道に用ゐたから。

我等が自然界の事實を間違つた方法で用ゐるか、或は智識の如何なる部門に於てか

發見したる客觀的事實に關して理性が正しく働かせられざる時、同じ様な錯覺が智的世界に行はれるのである。似而非科學的方法を自然科學、哲學、或は文學的批評に應用する結果、人は歸納的望遠鏡を逆轉して使用するが如き事となり、此の世界の創始は殆んど無限の過去に退轉し去るのである。天地の創造は、日々吾人が自然界に於て觀察する所の變化過程の條件を以て『説明』せられ、其の結果基督教は彼等の『科學』とは明かに衝突するものとせられ、斯くて聖書は我等世界の最初の時代の記錄として其信用が疑はれて來たのである。

されば若し我等が宗教と科學とに於ける近代的大問題に關して明確なる理解を得んと欲するならば、先づ其の豫備的資格として科學研究に於ける主觀的方法と客觀的方法との間に存する區別を明瞭に辨まへる事が必要である。

科學及び哲學に於て『主體』("Subject") なる語は心それ自身を指すのであつて、『主觀的』("Subjective") とは思考する個人 (主體) に屬する所の、或は其個人より

出で來る所のものを指すのである。『客觀的』とは、理想に對する實在、單に個人の思想の中に存するものに對して自然の中に存在するものを指していふのである。

ハミルトンの言へる如く『誤謬は思想上主觀的なるものを客觀的なるものと採り違へる事より生ず』（論理學三七八頁）るのであつて、聖書批評學、進化論、地質學等の研究に於て此の兩者間の區別を辨知する事の絕對必要を示すために茲には之以上いふ必要はない。

唯々我等の主觀的產物を客觀的發見と採り違へざるやう最大の注意を拂はねばならぬ事であつて、若しそうでないと實際は心其もの丶陰影を、論理的連鎖の實在的一鍵環と誤解する事があるのである。

主觀的方法は一名、先驗的方法（a priori method）と稱ばれ、豫め抱懷せる觀念或は豫想に基づいて事實を觀察し又取扱ひ、事實そのものよりも寧ろ觀察者の觀念に調和せる組織、學說を作り上げるものであつて、歸納的觀察法とは反對なる方法である。

希臘哲學者等は大體に、そして中世紀のスコラ哲學者等は全體に宇宙と自然界の事物とを主觀の立場より眺めた。近代科學の大多數——天文學、物理學、化學の如き更生せる科學は凡て——は歸納的過程と方法とに依らんと勉めた。そして或人々には新しく聞ゆるかも知れぬが、聖書記者が其周圍の世界を眺めし所の心的態度は一般に此の態度であつた。之は單純なる常識的態度であつて、此の單純なる歸納的方法は眞理を決定するために聖書中に千態萬樣に用ゐられてあるのである。

ヘンリー、ドラモンドは言ふた『トマスがキリストの許に彼の復活を否定して來た時、イエスは彼に事實、科學的事實、客觀的證據を與へた。イエスの精神は科學的精神であつた。イエスは彼の宗教を事實の上に築いた、そして萬人が亦事實の上に自己の信仰を建てん事を求めた』と。實際、後に明かなる如く、基督教は長き連鎖的事實の上に築かれたる唯一の宗教であつて、其事實の眞僞如何によつて、其興廢が分れる程に之等の事實と密接なる關係に立つて居るのである。而して『樹は其實によりて知らる

べし』『我が爲す所の事……我につきて證す』『汝等時の休徵を辨ふる事能はずや』などの主の代表的言辭は（なほ此他にも多くあれど）キリスト及び聖書記者は眞理を決定する方法として客觀的或は歸納的方法を用ゐた事の確かなる證據である。そして同じ方法が長く秘められたる天然の寶庫を開き、人類をして全く新しき意味に於て自然界の王者となせしが如き、勢力と應用とを其中より引出さしむる上に多大の貢献を近代になしたのである。

ウェウエル（Whewell）は簡單に定義を下して、歸納とは箇々の事實より一般の理論に進むことであるといふた。ゼー、エス、ミルも同様に歸納は『實驗に由れる一般化』であると定義した。之に對照して演繹法は、旣に知られたる或は假定せられたる理論に對し箇々の經驗或は事實を當篏める事である。

演繹法の代表的なるものは三段論法或は代數學に用ゐられる所のものである。歸納法の代表的なるものは物理學、天文學、或は化學に於て見らるゝのである、卽ち或る

主要なる點に於て相互に關聯せる幾箇かの事實を觀察し、之等を一つに總括して一般的結論を喚起し、之を一般的理論或は科學的一法則とするのである。相互關聯せる事實の全體より得た正確なる歸納は絕對性を帶びた確實なる眞理であらねばならぬ。結論の誤謬は關係ある事實の重要なるものゝ一つ或は其以上を見逃すより生ずるのである。斯て引力の法則及びエネルギー保存の法則は歸納的觀察と理論よりの結論であつて、一般に承認せられたる眞理である、之等の結論は事實を十分に廣き範圍に觀察して、後に發見せらるゝ如何なる事實も、之と矛盾牴觸する事なしと信ぜらるゝのである。

されど演繹法も自然科學に於て相當なる位地、決して輕視す可らざる位地を占むるものである。正確なる科學的手段によつて眞の歸納或は一般化が發見せられたる時、此一般的理論は次に、限られたる範圍内に於ける演繹法の出發點とせられて、其範圍内に於ける他の關聯せる現象に之を應用ずる事が出來るのである。

斯の如くに、科學に於ても日常生活に於ても歸納と演繹とは、前者が開拓者となり後者が調節者となつて、互に手に手を取つて進まねばならぬものである。我等の周圍に於ける世界に就ての眞實なる智識の殆んど全部を我等に供した所の方法、即ち近代の進歩せる、そしてその完全なる方式の下に行はれし科學的研鑽は純然たるベーコン的歸納法を基礎として行はれたものであるが、しかも演繹法の指揮と監督の下にあつて行はれたのである。言ひ換ふれば、科學的發見は專ら歸納法に依りて爲されたのであるが、しかも母たる演繹法によつて時々忠告せられ且軌道を脱せざるやう導かれたのである。演繹法は度々望むべきものを暗示し、又つねに熱心なる若き研究者が極端に走らんとするを引止めて吳れるのである。

斯て我等は誰かゞ永續自動器（perpetual motion machine）を發明したと聞いても我等はエネルギーの保存説を信じて居るから、ただ馬鹿にして笑ふだけである。どんなに器用なものでもたゞ器械的仕掛でエネルギーを製造する事は出來ないと確信して居

るのである。同様に、時々發表になる何々教授が、とうどう無機物から生命を造る事に成功したといふ報告を聞いても餘り興味が乘らないのである。その理由は我等は既に二世紀以上の觀察と實驗とに因つて證明せられて來た所の、生命はたゞ生命より生ず、とのハーヴェイの格言に對して强き信仰を有し、若し此の普遍的結論と調和しない如何なる發見に接するとも其は何かの間違であると感ずるに至つて居るのである。

新新教主義者なる近代の基督者は之と同じ論法をなすものである。最大の歸納的結論であつて、凡ての發見と思はるゝ事柄を檢査すべき最大の演繹的前提は、神と其の眞理である。それで若し實驗或は直觀よりする我等の結論が、此の最高の眞理と牴觸する如き危險に際會する場合には、正しき演繹法が顏を出して我等を忠告し又導いて異れるのである。そして時を費して檢攻するならば、我等の考へし歸納法に何か缺陷があつた事を見出すのである。新新教主義者はいふのである、斯の如くに自然科學に於ける我等の結論は斷えず絕對實在の試驗石である所の默示の眞理を以て檢査せらる

して之は多くの事實を集め來り、其等を土臺として一個の命題或は臆說を作り上ぐる所のものである。そして斯の如き間接的方法で作り上げられし眞理を受容れねばならぬ道德的感念が何故我等にあるのであるかは知らない、然しただ知る所は、我等の心智が斯の如く造られてある事であつて、我等の智能が常規に働く事を許さるゝならば我等は斯の如き間接的或は蓋然的證據を拒否するわけには行かないのである。科學、宗教、歷史、法律の大問題、或は人生日常の問題の大部分は此の種類の命題に屬するものであつて、之等の問題が以上の如く研究せらるゝ方法を特別に科學的方法と稱へるのである。

唯間接的或は蓋然的證據のみ存する場合、我等が一の命題を受容すべきか否かに關して守らるべき幾つかの規則があるのである。そして我等の到達すべき結果の價値は我等が意識的に或は無意識的に、之等の規則に正確に準じたか否かに因て定まるのである。之等の規則は單なる便宜として作られたものでなく、人智の性質上又人智が智

識を獲得する方法の性質上必然的に守らるべき規則である。『創造か進化か？ 一哲學的研究』（頁十六、十七） なる書に於て紐育の有名なる法律家なるジョルヂ、チックナー、カルチス氏（George Tickner Curtis）が公式化せし之等規則の重要なるものを擧ぐれば左の如し。

一、『我等が一つの推定を下さんとて集められし證據物件の一個一個は、直接なる證明に由つて獨立的に證せらるべきもので、決して其自身が或る他の事實よりの推定であつてはならぬ。』 言を換へていへば、我等は一の推定より他の推定を下してならぬ我等は或る一個或は幾個かの事實より他の事實を推定し、斯て後者を二つ或は其以上の獨立的事實と結合して一の連鎖的證據を編出す事は出來ないのである。各鐶はそれ自身の論理的證明を有せねばならぬ。

二、斯の如く獨立的證明によつて確立せられたる幾個かの事實は、次ぎに相互に正しき關係に配列せられ、そこから推論が惹き出されねばならぬ。言を換へていへば、

凡ての事實は正しき關係で配列せしめられねばならぬ。

三、此の凡ての事實の正しき配列に續く第三の規則は、此事實の全體は其より引き出されんとする推論と矛盾してはならぬといふ事である。

四、之より第四の規則が來る、即ち事實の集團はそれより惹き出さるべき推論の蓋然的の眞理と矛盾せざるのみならず、如何なる他の推論をも許さないものでなければならぬ。

重要なる科學或は宗教問題を取扱ふに當り之等の證據上の規則を嚴守すべき必要をこゝに喋々する要を認めないが、然し、人間が下等動物より漸次的又自然的經過に因つて生じたるものであるとの推定を下さんため集められたる材料の集團の如き、複雜なる事實の集團を取扱ふ場合に、之等の規則がしばしば暗默裏に弛緩、休止の狀態に置かれてある事に注意を喚ばねばならぬ。一の方向を指示するが如く見ゆる事實が澤山に集められたる時、以上の證據上の規則が嚴守せられないでもよいものゝ如く思ふ事

が流行して居る。唯集められし事實の數さへ多ければ論理の規則は無視してもよいものゝ如く考へて居るのである。量が質と同一視せられて居るのである。

特に上に擧げし第四の規則が無視せられて居るのである。或る一つの結論に到達するが如く見ゆる幾つかの事實が提出せられるのである。然し之等の事實が其一つの結論以外の如何なる結論をも許さないものであるとの事は示されやうとしないのである或る他の結論は之等の事實と全く同樣に調和せるものであるかも知れない、然し此の他の可能性は全く無視せられて居るのである。例を擧ぐれば、初代希伯來民族の法律と社會制度の或るものはハンムラビ時代の巴比倫(バビロニア)人のそれと等しき事が示さる、そうすると直ちに希伯來民族の習慣は巴比倫人よりの模寫であらねばならぬとの斷定が下されるのである。然し希伯來人のも巴比倫人のも共に兩者に先だちし共同根源より採られたものであるとの結論は同樣に論理的である事を忘れてはならぬ。それと同じく巴比倫人の有する創造と洪水の物語は、希伯來人の有する同事件の記錄よりも古い事

が示される時、此場合に於ても希伯來人の記錄は巴比倫人より採つたものであるとの結論が下されるのである。若し創造及び洪水が單なる神話、詩的情緒の國民の單なる所作であるとせば此結論はもつと眞實らしく聞えるかも知れぬが、然し兩者とも歷史的の實際的事實であるとせば、其事實は巴比倫及び希伯來の記錄より遙か以前の事であつて、希伯來の記錄は巴比倫のものより採つたのであるとの結論が如何に薄弱なるものであるかは如何なる童兒にも明かな事である。

之等の規則は他の仕方でも破られて居るのである。例へば、或點に達す迄個々の事實が順序正しく列なつて居る所の多數事實の一群と、亦次ぎの斯の如き事實の鏈鎖とがある、然し彼の一群と此の一群とを連結すべき鐶が絕對にない。一つの鐶が見當らない、しかも其鐶が大切である。此の『證據の空所』は研究の當事者達に由つて正直に幾度も承認せられるのであるが、しかも此の困難は、事實の第一群と第二群とが存在する理由を以て此の中間の事實（一個或はそれ以上の）も存在した筈であると論じ

て、飛越えんと試みられるのである。そして其後の議論は何の苦もなく進んで全體の結論、臆説を作り上げて仕舞ふのである。然し此場合大切なる中間の事實は唯想像的のものであり、他の事實よりの推定たるに止りて、從つて下されし結論は其中間事實が存在せざりしものと見て下される結論と價値の優劣を問ふ事の出來ないものである。即ち斯る方法は價値なきものである、之は假定より假定を引出さんとするもので恰も人が己が靴の先端を引張つて、自分を地上より引上げんと試みるが如きものである。

三

之等の證據上の推理法に就て之以上いふ必要がない、然し一般の主觀的及び客觀的方法の關係に就てなほ我等の考察を續ける事とする。後に見る如く、未だに客觀的科學的方法の採用に依つて更生せしめられざる一個の自然科學と數個の所謂歷史的及び

神學的科學或は哲學なるものがある。彼等は個々の獨立的に證明せられたる事實を根底として築かれたるものでなく、なほも大體に於て主觀的或は先驗的 (a priori) 方法、即ちサー、ヘンリー、ハウアース氏 (Sir Henry Howorth) の辛辣に表現せし『中世紀のスコラ哲學を奴隷にし、其をしてあのやうに不生產なものたらしめた』所の方法を墨守して居るのである。

ハウアース氏は此辭を以て、かの進化の鏈鎖中の見當らない多數の鐶の一つを製造せん爲の努力である所の、氷河說 (Glacial theory) を批評したのである。自ら有名なる地質學者なる此著者は、現今普通に敎へられ且解せられて居る如き地質學全體に對して、其が誤れる方法の下にある者であるとの强力なる非難を提出したのである。近代地質學に由つて用ゐられてある一般の方法に對する此著名な學者自身の言を引用すれば、

『殆んど他の凡ての科學が形而上學的論理の拘束より解放せられてあるのに、地質學

がなほも先驗的（a priori）論説の中に縛られて居るのは不思議な事である』といふのである。

實際地質學説は斯る方法が近代まで繼續して用ゐられし最も著しき實例である、そして後に至つて見る如く、之は化石世界全體に關して決して歸納的に議論して居らないのである、即ち人間及び現存せる植物の全種（スピシース）より先づ出發し、遡つて岩石の間を探り、何處に同樣の植物と動物が化石として發見せられるか、而して其は如何なる條件と關係に於てゞあるかを知り、而して後に其等が如何にして其處に來りしや、其と此との中間的變化は如何にして起りしものなりやを決定すべきであるが、地質學は之をなして居ないのである。なほも説明すれば、地質學は化石世界に關して普遍的なる概念（Generalization）を未だ編出さんと試みなかつた。即ち集團的に同時に發掘せられし化石に基き、之等と現存せる動植物とを一般的に比較研究して、普遍的概念を編出さんとはして居ないのである。斯の如く現在より過去に逆行して研究する事（之が唯

一の理論的又眞實の科學的方法であるが）は、現行の地質學は之を試みんとも宣言しなかつた。其反對に、つねに臆斷的に『最古の』原形と名づくる少數のものを出發點とし、之等を過去の殆んど不可見的遠方に勝手に配置し、其處から歸納的科學方法を眞似て、遲々たる歩みを辿つて上手に現在までの年數を數へ上げるのである。そしてライエルの一樣說と地面の緩漫なる變動說とに跋を合せて、現代まで逕送せし『生ける』種（スピシーズ）の積荷をこゝに捌いて仕舞ふのである。之は臆說に因れる、主觀的觀察點よりせる地質學である。之は殆んど過去一世紀に亘りて或人々が、不可知の事物を以て既知の事物を說明し、我等の殆んど何等知る所なき臆說を以て出發して、生ける動植物に關する我等のもつと確實なる智識を化石世界の起源に關する學說に强ひて調和せしめんと努めて來た所の所謂『科學』なるものである。そして或人々は聖書が『科學的探究』の斯の如き方法と一致しない故を以て之を非難するのである。しかし若し聖書が斯る方法で獲た所の說を裁可したとせば、それこそ聖書の永久の恥辱であるといひ度いの

である。

之とやゝ同じ非難を希伯來及び基督教の聖典に關する現行の歷史的批評學に對してもなす事が出來る。高等批評の土臺である先驗的學說の一つは一七九五年にウォルフ（Wolf）に由つて提出せられし所の、文學的目的のための書物は希臘歷史の古典文學時代以前には知られて居なかつたといふ假定である。なほ他の假定はアストルック（Astruc）の說（一七五三年）に土臺を置けるもので、創世記に於て神の名詞が異なつて居るのは異なれる著者がある事を示すといふのである。（註、現今一般に既知の事であるが、批評學者の文書類別說（documentary theory）は紀元第六世紀より行はるゝ樣になつたマソレチック聖書（Masoretic text）の希伯來原文の特異點を根抵として居るものである。然し今やウヰナー、（Wiener,）ダーセ、（Dahse,）イルドマンス、（Eerd-manus,）レプシウス、（Lepsius,）及び其他の學者に由つて指摘せらるゝ如く、他にマソレチックよりも幾世紀も古い十數の希伯來の原本や殆んど一千年も古い七十人譯の如

き譯本を無視して、唯一個の原文に基いて革命的異説を立てんとするが如きは全く非科學的の仕業である。純正の原文批評學はアストルックの『手掛り』に基ける學説を覆がへして來たので、ヴエルハウゼン Wellhausen すらも之等の希伯來原文の比較研究は彼の假説の『痛い所』に觸れて來たと承認して居るのである。）もつと近代になつて、この最近半世紀に入つて之等の假定（それは誰にも知らるゝ如く聖書の自然的發達といふ事を前提におき、超自然を一切否定せるものであるが）は有機的進化説のため非常に有力となり（批評的學者の考では）遂に種々なる形に於ける所謂ヴエルハウゼン組織（Wellhausen System）なるものを作り上げたのである。此説はイスラエル文學と宗教の發達は斯く斯くあらねばならぬとの假定を傲慢にも製造して、次ぎに此主觀的概念に一々合せて聖書の歴史と文學とを改造せんとして居るのである。近代『批評學』の開祖の一人なるロイス（Reuss）が此の組織の土臺とせる基本的主義の一に到達せし方法に關し、キイネ教授（Prof. Cheyne）の貴重なる報告の一片がある。

彼が我等に告ぐる所によれば、

『預言者は律法より以前であり、詩篇はその兩者より以後である、との說は論理的結論といふよりは寧ろ直觀として、彼に與へられたものである、實に其通りである。最初より彼の主な目的はイスラエル宗教文化の發達に對する一つの手掛(てがかり)を見出し、斯して其歷史的經路を心理學的に諒解し得るものたらしめん事にあつた、と。』（『舊約全書批評學の開祖』一七七頁）

無論此の人は驚くべき眞理を發見したと思つたのであらう、然し實の所、彼の『直觀』は唯一片の造り事、單なる主觀的空想に過ぎないので、恰も我等が希臘文化時代が羅馬の其より後であり、暗黑時代がそれら兩者よりも古いなどゝ空想するのと何等異つた事はないのである。然し『批評學者』は彼の空想を本氣に考へ、直に其を本調子の主觀的前提に造り變へ、之に對する相の手を見出さんと取掛り、斯てイスラエルの宗教歷史を改造せんと謀つて居るのである。然し上述の如き無邪氣なる告白に顯は

された方法は、スコラ哲學者等が其面倒臭い言辭の論爭に用ゐた方法其まゝであつて、之は眞正の科學的或は客觀的研究法とは全然反對なものなるはいかなる學童にも明かである。

實にジ、エイチ、ショッデ（G. H. Schodde）の如き獨逸の宗教界及び哲學界の思想に通曉せる大家が、舊約全書の改造的計畫の全部に就て言ふ『之は純然たる主觀的產物であつて、外部的證據の跡形もなき、全く主觀的分解と綜合とに由つて造られたるものたるは否定する餘地なき事である』

今は之等の聖書批評學の問題に之以上いふ必要がない。之等の高等批評の主觀的空想と、考古學が同一の問題を研究する歸納的或は眞正科學的方法との對照はセイス教授（Pof Sayce）の『碑石の事實と高等批評の空想』（"Monument Facts and Higher Critical Fancies"）なる小冊子に十分よく示されてある。其書の中に此の僞批評學が東洋に於ける發掘者等の鶴嘴と鋤とのため殆んど全部タヽキ壞されたかといふ事を手

際よく論じて居り、亦『批評家』等が希伯來民族に關する歷史的文書の一切に全く矛盾して、イスラエル及び他の東洋民族の歷史と國家的發達は斯く斯くにして起らねばならなかつたと定めたが、然し近代の發掘者等は『批評學者』等は間違つて居り、聖書は正しきものなるを證する數千の文書を發掘せるかをセイス教授は其繪畫的文章を以て告げて居らるゝのである。

新神學はもう一層の苦境に立つて居る、それは其宗教としては支離滅裂なる主觀的方法と名づくる事が出來るものであつて、一方は『高等批評』の結論と他方では有機的進化論の上に根據を置いて居るものである。所が其進化論は亦非論理的にして非科學的なる地質學の誤れる結論、其他の上に根據を置いて居るのである。幾つもの誤れる假定が抱合ふて成立して居るのであつて『麥麴(かうじ)を食ふた所の鼠を捕へた所の猫を』の昔譚を思出さしめる前置詞の連續の如きものである。されば其結果、此の所謂『進步せる』神學は聖書と全く不調和のものとなり、亦キリストと其使徒等の歷史的宗教

とも全然一致しないものとなつたのは怪しむに足りないのである。聖書及びキリストの宗教は自然界と宇宙の大問題に對する態度に於て、正直なる思考と凡て眞正なる歸納的研究法とに全然一致するものたる事は先きに述た如くである。

科學及び歷史的研究の凡ての部門に於て人々がアリストートル及びスコラ哲學者の方法を棄てゝ、ベーコン及びニュートンの方法を採用せば如何に幸福であらうか。新新敎主義者は之を勉めて來たので、以下各章は此論法の概括的結果である。

第三章　地質學と大洪水

"……And set you square with Genesis again." ——Browning.

『……もう一遍創世記で自分を律して御覧』　ブラウニング

一

今余が此を書いて居る南カルフォルニアのサン、バーナデイノ San Bernardino 山脈の海上數千呎の高い所に、海の貝殼が一杯に包まれてある厚い岩床がある。どうしてそんなものが其處に出來たのか？　大平洋や大西洋の方々の海底に見出れる貝殼と餘り異なつてゐないものである。若し大洋が其の高さに隆起するとせば殆んど全州は水に覆はれて仕舞ふであらう。亦地が陷沒するとしても同じ結果に至るであらう。但し確かな事は一つ、それは其等の貝殼が、海岸に見出されるものと同樣に美しい亦完

全な海の貝類であつて、其岩には何處の海岸にあるのにも劣らず一杯に其等を含有して居る事である。どうして其等が其處に出來たのか？　否もつと適當にいへば、どうして、水が退ひて其等を其高い乾ける處に遺したのであるか？

然し之等の狀況はたゞ南カルフォルニアに特有な事でないことは誰も知つて居る。地球上の各國は乾ける地と大洋とは古から恒に今ある通りではなかつたとの同樣な證據を擧げる事が出來る。或場所では此海の貝殼の床が山の上一哩も二哩も高い所にある事があり、又或場所では地下半哩も其以上もする所に大森林が埋れてあり、又其上を珊瑚或は海百合の石灰質が厚く覆ふて居る事もある。或は今は北極圈内にある地方否極地そのものゝ上にさえ昔半熱帶動植物の繁茂せし遺跡があり、又或は奇々なる、此世界のものとも見えざる動物の骨が一面に堆み合せられてあつて之等の巨大なる獸の大群が一時に埋沒せし事をあらはして居る。事實、此地球は大きな墓場で、岩石は墓石、死にし者は其上に各自の死と葬式の墓銘を印刻して居るのである。次の事は人

問に就てよりも下等動物に就て遥かに大なる事實である。」

"All that tread
The globe are but a handful to the tribes
That slumber in its bosom."

『地上を歩むすべての者は
其胸に眠る諸群に比べては
手の一握にも過ぎぬなり』

そして若し之等無數のものゝ死と埋葬との記錄を正確に讀むを得ば、我等は世界の前時代の歴史的問題を解決する事が出來るのである。實に我等の起源及び世界の起源に關する問題全體に對する鍵は、我等が之等の岩石の記錄を通譯する仕方に存するのである。我等人類は自然的經過に因つて進化して出來たものであるか、或は又自然が現在支持せられてあるが如き方法より異りたる方法で我等は創造せられしものか？

土地、湖海、及び地球の氣候に斯の如き變化を生ぜしめしは、今日我等が日常に見て居るが如きたゞ普通の源因に因つてゞあるか？　若し然りとせば之等の變化はいかに不可測の永き年代を代表せるものであるか、我等は近代の靜かなる地球に於て斯の如き變化に遷り行く何等の進歩をも認識しがたい程である。

之より必然的に天地創造に關しても甚だ變化せる考が生ずるに至り、そしてたとへ全經過の巨細なる說明をなし得ずとも或形式の進化論は萬更不必要でもなくなるのである。然し大洪水が之等の化石となりし生物を埋め、之等の岩石の大堆積を造つたのではなからうか？　若し其が本當の說明とせば、洪水は普通に考へられておるよりも遙かに廣い範圍に及んだものであらねばならぬ。其理由は之等海床の大古の墓場が地球の表面到る所にあり、そして斯て造られし岩石が尨大なる厚さを時々呈して居り、一哩やそこらのは珍らしい事がないのである。（註、教科書などに此の化石床が十哩も十五哩もの厚さがあるといはれてある時、其は多の散在せる地方から之等の『形成

層』を集めて來た上の話である事を忘れてはならぬ。一ヶ所でそんな厚さの所は極少部分である。言ひ換へれば、此の稱へられし厚さは全く人爲的に『岩層』を配列したものであつて、（實際の客觀的事實ではない）此の大洪水は水陸ともに如何に恐ろしく攪亂せし事であつたか！　まさに聖書の『その時の世は水に沧れて滅びたり』といへる如くであつた。

一樣性說（Uniformity）を信ずるか或は洪水說を信ずるか、――二者一を擇ばねばならぬ。不信なる科學者輩は嘲笑と不公平なる供述を以て、こゝ數十年間聖書的解釋を全く度外視し來たのである。殆んど一世紀に亘つて沈默と嘲笑と狂言とを以て、流行の一樣性說に對する唯一の對說である聖書の記事を葬り去つて、之を正直に且公平に驗査する事すらなさなかつたのである。化石地層は創世記の最初の數章を確證する同時代の證書であるといふが如き暗示に對しては近代的科學者はたゞ之を笑殺し去つたのである。そして科學の一般的問題に對し我等に比して何等劣らざる識見を有し、

且科學的問題の論理に徹する點に於て誰にも劣らざる鋭敏にして學者的なる地質學者等の多數は一千八百三十年の頃まで聖書の此問題に關する記事を信じて居つた事を彼等は殊更に忘れしめんとするのである。

二

基督教は唯一の歴史的宗教である。其意味は此宗教は事實の長い連續の上に土臺を置いて居り、其事實の眞僞如何に因つて立つか倒れるかする程に、事實と密接なる關係を有するものである。されば數世紀に亘つて、論爭は舊約全書記事の眞僞如何といふ點に於て鬪はれて來たのである。約百五十年前に所謂『批評家』なる學者達が次のやうな説を言ひ出したのである、即ち聖書の最初の部分が書かれたといふモーセの時代には未だ人々が殆んど讀み書きが出來なかつた、其時代に於ける眞實の文學の如きは問題外であると。されば・そんな野蠻な時代にどうして聖書の最初の書物が書かれ得

んや？「批評家」等は、文學的目的の爲め書き物の出來たのは紀元前六百年より以前ではないと主張した。されば彼等は、アブラハムの時に書物或は手記があつた、或はモーセの時代に於てさえ其等があつたなどとは笑ふべき説であるとなし、其の學者振つた傲慢な態度に依つて多の人々をして、創世記や出埃及記の記事は信ずるに足らざる神話或は仙人譚の如きものに過ぎずと想はしむるに至つたのである。

されど殆んど之と同時に、化石は普遍的洪水につけるモーセの記事は正確なる事を多の著しき證跡を以て世に發表し出したのである。近年の地質學は地質學的事實の此の解釋に基礎を置いて建てられて來た、少くとも之を二者一を擇ぶべき學説の一とし て認むるに至つたのである。それで先きに此の學説を嫌ふた學者等は、大洋の沈澱物が不思議な場所に、ものいひたげな狀態にある現象を説明するため、水陸の同樣な變化がいつでも我等の周圍に起つて居るのであるが、しかし其は我等が注意せざる程緩慢なのであるといひ出したのである。彼等はいふ、陸地は今も或所では降下して其所

を海が覆ひつゝあり、又或所では海底が隆起して陸地となりつゝあるのであると、そして賞讃に價する努力と忍耐とを以て、スエーデンやグリーンランドの海岸又は他の邊陬の地を測り、世をして彼等の一樣性說に對する證據を存せるものの如く信ぜしむるに成功した。即ち凡て過去の地質學的變化は一般の人には注目せられないかも知れぬが、今も我等の周圍に起りつゝありと彼等がいふ普通の平凡なる經過に由つて起つたのであるかも知れぬと人々をして思はしめたのである。

それで彼等の平靜なる一樣性說に都合よくするため化石の埋沒の時を出來得る限り長く延さんとて、之等の種々なる型の生物は順次に生きて居つたので（キユヴエー Cuvier のいふ月賦拂式の一種の創造說）、斯して順時代的に埋沒したのであるといふ說を發明した。そして之等の化石を年代的に配列し、其の各異なれる種類が地球上に現はれし正確なる順序を之に由つて間違なく知る事が出來ると主張するのである。之より少し後第十九世紀に於てチヤーレス、ダルウヰンは之等の連綿たる型が漸次自然的

變化と發達を經て次々に現はれて來た方法であると稱するものを示さんと試み、斯て進化論の計畫を完ふし、世界は基督教の教科書に示されてある創造の記事の代りに、學者振つた流行の一學説を抱懷するに至つたのである。

三

されど『批評家』等が先づモーセ時代の無文學説を出したのであり、亦此説の前には地質學者及び進化論者の説を第一に受容したのであるを以て、彼等は最近科學的發見の暴露を以て答辯せらるべきは至當である。そして最近に至つて彼等は容赦なく目を覺されねばならぬやうな目に屢々遭ふたのである。

先づ第一にエヂプト象形文字である。ナポレオン部下將校の一人に由つて、攝理的にナイル河口附近で發見せられたロセッタ石 "Rosetta stone" より人々は埃及の凡ての古紀念碑を覆へる此の不思議なる文書を讀む事を學んだ。かくて、モーセの幾世紀

前に於て埃及は隅から隅まで文書で一杯であつた事が發見せられた。次に巴比倫(バビロニヤ)の楔形文字がベヒスタン岩"Behistun rock"の三國語の碑文の助に依つて讀まるるやうになり、そしてセイス博士の言を借りていへば『アブラハム時代のバビロニヤはジョージ三世時代の英國よりも、もつと高等に教育せられた國であつた』といふ事が明かになつた。

『批評家』等は大膽に構へて、楔形文字なり象形文字なりを眞實讀み得る者は誰もないと長い間否定して居つた。然し『其は客觀的事實に對する主觀的議論であつて、一般の『批評的』方法に循じて、事實が議論に所を讓るが如き恐論である』(セイスSayce)『批評家』等はまあ維持し得る限り頑張つて居つたが、然し遂に、一八八七年にテル―エル―アマルナ碑板、(Telel-Amarna tablets) 一九〇二年にハンムラビ法典(Hammurabi code) の發見せらるゝに當りて、古代東洋史の舊觀念は革命的變化を受けモーセ時代の無文學說は一片の反古となつたのである。そして若しも『批評的』立

場が生物學的進化論の大流行に因つて此時强められ（外見上）たのでなかつたならば之等『批評家』の説はケルサス(Celsus)やポルフリー(Porphyry)やジュリアン(Julian)等の書物と同じ道を靜かに行つた事であらう。

四

然し今度は一樣性説の地質學者の順番である。幾十年間ライエルの弟子等は天下を我有顔に橫行して居つた。そして世は彼等の喧々たる主張、即ち化石層に記錄せられたる凡ての作業は今日造らるゝ堆積物によつても繰返され、再び生ぜしめられつゝありとの説を信じて來た。然し近年に至つて之等の一樣性説の自信的學説がもつと注意深く吟味せらるゝに至り、其結果彼等の説はその重要なる凡ての點に於て全然破られてしまつたのである。聖書の洪水に關する記事を、あれ程長く反對して來た所の、地質學的一樣性説の運命を摘んで擧ぐれば、

一、化石はその豐富なる點に於て全く不正規(アブノーマル)である、其理由は我等の近代世界に於て化石は極僅少しか造られてゐないのである。

二、化石はその完備して保存せられたる點に於て不正規である、其理山は近代世界の示し得る化石の材料は極めて半端(はんぱ)なものである。

之等の事實は科學の初代より知られてあつたのであるが、地質學者は之を最小量に計算し且よい加減に説明し去つて居つた。單獨に考へると、之等の事實丈では通俗の學說を覆(くつがへ)すに足りないが、然し其以後の發見の光を以て考究する時、之等は一大世界的變災(カタストロフイ)の事實に對する有力なる傍系的證左となつたのである。そして奇妙な事に、之等の不正規的(アブノーマル)狀態が余り普遍にあるを以て、或人々は却つて之等の不思議なる狀態を全く正規(ノーマル)なものと論じて居るのである。

三、春の美裝の如き外衣が南北に亘りて、全地を掩ふた氣候があつた事が純地質學に知られてある。然し北方シベリヤの氷中に凍死せる象や其他の動物は、其氣候が

『急激に終息し』『不意に冬夜の如く極寒に』なつた事を證するのである。――ダーナ Dana.

四、化石は廣く觀察すると、大抵は現代の生存せる其等の代表者よりは巨大であり且よりよく發達して居るを見る。種(スピーシス)や屬(ゼネラ)を等ふする場合殊に然りである。之は其古代世界の立派なる氣候が大に與つて力あつた事と考へられる。然し特に注意すべき點は、此著しき特質が凡ての化石の特徴であつて、我等が我等の近代に渡渉して發見する化石の變化は丁度氣候の變化と同樣に急激にして完きものである點である。

之等最後の二事實も長い間知られて居つたのであるが、たゞ最近に至つて之等の事實が古世界と現在の世界との鋭どい明白なる境堺線となつて居る事が注意せらるゝに至つた。そして彼の古世界は幾つもの時代の長き延長の連鎖でなく、一時代、一單位、單に現世界の先きの狀態と考へらるゝに至つたのである。然し地質學上の二大基本的假定即ち、一樣性說(Uniformity)と生命の連鎖的時代說(Successive Ages of Life)

が公理の如く認められ、辯護の要も又辯駁の要もなきものと考へられて居つた間は、前述の四事實も地質學の一般に通用せる學説の虚僞を暴露するには十分でなかつた。之等の二假定説が近年の發見に由つて、如何に其虚僞にして非科學的なるかを證せられしかを研究するは、科學の歴史の最も興味ある章の一であるが、たゞ茲には我等の紙面が許す範圍に於て、其等の發見の梗概を載するに止めるのである。

五、化石岩の如き堆積は現今何處の深海にも大洋にも形成せられてゐないのである此の及ぼす影響の大なる事實の最初の發見は、海洋の表面より底部までを驗査し、其處に現存せる物理學的及び生物學的狀態を測定せしめんがために、英國政府の派遣せし『チャレンヂャー』號探撿隊（一八七二――七六年）the "Challeger" Expedition に由つて成されたのである。斯して始められし事業は多の他の科學的探撿隊に由つて續けられて來た。そして斯の如くして成されし多の革命的發見の總計は、今日深海に於て地層學的堆積は少しも成されてゐないといふ事實であつた。海流は其運動

に於て餘り淺い所を流れて居り、地層を削取り或は積重ねるために何等の機械的作用をなさないのである。(Sir John Murray, "Report on Deep Sea Deposits" ジョン、ムレー卿『深海堆積物に關する報告』) 海床の隅から隅まで全面に亘りて礫も砂も泥土も所を變更したり、或は堆積せられたりして居らぬ、靜かなる海の永遠の平安を亂す何事も起つてゐないのである。然し地質學によつて驗査せられし成層岩の多は、水深一哩より三哩までの間に棲息せる魚類、珊瑚類、海百合類、ホホヅキガヒ等が、埿土、砂、礫、陸地植物等と交互的に層を成せるものであつて、現今我等の深海に於て見らるゝが如き狀態は甚だ不可思議なる現象と考へられたのである。チッテル Zittel が卒直に言ひ表せし如く『チャレンヂャー號探撿隊は十九世紀に於ける最大の科學的事件であつた』――(『地質學の歷史』二一七頁)

此點は我等の議論にとりて非常に大切であり、又舊き觀念は中々粘り强い生命を持つて居る故に、海底に於て近代に成されつゝある堆積と古代の化石層との著しき差異

を明かにした之等最近の發見の結果を論じたる、もひとりの標準的著者、しかも英語國民の間に廣く知られたる人の言葉を揭げる事とする。兩者は全然性質を異にせる學者である。アーチボルド、ゲイキー卿（Sir Archibald Geikie）の言は之である。

『「チャレンヂャー」號及び他の探撿隊に出つて成されし大事業に對して感謝すべき事に、我等は現今海床の深部に於て形成せられつゝある堆積の主な特質につき知る事が出來た。我等の知る範圍に於て、其等と地殼の形成との間には何等の類似點がないのである。其等は地質學者が深海の所產と考へた如何なる地層とも全然相異せるものである』――（『地質學敎科書』一九〇三年版九二―九頁）

簡單に論ぜば、多の地質學大家は今や海底軟泥も遠海『赤粘土』も別に化石岩の代表とはならずと論じて居るのである。前者は現在海底の四千萬平方哩を、後者は五千萬平方哩を占め、二つを合せば殆んど純大洋の海底全部となるのである。海底軟泥及び『赤粘土』にある生物化石の屬（ヂェネラ）及び時々種（スピシース）までが、白堊質層及び其他に發見せらる

ゝ化石と同一である場合が屢々ある、然し他の點につきては（例へば結構、配列等）古代の堆積と近代のそれとは全然不同である。されば近代の科學者は一般に大洋の恒久性說を持し、化石層の形成せられし事に對する昔の說は廢止するか、或は少くとも大に改變せられねばならぬといふ樣になつたのである。

六、次にスース(Suess)及びホワース(Howorth)の如き學者の或人々は、水陸平面の變化が現在行はれつゝありとの事を證せんための證據を検査し始め、それが全く價値なきものたるを見出したのである。

無論、陸地は絶えず削られ、河川によつて運ばれて其河口に堆積せられて居るのである。然し之等の堆積も岸より幾哩以上に出るといふ事は珍らしいのである。しかし一樣性說のいふ所は之ではない。此通俗說の主な點は、陸地の或部分が緩慢にそして漸次に海の上に隆起しつゝあり、又或部分は低下しつゝありといふのである。一樣性說論者が過去の堆積物を說明するために用ふる論據は、『地殼の脈搏』に因つて水陸

の間に規則正しく且永久に行はれつゝありといふ斯の如き變動である。されど現存せる地質學者の最大なる者との定評あるエドアードスース(Eduard Suess)の畢生の事業はこゝかしこの陸地の隆起或は低下を證するると考へられたる證左は凡て想像的のものであつた事、及び斯の如き變動は現在地球上何處にも起つて居らぬ事といふに歸するのである。水陸は地震に源因せる一地方的にして且急激なる變動を除外していへば、現在は絕對に平靜なる均衡を保つて居り此狀態は科學的觀察が始まつて以來そうであつたのである。されば岩石が我等に告げて居るやうな、過去に於てどういふ方法にてか起つた所の素晴しい變動に類似するが如き近代的實例は一も見當らないのである。

スース自身の言を引用すれば、

『大陸の世紀的動搖說(Secular Oscillation theory)は地面が洪水で氾濫せし事と再び其が露出せし事を說明するのには十分でない。』スヱーデンやグリーンランドの如き、隆起と降下が行はれつゝありと想像せられて居る土地にても『測量せられ得る程の轉

位は有史時代後に起らなかつたのである』――（『地球の表面』第二卷五四〇、四九七頁）

略言すれば、近代的發見が我等に與へし凡ての智識を綜合して此科學の大家は、次の如き言を以て古き學説に對する墓銘を書いたのである。

『斯の如く、我等の智識が一層正確になるに隨ふて、大陸の洪水的氾濫と其後の露出とが繰返されし事の説明として一般に提出せられたる其等の學説を固守する事は一層困難となるのである』――（同書二九五頁）

之等最近の二發見――即ち化石的堆積が現在の海洋中になされて居ない事、及び陸地は現在上つたり下つたりをして居らぬ事――は地質學説の根本的改造を要求するに十分であると考へらる。然し彼等の舊説に對する未練と執着は强いもので、丁度エヂプト及びアッシリアに於ける打擊發見後の『批評家』の如く、彼等は彼等の『保證付の結果』は之等の發見に因て何等影響せらるゝ所なしと、お互同志告げ合ふて居るの

である。

五

然し乍ら神が其眞理の探海燈(サーチライト)を、神の言に敵對して崇めらるゝ虛僞に向つて放ち給ふ時は、啻に其虛僞の輪廓(アウトライン)をチラッと見せる丈でない、其固有の醜狀を全く暴露し給ふのである。此事のため用ゐらるゝ器は世の所謂偉大なるものではないかも知れぬ若し微小卑賤なるものであればある程結構である。然らば榮譽は當然受くべきお方に歸せらるゝのである。然し其論證は決定的のものであつて、神の民は其に依つて神の言が最後の細目に至るまで眞であり正確である事を知らしめられるであらう。

先きにもいふた通り、聖書の初頭の部分を嘗て敎會が信じた如く、文字通り解釋せんとする立場に立てる人々があちらこちらに多くあるのである。それらの人々は聖書が最も信用すべき歷史であり、且最も眞實なる科學である事を自ら世に證明すべき時

が必ず到ると力説して來たのである。之等の人士即ち新新教主義者の或人々は、創世紀の明々白地にして首尾一貫せる教説を『假定說』として出發し、（人間の發明した直觀說或は他の假定說より何れ丈優れたるものであるか）天地創造と世界の初代史とに關して地質學の主張を其聖書と相背致する點に於て檢査せんと努めた。そして彼等は終始一貫したる議論が表面つかまへ所なく見ゆる眞理を捕捉するに最善の方法たる事と、古き格言の如く『君が義しいならば、君は自分で思つて居るよりも、もつと義しいのである』といふ事とを信じて來たのである。そして其結果はどうであるかといふに、地質學說殊に生命の連續年代說は僞科學と僞論理の上に其根據を置けるものなる事が餘り容易く發見せられたので、實は彼等自身も吃驚して居る次第である。

茲では其結果の概畧だけを舉げる事とする。之は通俗なる一樣性論者の地質學を駁し、洪水の事實を論證し、斯て間接に聖書の創造說を確證する所の累進的議論を組立てる連續的事實の第七のものである。此點に關する證據論に明かでない人は宜しく著

者の『地質學の基礎』"Fundamentals of Geology" を見らるべし、そこではもつと詳しく此點が論議せられてあるのである。

七、此第七の事實は連續的年代に關するもので、通俗說の此部分も亦根底なきものたる事が明かにせられるのである。

ダルウヰン說及び進化論の基礎的觀念を、聖書の記錄と列べて考察する時に、直に目に觸れるのは、地質學の敎ふる所の生命の連續（或は連續的年代）といふ事が論點の關ヶ原であるとの事である。敎會は永年の間、或は『回復說』("Restitution theory" 譯者註、天地の創造は永き過去に於てであつたが、之が一旦破壞し、再び其が比較的近年に現今の狀態に回復せられたりとの說）を以て、或は『一日一期說』（Day period theory 譯者註、天地創造の記事中の一日は一時期を指したものであるとの說）を以て地質學と妥協點を見出さんと試みて來た、然し之等はいづれも折れたる葦の如きものであつた。もつと大膽に眞正面より此問題に對する事は出來ないのであるか？

此連續的年代說は如何なる科學的證據を根底とせるものであるか？　或は其は單なる推定、『運用上の假定』で、何時にても發見に因つて虚僞なる事が證せられ得るが如きものに過ぎないのであるか？　或讀者にとつては不思議に思はれるであらうが、生命が種々なる形態に於て正確に連續して來たとの說、而して此の生命の連續は地球の連續的時代を正確且截然たる順序に分つものであるとの說は、殆んど公理的自明の理の如く――科學的『直觀』の一種と想はれ居つたのであるが、今や之はたゞ一つの假定に過ぎない事が判つて來たのである。

然し此概念を否定し、且岩石はいはるゝが如き規則正しき順序で發見せられない事を證明する冷靜なる客觀的事實が、今や地球の全面に亘りて澤山發見せらるゝに至つたのである。

幾多の事實より唯一種を擧ぐれば、歐洲、印度、濠洲、及び北亞米利加に於て、廣大なる領域に亘る地層が『間違つた』順序、即ち所謂『最古』の岩層が頂上にあり、

そして『最年少』のものが其下になつて居り、しかも此順序で最初から置かれた凡ての形跡がある場所が澤山あるのである。スウキツルランドのグラルス(Glarus, Switzerland)附近の地方が最初に發見せられたのであるが、此の『說明』のため幾多の書物が書かれたのであつた。スコツトランドに於ける一實例は學者間に少なからざる論爭を惹起したのであつて、サー、エ、グイキイ(Sir A. Geikie)は之について いふた。『之等の部分が詐僞のため計畫せられたものとしても、此以上巧妙には造られ得ない……そして此地にはじめて足を入れる人は誰でも、所謂地層學上の順序といはれて居るものは實地に於ては事實でないと考へるであらう』――(自然、一八八四年十一月十三日發行、二九―三五頁)　東部テネシー洲及び北部ジオジア州に亘れる南アパラチ山脈中に他の幾つかの實例が發見せられ、其等上下顚倒せる地床の一は長さ三百七十五哩にも及ぶのである。

もつと最近に至つて之等顚倒せる地層の多數がロツキー山脈中にもある事が政府の

報告に發表せられた。最も近くに發見せられたのは、問題の地の中央に近きアイダホ洲バンノック縣より其名をとりて『バンノック顚倒地層』"Bannock overthrust" と稱へらるゝものである。之はアイダホ、ウタ、ウアイヲーミング三洲の部分に跨り、凡そ長さ二百七十哩に及んで居る。此處では石炭紀の石灰石が侏羅紀或は白堊紀の石の上に延長してあるのである。（リチャーヅ及びマンスフキールド氏、一九一二年十一、十二月地質學雜誌）殆んど之と同樣な地層、或は之と連絡せるか又はその延長であるかとも考へらるゝものがモンタナ洲の中央よりアルバータ山脈の黃頭路にまで凡そ三百五十哩に延びて、寒武里亞及び前寒武里亞石灰石と板粘岩が白堊紀の頁岩の上に横はつて居るのである。そして模型的實例とも稱すべき場所では土地の斷層がよく露出して居つて、順序よき配列が見られるのである。（マッコネル氏）此地方は七千平方哩に及び、緯度五十度の少しく南に當りて斯の如き古生界の地層より成れる山脈が五つも平行して南北に走り居り、其間に四つの白堊紀の谿谷があるのである。此邊は何

處でも川が深く浸蝕した處では、下に白堊質の河床を露はすやうになつて居るのである。

地質學者等は之等の顚倒的狀態の發見に因つて最初は困惑したやうであつたが、然し彼等の組立てし化石の不變一樣なる順序說を固守する餘り、間違は彼等の學說にあるに非ずして、それは岩石にあるのであるといひ出した。岩が惡いのであるさ。そして之等の古生界の岩はきつと隆起して他の上に推上げられたものであるに相異ないといひ、之が如何にして起つたかを我等に告げんとて長い論文を書いて居るのである。然しかの「批評家」等がいかにエジプトの象形文字とバビロニヤの楔形文字碑の證據に對抗せんとし、又トレマイ（Ptolemaic）の天文學者等が、望遠鏡に因つて發見せられし面倒な事實を說き去らんとして、『從圈（デフェレント）』や『周轉圓（エピサイクル）』說を持出せしかを我等は記憶せる者である。眞理は强い、早晚之等の發見は、生命の連續的形態が確固たる順序で（連續的年代）に存在するとの空虛なる假定說を根本的に破壞するに至り、且一の

化石が他の化石より或は人類其自身よりも本質的に古いものであるといふ事はない事が明白になるであろう。それで我等が多年、地質學的系列、或は『系統發生列』"phylogenic series." の名を以て呼されて來た所のものは畢竟は、舊時代の分類學的系類の岩石の中に埋沒したものに過ぎないのであつて、如何にしてか又何時かといふ問題は他の研究を以て定めらるべきものである。

次章に於て明かなる如く此概念の歴史を研究すれば、かゝる結果になる事は初から明瞭である。化石が岩石の年代に對する指標であるとの此説は殆んど百年前無法なる山師的學者の創唱せしものであつて、彼等は自分の頭で造り出した説を恰も事實の發見かの如く考へ、たゞ西部歐洲の僅かばかりの隅つこの岩石を驗べてこしらへ上げた甚だ主觀的説を、世界の他の凡ての所に當嵌め得ると愚かにも想像したのである。彼等は世界の他の部分に關しては全然無智で、且自然が其埋沒せる記錄より將來何を暴露するやに關しては驚くばかり無關心であつたのである。

六

以上列擧せし七事實或は七原則をこゝに一纒にして示す事はあながち無益でない。

一、化石は其夥多豐富なる點に於て全然變則(アブノーマル)である。

二、化石はその完備して保存せられある點に於て甚だしば〳〵變則である。しかして、それが如何にして埋沒せられしやを語れる多の明白なる證據を供して居るのである。

三、春の如き美しき温暖氣候が『突然終末を告げた』のである。

四、化石は概してその現代の代表者等よりはより大にして、より善く發達して居り古代のものより現代のものへの變遷は氣候のそれの如く急激であり且特殊のものである。

五、現今の深海洋は眞實の地層的堆積を少しも造つては居らぬ。

六、現今我等の大陸の海岸に於て水準の漸次的變化を證明する十分なる證據はない。『測定し得る程の轉位は有史時代になつて起らなかつた』――スース。

七、化石の種々なる形態に由つて年代を區別する說は主觀的假說に過ぎずして、今や多の事實を以て其說は方法に於て非科學的なもので、全く辯護し難きものである事が示されて來た。されば化石は本質的に且必然的に古いとか幼いとかいはるべきでない。一の種類の化石が他の種類のものより一層古いきか一層幼いとかいはれない事が今や科學的に證明されたのであるから、岩石層の年代に關して區別を付せんとせば他の常識的證據の上に其區別をなすべき事となつた。化石の系統說は、恰も近代の系統發生學の系統と同じく、純然たる人爲的のものであつて、其以上の何者でもないのである。

確かに玆に素晴らしい事實の系統があるのである。そして誰でも理性を具へた者、科學的證據の價値を認識し得る者であれば、之等の七事實或は七原理に面しては次の

如き自覺が自身の中に湧き上つて來るのを禁ずる事が出來ない筈である。即ち普通に敎へられてある地質學々說には確かに或る根本的誤謬が存してあり、（之とは唯一の掛替の說である所の）創世記の洪水の記錄はやはり正しきものであらねばならぬといふ事である。化石地層は凡ての點に於て變則であり、之と類似のものは今地球の何處にも形成せられつゝゐないといふ事が明白となりし今、一樣性說は間違であり且之等の化石層岩は古代に於ける世界的大變動の結果であるとの結論をどうして避ける事が出來やうか？　そして又之等の化石層を時代別にして排列する科學的方法は無く、如何なる生物が最初に棲んで居り、又最初に埋沒したのであるとも告げ得る道は無く、即ち化石の一種を他の種類或は人類自身より一層古代なるものと證する道は無い事が明瞭になつた今、我等は化石世界が一單位（ユニット）であつて、一大世界變動の時に埋沒したのであると結論する外方法がないではないか？　（附錄Aを見よ）

斯の如く世界的洪水に關するモーセの記錄は畢竟、最良の科學的事實となり、其が

聖書に於て占むる位地が要求せる重要さを基督教神學の中に認めらるゝに至るのである。そして斯して其の背後に聖書が宣言せる如き、文字通の創造が横はれる事をすべての理性的頭腦の所有者は認めざるを得ないのである。

然し我等は今や此問題の他の側面に注意を向くべき時であると考へる。事實冷酷なる論理は容易に且完全に洪水の記録と且（間接的に）創造の記録とを證明したのであるが、我等の忘れてならないのは、之等の見方は極めて最近の發見にかゝはり、其の全部は未だよく知れ亘つてゐない、そして世の人の大部分は未だ何等かの形式の進化論説を、我等の世界の創始の歴史に關して懐いて居るといふ事である。然し此新觀念の發達史は我等にとりて多の有益なる教訓を有せるものであつて、其歴史は章を新たにして論ずるを最善と考へられるのである。

第四章　歴史的略圖

"Theories come into our laboratory by the bushel; when they have served their purpose, they are thrown out of the window"

——Louis Pasteur.

『學說は桝で計る程我等の實驗室を訪れる、それらが役目を果した後は、みんな窓から捨てられる』——ルイ、パスツール。

一

三日に亘つてイスラエルの全陣は、抑制しては居るが然し激越なる昂奮狀態で、準備に多忙であつた。ヱホバ自ら彼等に語るため山に降らんとして居給ふのである。

『かくて三日の朝にいたりて雷と電および密雲山の上にあり、又喇叭の聲ありて甚だ高かり營にある民みな震ふ』(出十九ノ十六)

そして次に此世界に空前絶後の光景が續いて起つた。簡結で權威あり且最後的なる『十誡』の言が其等の恐怖に畏縮せる千萬の民の耳に鳴り響き、閃々たる電光と殷殷たる雷鳴とが長く忍び給ふエホバの嚴肅にして威嚇的なる御聲の先驅となり又伴奏となつたのである。怖れ狂へる民は異口同音に『汝われらに語れ我等聽ん、唯神の我らに語り給ふことあらざらしめよ、恐くは我等死なん』とモーセに歎願したのであつた。（出二十ノ十九）

それから僅か數時間經つか經たない間に彼等は其の鑄なしたる金の犢の周圍で、馬鹿騷をして踊り狂ひ、再びエジプトに歸らんと計畫したのである。彼等は愛の律法をかなぐり捨て、不法の者の軛を求めて取つたのである。永遠の王が提供し給ひし王の子たる榮光の運命を足蹴にして、東の間の肉的快樂に精神を痲痺せしめ、思想を溺らさんとしたのである。エホバに去らん事を求めて、自ら製造せし神々の前に彼等の心靈を汚し其人格を辱しめたのである。

是ぞ人類全歴史の模型ではないか？　パウロは之が神を忘るゝ人類の辿るべき常道であるといふた。凡て異邦の民の堕落せる狀態は彼等が低き標準で造られたためでなく、退化の結果——神を心に存むることを願はざるため（羅一ノ二十八）であると云ふた。

ニネベ、バビロン、及びエジプトに於ける發見の結果、之等古代の人民の懐きし思想、及び生活習慣が美しく描寫せられ、且彼等の宗教生活は其以上高尙なものであつた事が最も顯著となつた。彼等の社交的習慣、彼等の言語、殊にエデンの起源に關する彼等の傳說が此事を示して居る。されど其等にもまさつて、彼等の宗教が此事を證明するのである。其宗教たるや死せる形式主義と偶像崇拜の外皮に包まつてはおるが其中に氣品高き理想と唯一絕對者、即ち造物主に對する祈禱の形式がほの見ゆるのであつて、——之等は凡て遙か遠き昔のもつと智的で且もつと眞に人道的であつた時代の紀念物、嘗て輝きし時代の夕紅である。考古學は人類退化の悲しむべき記錄を示せ

ゐので、向上進化の跡を示してゐないのである。

實際いかなる民族であつても、或は神の言、或は神の御業より新しき默示を示さるゝ時、其默示を受くる事を好まず、もつと十分に自己を神への奉仕に献ぐる事を好まざる者は、間もなくイエラエルの歴史を繰返すに至り、彼等も亦彼等自身の暗想なる新發明の神に膝を屈するやうになるのである。

　多の改革の歴史は此の眞理を說明するために引用せられ得るのである。此章に於て我等は、神の自然の書に注がれし大なる光の洪水を濫用せし悲しむべき結果の跡を辿らんとする目的である。此の光は造物主の智慧と能力の記錄を鮮明にするために與へられしものであつたが、然し人間の邪なる智慧に因つて自己尊崇の紀念碑を建つるため出用せられた。そして今や其紀念碑は人類歴史の頂點(クライマックス)に於て、聖書が罪、といふ語で稱ふる所の狀態の如何に絕望的たるかを證明するためのものとならんとして居るのである。

二

第一章に於て、人々が暗黒時代の長き夜より醒めし時、聖書と同時に自然界の研究が勃興し來りし事を見た。宗教の妹たるべき自然科學が其時に生れたのである。智的束縛より解放せられたる人心は各方面に展開して進んだ、そして神は斯の如く宇宙の秘密を開發し、昔シナイ山より語り給ふた如く、自然界を支配する偉大、不易なる法則で再び語り出で給ふ上に特別の目的を有して居らるゝ如く見ゆるのである。來らんとする時代を先見したる預言者等は、世は『直觀』と自分勝手な說とを神の言に反抗して採用し、自己催眠に陷るべきを見た。そして末の日に於ける『不法』につき我等を警告し、時代の試金石は神の道德法の不變と、我等が造物主としての神に對する固有の義務との上にある事を宣言した。それで、此の試驗が有効にせらるるために、宇宙を支配せる不變の法則がより明かにせられ、自然界の基本的大法則が新しく默示せ

られたのである。斯て我等は被造物とは如何、造物主に對する關係如何、被造物として造物主の物質的且道德的法則に服從すべき義務は如何といふ事につき一層明白なる觀念を有するやうにせられたのである。

物質的世界の秘密を斯く開發せられし理由がも一つあるのである。教會は永い世紀の間『全世界に行きて、凡ての者に福音を宣傳へよ』との命令に耳を傾ける事を怠つて來た。かの猶太人の姉妹教會の如く、自ら高くとまつて、世界の他の人種は福音を理解するに餘り墮落して居るものと視て居つたのである。然しキリストは彼の再臨の福音は、終末の前に、證のため凡ての民に宣べられねばならぬといふておかれた。されば今や時代の暮方、夜の帷が教會の未完成の事業の上を將に覆はんとする時に當りて、神は其民が永らく怠つて居つた此事業を全世界に速めんが爲に、自然の能力、空の雷電をさへも利用する事を人に教へ給ふたのである。

三

第十五、及び十六世紀に於ける學問の復興の直後、動植物、天文、地質其他の科學が勃興した。そして地質學は他の學問と平行し、或場合には先驅して進んだ。

幾つかの年代を擧げると、如何に自然科學の進歩が宗教改革に隨伴したか、如何に自然の書の智識が聖書の智識と手を携へて進んだかが知れるのである。コーペニカス（Copernicus）はルーテルに先つ十年、一四七三年に生れた、そして彼はルーテルが彼の改革事業を進めつゝあつた次の世紀の初に於て、彼の天文學上の發見を完成したのである。ケプレル（Kepler）は一五七一年より一六三〇年まで生き、物理學の父なるガリレオ Galileo）は七年早く生れ、十二年晩く死んだ。二人とも英國に於ける淸敎徒（ピューリタン）の大運動と同時代の人であつた。自然科學を革命せしベーコン（Bacon）の大事業は一六二〇—二一年に成された、之は『メーフラウアー』號の年である。ベーコ

ンのそれにも劣らざる大感化を後の科學界の歴史に殘したるサー、アイザック、ニュートン（Sir Isaac Newton）はそれより二十年程後れて一六四二年に生れた。此の學問復興時代の學者としてはなほ他に、ステノ(Steno)ダ、ウインチ(Da Vinci)及びジョンウードワード(John Woodward)の如き幾多の人々が、岩石や化石に關する多の書物、時には鮮明なる圖解の伴へる、を發行して、地質學の基礎を置きつゝあつたのである。ウードワードは少くとも彼の時代を遙かに超越して居つた、然し今は彼が之等の岩石化石は普遍的大洪水の證左であると敎ふる故を以て顧みられないのである。亦或者は岩石中に含まれたる動植物に酷似したる奇妙なる物體を說明するに種々なる馬鹿氣た說を出したのである。然し一七〇〇年代までに岩石と其化石的含有物に關する智識が生ける動植物に關する智識を凌駕するに至つたのである。

四

茲に於て進化論の發達が始まつた。岩石の間に發見せられし動植物に因つて地球の初代に關する驚くべき默示に直面せる人々は『抽象的原理として自然をして我等に語らしめよ、然らば我等聞くべし。されど自然の神たる人格的造物主をして語らしむる勿れ、恐らくは我等死なん』と昔のイスラエルの如く請願し出したのである。といふのは此の時代の多數の學者は地質學的變化が大洪水の結果であると自由に認めたが、それと反對に其時代の一般的懷疑主義にかぶれて、普遍的洪水の觀念を嘲笑し、地質學的堆積は多の永き時代と變革が次々に非常なる長期に亘つて生ぜしものと說明せんと試みたるレーマン(Lehmann)フユックゼル(Füchsel)アルドイノ(Arduino)及びコムドブフオン(Comte de Buffon)の如き一種の人々が漸々頭を擡げて來たのである。斯して進化論の主要點が次第に公式化せられ、植物、動物及び岩石に關係せる科學を形成する上に其が與つて力あるやうになつたのである。

さればこゝ一世紀以上に亘つて、何か地質學上の議論をなす場合には、必ず我等の

地球或は宇宙の起源に關して或る空想的臆說を假定して議論を始めるといふのが流行となつて居つた。一世紀以上に亘つて、といふたか。然り、此の粗野にして非科學的方法が我等の時代に至るまで生存を續け來り、普通の地質學教科書は、現在の事物即ち生存せる動植物（人間をも含めて）の生ける種（スピシース）より出發して、其より過去に遡り、地球上に於て集め得る凡ての事實の總和より眞のベーコン式歸納法に循つて學說を組立てる事をせずして、やはり舊式な一の臆說を先づ假定して、其處より出發して學說を組立てるが如き事をして居る、即ち我等の地球は先きに太陽より投げ出されたるものであつて、其が後に赤熱的狀態より冷却し、漸々と下等生物を生じ、順々に高等なるものに發達し、遂に今日見るが如き動植物の種（スピシース）を生ずるに至つたのであると說いて居るのである。

そして此等の教科書は、科學の名によりて小學校に於てのみならず、文明國全體の中學、大學に於て、我等の子弟に教へられてあつて、地球の此の驚くべき變化は、簡

單にして漸次的なる日々の經過に因つて生起せられたものであると大膽に斷言して居るのである。最も明斷なる頭腦を有せる近代の科學者も斯る學說は、何等の科學的眞實性を具備せざる所の一の世界創造譚に過ぎない事に對し殆んど無意識で居るかの如く見ゆるのである。之はヒンヅー(Hindus)人の、ブラーム(Brahm)が聖なる卵より宇宙を孵化したといふ虛誕、或は支那人の、プウアンク(Pwanku)が原始岩より太陽や月や星を砍出したといふ昔噺と同様に、粗野なる主觀的想像に根底を置ける非科學的なものであり、亦はベーコン及びニウトンの主義と方法に反對なるものである。

一つの宇宙創成說を組立てんとする此の病氣は地質學の惡天才で——忍耐深き探究と健全なる歸納法とに依り、科學的論究の制限と斯て獲られたる積極的結果とを以て滿足せずして、主觀的意識より一學說を編み出さんとする惡癖であつた。そして斯く造られたる多の天地創成說は啻にベーコン式科學と其方法及び結果とに於て相距る遠きものたるのみならず、彼等は無意識であるかしらぬが、其科學的探究の領域に於て

神を『心に留むる』事を欲せぬ決心の如くに見ゆるのである。こいふのは之等の創成說は其概念に於て殆んど一樣であつて、出來得る限り聖書の創造說に相反するものである。其等はすべて異敎的にして唯物的なる計劃である。すべて其主要なる性質に於て進化論的である。我等が進化と稱するものは古き昔のギリシヤ、否其以前のエジプト、カルデヤ及び印度等より流れ來つたる古き異端的思想の最後のものに過ぎないのである。(近代の進化論者はかゝる古き兄弟等を恥ぢて居るであらうが。) 彼等の形式は異つてゐる、然しすべて其創成說の內容、性質は同一である、(一) 其等は凡て物質の永久性を說き、斯て汎神敎的である、(或ものは他よりは一層明らさまに。)(二) 其等は凡て創造を現在行はれつゝある經過と比較して『說明』せんと試みる。(三) 其等は凡て其のいふ所の創造或は進化がなされし殆んご無限の年月を含むのである。

なほ彼等の一致點は、其等の進化論的計劃が、古きカルデヤ、アッシリアの宗敎より現代の接神術(Theosophy)、人道敎(Humanism)、或は新神學(New Theology)などの凡

て人造宗教の基礎とせられた事である。近代の進化論は形成の途中にある一新宗教であつて、其の傳播が速かなるとともに、如何に其が『科學』の名によりて不可侵的のものとせられ、又如何に非宗派的たりと考へられて居る各國の公學校が、其傳播のための傳道會社(ミツシヨナリーソサイチー)と變へられて居るかを忘れてはならぬ。ギリシヤ、カルデヤ、及び印度の古き宗教哲學の如く、之は主として人間の起源と、彼の宇宙に對する關係を取扱ふものである。そして先にもいふたやうに近年に至りて、之は基督教の形式を眞似し聖書の慣用語を採用し、其等を自家藥籠中のものとして其汎神教的且進化論的教説を宣傳するに至つたのである。されば今や我等は此の若返りたる異教が幾千の教壇、專門學校及び大學より教へらるゝのを聞かされ、又凡ての通俗的雜誌、新聞に之が說かるゝを見せしめらるゝのである。

されば問題は要するに、基督教か異教か、何れの宗教を我等が採るかに歸するのである。――創造は基督教を意味し、進化論は異教を意味するのである。聖書の創造說

に反對なる如何なる起源說も早晩、其歸する所は異敎であるといふ事は、多の實例によつて歷史の證明する所である。こゝ數十年に亘り、我等の學校を通して此敎理を敎へて來た結果として、斯の如き異敎的哲學、宗敎、然り異敎的道德への退步がまざ〳〵と我等の眼前に展開せられて來たのである。我等は已に其結果の或ものを見せられた。そして其等が凡て世界の爲め善き事であり、未來の希望は輝けるものだ、といふ事が出來るか？　若し其が出來ずば、斯る僞の科學と僞の宗敎の組織に頭から反對し、其の科學は何處か間違つて居る、何となれば其より生ずる所の宗敎が僞である、結果が惡いのである、といふ所の聖書基督者（バイブルクリスチャン）即ち新新敎主義者を何ぞ論理が間違つて居るとて攻擊する事が出來やうか。實際此の實用的（プラグマチック）試驗は余にとりて最も論理的、最も眞實に科學的論法であつて、日常生活の事物につきて我等の用ふる方法である。自然科學以外のより確かなる事實、より確實なる眞理の論據に立ちて我等は斯の如き恐怖すべき結論と結果とに導くが如き創成論には、必ず何か間違つた所がある事を知る

のである。然しなは我等の歴史について考へやう。

五

ブフォンは地質學に關し、科學的方法と聖書の事實に反抗せし最初の有力者の一人であり、斯て或意味に於て近代進化論說の開祖とも認めらるゝ者である。彼の七『期』說は上に擧げし進化論的創成說の特徵たる項目を凡て具有して居り、斯て彼は嚴格なる意味に於て近代進化論的地質學の祖と稱へらるべきである。此學說の發達に大感化を及せし人々にウエルネル(Werner)ウキリアム　スミス(Willam Smith)及びキユヅエー(Cuvier)がある。此等の三人につき、亦其學說につき、少しく說明せん。ア、ゲ、ウエルネル(A. G. Werner. 1749—1817)は獨逸フライベルグ州マインスの學校に於て首席敎授であつた。彼の先祖は三百年間鑛山業に關係し、ウエルネル自身も中央ヨウロッパに於ける彼の狹き小區域より甞て一度も外に出た事がなかつたので、彼は甚だ

狹量なる觀念を自然と發達せしめた。彼は優秀なる鑛物學者であつた、然し彼が熟知せる地方で片岩や板泥岩や砂岩や石灰岩等が或る秩序で存在せるを發見したる時に、彼は此の同じ秩序が地球の全面何處でも發見せらるゝものとの甚だ狹い又前後不揃なる結論を構成したのである。

今に於ては妄誕の如く見えるが、ウエルネルは其の熱中せる數千の弟子に、之等の種々なる鑛物的堆積の一つ一つが洋葱(タマネギ)の皮の如く全地球を包んで居ると教へたのである。彼は書物は一つも書かなかつたが、然し魅力を有せる教師であつて、其の學生等をして彼の教へし地質學に無限の信用を置かしむるに成功した。エ、ゲイキイ氏の意味深き言を借りていへば、『ウエルネルの徒は恰も地殼が形成せられし時、其處に立會ひしかの如く、岩石の起源と順序とに關して自說を確信して居るのである』と。(『地質學の開祖等』二八八、二八九頁)そして彼の四十年の教授事業の間に、彼は其のフライベルグに於ける專門學校を歐洲の科學的大中心の一とし、其處へは世界の

各地より幾千の學生が群がり集ひし事であつて、彼の荒唐なる洋愡說が此科學の後の歷史に及せる惡感化は測り知るべからざるものがあるのである。

ウエルネル自身の觀測はエルツ山脈（Erz montains）とサキソニー（Saxony）及びボヘミヤ（Bohemia）の附近の地方に限られてあつたのであつて、彼が他地方に於ける地層の構成に關し、彼が如き直觀的且つ主觀的方法を以てして正しき推定と判斷を下し得る者と期待するのは無理なことである。然るに彼の弟子達は永い間スコットランド、合衆國、メキシコ、或は南米を探險するに當り、その發見せしものを恒に彼等の師の學說の用語で解釋せんと試みたのである。フオン、フンボルトすらも彼の苦心の著作をウエルネルの世界構成說と調和せしめて書いたのである。然し遂に幾千の累積せられたる事實は此の眞面目腐つた道化芝居に最後のとどめを刺した、そして科學者達に對しウエルネルが地球の他の側面に於ける地層構成に關する智識を魔術的に與へられて居なかつた事を證明し、斯くて洋愡說は一部分放棄せらるるに至つたのである。

余は一部分といふ、その理由はウエルネルの主唱せし斷定說の不十分なる事が夥しし來り、彼の學說の同復し難き失敗が一層明白となりしにつれて、その化石の內容に依つて岩層を斷定せんとする學說が次第に前說に代つて擡頭するに至つたのである。此の觀念は英國の一無學なる土地測量家なるウヰリアムスミス（William Smith 1769—1839）に由つて最初唱へられた。スミスと殆んど同時代に、彼と同じ觀念を發達せしめたと思はるゝ、其當時の最大科學者なるバロン、キユヴエー（Baron Cuvier 1769—1832）の有力なる感化の下で、化石層の洋葱皮說がウエルネルの鑛石洋葱皮說に代りて頭を擡げ、此種の說は今日なほも地質學の凡ての教科書に隱密の間に散見せられるのである。スミス及びキユヴエーの新學派は『一切のウエルネル派の誤謬を排す』と唱ふれども、其誤謬の最大なるものをなほも保持して居るのであつて、之が今日の地質學全體を支配して居るのである。されば、五十年前に書かれた時と同じく今日も眞理であるハーバート、スペンサーの言の如く『洋葱皮說は死んだが、其精神は

超越的形式でなほも其論敵の結論中にも發見し得るのである』("Illustrations of Universal Progress," P343)

キュヴエー及び其時代の學徒は、彼等の推定せし連續せる各時代は大なる世界激變によつて終末を告げたもので、其時代に生存せし凡ての種(スピシース)は其に由り死んで岩石の間に埋沒せられたのである、聖書の大洪水は多分其の最後のものであつた、と教ふるのである。然し約一八三〇年にチャーレス、ライエル Charles Lyell は其の『地質學の原理』を著し、之等の連續的激變の代りに、現在地上に、海に、又空中に行はれつゝある普通日常の變化のみが過去に於ても起つたのである、そして之等の緩慢なる、現代のそれと一樣なる經過に依つてのみ、凡ての過去の地質學的變化は説明せらるべきであるといふた。科學世界は、まあ之で助つたと、長い溜息を洩し、熱心にライエルの一樣説を受容れたのであつた。

之等の連續せる時代の目錄として化石の分類配列の仕事は主としてアガシズ(Agas-

siz）が之に當つたのである。其時代最近に發見せられし發生學の事實を利用して、彼はある特殊なる化石の時代的順序は、其生物の發生學的の近代的發達の順序さ適應す。。。べきものさ結論し、地質學的系統の細別を其に順應して配列したのである。そして地質學的系統は、あちこちの異なれる地方に散在せる實例より綴り合されたる所の純然たる人工的のものであつて、此點では生物の分類學的系統が人工的なものであると同じである。さればアガシズの欲する如くに順序を配列する事は困難な事でなかつた。それで幾らかの少修正はあるさいふものの、此の方法は生物學的科學に於ては一般的のものさなり、化石的及び近代の分類學的系統は恒に發生學的系統さ比較せられて、或は訂正せられ或は査證せられて居るのである。しかも不可思議な事は、今日の進化論は、ヘッケル(Haeckel)の如き人々に指導せられて、彼等の議論の頂點としていふ所は、或る特別の種（スピシース）の發生學的發達は此の（彼等の勝手に人工的に製造した）系統さ地質學的時代を多少さもに相同ふするものであるさ、する事である。（譯者註、彼

等は初めに地質學的系統を生物發生學的系統に適應せしめんとし、後には生物發生學的系統を彼等が斯くして人工的に造り上げし、地質學的系統に適應せしめんとするのである。)しかも彼等は斯の如き結論的議論の能力を感知し得るに足る科學的訓練と教養とを十分に有せざる憐れむべき聖書的クリスチャンを憫笑せんとするのである。※(※註、ヘッケル及び其一派の進化論者の用ふる此得意の論法、即ち近代的生物個々の發生學的發達を採りて、之と彼等の(人工的に配列したる)地質學的系統の間に存する驚くべき類似點に注意を喚起せしめんとする方法は、丁度かの一少女が生れて始めて一匹の小羔を見た時『あゝ何と本物のやうじやありませんか！ わたしのおもちやの羔と同じやうになきますね、そして同じやうな毛を持つて居ますね』と叫んだ面白い物語に酷似して居るのである。

然し實際に有名なる今日の生物學者、アダム、セジウイク(Adam Sedgwick)チ、エイチ・モルガン(T. H. Morgan)オスカー、ヘルトウイグ(Oskar Hertwig)の如き、及

びなほも其數を增しつゝある他の學者等は、幸にも此少女の議論よりは進んで來たのである。）

　されど本論の歷史的考察に再び歸らん。

　第十九世紀の中葉頃には之等の驚くべき連續的時代は未だ聯絡が付いてゐなかつた如何にして斯くも無數の、見た所繁茂せし種（スピシース）が巨大なる塊で、あの樣に姿を沒し、そして亦同樣に不意に且つ不可思議に、他の酷似せる、しかも明かに別なる種（スピシース）によつて置換へられたかは、大なる謎であつた。

　丁度此の『心理學的』時期に際してチャーレス、ダルウイン Charles Darwin が出現して、前者は自然的經過に由つて後者にまで單純に成長したので、何等の激變とか超自然的經過に由るものでない事が說明し得るといひ出したのである。如何に此の說が科學世界に熱心に歡迎せられたか、亦如何に之が現今科學及び哲學の最高型として稱揚せられたかは一般に知れ亘れる事實である。

六

然し數十年前にダルウイン派の學徒を昂奮せしめし熱心の多分は、現在學界の幾つかの事相の爲め今は失はれたのである。

其第一はワイズマン(Weismann)ウオレス(Wallace)ランケスター(Lankester)等に由つて指導せられたる新ダルウイン派の仕事であつて、後天的性質は子孫に遺傳せず、たゞ先天的性質のみその後裔に遺傳せられ得るとの說である。此說はダルウインが敎へし儘の原說を大部分破壞するものである。そしてスペンサー及び其他の學者等に由つて指導せられし新ラマーク派(Neo-Lamarkians)は、自然淘汰の說のみにては進化の全部を說明するには甚だ不十分である、と稱へ出したのである。自然淘汰は決して新種(スピシース)を產出すものでなく、否其は何をも產み出すものでない事を彼等は宣言した。「其は適者の生存を說明し得ても、決して適者の新出現を說明し得ないのである」

と、そして諺にもある如く、兩者とも其否定せる事柄に於ては多分正しいのであつて見れば、我等がダルウィンより嗣いだと想像せし、豐富なる智的遺産は殆んど何も遺らなくなるのである。

然るに晴天の霹靂の如くメンデル說(Mendelism)が現れた。之に由つて我等は變異と遺傳に關する全く新しき觀念、即ち具體的事實に據つて證明し得られ且つ數學的方程式にまで復歸し得らるる新觀念が與へられたのである。之等の新しき事實より我等の發見する事は、ベートソン(Bateson)の言を借りていへば『第一に、大體に於て有機體の特質は、遺傳に於て別々に遺傳せらるゝ所の單位的特質(ユニツトキヤラクター)、即ち別箇の分離し得らるる分子の存在に歸因するものである。第二に、父母は其子孫に自らが所有せざる一因子をも、及び從つて其因子に準應せる特質を分與し得るものに非ず』

(Scientific American Supplement, Jan 3, 1914.)

讀者はメンデリズムの此の二主張を細心研究すべきである、そして第二のものは第

一のものより必然的に生じ來る事と、兩者は共にダルウィン説の過半分を占むる所の後天的性質の遺傳なるものを排除し去る事とを注意すべきである。之等の單位的特質（ユニツトキヤラクタース）は決定的のもので、遺傳に際し別々に傳へられるものとすれば、變異は之等の單位的特質が新しき形式で再結合せられる結果に過ぎなくなる、或性質は隱退的となり、或性質は優勢となり、或性質は全然姿を隱す、然し母體に現存し或は潜在せざりしものが新しく附加せられる事は決してない。之がメンデル法則である、遺傳學上の生物學的研究の勝利であつて、此の最後的學説のためダルウィン學派の幾噸の書物は書架の頂上か『歴史的參考書』と題したる部分に置かる丶必要に立到つたのである。

（註、エルンスト、ヘツケルは告白していふた『後天的性質の遺傳を信ずる事は一元論の必然的公理であつて、』後天的性質の遺傳を否定するワイズマンに同意せんよりは『寧ろモーセの記錄に敍せられたる凡ての種（スピシース）の神秘的創造説を受容するにしかず』）

エジプト及びバビロンに於ける考古學的發見が長い間『批評學者』等より受けしが

如き苦いおきまりの反對に對抗して、樹立せられた如く、メンデルの法則は今や其の主なる敎說を絕對的證明の位地にまで樹立するに至つたのである。余の現在知れる著名なる動物學者或は植物學者にして上記の如きメンデル法の主なる結果に對し疑義を挾む者はないのである、たゞカール、ピヤソン(Karl Pearson)の如き多の偏狹なる進化論者等は、自ら生物學專問にあらざるに、避く可らざる敗北と生涯の事業の破滅との豫感に襲はれたる劇烈さを以て、なほも此說に抗戰して居るのである。そして無論、之等の遺傳に關する新しき眞理は未だ通俗雜誌や日曜附錄などには（一般民衆は其等より彼等の『科學』を學ぶのであるが）流布せられてゐないのである。

メンデリズムの主な結果は、なほもダルウイン說と生物學的進化論を不信用に陷入れるものである。然し其の一をいへば近代分類學上でいふ種(スピシース)は（化石の事は論せずとして）余り狹隘なる範圍で區劃せられてあつて、メンデル遺傳法則が、我等の周圍にある動植物に存する無限の變異の一部分が如何にして發生せしかを說明して吳れるに

隨ふて、種（スピシース）と稱へられてあつたものが悉くは種でない事が明かとなつた。

或人々は進化論といへばたゞ之丈の事を論ずるものであると考へて居るやうであつて、我等が教科書に列擧せられたる多數の分類學的『種』の斯る發生說を是認しながら、全體の進化學說を是認せないのは不思議だといふ。然し之等の事丈が進化說ではない。進化論はダルウィン說の背後である（一樣性を加味せる）連續せる地質學的時代といふ事が其の根抵となつて居るので、しかも此說は先きに示せる如く、近代の科學的方法及び普通智識の事實とは全然一致せざる所の無智なる臆說と誤謬の長き連續に其の基礎を置けるものである。『種』の變異に關する之等多くの生物學的發見は、進化論を證明するものであるとは以ての外、之等は創世記の信者が、聖書及び眞の歸納的科學が敎ふる所の一大世界的激變即ち大洪水後、殘存せし比較的少數の原形より如何にして近代の植物及び動物が蕃殖して來たかをより容易に理解し得る爲の補助參考となつたのである。

大洪水説に關して存せし唯一の困難は、如何にして斯の如き世界的激變が生じたかに非ずして、如何にして世界が其より回復し得たか、に在つた。そして近代の生物學は如何にして此事が有り得たかを理解するために或る根本的補助を供し出して來たのである。我等が變異を多く認容すればする程、此の激變後生起した所の動植物に於ける變化（それらの地理的播布を含めて）を説明し易くなるものである。

されど我等は近代科學の總結果より學ぶべき、なほ他の極めて重要なる敎訓を有するものである――此等の敎訓は、今も現に行はれつつある如き、我等の世界の起源を科學的觀察點より説明せんと試むる所の、恰も鬼火を追ふが如き愚さを繰返して、苦き經驗を嘗めしめたとはいへ、實に之等の値を拂ふてなほ餘りある貴い敎訓であつた。我等は有望らしく見えし幾つかの手掛りを手繰つて行つた――地質學に於ては生命の一樣性説と連續説、生物學に於ては自然的發生説、ラマーク説、及びダルウィン説を。しかし各れも迷路であつて、前途なき死巷（ユキドマリ）の如きものであつた。なほ他に何か

試みるべきものなきか。一樣性說と進化論は十分なる機會と開放せられたる舞臺が與へられ、そして彼等の最善の努力を盡した事は事實である。然るに彼等は失敗した、慘敗したのである。

眞摯なる科學者にとりての重要なる敎訓は、一切の世界形質論的（コスモロジカル）空論を避けよとの警告である。自然科學は天地創造の順序或は細目に關しては何等知る所なきなり。之等は其學問の正規なる範圍外の事に屬して居り、之等の蠱惑的領域に這いり込むと、必ず世界形質論（コスモロジー）の主觀的誤謬が擡頭して、我等の結論の正確さを亂し、亦歸納的科學の眞精神を墮落せしむるものである。

數十年前に於ては、多の自然科學の大家等は、科學は今や吾人に世界の創造せられたる方法を示し得るに至つたと誇つたものである。彼等は宇宙創成の活動寫眞を製作し得ると稱したのである。されどライエル說とダルウイン說の倒產の結果、眞の事實として殘されたるものは我等に何を證明するか、即ち我等は宇宙創成に關しては科學

的には何等知る所なしといふ事である。近代科學は畢竟宇宙は今行はれつゝあるが如き變化に類似せる、漸次的なる長引いたる經過に依つては生じなかつたといふ巨大なる消極的證明を發達せしめたに過ぎない。そして進化論說は此の證明に於ける一種の有害なる副產物の如きものであつた。五十年前に於ては、科學が『宇宙の謎』を日常生活の經過の用語で解說すべき事を望んでも餘り非科學的には見えなかつた。其時代には斯の如き觀念を駁すべき生物學的及び地質學的證據を我等は有して居なかつたのである。然るに今やより十分なる智識と、より正確なる方法との光の中に於て、我等の存在、我等の起源、我等の運命なる開闢以來の神秘が、我等の先祖たちの感ずる資格がなかつた程度の執拗なる勢を以て、我等の顯微鏡、我等の試驗管、亦は其他の正確なる器械を通じて我等に解決を迫つて居るのである。然るに自然科學は之等に關して何等知る所なしと、いやいや乍ら遂に告白せねばならなくなつたのである。

然し之はとりもなほさず、聖書の創造說の確認に外ならないのである。我等の觀察

せし所のもの、我等の知る所のものは科學(サイエンス)「(Science (Latin, Scio, "I know"))」である。されど我等の一切の探究の結果、我等は宇宙が如何にして造られたか、或は生命又は動植物の種(スピシース)が如何にして生起せしかを科學的方法で何等知る所なしといふ事が一層明白になつたとすれば、宇宙の創成は現在行はれつゝある過程よりは根本的且本質的に異なれる過程によれるものであつたとの結論は不可避のものとなる。進化論の基調は一樣性説である、卽ち自然界に於ける現在の運動は、過去に起つた萬物創成の運動の一部分に過ぎずとするのである。しかし近代科學の總結果はすべて之に相反せるものである。其結果は創造(クリエーション)を教へ、進化(エヴォリューション)を教へず。いやいや乍ら强ひて告白せしめられた故に一層有力に、其等の結果は、現在行はれつゝあるものとは本質的に相異せる所の眞個、直接なる創造が最初に必ずあつた事を我等に證明するのである。

『元始に神天地を創造りたまへり』との聖書の冒頭辭が遂に自然科學によつて證明せられて來たのである。　(附錄Bを見よ)

第五章　近代哲學

"If any man willeth to do His will, he shall know of the doctrine" John 7.17.

『人若し御意を行はんと欲せば、此教……を知らん』　ヨハネ傳七。十七、

一

人間思考に於ける一切の誤謬の自然的源因として、ベーコン卿は其の『ノーヴム、オルガヌム』(Novum Organum) 中に四つの謬見の源因を舉げて、之等が思想の各部門に於て眞理の發見と理解を妨げて居ると論じて居る。彼の古風な言ひ表し方で、之等を『四つの偶像』と稱へた、その意味は虚しく、欺瞞的にして、危險なる、崇拜の僞の目的物となれるをいふたものであつて、何れの部門に於ても眞個の眞理に到達せんためには、之等は必ず嚴格に且永遠に棄却せねばならぬものだと彼は宣告したのであ

る。ベーコンは之等誤謬の源因を約二十數個の格言の下に詳しく論議して居るのである。そしてスコラ學派の桎梏より我等を導き出し、客觀的卽ち歸納的科學の約束の地の境界まで我等を伴へる所の此の大哲は斷定的に彼の意見を吐いて言ふた、科學の改革後、之等の同じ四つの偶像は復活し來りて人類の崇拜を要求するに至るべしと。ベーコンが如何に正確に人心の弱點を診斷したか、亦如何に正しく、人性なるものは凡ての時代凡ての國土を通じて、恒に同じものであるかを洞察せしかは、近代思想家が大仕掛に此の預言を旣に實現しつゝある悲しむべき事實に由つて證明せられて居るのである。

其四つの偶像とは何をいひしものであるかを簡單に調べるは價値ある事である。

一、種族の偶像、——人類全體に共有なる間違つたる傾向を指せるもので、聖書に敎へられてある如く、人間は墮落せる者であつて、生れつき光よりも寧ろ暗黑を愛するものだとの悲しむべき事實より生ずるのである。罪の毒素は人の身體にも彼の意志

にも亦その理性にも傳はつた。ベーコンの格言でいへば『人間の感覺は事物の定尺(ものさし)であるとは僞の斷案である。』そして現今一般通俗な直覺派の哲學がその人心の自治權論に於てなせる如く、斯る定尺を振舞さす事は、明かに此の偶像をその古の宮に立て直す事である。

二、洞穴の偶像、——之等は一般種族に共有なる誤謬の傾向の外に、個人に特有なる誤謬の傾向をいふたものである。ベーコンの言を以ていへば『我等各々は各自特有の穴を持て居り、自然の光を或は屈折し或は阻止するものである。……それで人間の精神は、その個性の傾向に隨へば、動搖し易きもの、不秩序なるもの、所謂氣隨氣儘なるものである。』

三、市場の偶像、——之等は思想を說明するよりは反つて之を胡麻化す所の言辭を弄するより生ずるのである。

四、劇場の偶像、——之等は哲學各派の異なれる信條及び傳說より、亦は間違つた

る證明の方法より生ずる所の欺瞞、誤解、及び偏見などを指せるもので、ベーコンの時代より決して餘り減少して居らない害惡である。

二

自然科學の世界に於て進化論が之等の偶像のあるものを其の原の臺座に据えるために其の分を謚したかを見た。然し絕對論（アブソリユート）の諸哲學も其にも劣らず、否其以上に此の方面に害を流したのである。

天地間の一切萬事を分類したと誇り、存在と經驗のすべての事實、心意のすべての運動、神と人と宇宙との間に存し得るすべての關係を鳩小屋に入れ得た（分類、類別したとの意）と誇る所の第一人者はいふまでもなくインマヌエル、カント（Immanuel Kant. 1724—1804）である。一の單なる試驗的の目論見として、誤謬に陷る恐れもあり、修正も補足も必要となる可きものとしてでなく、絕對的終極のものとして組織せ

られたる彼の哲學は、多數の人々に對し彼等の市民としての生活、他國家の人民との國際的關係を規定し、進んでは啓示宗教の領分までも簒奪したのである。

若し人類の大多數、殆んど世界の國民全部が、實在を靈的なるものより、生活と外部的事物を義務及び内的道德性の事柄より、卽ち宗教より、分離して考ふるやうになつたとすれば、其の源因を我等はカント哲學と其の種々なる變態とに求めねばならぬのである。外的にして實在なるものは内的にして靈的なるものと（後者は前者に對しては一般的優越性を有せりといへども）は決して共に測定し得ざるものであると敎ふる所の此の派の學徒等は、もはや宗教を希伯來歷史或はイエスの生涯の如き單なる歷史的事實の上に置く事が出來なくなつたのである。彼等は宗教を否定せんとするのではない。否、前よりも一層宗教的ならんとするのである。彼等は鼻高々と自慢していふ、彼等は一切の外的なるもの、皮殼を捨てゝ、宗教を人間内部の道德性なる不變的事實の上にその土臺を据えた故に、遙かに大なる利益を齎らしたのであると。

されど我等聖書基督者（バイブルクリスチャン）が彼等は誤謬に陷ちて居ると考へても、天地間の凡ての事こ人間靈的生命の凡ての事を抱擁するが如き先驗的（アプリオリ）範疇の背後に陣地をかまへたる者等を、如何にして單なる客觀的議論を持つて、其の誤謬を覺醒せしむる事が出來やうか。哲學上の絶對論は政治上の專制主義が倒壞し難くあつた如く、倒壞しがたきものである。若しも彼等の神秘的先驗的（アプリオリ）議論を單なる客觀的議論を持つて迎へ擊たんと試みるならば、諸君は此派の弟子等に、愚鈍なる經驗論者、單なる唯物論者と罵らるゝのであらう。物質的なるもの、外的なるもの、有限なるものが、靈的なるもの、內的なるもの、絶對なるものを如何にして駁擊することが出來るか？と彼等はいふ。聖書言語學、或は批評學に於て例を取れば、如何にして東方の紀念碑の間に發見せらるゝ事實が、希伯來文學の預言は律法に先ち、そして詩卷は兩者よりも後であると直觀的に獨り定めをせる人々の意見を變ずる事が出來やうか？

そして哲學上の絶對主義は實際的事物に影響する點より見て、政治上の專制主義に

劣らす公民的亦宗教的自由に對し反對なるものたる事が明かである。人間が『僅少なる短期間の主權を委ねられて』自ら神の特別の使者或は代表者だと稱し、自己の意志を他人に强要せんとする事が、恒に如何に危險なるかは歷史の吾人に示す所である。

『一つの先驗的理論が神意と取り違へらるゝ時、危險は同樣に大である。經驗的に基礎づけられたる眞理は其勢力範圍が廣大でなく、亦理性それ自身より直接に出來る如く想像せらるゝ觀念のやうに、自らに對して激烈なる忠誠心を鼓舞しない。彼等は論議し得らるゝのである、彼等は人間味のある社交的性質を有して居る。然るに純粹理性の眞理は逆罘的に、議論の仲裁を避けんとするものである。彼等は經驗の論理を避けんとして、最近の一著者の言を借りていへば、「狂信の論理」の玩弄物となるのである。絕對論の鍛冶屋で鍛えた武器は單なる人間的反抗に相遇する時殘忍となり嶯的となる。』ジョン、デユーヰェー（『獨逸哲學と政治』四三頁）

カント哲學の主張である、宗教は外的なる歷史的事實とか、或は神的黙示と考へら

れてあるが如きものゝ上に其基礎を置くべきものでなく、人間の內的なる道德性に基礎を置くべきものであるとの說は、一見、好ましく、少くとも無害の如く見ゆるのである。人間の主觀的經驗の不變にして議論を許さない道義、卽ち彼の道德的及び靈的性質の上に基礎を有すと主張する所の義務の叫は勇ましく聞えるのである。然し我等の間もなく發見する事は、此の『義務』なるものは內容を欠ける單なる神秘的抽象に過ぎずして、軌道を脫したる機關車がむやみやたらに驅けずり廻らんとするが如きものである。

聖書基督者（バイブルクリスチヤン）にとりては義務は恒に理性の上に基礎を有し、そして或る具體的目的のため向けしめられてあつて、此目的は卽ち義務を果すによつて實現するものである。神の主權に由つて示されたる道德法なるものが、機關車の走るべき軌道を敷くのである、然る後、義務の觀念は人をして確固たる目的の方向に推進せしむる勢力として役立つのである。併し經驗的（エムピリカル）、或は實用的（プラグマチツク）目的より離して、義務の福音を說く事は恰も

軌道を脱したる機關車に一層蒸汽を注込み、節汽弁を開くと同じ結果を、個人に與へるものである。その理由は斯の如き義務の觀念、服從の盲目なる衝動は現存せる社會的及び政治的主權の如何なる暴君的要求に對しても、直ちに其玩弄物となつて了ふものである。そして斯の如き似而非道德は、暴君主義を超越的理性の衣にて纒はしめ、一の先驗的論理の怖るべき武器にて武裝せしめ、實際問題に於ては實に危險極まるものとなる。之は批評を封じ、一切の智的思索を禁ずるのである。

されば斯る哲學が其盲信者をして、個人としての人間的權利に對し無頓着たらしめ國家（the State つねに花文字で書く）を畏れ其誡命を守るは人の全義務であると敎ふるに至らしめたのは怪しむに足らない。亦斯る敎訓を塹壕として主權者が其下に隱れ一切の批評と都合の惡い訊問より避けんとするのも怪しむに足らないのである。

國家が一の神秘的、超越的人格と祭り上げられ、普通に『理想主義』（"Idealism"）と稱へて居る靈的汎神敎或は一元論と調和せしめんがためカント哲學を修正せしフヰ

ヒテ(Fichte)及びヘーゲル(Hegel)の教へし如く、國家は個人に對する一切善の源淵、最高の道德的實體であるとせらるゝ時に、斯る義務に關する教訓は最も危險となるのである。斯る教訓の下にありて、歷史の神性化は實現せられ、人類の進步も純然神性化せられ、歷史の連續的局面は神の國の地上に於ける發展の階段とせられるのである。されば此の計畫の下にあつては、國家は神の具體化せる機關、絕對者の化身となり、愛國は宗教の最高模型といふ事となる。國家の主權に對する不服從は謀逆以上のより惡しき事となる、其は不敬神、瀆神罪となる。デューウエーが賢こくいふた如く此教は『帝王神聖權でなく、國家神聖權』の教である。

フキヒテ及びヘーゲル哲學の他の要點は大部分棄てられたが、しかし歷史及び國家の神性化なる之等の觀念は獨逸大學の科程の中に保有せられ且カント哲學に附加せられたのである。それで此の修正且補足せられたるカント哲學は今なほ獨逸の智的生活の守本尊となつて居るのである。そして大戰前、之等獨逸大學の英、米思想界に及ぼ

せる感化の結果、此哲學の近代世界に及ぼせる有害なる影響を誇張せんとするは容易な事ではない。

三

カントの峻嚴なる論理より移りて直ちに、『直觀派』哲學の名で行はれておる所の、何等其間に連絡統一なき印象の混合の如きものを論ずるは、恰も天頂より地獄まで一足飛に飛んだ如く見ゆるかも知れない。此學派はベーコンのいふた第一『偶像』を拜せんとするもので、直觀なるものを人類最高の指針とし、之を神性化せんとするものである。此宗派にも多の祭司があつた、併し其第一人者として我等はラルフ、ワルドエマーソン(Ralph. Waldo Emerson)を擧げやう、彼は多の人に對して、個人心意の自治權、『我は其である』"I—am—it" 主義の最も親しき實例である。エマーソンは眞理、各部門の智識に於ける眞理の直接把握、或は直觀を敎へた。彼の有名なる論文

『自己信頼』"Self Reliance" に於て彼は斯ふいふて居る。

『汝自身の思想を信ずるは、即ち汝自身の秘れたる心の中で汝にとりて眞である事は萬人にとりても亦眞であると信ずるは……是即ち天才である。汝の中に隠れたる確信を語れ、然らば其は世界的觀念とならん……人は詩人、賢人の華麗なる光輝よりもいやまさりて、自らの内より生じて自の心に閃めく閃光を看取せねばならぬ。』

探究者が外部世界に於ける具體的客觀的事實よりも寧ろ『内より生じて自の心に閃く閃光』を迎る時、自然科學或は聖書批評學に於て如何なる結果を齎らすものであるかとの幾つかの實例を擧げた。併し此派の弟子は一分毎に産れて居るのか、或は死んでも少しも改良せないのであるか、コルネル大學のシュルマン校長(President Shurman of Cornell.)に依れば『エマーソンは今日宗教界及び俗界の如何なる他の預言者よりも大なる感化を有して居る』のである。

余の讀者の多數はかゝる言辭を、殆んど信ずるに足らざる誇張の言と思ふかも知れ

ない。亦實際餘り注意して語らなかつた食後閑談の一節として見逃し得るとしても、下に引用せる萬國百科辭書の言と比較して見るならばどうであるか。

『「自己信賴」'Self-Reliance' の如き論文にあらはれたる教訓は今日アメリカに於ける教育ある人士の心的骨髓の一部をなせるものといふ事が出來る。』――項目エマーソン同書、

茲に論ぜられたる個人の感化に關する之等の記事を餘り重要視する事は危險である然しエマーソンの直觀主義(往々超越主義ともよばる)哲學の跋扈をいくら强く論じても論じ過ぎる恐れはない。それて其の最も善く知られたる思想體系を詳しく硏べる事は萬更不必要でもなからう。

余は寧ろ思想『體系』と呼ぶ筈ではなかつた、何となればエマーソン自ら如何なる思想の『體系』をも作る意志ではなかつた事は周知の事實である。亦誰でも彼の著作を見れば容易に知り得るやうに、彼には秩序整然たる思想は不可能であつた。そうか

といふて彼がポロク(Follok)のいふが如き種類の人であつたといふのではない。

"......who never had a dozen thoughts
In all his life and never changed their course;
But told them O'er each in its 'customed place,
From morn to night, from youth to hoary age."

『......その生涯に一打(ダース)も思想といふものを持たず、併し其持てる丈の思想を、入念に朝より晩まで、青年時より老年期まで、毎日毎日順序違えず、お定り文句に列べ立てゝ居つた。』

エマーソンの欠點は之とは少しく種類の異つたものであつた。彼には單獨の思想には事缺かなかつたが、之等を連結しやうとしなかつた。彼の嘆美者にして、彼よりは系統的に思考する能力を多分に有せし人々が、彼の『哲學』を組織立てんと試みたが然し其は望みなき仕事である事を發見した。其理由は彼の光彩陸離たる文章や獨斷的

言辭が、同一頭腦より生せし他の文章や斷言、しかも同じ手によつて冷たい文字で書かれ、同じ日で校正せられたるものによつて全然破へされて居るのである。勿論かゝる哲學『體系』を相手取つて議論せんとするは、狐火を射撃に行くやうな無益なものである。然し斯る心的傳染の有害なる感化を指摘する事は決して無益な仕事でない。といふ理由は之が非常に汎く蔓延して居り、且其の實際的應用に於て之は聖書を人生の指針としては全く不用ならしめ、其代用として個人の『内的光明（インナーライト）』を立てんとするものである。

四

人は直觀として彼に來るすべての美しき觀念を絕對に信ずべきであるか。多の人は日常生活に關する事柄に於て斯く行ふた、しかし早晚彼は智的迷妄に陷入つて居つた事を見出さねばならなかつた。往々彼の友人が彼のために、彼の心の狀態を發見し、

彼を保護者の手に置かねばならなかつた。斯る直觀的指針に循ふことは具體的客觀的實在に關する事柄に於ては安全な方法でない事が明白である。倫理及び宗教に關する事柄に於ても之は決してより安全なる、又より賢こき方法でもあり得ないのである。

具體的客觀的事實の領域にあつて之等の事實そのものが、我等の指針とし標準として役立つのであつて、之等に依り我等は直觀の形態をして來る所の觀念の價値を評價し、又之を取締るのである。若し其が純粹直觀であるならば、其は歸納的及び演繹的論理の正規なる規矩によつて確め得らるべきものである。同樣に基督者の信ずる所は彼は聖書と基督敎經驗の事實の中に、純粹事實の一群を有し、之に由つて倫理或は宗敎の『新しき光』として外よりか或は内よりか彼に來る所の、ある觀念に對し最後的斷定を下すことが出來るのである。

エマーソン（我等は單に彼を直觀派哲學者等の一代表として擧げたのである）は歸納及び演繹法の規矩については聞いた事がなかつたのであらう、若し聞いたとしても

其には毫末も注意を拂はなかつたのである、彼は内より彼の心に閃く『閃光』を宇宙に於ける他の事實と何等の關係をも顧慮せずして、來るが儘に書き留めて之を印刷屋に附したのである。何か賢こさうな言辭で發表せられ得る美しき思想、觀念は、彼の『哲學』の一部として『其自身存在の價値』あり、亦世に發表する十分なる理由ありとしたのである。そして其の『閃光』が或は政治、美術、文學、倫理、或は宗教に關せるものであるか、何であつてもおかまひなしであつた。そして亦今日の『閃光』は彼が昨日或は一昨日發表したものと一致しやうが、一致しまいが一向おかまひなしであつた。

懶怠なる訓練なき人の性質は、自らの觀念を骨折つて理論的に研覈する面倒を避けんとして、つねに此の直觀的近路を辿らんとするもので、之がためには別に先張等の獎勵、或は似而非哲學的基礎によつて理由付けられる必要はいらないのである。

預言者は律法より先にあり、詩篇は其兩者よりも後に來るとの驚くべき眞理を、此の方法を用ゐて發見したと正直に告白した『聖書批評家』のあつた事は先きに述た所

である。彼は此の直感的『眞理』を大前提とし、そして其に適合する小前提を探し出して、遂にイスラエル宗教發達の全歴史を組立てる事が出來たのである。亦ヴエルネル及び他の多の地質學者等が此方法を用ゐて、世界が如何にして造られたかに對する斷案を下したかを見たのである、之等は恰もチヤーレス・ラムの物語にある支那に行はれて居つたといふ直觀的考方の實例に類似して居るのである。ホチさんの家が火事で燒けて、豚が丸燒になつて居つた。それからといふものは丸燒の豚が欲しい時は家一軒を燒く事が必要だと思はれて居つたと。しかしラムの譯では殘念なことに其後一質人が炮器を持來りて、此のエマーソン式――支那式の美しき『直觀』の夢を醒ますことになつて居るのであるが、併し斯ういふ物語の中にも全世界は親類筋だといふ人間性の表示を見るのである。

普通の視力の人にとりては生れ付の色盲者の心理狀態を諒解することが困難である。それと同樣に、客觀的事物を歸納的方法で取扱ふ事が先天的に不可能の如く見え

其方法の代りに近頃の流行語でいへば潛在意識的（サブコンシヤス）心意（マインド）の自己靈感（セレフインスピレイシヨン）と名づくるものを用ゐんとする人々の心理狀態を諒解する事は困難である。普通の機能を具へたる我等にありては、個々の實例に於て或は失敗することがあつても、我等は我等が具體的實在を取扱ふ塲合に、我等の機能と理性の證言を信ぜんと志し、神と人と自然との事實を取扱ふに當りて、思想の比較測量をなし、最善を盡して大膽正直に思考せんと勉めるのである。併し色盲者であつて、自らの制限を知り、其最善を盡せる者に對しては余は同情する事が出來る。同樣に、歸納的論法とその三段論法に於て屢々躓き乍ら我等と同じ眞理の共通標的を認め、其に達すべき方角につきて大體一致せる人々に對して十分同情する事が出來る。そして感ずる事は存在の大なる永久的問題に關して、系統的に思考することが生來不可能の如く見ゆる人々に對しては一層高等なる同情を持たねばならぬと。然し論理的に色盲であるにもかゝはらず、美術の批評家として認識せられたいとあこがれる人々、他人の機能より供せらるゝ證據に對して自分は少し

も頓着しないと誇る人々、そして已の寫せし幻想を以てまんまと世界を瞞すことに成功した人々に對して余は如何なる態度を執るべきであらうか？

余は自らの『直觀』に頼り、之を大げさな心理學的言語を以て威嚴付けんとする人々の心的經驗の實在を否定せんとする考はないのである。基督教では靈的感化に二種あることを認めるので、『靈感（インスピレーション）』といふ言の第二義的意味でいへば善と惡との靈感があるのである。神の靈か或は善天使の感化が人間の靈魂に、ある眞理の確信を輝らし入れる時、此の確信は冷かなる理論的過程とは獨立せるものとなる、其と同じやうに惡靈も僞の觀念を傳播する能力を有するもので、之が往々にして天才のひらめき或は『潛在意識的心意』の活動などゝ稱へられるのである。しかし基督者が聖書に於て有つて居るやうな眞理の外的標準、或は凡て之等の主觀的印象を検査すべき錯誤なき規矩を認めない人々にとりては、如何にして最も危險なる自己僞瞞より自を防禦すべきか甚だ覺束ないのである。されど斯る僞の直觀を辿れる結果、斯の如き自己僞瞞に陷

れることを徳性、倫理、及び宗教の複雜せる領域に於て屢々散見するのである。之が外部的實在の領域にあらはるゝ時、我等は之を錯覺、幻覺、或は精神顚倒と稱するのである。されど所謂『新思想』なるものは、（エマーソンは其一タイプであり一實例であるが）斯る思考方法を全然正規なる事となし、否天才の刻印の如く見做し、今や『哲學』として辯護せられ、高壇より亦文書より種々なる樣式で敎へられて居るのである。

斯の如き思想『體系』に對して議論を以て之を迎へんとする事は如何に困難であるか？　個人は自らの衷に道德或は宗敎の一切の敎義を檢査すべき最終の標準を有せるものと敎へらて居るのである。之等の眞理檢査法はベーコンが暴露したやうに中世紀に於けるかの有害なる推理方法の再生の如きもので、近代人は既に其等より解放せちれたと誇れる所のものである。彼等が宗敎或は倫理の領域に於ては論理は不必要だとして郤け、彼等の好んで用ふる言『價値判斷』に由る外には、宗敎或は倫理に於て眞

理を客觀的に學ぶ可能性はなしといへる斯の如き哲學、斯の如き宗教の徒に對し、我等は如何にして議論を以て對する事が出來やうか？　斯ては宗教と倫理の全領域は全く智的渾沌に陷り、人間の義務及び其の高尙なる性質に關する一切の眞理は單に各人の意見の問題となり、一人の意見は他人の意見と同樣に善良なるもの尊重すべきものとなり、亦各人の意見は氣の向くまゝ風の如く變つても差支なきものとなるのである。

近代生活の田地にクリスチヤン　サイエンス（Christian Science）や『新思想』（"New Thought"）や『高等神學』（"Advanced theology"）などの名で行はるゝ種々な形式の宗教まがひの妄想が雨後の筍のやうに生長し、はびこつて來たのは相當の位地にある人々が斯る教を說いて來た結果である。到る處に見るのは、近代人がいよ〳〵宗教や哲學に於て嚴格なる思索を避け、其代りに個人の意見（近頃の流行語でいへば、集合(コレク)的(チーブ)『自覺(コンシヤスネス)』）を眞理の批判標準として採らんとする懶惰なる氣まぐれの方法が流行し

て來た事である。現代は緻密にして長くかゝるやうな思索に對しては先天的或は後天的厭惡を有つて居るやうに見えるのである。或る著者がいふたやうに『刹那主義が習慣、いやそれを通り越して病氣となつた。』そして人生と運命の最深、最大の問題を斯の如く輕はづみに取扱ふ方法は今日、進化論の如き僞の宇宙哲學が已に權威を執つて、過去歷史の一切の不寛容なる獨斷論と鐵面皮なる頑固さを以て智的世界に向つて命令を降しつゝある時、殊に有害危險である。

併し前に述べた如く科學及び宗敎世界に於ける事態は全く變轉し來り、今や自然界より發見せられし千百の事實が重なり重なつて敎會の味方となつて現はれて來たのである。例へば進化論の根抵に横はれる僞科學と僞論理とを注意して研究すれば、多の人は必ず其の迷夢を醒ますに至るであらう。然し悲しむべきは彼等は問題を正直に考へる事をしないで『貴方もあなたの御意見を尊重しなさい、私も私の意見を尊重いたします』とか、或は『斯る問題について何を信じやうと別に差支はない、たゞ汝の衷

なる光に從ひなさい、さらば間違はない』などゝ冷然とエマーソン式の汎神的な答を賢こさうにして居るのである。

五

近代世界に多少なりとも汎く行はれて居る種々なる哲學體系を巨細に調べる事はとても限のない仕事である。それで我等の仕事は寧ろ哲學一般に亘れる廣き觀察を下し特に其全體或は大體の共通點を見出し、之等の哲學思想の一般的傾向が聖書基督教（バイブルクリスチヤン）、我等の稱ふる新新教主義（ネオプロテスタンチズム）の上に如何なる關係を及ぼすかを見んとするに在るのである。之はハーバート大學のウキリアム、ゼームス教授の一千九百九年になされしヒッバート講演集より最も善く發見し得らるゝのである。彼は其著を『複元的宇宙』("Pluralistic Universe") と命名した、其理由は彼も一般に通俗なる一元論を却け、修正せられたる二元論、彼の特に稱へし『複元論』("Pluralism")（普通の分類法に從へば聖書

に敎へられてある天地創成説はやはり二元論中に含めらるべきものである)を主張した幾人かの學者の一人であつたのである。

聖書の創造説に關してゼームス敎授はいふ。

「二元論的神學はすべての舊敎の學界に於ては今も昔と變らず嚴格に宣傳せられてあるが、近年に至つて英、米の大學に於ては之は其姿を隱し、其あとに一元論的汎神論が或は陰に或は陽に頭を擡げて來たのである」――二四頁。

我等は聖書の創造説が二元論の一つとして分類して可なるものか或は不可なるものかを考究するため茲に立止る時を持たない。此の説は如何なるものであるか又此説と其反對説なる進化論との間には、我等が如何に其兩者を分類しても、全く正反對なる大相異の存する事を知らぬ者は少ないのである。併しゼームス敎授に從へば、宇宙の創成、其の支配、惡の起源及び倫理道德の根本理由などに關する舊觀念は英、米に於ける高等敎育機關よりは殆んど一般に排斥せられ、其代りに或る種の一元論的汎神哲

學が流行して來たのである。

　されどなほ歩を進めて研究すれば、ゼームス教授も現時流行の一元論に對すると同樣に舊觀念に對しても同情を有つて居ない事が明かとなるのである。事實、彼の『複元論的宇宙觀』も無論、前後一貫せる學說となし、且嚴重に論理的で又科學的たらんと努力して居るとはいへ歸する處、エマーソンやリッチユルの『直觀主義』と相隔る遠きものではない。

　エマーソンの說によれば、彼の說及び現時流行の汎神教的一元論と、舊態の基督教とを比較すれば、後者は全く時代錯誤（アナクロニズム）、時代おくれの說であつて、彼の現代哲學に關する講演に於ては、單に通り一遍の注意を惹くに過ぎないのである。彼はいふ、

　『余は犬儒學派の唯物論の如きは、此の聽衆の前に持出す價値なきものとして、全く余の議論より除外するのであらう、そして亦同じ理由で舊態の二元論的神學をも顧みない事とする』――三〇頁。

同じ關係の講演中に、同氏は智的世界に於ける此の變化の普遍的たるを示すと同時に、此の變化が急激に起つた事實に偶然言を及ぼして居るのである。といふのは同氏が或る印度人より『基督敎の印度に播まる上に大なる障碍となれるは、其の天地創造說のおとなげないためである』と聞かされたといふた後、彼は附言していふに『確かに此の聽衆の大多數は此の問題に關しては此の印度人に同意せらるゝであらう』と。そしてなほも進んでいふた『余等六十の齡を越した者は非常に急激なる變化を實驗したのであつて、殆んど半世紀前の思想は恰も別種類の人間の言の如く見ゆるのである。我等の先祖達にあの樣に力強く語られた所の神學說、即ち世界の有限的年代、其の無より造られし事、其の審判說と終末說、神を超越的作爲者、智的及び道德的支配者と見るが如き思想は、我等の多くにとりては何か異樣の野蠻人の宗敎の如く聞ゆるのである』と。――二九頁。

我等はもはや此問題を此以上進める必要がない。已に見し所に由つて我等の目的は達せられた、即ち我等は穢らはしき又悲しむべき現狀を知る事が出來た。過去四五十年の間に文明國殊に新教國に於て、天地創成、神の品性と宇宙に對する關係、道德倫理の根柢に關する彼等の哲學及び宗教思想の調子と性質が丸つきり又急激に變化して來た事は疑の餘地なき周知の事實である。そして現在流行して居る思想は印度の一元論的汎神教の思想と實際的に同一なるものである。

六

前々章に於て我等は地質學及び生物學に於ける幾つかの誤謬を指摘せんと勉めた、そして或程度成功したと信ずるのである、之等は客觀的事實の問題であつて、其故容易く決定せられる事が出來るのである。此よりの章に於て我等は哲學と倫理と經濟學との接觸點の幾つかを考究せんと試みるのであるが、併し抽象的哲學に於て同樣の研

究を、殊に通俗的書物に於て、試むるは其骨折甲斐のない仕事である。其餘りに專門的である事はいはずとしても、斯る研究は決して滿足を與へ得るものでもなく亦終了的のものでもないのである。ノースチック派（Gnosticism）及び新プラトー派（Neo Platonism）の時以來幾度となく此事が試みられ、種々なる結果を齎らしたのであつた。多の點に於て實體論（オントロギー）或は形而上學（メタフイジックス）として知られてある哲學の此部分に於て用ゐらるゝ用語が實際の所單なる頭腦の遊戲の如きもので、且其等を取扱ふ方法といへば之亦智的娛樂の如きものである。兎も角も、同樣なる空想的議論と質問が未だ嘗て何等の解答も與へられなかつたかの如く、あとへあとへと出て來るのである。そして其等の論者は聖書に示されたる平易にして充分なる說明を無視し、似而非（えせ）論理的方法に依り宇宙を一貫する直道を開かんと試み、或は其物の性質上人智の及ばざる所の存在の秘密を闡明せんと試むるのである。

實に過去半世紀に亘つて當時の道德と宗敎の信奉者等が、此の異敎的哲學の滿潮の

渦中に一人沈み二人沈みして、葬り去られて行く彼等のかすかに泡ぶく叫び聲を聞くは哀れにも亦傷心の事である。遂には廣き智的世界の何れの岸邊からも、ゼームスの如き人は、只一人の生存者の聲をも聞かないといふに至つては！

　然れども余は此近代的背教の普遍的たる事それ自身に由つて反對に勵まされて居るものであると言はざるを得ない。此事は余にとりては、大なるヱホバ自らが驚くべき方法を以て現代人の前に御自身の眞理を示され辯明せんさせられて居るより强き保證の如く見ゆるのである。先にも述べた如く、以前は教會の使命（メッセージ）をして時代後れのものたらしめ、或は全く其性質を變へしめねばならぬ如く考へられた所の自然界よりの此等の事實が却つて今では教會の使命（メッセージ）を裏書し又强めるため役立ち、凡て其味方となつて現れて來たといふ事は歷史の一の驚異である。舊態の福音基督教（ゴスペルクリスチャン）が今や亦開かれたる機會の門戶の前に立つて居るのであつて、彼女は其を通つて再び權威と信用の高壇（プラツトフオーム）に還り、其處より全世界の民衆（如何に悲しくも福音を要せる者ぞ）に向つてべ

ンテコステ的効力を以て主イエスの愛の福音をもう一度宣布せんさせる事を誰が疑ふ事が出來やうか？

併し此點は第十二章に於て再び論ずる事さしよう。

第六章　惡の起源

"If man is not a free agent, he is not the author of his actions, and has, therefore, no responsibility, no moral personality at all."――Hamilton.

『若し人間が自由意志の作爲者でなかつたならば、彼は自己の行爲の作爲者ではなく、從つて、何等の責任、何等の道德的人格を有しない事となる』――ハミルトン。

一

ハックスレーが基督教の天地創成及び萬物の起源に關して論ぜんと試みた時、彼は外交的辭令を以て之をミルトンの宇宙開闢說と呼んだ。人々は聖書基督教（バイブルクリスチヤニチー）とハックスレーの科學との間に背致するものがあると聞かせらるるよりは、ミルトンの神學と進化論との間に爭鬪があると聞かせらるる方が一層驚かされない。斯の如く問題を轉換することにより、一の生死に關はる宗教問題を單なる一學問的問題として仕舞ふた。

ハックスレーの時代に於ては聖書の神學はなほ民衆の間に權威があつた故、聖書の神學を批評するよりはミルトン神學をコッピドク駁撃する事はより安全であつた。今日に於ては聖書神學の擁護者にとりての外交的方策はやはり同じ方法に出づる事である。今や半世紀に亘つて創世記の『搖籃物語』を嘲笑して來た結果、人々は聖書の此問題に關して甚だ曖昧な又突拍子な考を懷いて居るのであつて、公平なる議論をなさんとするに當つて人々が殆んどたゞ過去の歷史的興味として視て居るに過ぎないが如き宗敎の不信用な敎科書を持出すよりも、大敍事詩人の考だとして之を持出す方が、或人々には議論がし易いのである。

それで、多の文學學生は聖書よりも一層ミルトンに親しいのであるが、余は彼等に言ひたいのは、後者の宇宙開闢說は前者に基礎を有して居り、彼の偉大なる詩の中にある二三の寫實的筆法を除外しては兩者は我等の只今の目的のためには殆んど同一視して差支ないといふ事である。併し場所を省畧するため此點を闡明せんとて聖書より

特別に引照する事を控へやう。

二

さて我等は簡單に聖書の（或は讀者が好むならばミルトンのといふ）罪及び一般に惡の起源に關する敎を審べて見やう。そして之等の敎說は極めて最近まで、即ち進化論的學說が這入つて急激的變化を與へた迄は、基督敎會によつて殆んど普遍的に抱懷せられて居つたものである事を記憶する必要がある。

聖書に據れば、智慧と能力と愛とに於て無限なる天の神は天地創造に於て絕對に自由であつた。といふ意味は、物質それ自身は彼の言に由つて存在するに到り、啻に彼が之を創造せし前に存在せざりしのみならず、其の存績の爲めにも彼の能力に依賴せねばならぬものであつた。それ故、物質は神がそれに附與せし以外の性質を有する事なく、若しも自然界に於て神御自身及び其の愛の法則とに一見不調和と見ゆるが如き

特質があるならば、之等の特質は罪惡となづくる所の神秘的にして不可解なる侵入者の結果であらねばならぬ。たゞ聖書及び道理的哲學の兩者に於て最も明かなる事は罪惡の侵入に對して神は決して責任あるものではないといふ事である。或は神の恩寵又は指導が專斷的に中止せられしか、或は神の支配に何か缺陷がありしか。斯かる場合には罪惡の生ずる眞源因が神にあつたといはれ得るのである。がしかし其の樣な事はなかつたのである。

惡が這入つた前には平和と幸福が宇宙全體に充滿して居つたのである。啻に無生物界が神意に對し完全なる調和を保つて居つた計でなく凡ての被造物はみなその造主に對し完全なる調和を持つて居つた。父なる神に對する愛は絕對であり、相互間の愛は無私又無偏のものであつた。併し選擇の自由を賦與せられたる智的人格(パーソナリチー)を生せしむる事は他日何かの機會に其選擇が曲げられる危險を伴ふことであつた。其選擇が單なる誤謬或は智的差誤に由つてでなく、宇宙の基本的主義と背反せる道を擇ぶに由つて

曲用せられる危險が伴ふのであつた。

此の世界の創造前遙か先に、罪は宇宙の住者の最高者の一人に起つた。徐々に此の大天使は自己擴張の慾望に所を得られ、神の御子の榮と權とが妬ましくなり、天使達の間に不平不滿の精神を瀰漫せんとしたが、遂に此事が忍ばれ難き程度に到り、彼は天より逐出されたのである。

リシフア（Lucifer）をして彼が進まんとせる危き道より引返さしめんために無限の愛なる神が如何ばかり努力せられしかにつきては聖書は無言である。彼と其同類とが幸福の棲家より追放せられし後も、彼等は滅されなかつた。エホバにとりては只愛の奉仕のみが嘉納せらるべきものである故、その被造物は神の義と愛とを正確に自覺したる土臺に立つて神に歸服すべきである。未だ罪の眞性質が十分に暴露せられない時に當り、サタンを直に滅亡すに事は天の住者と宇宙の他の存在者に對し神の義と恩惠とを十分に示す道ではない。若しサタンが直に其存在を奪はれたとしても天の他の住者

等は續ひて神に事へたであらう。併し其は愛に由つて刺戟せられたる奉仕でなく寧ろ恐怖より出でたものであらう。造物主に對する反逆の固有的惡性は、來らんとせる各時代に對する實物敎育とし、又斯の如き怖るべき實驗を繰返す事なき永久の保證として宇宙の善のため其成熟を許容せられたのである。唯サタンの計劃遂行の結果、人と天使等とに及ぼせし墮落的及び廢頽的影響を見る事に由つてのみ、大詐僞師の陰險なる感化が十分に滅ぼされ、疑問と反逆の最後の種子が全然永遠に除去せられ得るのである。

サタンが詐僞と反逆の仕事を此世界に持込む事を默許せられしは、罪をして其結實までに到るを許されたる造物主の一般的より大なる計畫の一部分に過ぎないのである。神は人を義しく『己の像に似せて』創造し、之を『甚だ善し』と宣言せられた。されど人は己が意志を以て大反逆者に加擔し、其心中には反逆の神秘的なる固有の性質に依つて利我心が愛の場所を占むるに至つた。

彼は此世界の主人として立たしめられた、然れども其反逆により彼と其周圍の自然界の事情との間に存せし平衡は破られた。そして其行爲の反射的且つ同情的結果として彼が王として、君臨すべく置かれた所の自然界に於ける凡ての勢力と事物とを彼と共に墮落に陷らしめたのである。神は斯くて凡ての自然をして彼の墮落を證詞せしめ、此の狂へる自然法をして人を服從と幸福と平和の道に引返さしむる手段となすぞよしとし給ふたのである。

斯の如きものが『この惡しき世』が、種々反對らしく見ゆる現象あるにかゝはらずなほ愛なる神の業であるとなす聖書の說明である。之は惡の責任をジ、ゼ、ロマネス(G. J. Romanes)がいふ所の、我等が實驗的直接の智識を有する如何なる事物にとりても只唯一の實際源因であるもの、即ち自由なる人格の撰擇に負はしむるものである。而して此の造られたる者の意志の自由なるものは、神をして其の宇宙間に發見せられる一切の事に對する直接責任より解除せしめ得る唯一の條件である。而して終局

の結果、即ち罪が過去の記憶に過ぎざるものとなり、平和と調和と宇宙的愛が再び全宇宙に回復せられし後にあらはるゝ最後の結果こそは、正邪善惡を擇び、造物主に愛もて結び付くか或は彼に背いて反逆するかを撰び得る自由を造物に賦與するに伴ふべき怖るべき危險を許するに十分なる理由であらねばならぬ。

そして此場合注意すべき必要ある事は、此の惡の起源に關する聖書の記錄はたゞに創世記の最初の章にのみ根據を置いて居るのではないといふ事である。勿論其處には創造の神の業の最初の映諧があるのであるが。多の有神的進化論者等は聖書の此部分丈が彼等の學說に反對なるものであるやうに見せんと勉めた、併し若しモーセの一切の書物が棄てられても、形勢は少しの變化をも見せないのである。聖書は何處を開いて見ても、――人は罪を犯した、凡ての人は今は罪人である、そして人を神との交際に返らしめ、神の愛の法則との調和に引返らすものは神の力の外にない、――との一切の教理に對する基調を發見するのである。解放の方法は備へられた、そして此準備

を利用する者は最後に罪と其一切の結果より全く救はるゝのである。されど現在に於ては、人は其造主と調和して居らないのである。若し聖書より此一般的概念を取除けるならば、あとに何が殘るであらうか？

三

世界の現在の狀態、殊に人性のそれが理想的に完全でない、否寧ろ最も悲慘な狀態に不完全であり、不規則である、即ち何かの一個或は其以上の源因に由つて墮落廢頽せるものである事は、之を否定せんとする者稀である。ライプニッツ（Leibnitz）の樂天主義は現在の宇宙は可能的なる最善の宇宙であると論じた、然し今日此說を眞面目に敎ふる所の者を余は知らない。ショッペンハウエル（Schopenhauer）やハルトマン（Hartmann）の極端なる悲觀主義に同情を寄せ得ないまでも、我等はみな我等の周圍にはすべて、罪と惡とが充滿せるを意識して居る。

『こゝでは人は坐して互に他人の悲歎を聞かされるのである』
『俺の知つて居る事は、
喜悦はなくなつて、
なげき、といふ此奴が
俺達の心にもぐり込んで來て、
どうしても其處を出て行かないことだ』

昔の賢者も、今の其子孫の聰明なる者も同じく人間性固有の惡と、一切の世界惡とを歎息したが、之を救ふ事は出來なかつた。そして聖書の示す所の前に述しが如き說明を除きて、我等が無論人格的神の業として此世界を視る時、他にたゞ二の假說を許す事が出來るのである。

一、人は今の如き悲慘と害惡、劇しき慾情、兇暴なる憎惡、固有の利我心とを以て自己とすべて周圍の者を不幸にせしむるが如き有樣の儘で造られたのだとする說。卽

ち人は自然及び自然の神と不調の中に造られたのであると。併し斯の如き説は、他の點に於ては聰明善慈なる神をして、無意味に馬鹿氣たるものとなす説であつて、神をして我等の世界の一切の罪と其害惡とに對し直接源因たる責任を負はさしむるものである、余り怪奇なる説で一瞬時たりとも抱懷し得べきものではない。余はかゝる説を主張する學者を知らない。

二、人は肉體的、智的、且道德的に不完全なる發達の狀態で造られたるものであつて、今は（自然的經過により）より高き發達と最後の完全への途上にあるもので、現在人生の惡とか固有の利我心といふものは、過去に於て一層惡くあつた或性質、其時にはそれらが自然的遺傳であつた所の性質の殘存物で、人間存在の遙か以前に生物に植付けられた特質の發現であるといふ。之は生物學的進化論の説である。

併し後説も前説より少も勝れる所はない、之は罪と惡とをしてやはり創造主の仕事となすのである、彼が宇宙を進化の道程に出發せしめた時に宇宙の何所かに其種子を

裝置しておいたとするのである。時間に於ては惡の源因をなほ昔に遡らしむるけれども神がそれに對する直接責任を負ふべき事については少しも變りはないのである。なぜ神は此世界をこんな怖ろしい様に造らねばならなかつたか？　たゞ一寸試驗をして居つたのであるか？　神はより高等なる生物（人間をも含め）を造るため、幾百萬年の長い時代に亘り、人の未だ出現せざる先より、不幸と苦痛の連續を以て、人間自身も情慾と血潮の渦卷の中より甚だ遲々たる經過を辿つて現れ出で、『牙と爪とで眞赤』になつて―眞に自然の產物として出來せしめねばならなかつたのであるか。或は亦彼は其取扱ひし自由にならざる物體（物質）が彼の意の儘にならずして其制約を受けたのであるか？　此の最後の假說は今一般に有神的進化論者の採用せる說の如き觀があるのである、然れども之はやがて明白なる如く、決して基督教ではなく、純粹に混合物なき異教である。

懷疑論者は之に比ぶればなほ自然の神に對してより輕き誹讀者といひ得るのである

彼等は全智、全能なる創造主が斯の如き事態に對して責任ある者となす事を信ぜず、亦其取扱ひし材料の特質によりて制約せらるゝ事をも信じないのである。彼等は論じていふ、斯の如き傾向を被造物に注入しておきながら、其遺傳の本能のまゝ生活する事に對し、源因結果の法則に由りて、之を罰するとは暴君或は惡鬼の仕事であると。

進化論の大家等が人類の初代狀態につき如何なる教をなして居るかは次の引照を以て十分知る事が出來やう。

ハックスレーはいふ、

『人類は其野蠻時代までの連續的進步に對しては、猿や虎などと共通なる性質に負ふ所大なり。』

ジョン、フキスク（John Fiske）は其にも劣らず斷言的にいふた、自然は之等の性質に高い割增金を付けた、之等の性質を階梯として人類は現今の狀態にまで登つたのであると。彼は亦いふ。

『文明人種が進化し來りし所の原人の成功者は、機敏と意志の强固に加へて、奸黠と殘忍性に於て勝れたる者であつた事と考へらる』

他の箇所に於て此記者は今論究しつゝある問題に關して、もつと一般的觀察を下して居る。

『神學は原罪（Original Sin）につき多くいふ。併し、此の原罪とは凡ての人間が自身に携へて居る所の野獸的遺傳に外ならないのである。』——『人の運命』（"The Destiny of Man," p. 103）

ラコント（Le Conte）は此の遺傳の惡性質をなほも遡らしめて、事物の性質そのものの一部分とするのである。

『若し進化論が眞理であり、殊に人が眞實に進化の産物であるならば、我等の惡と稱ふる所のものはたゞに人間に限られたる特異の現象でなく、又一出來事（人類の墮落）の結果でなく、之は萬有に共通の大事實であつて、宇宙構成そのものゝ一部分で

ある。』（『進化論と宗教的思想』"Evolution and Religious Thought," p. 365)

余は此の最後の引照に特別の注意を喚びたい、其理由は之は自ら一基督教的進化論者であると稱したる人の文であり、且つ此種の思想家の大多數を可なり代表した言であるから。然れども此説と次に引照するケルサス (Celsus) 即ち普通にネオープラトニストと呼ばれてある人で、基督教を攻撃するため一書を著した最初の古代學者であつた人との説との間に殆んど差異を見出し得ないのである。

『そは此世界に在りては惡は必要物である。其には起源なく亦終もなかるべし……』

("Neander's History," Vol. 1. p. 168)

併し之は使徒等の死後間もなく異教の哲學者が使徒的時代の基督教に正面より反對するため書かれたるもので全く異教的のものであるとするに、此二十世紀の今日此と同じ説が、たとひ聖書を信ずる敬虔なる信者の遺産寄附によつて設けられたる神學講座より宣べられたとしても、どうして其を基督教と稱する事が出來やう。山羊を羊と

よんだからとて其が羊の性質を持つものとはならない。

四

若し一歩進んで、此惡よりの救、贖の教理或は罪よりの救といふ問題につき一考するならば、進化論者は必ず之は我等の中なる獸性との戰を意味し、たとひ天與の性質に反對して戰ふ事であつても、『より高き』生命に向つて我等の全力を擧げて奮闘する事である、といふのであらう。『進化の徑路は眞の救に向つての前進である』とフヰスクがいふが如くである。そして余が彼等の著書を讀みし所によれば、罪を單なる獸性に歸する所の凡ての基督敎的進化論は、新生或は更生の代りに文明或は文化（クルツーア Culture）によれる進歩を持つて來るのである。

然し此の種の進化論的『救』は專ら主として未來の人類全體の完成を待つて成る所の人種的救であつて、現在罪の惱むべき陷穽にあつて、其所謂遺傳の獸性と悲慘なる

惡戰苦鬪をなせるこゝかしこの憐れむべき個人にとりては其救は何するものぞ。其は之等の現在の道德的失敗（或は過去のそれ）に對し何等の福音をも齎らさない、たゞ人類的進步のより高き階段に登らしめられない以上、或は未來に於てもつと順應的境遇の下で『第二の機會』を與へられない以上全く望なきものである。そして之等の有神的進化論にありて、此人類的文化或は發達は神なる仲保者の干涉と神なる犧牲者の死なしに成熟せられ得るものたる事はいふまでもない。

併し我等は斯る倫理的文化敎說は前にも有つた事がある、されどそれらは墮落せる人類を贖ひ又向上せしむる上に大した力を有しなかつたのである。それと同じ樣な立派な倫理的敎說が異敎的ロマ皇帝なるマルコス●オーレリアス（Marcus Aurelius）によつて明細に書き上げられた。然し斯る哲學も彼をして幼き敎會に對し、ロマ帝國の全機關を用ゐて之を剿滅せんとの目的を以て、最も怖るべき迫害を敢て行はしむるを引止むる力はなかつた。そして今や歐米を通じて一般に（後に詳說する如く）古代ロマの

政治的觀念が復活して之が廣く宣傳せられてある事は餘り氣持の好い事ではない。其觀念といふのは、國家は個人の上に絕對に超越權を有し、個人は全體の福利と思はるゝ事のために彼の上に與へられたる外の如何なる權利も特權も有しないとする說である。歷史學の學徒は今や事態は急速に同樣なる立場に進展し來つゝあるを見るのであつて、上述の如き異敎的敎說が復活蔓延し來つて折角父祖の貴き血を以て贖ひし神聖なる權利と自由とが蹂躙せられんとして居り、長き世紀の奮鬪によつて漸く獲得せし市民的又宗敎的自由がいよ〳〵脅かされんとせるを見るのである。

世界は病んで居り、罪よりの救を要して居る。敎會は多年の努力である福音宣傳の試驗は全然間違であつたと告白し、新に其等のなまやさしいキリストを拔にしたる文化的、政治的方針に基いて其全事業をやり直し、斯して全世界に漲れる惡の潮流を逆轉せしめんと試むべきであるか? 或は亦之等の『進步的』學說を受納れ、大多數に對し頭を下げ得ざる所の聖書基督者（バイブルクリスチャン）、一名新-新敎主義者等は、此の復活せる異敎主義が再び

支配し、マルコス、オーレリアス及びディオクレシアン（Dio·letian）の時代に於てなされし如く、個人は全體に對し全然屈服すべきものであるとの此教説の無慈悲なる論理が實行せられんとする曉、彼等はも一度血の洗禮を潜らねばならぬのであるか？

聖書は我等の宗教的案内書たるよりは、遙かにより以上の書である。其は我等の市民的及び宗教的自由の福なる勅許狀（チャーター）である。そして之を拋棄するによりて近代英語國民は歷史の殆んど各頁を血染にせるが如き血腥き行爲を大仕掛に繰返す事より現代を牽制すべき唯一の感化力を拋擲したのである。

此の新しき哲學の倫理觀を其國民的分量に於て又其國際的關係に於て採用する事を公然と宣言せし世界强國の一、且其智的指導者の一たりしものの教訓的實例を指摘せずに止む事が出來やうか？　然れども此標本は多少なりとも此の異教的哲學に感染せる他國民をして必ずや立止まつて考へしむるに十分なる實物教訓であるのである。ダルウキン説によつて教へられたる宇宙觀及び人類の起源説はたゞ學究的問題として考

へられた時には左程怖るべきもの、我等が過去四世紀に亘つて漸く獲得せし凡ての權利と自由を脅かすが如き危險の伴ふものとは、多の人に想はれなかつたのである。一元論的哲學者等の教説が戰爭を讃美し、森林岩窟の倫理がなほも國民間の最高法典であると説きし時も――即ち換言せば幾十年前にダルウヰン説の生物學的『法則』を國際的問題に應用せんとした時も、今や此教理が具體的に一强國によつて實行せられんとせるを見て世界の他の國々より此教説が受けつゝあるが如き强固なる駁撃に彼等は其時遭はなかつたのであつた。

斯て先きの怖るべき大戰は此教説が國民的生活に實際に適用せらるゝ時如何なる結果を齎らすかを暴露して、其眞內容を示し、以て其覆轍を踏まざるための警戒となさるべきであつた。されど若し世界が永い間國民と個人との權利及び自由の保證させられたる所の、かの指導者に歸るべき警告に耳を藉さないならば、全世界は今や免れんとして氣狂の如く踠いて居る運命を己が頭上に招來する事は、夜が晝に續くよりも確

實となるのである。

第七章 新汎神教

"Jehovah is the true God; he is the livnig god, and an everlasting King." Jer. 10:10

"Thus saith the high and lofty One that inhabiteth eternity, whose name is holy: I dwell in the high and holy place, with him also that is of a contrite and humble spirit." Isa 57:15.

『エホバは眞の神なり彼は活る神なり永遠の王なり』 耶十。十、

『至高く至上なる永遠にすめるもの聖者となづくるもの如此いひたまふ。我はたかき所きよき所にすみ、亦こゝろ砕けてへりくだる者とともにすみ』 賽五十七。十五、

一

顯微鏡下に原形質動物の一群を、例へば蛙の足に於て、之を凝視し、一個一個の細胞があそこゝと動ける有様を見る時、凡ては混雑の塊(かたまり)のやうに見ゆるのである。斯

の如き方法では決して細胞組織發成の概念に達する事は出來ない。之等の一見混雜せる且無秩序なる運動によつて成遂げらるゝ結果を知らんとせば、之を大局より瞰める必要があるのである。

我等が時代の社會事相を觀察するも之とやゝ趣を同ふするものがある。現代の社會運動の歸趣や、或る教說の齎らすべき結果を知らんとするにも、我等は之を歷史的に研究し、之等の現代事實を過去の其と比較し、又他の時代に於ける結果より現狀に對する教訓を適應せしめて考察する必要がある。前者に於ては十分發達したる蛙の見本二三が問題解決の鍵を與へるであらうし、後者に於ては歷史よりの幾つかの實例が少くとも我等に何かの教訓を與へるであらう。

三

『汎神教』("Pantheism") なる語は一七〇五年の頃ジョン、トーランド(John Toland)

によつて作られた事は明かである、が併し其語の代表する觀念は實に人類の哲學的思考と共に古い、之は歴史の曙光に近く其紀元を有せるヒンヅー（Hindus）人種の聖なる書物の基礎となつて居るものである。汎神敎とはやゝ一般的の名稱であつて、其中には幾種かの思想系統を含めて居るのである。或は神を宇宙と同一視し、彼は萬物に潛在する大なる宇宙的勢力であるとなす說があり、或は宇宙を神と同一視し、一切の人間經驗を假說の宇宙的心の迷妄的且無常の一斷片に過ぎずと說去らんとするものがある。然し斯く變幻自在なる汎神敎の種々相も其根底に於ては同一であつて、一樣に神の眞實の人格性を否定し、神は一定の住處を有し、意志し、思考し、愛し、亦物質的宇宙を超越するものたる事を拒み、斯て論理的に贖罪と一切の神的默示の必要とを否定し去るのである。敎會は其歴史に於て數度此の哲學と決死的爭鬪に從事した、そして常に異敎の本體であると考へられた斯る敎理との一切の妥協と一切の商議を却け來つたのである。しかも我等の時代に於て此の古狸は新しい顏をして再現し再び敎會

を不潔なる同盟に誘惑せんとして居るのである。なほも附加すべき事は希臘、羅馬の時代に於てさゑも之は二十世紀の第二十年目の今日程には廣汎な範圍に泰西諸國に亘つて、敎へられ且信ぜられなかつたのである。そして此敎理の近代相とアテネの市場步廊や、ガンヂスの岸邊や或はナイルの溪谷に發生せし古代相との間に何等本質的差異はないのである。

希臘の汎神敎はストア哲學に於て其完成を見、基督敎の最も熱烈なる敵たりしマルコス、オーレリアスは其派の最有力なるものであつた。其よりはやゝ非物質的なるネオ・プラトー派は永い間基督敎を彼等の世的智識と妥協提携せしめんとて努力した。然れども敎會は之を振り捨てたが、再び之は中世紀になつて擡頭するに至つた。ヨハネス、スコタス、エリゲナ(Johannes Scotus Erigena)は九世紀の頃此說を吐き、スコラ哲學の智的輕業師に結構な材料を供給した。

併し近代的即ち新しき汎神敎はジオルダノ、ブルノー(Giordano Bruno)より起源を

發して居るやうだ。彼は人格化せる自然てふ一哲學組織を編み上げ、一六〇〇年異端として火刑に處せられた。此時より以後密教的仲間にあつては或は唯物的或は唯靈的汎神教が、宇宙の究極的智慧として尊奉せられた。スピノザ（Spinoza 1632—77）は後世の思想に形體を與ふるため或は最も有力なるものであつたと考へらる、彼の感化はゲーテ、（Goethe,）ウアーズウアース、（Wordsworth,）アーノルド、（Arnold,）エマーソン、（Emerson,）及びカーライル（Carlyle.）の如き文學的大家の中に散見せらるるのである。余のいふ意味は之等がすべて終始一貫せる徹底的なる汎神論者であるといふのではない。彼等の或者は幼時の聖書的訓練や周圍の基督教の反射的感化により此の本質的非基督教的なる毒素に全然と犯される事はなかつた。しかし彼等及びこゝに擧げざるなほ多の者等が其の時々の筆により或は其一二の者の場合にあつては其全部の著書により、近代文學の全體を汎神的迷信を以て蠱毒した事は否定を要せず明白である。そして之が現代科學の教説に於て有力なる後援者を見出し、斯て之等が近代

世界に於ける此觀念の大普遍の主なる源因となつたのである。

凡ての汎神論は一元的である、然し一元論は必しも汎神的といふのではない。先にも述し如く宇宙を只々分子と原子とで説明せんとするが如き極端なる唯物論もあり、亦一方にては、實際的には物質の實在を否定し、凡ての現象を心と靈とによつてのみ説明せんとする唯靈論或は『唯心論（アイディアリスチツク）』もある。此等の極端と極端との中間に無數の變化があるのである。多數者は其思考の種々なる部門に於て汎神的觀念を有し乍ら、しかも彼等の思考全體を其汎神論に適合せしむる丈の骨折をなさないので、其抱懷する説は實に種々雜多である。例へば宗教に於ける神秘主義（ミスチシズム）は大抵汎神論の或る形式と結び付き、カルヴヰン教すらも世界の攝理的保存てふ事と一種の繼續的創造説とを混同せしめし結果、即ち宇宙の『保持』と創造とを區別して説かざりし結果、汎神的觀念の發成に對し甚だ都合よき土壤を供したのである。

カルヴヰン教はジョナサン、エドワード（Jonathan Edwards）に於て其頂點に達し

た、彼は疑もなく世界最大の深遠なる頭腦の所有者の一人であつて、絶對的一元論を敎へながら巧妙に汎神論を避けたのである。されど其以後の多數の神學者、此の偉大なるゼネバ人によつて植付けられたる種子より發生せし種々なる新敎々派の間の神學者等に於ては、神の遍在てふ聖書の敎理と、宇宙より神を追出し、すべての彼の事業を自然的勢力とエネルギーの名によつて解釋し、超自然或は靈的のものを全く排除せんとするが如き宇宙觀との間に存する差別を見失はんとする傾向がいよいよ增加して居るのである。そして浸禮派（バプテスト）、組合派（コングレゲーショナリスト）、長老派（プレスビテリアン）、其他の間に於けるカルヴキン系神學の多數の敎會は、彼等の古き敎理なる預定、罪、更生等の信條を漸く捨て、之に代ふるに所謂『より大なる希望』とか『新神學』とかの種々和を暗默の間に、或は公然と輸入し來つたため先に擧げた傾向は恐ろしい程蔓つて來たのである。何故『恐ろしい程』といふかといふに、之等の觀念が敎條とし或は哲學的一系統として自己を組織する時、必ず其基調は汎神的であるからである。

三

我等の弱き有限なる人間的智能は、しかも其が惡に向ふ遺傳的及び後天的傾向を有するものとして、屡々思考上の迷路に我等を踏み迷はしめ進退谷まる窮地に我等を陷入るゝ怖があるのである。其にもかゝはらず、若し人が自己と他人とに對し、自らの歩みし道は不可知即ち『絕對』界を貫通せる直道を開拓したものであると、確認せしむる事に成功せば、其結果は此無益なる、亦決して目的を達することなき『眞理』の探究をして一つの自己永續的迷想たらしめ、後世必ず其同じ苦勞の探究道を辿る者を絕えしむる事はないのである。『隱微たる事は我らの神ヱホバに屬する者なり、また顯露されたる事は我らと我らの子孫に屬す』（申二十九。二十九）

ある上手な物言ひをする記者がかゝる哲學者等の努力を、乳塲を吸ふ赤子のそれに譬へていふた。塲に乳のある間は赤坊は吸ふても氣持好く又有益であるが、間もなく

壜が空になるか或は乳が出ない樣になつても赤坊はなほも同樣に吸ふ事を止めない、其結果は氣持を惡くし又疝痛を起すのである。成人したる小供等も智的乳の供給に限度のある事を知つて、嬰兒の如く空しく空氣を吸ひ止めない樣な眞似をしない方が善いのである。或る事は我等の現狀では不可知として恒に殘さるべきである、しかるにいつの時代にも、我等と不可知境とを距つる空間を綱渡りするが如きネオ・プラトー派や或は中世のスコラ派の智的輕業師の如き仕事を眞似せんとする新しき一群の人を絶えしめないのは甚だ遺憾事である。

聖書の明白にして疑問の餘地なき教は、宇宙の大創造者は一個の人格者であつて、思考し、意志し、愛し、又同情する所のものであるとの事である。現今之等の同樣なる力と能力とを働かす所の人間は、其能力と完全性に於て無限である所の神に似せて造られし偉大なる原形の憐れなる寫に過ぎないのである。聖書は最も積極的に神の遍在を說くが、其と同時に宇宙間に於て神の在す特別の場所、即ち他の場所にては見出

され得ざる意味に於て見出さるゝ場所のある事を教ふるのである。されど之等の記述は互に相矛盾せるものではない。聖書に親しき人々の思想に於ては之等の記述は、たとへ其が不信の科學的批評家にとりて逆理の如く見えても、聖書的教訓の光によつて容易に解せられるのである。神の遍在とは、その言とその靈によつて宇宙の至る所に神が現存し給ふ事であつて、その御言は宇宙の極にありても近くと同様に能力あるものである。元來物質は神がそれに與へ給ふた屬性の外には、如何なる屬性をも有するものでなく、隋力とか抵抗力とかいふもみな神の言の命令に服從せるものである。此教理は神の遍在或は『內在性』(immanency)を其言の原の正しき意味で教ふるものである。併し此『內在性』なる言は、神の人格性を否定し、自己特有の汎神的觀念を表現せしめんがため其言の中に半專問的意味を注入せし人々によりて餘りに濫用せられたるを以て、我等は此言を用ふるを控えねばならなくなつた。

我等の主なる救主キリスト、イエスは神の本質の眞像であつて、天地創造の凡ての

業に於て父と協同で在した事、及び父なる神を我等に示さんため、人間が其造主と接觸しても燒き亡されざるために其神性を人性に包んで地上に降り給ふた事が聖書に敎へられてある。我等の有限なる心は無限なるお方を決して十分に會得する事は出來ない、然しキリストに於て我等は父を視、永遠者に關して我等の知るを要する凡てを學ぶことが出來る。此以上は我等は、恒に疲れたまふことなき聖手と、決して過ちたまはざる聖智と、いつまでも衰へたまはざる聖心におまかせする外はないのである。

四

次に或人々にとりて汎神的觀念に導くやうに想はれた科學的事實の或ものを簡單に考究する事とせう。

ケプレル（Kepler）と其有名なる三法則の出來るまでは世人は、太陽系の秩序的配列に關しては知る所なかつた。併し若しケプレル自身、之等の立派なる法則の究極的

源因は何かと問はるゝならば、それは造物主の絕對の意志であると答ふる外なかつた。ついでニウトン(Newton)出でゝ第二次的即ち物質的源因を提供した。彼は凡て之等の秩序ある配列は宇宙引力の必然的結果たる事を示した。其の初期の時に於てはやヴォルテーヤ(Voltaire)や其他の哲學者等は此發見を執えて、之を以て少くとも天に於ては、もはや神の支配は不必要のものとせられたとしたのである。それからやれ化學だ、顯微鏡だ、電氣だと次から次へ驚くべき事が來り、勢力の相對性やエネルギーの不滅などの事實が發見せられ、遂に今日にては法則と秩序とが全宇宙に行き亘り、其等が迹なき迹を辿つて空間を走る所の惑星より、太陽の光線に照されて浮遊する微塵に至るまで、或は我等の肉體を組織せる原形質的單位に至るまでの萬物を支配する事となつたのである。

我等は之等凡ての法則を諒解したといふのではない、たゞ相互間に存する彼等の相對關係を知るに至つたのである。といふのは、今日我等の知れる所は、引力、光線、

熱、化合力、磁氣、電氣などの如きものは實際獨立せる力では、之等は損失を見ずしてみな相互變遷し得らるべきもので、此故に之等は同一エネルギーの異れる表現に過ぎないといふ事である。之は議論ではなく、事實である。自然科學に於て勢力の相對性及び其双子的法則なるエネルギー不滅の法則程不拔なる根抵を有する法則はないのである。今や生命組織に於ける活機能も其間に完全なる聯絡ある事が明かとなり、亦科學が其精密なる機械を以て測量し得る範圍に於て、物質界に於けるエネルギーは恒に空間に向つて放散しつゝあるが、また同時に太陽よりつねに補給せられて、其エネルギーの分量は一定量たる如く見ゆのである。

斯て我等は法則と秩序とが絶對の權を振へるを以て、以下二者のうち何れかの立場を採らねばならぬ事となるのである、――或は宇宙は其自身で十分なるもの、其自身で回轉せるものであつて、我等は大なる全體の極微分子また細胞に過ぎないといふ說之は即ち汎神的にして一元的なる唯物論である。或は又宇宙の大創造者は自然と密接

なる關係を有せるものであつてカントが敎へしが如き哲學とは非常に異れる方法で凡ての自然現象を司れるものとなす說である。我等近代人にとりては中間の立場を採る事は可能ではない。或は唯物的（時には唯靈的或は理想的）汎神論であるか、或は基督敎的有神論かの二者一を擇ばねばならぬ。後者は我等が『神にありて生き、動き且つ有ること』を得るとなすものであつて、或意味にて此思想は未だ凡ての者の大なる父を愛する事を知らない罪人にとりては怖ろしい思想である。物理學と化學の何たるかを知り且つ一つの結論に達するまでに深く廣く考ふる人々にとりては第三の撰擇はないのである。

約半世紀前人類が自然界の驚くべき神秘をはじめて征服せし意氣洋々たる時に當りて、殊に進化論が勃興して動植物の起源を說明せんと企てゝ以來、汎神的なる物の見方が秘傳を許されたる少數の者の手より漏出して、凡ての泰西國民の一般に速かに普及するに至つた。最初は全く唯物的であつた、然し人間は宗敎的動物であるといはれ

てあつて、スペンサー（Spencer）やヘッケル（Haeckel）の唯物論は一般民衆を永くは滿足さすことが出來なかつた。そこで、こゝ十年間以上といふものは振子は大層宗教的に見ゆる所の唯靈的汎神論の方向に強く傾いて來たのである。そして永き前にネオ・プラトー派が試みた其に極似して、之は基督教會の永年用ゐ來りし宗教的用語や又は禮拜の方式を採つて、之を自家藥籠中のものとし、其中に異なれる意味を盛り、自己の世界哲學系統を建てんとして居るのである。一々證據を擧げて之を證明する必要がない。我等の明かに知れる所は、羅馬教會の近代派（モーダニズム）、英國々教會の自由主義運動（リベラルムーヴメント）、英國非國教派及び米國新教各派の『新神學』或は猶太教の改革的精神すらも其根抵に於ては何れも同一の運動であつて、たゞ其地方的差異を有するに過ぎざるものである、彼等は何れもみな近代科學の發見を聖書よりも優等なるものとなす信念に支配せられて居つて、程度の差はあるが何れも古代希臘或はヒンヅー教の汎神論と區別し難き神觀及び宇宙觀を說いて居るのである。

五

二つの事が主として之等の不幸なる結果を招來した如く見ゆるのである。

一、其第一に擧ぐべきは、聖書と歴史的基督教とが眞實に説ける所を誤傳して、それらが『留守の神』（アブセンティーゴッド）を敎へるものとなし、神は天地の支配を光、熱、引力、電氣、化合力等々の代理者に委任したとしつこく説いたことである。カント哲學も其無數の修正説と共に、罪人の自然の傾向である所の、神を自然界の諸現象より驅逐し、專ら現象其ものに注意を向はしめ、物質的事物をのみ其等の源因と仰がしめんとするに非常に奬勵をあたへたのである。されどクリスチャンが『留守の神』を信じて居るといふ嘲笑は甚しき誤傳である、それには二つの理由がある。

（一）、基督敎會は未だ嘗て斯る敎理を説いたことがない、シカゴ大學のフランクリン、ジョンソン博士（Dr. Franklin Johnson）は敎會歴史の問題については確に權威あ

る學者である。彼の證明に曰く、

『「留守の神(アブセンチーゴッド)」なる教理はノースチック教のものであつて、基督教會は其最初より之を恐るべきものとして却け、今日に至るまで却け續けて來たのである。此點に關しては教會内に一人の反對者もない。オーゴスチン、(Augustine)アクイナス、(Aquinas)カルヴイン、(Calvin)メランクトン、(Melanchton)及びアンデレ、フラー(Andrew Fuller)等はみな、神は何處にも在し、何處にも働き給ふといふ記述に一致せるものである。』

(二)、聖書は斯の如き教理を說かない。聖書全體に亘つて神の遍在が教へられてある。さらば此遍在の神がいかにして『留守の神』であり得るか。

ネヘミヤに由りて記されたる彼等の美しき讃美歌に、レビ人等はうたふた『汝は唯なんぢのみヱホバにましします、汝は天と諸天の天およびその萬象、地とその上の一切の物……を造り之をこと〴〵く保存(たもた)せたまふなり』(尼九。六) 我等の世界に關する

限り、創造の事は己に完成して居る『されど世の創より御業は既に成れるなり』（來四。三）と錄されてあるのである。安息日は完成せる創造の御業の紀念さしてあたへられたのであつて、其業がなほも繼行せられつゝある紀念ではない。科學に於ても此事を發見して、之をエネルギー不滅の大法則と呼んだのであると思はる。創造主の御業は『己が權能の言をもて萬の物を保ちたまふ』（來一。三）上になほも顯著である。機械が一度動かされはじめ、あとは其が自分で獨りで動くやうになつて居るから、呼吸や脈博がその間斷なきリズムを續けるのではない。一つ一つの波うつ胸、一つ一つの鼓動する心臟は一切の物の造主なるお方の不眠不休の守護を物語るのである。我等は『彼の中にありて生き、動きまた有ることを得る』ので『彼は一切のものゝ中にあり、また汝等すべての者の中はいます』のである。

此教理は人間の自由なる人格性を無視するものではない。最も明瞭なる意味に於て神は義人の中に在して、惡人の中には在さゞるのである。ジョンソン教授の言ひし如

く『我等は神が惡人の靈に內在せる事を否定せねばならぬ、しからずば彼等の惡性を否定せねばならぬ』のである。我等は飽くまでも意志の自由性を信じ、又罪の結果自然界に於ても神の御心に反對なる作用が起つた事を認めるものである、若し然らずばコレラの桿狀細菌や毒蛇や虎の本能がまことの神の自現であり、或は又火山の爆發と共によれる老幼の無差別的殺戮が神の直接の行爲、彼の意志の完全なる表現であるとせねばならぬのである。

我等は罪によつて多少歪められ、頽廢せしめられたる世界に住んで居るので、啻に人性が罪悳のため變化したのみならず、自然界までが神の秩序を亂すに至つたのである。聖書の『造られたるもの〻虛無に服せしは』といふ如くである。人間に對する贖罪の計畫は其造られたるもの〻凡てに於ける原の秩序に回復せらる〻事をも含んで居る、『造られたるものにも滅亡の僕たる狀より解かれて、神の子たちの光榮の自由に入る望は存れり』とあるのである（羅八。十九――二十一）。自然界の完全なる秩序

が廢頽せし結果、我等は自然界に於て二組の現象の存在を認めねばならぬのである。之等の二つの間に判然たる境界線を引く事は困難である、亦 其は絕對に 必要でもない。唯我等の認むる所は、神は遍在して其聖旨を行ひつゝ居給ふので、やがて萬物はその原の秩序に全く還されんとして居ることである。されど萬物は未だ神の計畫と調和して動いては居らぬ事をも亦認むるのである。

凡て之等の現象に於て我等は神が造り給ひしもの、そして其上になほも支配を執り給へるものゝ事を論じて居るのであつて、其御働の方法の或ものにつき我等は定義を下して之を自然法と名づけたのである。自然界の諸現象は畢竟神の思想の具體化に過ぎない、自然の諸勢力は一エネルギー或は意志の異れる表現に外ならない事となるのである。そして自然法とは此意志が働く秩序的法則である、――秩序的といふのは『神は混亂の神でない』からである、そして不易的である（罪が存在を許されてある期間外に於て）その理由は神は完全であつて、其故に不變であるからである。

全智者は事を爲すに當つて試驗を要しない。物質を造り、それに『屬性』を與へ給ふた全能者は、物質が彼の意志の敵となり或は其支配を脱出するを容し給はないのである。そして最初より事の終末を洞察し給ふ者は、一切の可能的なる出來事に對し準備をなし給ふて居り、生起し得る如何なる出來事によつても驚愕せられて彼の最善にして確定せられたる行動の方法を破らねばならぬ如き醜體を演ずるが如き事はないのである。」

六

二、近代の汎神的觀念の流布に寄與せし第二の源因は、我等の智識の裂罅を架橋するに唯物的『源因』を以てせんとせし不斷の空論的傾向である。言ひ換ふれば唯物的屏風を立てゝ、神が生活の諸問題に干渉するといふ厄介な考を避けんとするのである。確に或者にとりては斯くの如くに大きな取締の目の下で始終生活して居るといふ思想

は決して愉快なものではないのである。

物質的源因を探究する此性質は人間の心に本能的にあるのであつて、之は亦我等の先祖にとりて『此内に入るべからず』との立札が懸つて居つた多の閉されたる自然界の戸を開く上に大なる實際的奉仕をしたのである。併し自然界の如何なる部門に於ても一旦內らの聖所に入つて見ると、其處には大きな裂罅があつて言葉の橋を架して渡る外に途なきことを發見するのである。そして之等の言語の橋に我等はいかめしい名稱を付けて勿體ながつて居るのである、或は『發光エーテル』『引力』『化合力』等々と、そして之等の言語が我等が渡つた實際の客觀的橋を表現するものであるかの如き印象を與へて民衆の僞瞞し易きに乘ぜんとするのである。

併し實際に我等は物の源因につきてどれ丈知つて居るか、或は又一見空虛なる空間を越えて物質の上に働く理法につきて（引力或は他の相引く力の形式の如き）何を知つて居るか。我等は自然現象の發生に或る種の規則正しきことを發見する、すると我

等は直ちに賢こげな理論を發明し、其を飾るにすばらしい數學の公式を以てし、斯てエーテルの精密なる運動や分子の力學的運動を說明し得ると稱するのである。そして之等の發明を倪かすに用ふるため我等は自己催眠に陷入り、我等が客觀的實在を取扱へるものと妄想し、又之等の理論は我等が眞實の性質を知らざる事を蔽はんとする學者振つた假面に過ぎないことを知らないのである。

引力、化合力の法則、光と熱の特質、電磁氣、又はX光線の法則などにつき語るは普通の會話に於ては結構正しい事で又甚だ便利なことである。それは丁度天文學者でも『日の出』とか『日の沒』とかいふ語を用ゐるやうなものである。若しも我等が宇宙の深遠なる問題を取扱ふに當りて之等の用語が我等の思索を曖昧になすを許さないならば、之等の用語は普通の談話に於ては差支ないのである。されど我等の『法則』の最も確實なるものも、少しく高き觀察點より眺むれば其等は最も粗末なる素人の判斷に過ぎないかも知れない。といふ理由は今迄に發見せられたる物理學或は化學——

科學の中にても最も確實なるもの――の法則に於ても一つとして或る驚くべき且又神秘的なる例外の發見せられなかつたものはないのである、之は我等の智識の悲しむべき制限を思はしむるものである。鐵道線路の近くに住んで居る兒童は凡ての汽車が通過する確實なる時間を大なる自信をもつていふ事が出來るかも知れない、されど往々にして『特別仕立』が走るので、兒童は列車發着掛の事務所に於ける計畫と配置とにつきては餘り知つて居ない事が暴露せらるゝのである。

七

水が其膨脹と收縮に於て如何に不思議に働くかを暫時ながめたい。固體、液體、瓦斯體は熱と共に膨脹し、其が欠けるか或は寒冷が加はるかすれば收縮することは自然界に於ける殆んど一般的の規則である。其結果として固體はそれ自身の液體中にては沈むのである。前に一八六七年ステリーハント博士（Dr. Sterry Hunt）は此事實を

用ゐて地球の内部が鎔液狀態であるとの普通の觀念は眞實であり得ない、表面の固體はそれが形成せらるゝや直に底（中心）に沈下すべきであると證せんとしたのである。しかし氷はそれとは反對に斯の如く作用しないのである。液體の狀態にては寒冷と共に収縮し遂に攝氏四度にまで至る、之が水の最も收縮せる狀態である。次に其になほ寒冷が加はると膨脹しはじめ、遂に攝氏〇度に至りて突如膨脹して氷となり、其よりは亦寒冷と共に收縮する普通の法則を辿るのである。之と稍同様なる現象を其極端なる溫度に於て呈する他の物質が幾つかあるのである。

氷が斯の如く一般の規則の例外であることは我等人類にとりては非常に幸な事である。若し他の物體の如く其固體の狀態に於てはその液體の狀態に於けるよりもより小さき場所を占領するものとせば、其は形成せらるゝにつれて水中に沈下し其結果は思ふだにも怖ろしいものがあるのである。我等の湖水も河川も冬期の最初に於て凍つて固體となり、夏中かゝつてもやうやく其表面を少しばかり溶かし去るだけとならう。

之等の氷に關する奇怪なる現象を力學の理論と調停せんとて色々と賢こげな企がなされたが凡て成功しなかつた。余自らは造物主は未來に於て我等が發見するか或はしないかも知れぬ一層高い法則によつて、氷の場合一般の法則に對して一の例外を設け給ふたのであつて、斯て、此の世界をして棲居するに適したるものとせられたのであると信ずる事は一層容易てある。

八

次に光即ち輻射エネルギーが太陽或は不可測な遠方の星より如何にして一見空虚と見ゆる空間を越えて我等に傳達せらるゝかとの未解決の問題が殘されてある。之は全能者がなやめるヨブに提出せられし多の同樣なる問題の一つであつて、人間の苦痛が決して唯一の未解答の現象ではない事を示されたのである。『光の發散る道は何處ぞや』とは族長ヨブに提せられたる問題であつた、しかも我等の一切の科學を以てして

も此幾世紀に亘れる問題はなほ未解決のまゝ存されてある。近代のエーテル論は其波動或は振動說と共に、畢竟かの見掛け倒しの言語の橋の一に過ぎず、たゞ說明らしきものを以て我等の好奇心を鎭靜せしむる助になるのみである。併し其說も最後の解析に會つては、神の質問に何等答ふるものでなく、如何にして其現象が生ずるかを解せしむる上に何等の助を與ふるものではない。エーテル說は問題を解くものではなく、たゞ其解決を延期したものである。凡て斯の如く唯物的說明を許さない自然現象は似而非理窟家でない人々には、自然の背後にあつて其とは獨立せる大なる心がその實際の源因であるとの思想を惹起さしむるものである。之は前述せし如く聖書の一般的教理である。されど科學者は物理學的源因を提出し得るものと主張して止まない。我等は彼等の學說を試みて見るに、一の神秘をも驅逐せずして、却つて十の神秘を呼び醒すのである。さらば之等の學說により我等の利する所は何か。

輻射エネルギーが凡ての空間、固體の內部にまで浸透せる稀薄なる彈力性ある導體

なるエーテルに於ける波動或は振動によつて傳達せらるゝとの説は或人のいひし如く『思想經濟の方便』である。確にその通であつて、此説のため我等は神が自然界に亘つて活動して居給ふ事を考へずに濟み、亦人生の日常の現象中に彼の愛護の公開的教訓をつねに讀む事をせずに濟むのである。否之は寧ろ神を忘却せしむる方便と呼んだ方が適當である、之は神の能力の活動に代ふるに唯物的代用物を以てせんとするものであつて、余は余の思索に於て斯の如き薄弱なる言葉の懸橋を渡る事は御免を蒙りたい一人である。

此のエーテル説の如き他の多の學説があつて、其等は現象の眞實、重大なる教訓を延期し或は無視せんとする――眞實の源因を一歩後ろに却けんとする努力――唯物的努力に過ぎないのであつて、近代智識の不斷に堆積する證據が大なる第一源因は多數の者が之を信ずるを好む以上に生命と運動とに對しより密接なる關係にある事を證明し來つた事實に對する最後の必死的反抗である。例へば引力――粘着力及び凝聚力の

如き一切の牽引力――の如きものは物理學的或は唯物的意義では決して解釋を見る事はないであらう。我等は術進の如何なる形式をも容易に物理學的に說明する事が出來る、併し物質の一質點が如何にして他の離隔せる質點に作用し、之を自己の方向に牽引し得るや。しかも此牽引力が不可測的廣大なる空間を通じて作用し得るやを如何に說明すべきか。數學の逆自乘方程式は之等の力の作用する方法を正確に示す事が出來るが、併し引力の源因を物理的に示し得る學說にして眞面目なる眞理を好愛する人々の時間を割愛するに足るものはないのである。之は大なるヱホバが定め給ふた方法であるといふ外に決して說明の仕方はないのである。斯る事柄に關する學說はたゞ既知の事を不知の名稱で說明するに過ぎないものであつて、我等をして人格的神の活動てふ觀念を懷かしめざるための智的防禦器或は屛風の如き役目をなすに過ぎないものである。

されども此の死せる唯物的エーテル、此假想の引力の『力』の代りに、全能者なる

造物主の言を以てせば如何。彼に對して物質はたとへ無限の空間を越えてでも直に服従する外ないのである。しかる時は之等の『隔離せる所に於ける作用』の現象は少くとも理解し得らるゝに至る。余にとりては、而して余は今科學者の立場にていふ、此の外に他の如何なる方法によるも其は理解し得ないものである。

九

自然の驚異の中でも顯微鏡下に於ける細胞と其の合成である原形質の如く不可思議にして我等をして造物主の製作場に案内せられたやうに思はしむるものはないのである。ハックスレー（Huxley）は後者を生命の物理的基礎と稱した。その理由は其が植物及び動物にあつて同じであり、且凡ての有機的存在の基礎であるからである。我等はいかなる物理學或は化學的試驗によつても動物の原形質と植物の其とを區別する事が出來ない、たゞ一は他とは異なれる作用をなすのみである。

然り、しかも如何に異なれる作用ぞ。凡ての生物の原形質的單位は各々異なれる部門の活動をなし、各自の義務をまことに韻律的に遂行し、其等を顯微鏡下に觀察する時(我等の血液の一滴中に約五百萬の血球がある)恰も自然界の大將軍が彼等に其命令を下せるを聞くが如き心地するのである。彼等の規則正しい軍人らしき運動を遺傳的慣習の結果とか或は彼等の化學的構成分子中にやどれる固有性質の結果であるとかいふのは以ての外である。たとへそういふた所で、其等の驚くべき性質は何處より來たか? との疑問はやはり殘されてあるのである。生命の過程は決して物理や化學の用語では說明し得るものではない。此事は有機體が死する時立派に示されるのである。其時にも化學的作用は其支配を執つて、全有機體を無機體的分子に還元し、胃液は之を分泌せし胃をも食ひ盡すのである。

されど我等の指頭に於ける此少さき斑點を視よ、其は骨格を建てて居り、我等の腦髓に於ける他の細胞、丁度其二倍のものは、腦組織を建てゝ居るのである。亦白血球

と呼ばるゝかの驚くべき被造物を視よ、こゝかしこを行き巡りて肉體内に見出さるゝ毒素を狩出し、之を食ひつくすのである。之等の少さい原形質は各々配當せられたる仕事を持つて居るのである。神の力と智慧とを示す所の有機的生命の驚異について語れば飽くことを知らない。遺傳の生物學的理論に於ける凡ての言葉の懸橋の有無に關せず、有機的生命の細胞は惑星を其途に導き、又之等の細胞の内に住むのでなく、之等を無限に亦立派に超越せる所のお方によつて支配せられて居るのである。

十

基督教會は此の十幾世紀に亘つて神の遍在の教理、時には神の無邊無量の教理と稱へたものを教へて來た。宗教改革者も羅馬神學者も、一方一切の汎神教的臭味を容易に且つ完全に避けながら、同樣に此教理を説いた。そして凡ての近代科學も聖書の中に美しく亦崇高に寫し出されてある事實に反對なる何者をも客觀的事實さして提供し

得ないのである。『彼ら皆なんぢを俟望む……彼等はなんぢの予へたまふ物をひろふ、なんぢ御手をひらきたまへばかれら嘉物にあきたりぬ。』（詩一〇四。二七、二八）

原形質より人に至るまで、原子より天體系統及び際限なき空間に至るまで、萬物は瞬間瞬間、萬物の大創造者また保持者の不眠不休の活動に依與せるものである。

眞や、生れつきの儘なる人心は此思想を歡迎しないのである。之は我等の罪深き欠點やその裸なるを餘りに彼のお方の目の下に暴露し過ぎるのである。かく無限者の目の直下に生活し動く事を喜ぶ者は少ない。それで彼等は哲學的『二元論』を發明して創造者を彼の宇宙より放逐し去らんと試み、或は彼等の科學的汎神論の面帕を以て彼の一切に透徹する眼光より其心を覆はんとするのである。埃及及びカルデヤの碑石が宣せる如く、古代に於ても人類は同様な事を試みた、そして我等の世界の朝に於て彼等の有せし熱くべき自然智識は世界歷史の最初に於て見る如く、汎神教と自然崇拜に墮したのてある。

是はかの所謂律法と福音との古い古い爭鬪である。唯物論は法則の固き嚴格性を意味し、人格神の動作は福音の祝福せられたる愛を意味するのである。物質界及び道德界の法律に於て罪の價は死である、されど愛なる全智の神は其間に干渉して傷を醫し、病を治し、罪を赦し、彼よりの自由なる賜物として永生を我等に得しめ給ふのである。

我等は近代科學が再びシナイ山よりの如く『不可避の運命を齎らす所の怖るべき』大なる自然界の鐵則を宣言するを聞きて戰慄するのである。其時我等は無限の聖潔と無私の愛の眼下に我等の裸と耻とを感ずるのである。我等は恐懼してイスラエル人と共に『自然をして抽象的勢力として我等に語らしめよ、さらば我等聞かん、されど此の人格神、無限なる創造者をして語らしむる勿れ、恐らくは我等死なん』と言ひたくなるのである。

併し乍ら我等が瞬間瞬間生命と其無數の一切の祝福とを享有せしめられて居る所の

其お方こそは、彼に歸り來る子等を生命と平和との約束をもて迎へ給ふ方であるのである。彼自らいとも良き衣を持來りて、我等に衣せたまふのである。その衣とはキリストの義の衣であつて天の機で圖案の大家の目の下にて織り成されたのであり、凡て神の自然界及び默示界に於ける他の賜物と同じく、金なく價なく、誰にでも自由に提供せられて居るのであつて、之を受くる所の怖れ慄く罪人のため役立つものである。

第八章　西洋の邪教

"This was the iniquity of thy sister Sodom, pride, fulness of bread, and abundance of idleness was in her and in her daughters, neither did she strengthen the hand of the poor and needy."

Eze. 16 : 49

『汝の妹ソドムの罪は是なり彼は傲り食物に飽きその女子らとともに安泰になり而して難める者と貧しき者を助けざりき』（結一六。四十九）

一

『ヒーズン』(heathen 邪教徒) なる語は異神を知らずして、自己の神或は神々を崇拜し自己の宗教を有せる人々に對して用ゐたものである。彼等は無神論者でもなく、懐疑論者でもなく、亦不信神者でもない、彼等は熱心なる宗教信者である。されど此

の一世紀間に西洋諸國に成長したる所謂『高等神學』を表はすに適當なる用語を缺くが故に、余は其が見付けらるゝまで此の章の標題としたるものを其に用ゐん事を許されたい。此の名稱は斯の近代的泰西宗教が未だ一個の體系となつたのではなく、種々雜多なる形式で行はれて居る事を表はすに一層適切であるのである。余はまた之を誹謗の用語としてゞはなく、單に一敍述として用ふるものであることをも、附加しておきたい。

永い前ではないが、或る通俗雜誌は『唯物論の凋落』に關する論文を載せた。之等の論文は過去十年間前後に宗教科學界に起れる驚くべき變化の故を以て必要とせられたのである。前世紀の七、八十年頃に於てはダルウヰン說が科學社會では首座を占め、世界は頑强なる唯物論の時代に入らんとせるかの如き觀を呈した。されど近年に至つて、進化學說はある不定にして捕捉し難き形式の下に『萬物創成の法則』として一層流行を來したのであるが、唯物的觀念は殆んど全然顧られなくなつて、基督敎の

神は進化の過程によつて世界を造つたとの言掛を言はれて來たのである。敢て言掛と言ふのは、進化學說が敍述するが如き不器用な、なさけなき仕事、お粗末なだらしなき仕事、決して全智にして全能なるお方に相應しからざるもの、亦殘忍なる經過、決して愛の神に相應しからざるものを聖書の神に歸する事は彼に對する讒謗であると余は考へるからである。併し、たとひ其が自然宗敎及び啓示宗敎兩者の最も基本的なる觀念の凡てと甚しく矛盾せるにもかゝはらず、此の『有神的』進化說は今や歐米の敎育組織の大多數を支配し、通俗雜誌ですら最近發行せられたるヘッケル(Haeckel)の書を嘲笑し、唯物論の『凋落』を云々する程に至つたのである。

二

有名なる東洋學者でオックスフォード大學の敎授たるモニール、ウヰリアムス(Monier Williams)氏は、東洋の聖なる書とバイブルとの間の相異點は前者は一般に人

間は業即ち自已の功德によつて救はるゝと敎ふるが聖書は救はたゞ神の自由なる恩寵によると說くのであると、つねに說いて居つた。此の相異點はまことに基本的なものであつて、基督敎と凡て他の僞宗敎との重大なる相異は之であるといふ事が出來る。凡て異敎の基本は人間は何かの方法で自已の努力によつて救はれ得るといふ點である、語を換へて言へば人間が何かの方法で自己の努力によつて自已を救ひ得るといふ如何なる宗敎或は倫理系統でも、其は異敎と命名するのが至當である。

人間の墮落說は信仰にのみよつて救はるゝとの福音の敎理と不可分的に相結合せられてある。ブラッチフォード（Blatchford）氏は例の辛辣なる口調でいふた。

『併し――アダム無しとせば墮落なし、墮落なしとせば贖罪なし、贖罪無くば救主なし。進化論を受容れながらいかで墮落を信じ得ん？人間は何時墮落せしや？彼が猿たるを止めし前か或は後か？彼が樹木に棲みし時代か其後か？石器時代にか青銅器時代にか或は鐡器時代に於てか？……そして若し墮落なるものが無かつたとせせ

ばいかで贖罪が有り得やうか？』（『神と我が隣人』"God and my neighbor" p. 159
併し基督教辯護者の中の最も明晰なる頭腦の所有者等はみな一樣に墮落の物語を宗教の肝要なる教理であると認めたのである。斯てジョン、ウエスレー（John Wesley）は言ふた。

『人間の墮落は啓示宗教の基礎である。若し之にして除去せられんか、基教は顚覆せられ、上手に作り上げられしお伽話にも過ぎざるものとなるであらう。』（著書第一卷頁一七六）

亦他の所で『原罪』に關する說教中にいふた。

『この故に之が異教と基教とを區別する所の第一の重大點である。一は多數人は多の罪惡に染り居り、亦生れ乍らにして其傾向を有す、されど同時に或者にありては生來の善は惡よりも遙か多量であると想像するのである。されど他のものは人間はみな罪の中に孕まれ、邪惡の中に形作られ、其故に各人の中に神に對して敵ひ、彼の律法

に服從せざる、また服從なし得ざる所の肉性(カーナル)の心がある。——それで第二に學ぶ事は原罪或は他の用語を以て稱へる所の此を否定する者は異敎と基敎とを分つべき基本的要點に於てなほ異敎的である。——言換れば題句に戻りて『其心の思念の都て圖維る所恆に惟惡きのみなるや』? 若し之を許せば汝はそれ丈基督者たるのである。之を否定せんか、汝はなほも異敎徒たるのである。』(同上第五卷頁一九五)

キリストの十字架、神人の犧牲によれる代償的贖罪の敎理は、我等世界の元始の記錄即ち神の像に似せて人間が眞質に創造せられし事及び續いて人が其自らの行爲によりて墮落せし事の原始的大事實に根底を持つて居るのである。そして今日に於て凡て之等の基本的敎理を歷史的敎會によつて敎へられたる通り信ずる近代基督者と、俗人の大多數及び所謂基督者にして之等の敎理を排除し進化論を信ずる人々との間の區分線はいよ〳〵明瞭となつて來た。後者は斯て、たとへ亞米利加或は英國に住んで居つても實質では異敎徒として分類せらるべきものである。

三

かゝる本質的に異敎的なる敎理に基敎を調和せしめんとの目的を以て送り出さるゝ書物や論說の洪水の中にあつて、本著者は頃日、フエーバー氏の『造物者と被造物』("The Creator and the Creature" by F, W, Faber.)なる一古書を手にして愉快を覺えた。其は一八五六年の著で、ダルウヰン說がまだ世に飛出さなかつた前のものであるが、彼の主要論點は健全なる哲學と初代基督敎々說と十分一致せるものである。

其章の一に『被造物たるは如何なる意味か』といふのがあり、亦他の章に『造物主を有するとは如何なる意味か』といふのがある。被造物と造物主との間に存する相互的關係の中に一切の道德的義務に對する根本的且つ唯一の理由が存するといふ事を廣汎なる事實より論じ之を微細に說明して居るのである。神が我等を創造なし給ふた、彼は我等の父であり給ふ故に我等は神を愛し之に服從すべきである。亦我等の父が我等の

隣人を造り給ふたが故に我等はわれらの同胞を愛すべきである。されど進化論のために惡の問題及び神愛の敎理全體が非常なる變化を被り、それがやがて汎神論に近き神の遍在說に導くを見る時我等は斯る敎說は基督敎に對する狂言の如きものであつて、佛敎或は他の異敎哲學の如くキリストの福音よりは遙か遠きものである事を知るのである。

畧言すれば近代の進化論的哲學及び其より發生せし所謂『新神學』或は『自由神學(リベラル)』なるものは、佛敎、印度敎、バルシー敎其他が發生せしと甚だ類似の方法で勃興せんとせる僞宗敎の一大組織の胚胎的階段である。希臘及び羅馬、埃及及び巴比倫の諸宗敎も近代印度及び支那の宗敎と同じく、之等が唯形式と儀式と偶像崇拜とのみで出來て居つたものと考へるのは間違である。古代及び近代の斯る宗敎は其の無智にして廢頽せる迷信者にとりては或は其に過ぎないかも知れぬ。されど其の最初に於て、亦もつと有識なる信者にとりて其等はもつと有意義なるものであつた。言ひ換ふれば其等

はすべて自然現象と物の起源と人間と宇宙と、及び宇宙の頭に在る力とに對する關係を説明するための哲學系統である。禮拜の形式や儀式などは人が禮拜する動物である故に自然とあとから出來したのである。斯て人間の造りし宗教の各系統は、其最も手近なる、より古代の、より純粹なる信仰形式の墮落せる紀念物を採り、之を自己の世界創成説と哲學説に適合せしめ、亦同化せしめ、斯て遂に我等が知るが如き特殊の組織に成長せしめたのである。

過去四分の一世紀前後の間我等近代人はも一つ他の宗教が製作せられんとするを目擊したのである、即ちかりに『有神的進化論』"Theistic Evolution"と稱する所の異教的宗教の大組織の胚胎的發達である。既に擧げし宗教的哲學の組織の如く、之も人間の起源と彼の宇宙に對する關係を論ずるを以て本旨とせるものである。そして其本質に於て之は埃及、希臘、或は印度に發生したものと比較して、少しも劣らざる異教的邪教的なるものである。

一九一七年八月の『アトランチックモンスリー』("Atlantic Monthly")誌の論文にありし新邪教の信條は次の如し。

『余は喜樂、發溂たる生命、自己發現を信ず。余は世と肉とを信ず。余は自然人、彼の本能の健康、彼の機能の純潔、及び彼の神的可能性を信ず。余は人心の健全、人生の善良及び凡ての經驗の美を信ず』

多分此論文の著者はロンドンの有名なる一公人によつて與へられたる罪の定義即ち『罪とはたゞ神への探求である』に同意するであらう。そして彼は亦ボルシエヴイキ治下の露西亞人の經驗に『美』を見出し、亦オスカー、ワイルド(Oscar Wilde)が爲にリーデイグ獄に投せられしが如き筆にすべからざる經驗の中に多分の『美』を見出す事であらう。後者は丁度斯る教説を說き、自ら其を生活したのであつた。

四

罪のある理由及び其に對する救治策なる二つの最も基本的なる點につき此の宗教或は哲學が教ふる所の主要點を前章より摘載すれば下の如くである。

一、進化論は罪に對し亦此世界の惡に對して何等の説明をも有たない、たゞ之を神が世界を進化の途上に出發せしめた時神自らも避け得なかつた所の物の性質の一部分となすのである。

再びラコント（Le Conte）の言を引用すれば『我等が惡と稱ふものは人間にのみ限られたる唯一の現象ではない、』そして創造者に反逆する所の有識的存在者としての人間の自由意志とは少しも關係せるものでない。其とは反對に『惡は一切自然界に遍通せる大事實て、其の組織の一部分であらねばならぬ。』人間は下等動物より永い間の生存競爭を通して向上し來つたものであつて、なほも已が身に岩窟や沼澤の紀念物として動物的利我心や情慾の多分の遺傳を携へて居るのである。されば之等の種々な途にて罪を犯す事は、單に少しく原始人の狀態に後戾をすること、即ち原人により似た

るものとなる事に過ぎない。ジョン、フキスク（John Fiske）の言へる如く『神學は原罪のことをやかましく言ふ。此の原罪とは即ち各人が携へて居る動物的遺傳に外ならないのである』と。

我等は罪を單に遺傳せし動物性となす說が如何に不滿足なものであるかを示すため玆に暫らく立止つてもよいのである、が併し其を省畧するとしても甚だ明白なるは進化論は斯て神をして罪の造主、隨つて罪の自然の結果である世界苦の造主となすものであるとの事である。若し我等汎神論を避忌して、有神論者たるを主張せんとするか、されども以上の說を以てしては神は或は遭遇の無力なる犧牲であるか或は惡の自意的造主たることゝなるのである。根本的惡はラコントがいふ如く一切自然に遍通し、其組織の一部分となつて居るので、之は神が世界を其進化の途に出發せしめし時に敢て宇宙の中に裝載せしものであるとするか、或は亦神は我等がこれまで考へし如く全能で又全智でないのであるか孰れかである。此の恐ろしき兩頭論法（ディレンマ）の一角か或は他の角

かどちらかを避くる事が出來ない。『有神的』進化論に據れば、罪と苦痛は或は神の自意的目的の結果であるか、或は物質固有の性質であつて神の如何ともなし給はぬものであるか何れかである。物質は斯して神とは獨立の存在を有し、神の支配外なる特質を有するものとなる。確かに此の說に由れば人の罪人たるは彼自らの過失でなく、寧ろ不幸事であつて、若し宇宙に誰か現在の罪と世界の惡に對し責任を負ふべき者がありとせば、其は神自らでなければならぬとなすのである。

吾人はかゝる說を邪敎的敎理と稱ふる事が義しくないであらうか？次に罪と苦痛に對する其の救治策は如何。

二、前章にて述し如く進化論には個人の場合にも亦世界一般の場合にも罪と苦痛とに對する救治策は皆無である。基督敎は上より來る生命が靈魂に入りて、罪人を新生せしめ之を神の子となし、一切の遺傳的及び後天的罪の傾向に打勝つ能力を授けるものである。進化論はたゞ發達と修養の力を高慢げに語り得るのみである。基督敎は現

在世界秩序の終末、『かの福なる望』、留守であつた主の個人的再臨、それと同時に凡て我等の愛する者の甦と罪と惡の最後の完き根絶を目當として進むのである。進化論はたゞ來らんとする世界に於て人類に持來らせらるゝ未來の幸福を漠然と約束するのみ、そして世界はある遙か遠き未來に於て人間が一層住み良き、罪を犯し易き、亦死によき場所となるであらうといふのである。之は勿論、個人と人類全體の一切の希望を嘲笑するものである。

再びフキスク（Fiske）の言を藉りていへば『進化の過程は眞の救に向つての前進である』かゝる人類進歩の思想は、若し我等がその言ふ如く人類が今より向上せし未來に於てその幸福に與り得るものとせば或は多少我等を慰撫するに足りるかも知れないが、併し現在こゝで內外の惡と惡戰苦鬪して打碎かれ、打敗られて居る者に對して如何なる慰安を與へ得べきか。亦此のキリスト敎の哲學が性格と精神の改造に對し、即ち蕩兒を純潔にし、高慢、頑强なるを謙遜柔和ならしめ、殘忍、利己的なるを親切無

私なるものごなすに如何なる力を有するや？

之等『進歩せる』學說の熱心なる辯護者の一人はいふた、未來、未來ご、未來を眺めて居るは間違である。今日何ものよりも優りて必要なるは人類が贖罪とか仲保者を要するといふ觀念を捨てる事、そして我等自身が神の一部分であるを諒解する事であると。

少時前にインデペンデント（the "Independent."）誌の主筆がキリストの犧牲的死に關する舊式の敎理を說いた一新著を評論した。彼はコッピドク其を批評して著者は時代後れの說を辯護せるものであつて、今やキリストの死の贖罪的說明につき何等開く所なき人々の時代となりつゝありといふた。此の博學なる記者は現時アメリカの敎會の多數青年達はキリストの死に給ふたのは彼等が死を見ざる爲であるなどと聞かされると魂消るであらうとまでいふた。

若し斯の如き事が事實でありとせば、かゝる青年を我等がヒーズン（異敎徒）——

之は誹謗の意味でなく普通の敍述の意味で――さ稱しても決して過言であるまい。疑もなく彼等は幸福の前掛の中に生れて來たかも知れぬ。そしてエール（Yale）やハーヷアード（Harvard）で教育せられたかも知れぬ、亦ニウイングランド（New England）やヷアジニア（Virginia）州の淸教徒（ピューリタン）の家庭より出來り、其姿態や修養に於ては二十世紀のチエスターフキールド（Chesterfield）であるかも知れぬ。併し進化論や高等批評や新神學の空氣の中に青年時代の訓育を受け、天地の創造主を知らず、亦之に崇敬を捧げることを抗む者、キリストの贖罪的死につきて聞く所なかつた者、我等の死なざる爲めキリストが我等に代りて死に給ひし事を聞かされたならば魂消るが如き徒輩は彼等がアメリカに居らうが或は支那に居らうが確かに舊式の言でヒーズンさよばるべきものである。

　されど感謝すべき事に此の近代的背教に其膝を屈せざるものは七千人の幾倍であるかを知らない。そして彼等はかゝる僞教理が今の如く一般に蔓延すればする程一層其

の忠信を勵まされるのである、そはヱホバが昔の時の如く今や自ら起ちて其御名の榮を發輝なし給ふ時近づけるを知る故である。彼等の聖書に於ける信仰は彼等に、神がさきに改革者の時代に聖書の權威を發輝なし給ふた如く、其の書かれたる言と自然の書との間には完全なる調和の存する事を世人の前に證明なさるべき時近づける事を確證するのである。かの時には多年の背教が傳說と教會の權威なるものを聖書の上に置いたのであつた。されど聖書が人類最高の指針としての正當なる位地が辯護せられ且つ回復せられたのであつた。されど今日、宗教改革の事業は大部分打消され、人々は凡て之を味讀服從する者のため絕對的祝福の源となつた所の聖書を單に歷史的興味の位地に貶さんとして居るのである。そして神のも一つの書物である自然もやはり此の誤解の中に含められて、兩書とも其眞教訓が誤傳せられ、人々は聖書が自然と一致せざるものといふて之を棄てんとして居るのである。

確に今や新しき宗教改革、さきのものゝリヴイヴルが必然來るのである。他の幾多

の改革は聖書のこゝかしこを基礎として成されたのである。今次のものは聖書の最初の部分に根底を置くもので、同時に自然界の其時代の默示にも關係せるものである。されば論理的要求として神が現代人の前に我等の世界の太古歷史の之等二記錄を證明せらるべきは當然である。彼の二書は調和せるものなる事、されば世人はもはや辯解の餘なき事が證明せられねばならぬ。そして教會が創造主の之等二つの書に存する一貫せる神的調和に關する眞の觀念を懷かしめらるゝに至る時、こゝに古來傳統の聖書（バイブル）基督教（クリスチヤニチー）の復活を見、其結果第十六世紀の宗教改革後未だ嘗て見ざりし如き信仰復興と人間改造の力とが出現すべきである。

第九章　創造と其紀念

"In six days Jehovah made heaven and earth, the sea, and all that in them is, and rested the seventh day: wherefore Jehovah blessed the Sabbath day and hallowed it."

Ex. 20:11, A. R. V.

『其はヱホバ六日の中に天と地と海と其等の中の一切の物を作りて第七日に息みたればなり、是をもてヱホバ安息日を祝ひて聖日としたまふ。』出二十。十一。

一

天地創造と人類太古の歴史に關する舊說は今や全く廢れて、もはや智識階級の人々で之等の時代後れの說を懷く者はないといふ考が或方面では可なり盛に行はれて居るのである。されど他の方面に於て、之等の舊觀念は決して死滅せるものに非ず、否、

却つて其反對に、科學と近代的問題に關して公正なる理解を有たんと勉めて居る人々の間にも、(たとへ其人々は自らを智識階級に屬する者だとは自稱しないかも知れぬが)其が可なり有力なる生命と勢力とを有して居る事を知らねばならぬ。

今迄講述し來つた所より自づと歸納せらるゝ事は、之等の聖書基督敎、新宗敎改革者にとりては人類歴史の太古に現はるゝ一切の事は聖書の最初の數頁に記錄せられたる事と文字通り正確に符合するものたる事が證明せられねばならぬといふ事である。そして本書の如き著述に誰彼が問題とする一切の論點を詳細に亘つて論する事は到底不可能であれど、しかも人類歴史の最初に記錄せられたる大事件の幾つかを考究するはあながちお門違でもないのである。

二

先づ第一に文明の起源の問題を考へやう。現代は埃及、巴比倫、クレテ島、其他に

於ける發見のため驚嘆せしめられて居る有樣である。いふまでもない事であるが之等の發見は聖書の記録と全然一致せるものであつて、之等の初代は比較的高き文明の時代であつた事を示して居るのである。進化論者の一の堅城とも依賴む所は時間である藉すに相當の準備の時間を以てせば彼は如何なる程度の文明をも築き上げるのである。されど斯の如き方法は問題の要點を避けんとするものであるか或は其解決を延さんとするものである、其理由は大監督ツトレーによりて永き前に指摘せられた如く文明は恒に遺傳である、少くとも其初代の階段に於て其は決して自發的のものでないのである。他の言でいへば、人類學者や考古學者等の或る近代派の者が熱心に宣傳せる所の、原始的蕃人が文明の狀態に向上せる點に關し我等は想像を逞ふする事が出來るが然し、野蕃人にして自分で、或外部的根源より變化の實質を受けずして其狀態より脫して耕作的生活(或は他の如何なる程度の文明狀態にも)に發達せし客觀的實例の一をも我等は有たないのである。蕃人が自らやゝに發達して文明の域に達したといふ此

說は夢想的（ロマンス）時代の快き夢に過ぎずして客觀的歷史事實の一分子を以てすらも實證し得ざる說である。文明は恒に遺傳であつて、未だ嘗て如何なる時代に於ても如何なる人種によつても自發せしものではない。凡て之等の點は、人間が野蕃人として地上に其生存の出發をせしものでなく、『たゞ人は天使よりは少しく劣つて』造られたものであるとの聖書の記事を說き明かすものである。(附錄Cを見よ) 贅澤と自制を失ひし結果多の國民は野蕃と半野蕃に墮落したのである。されど文明に必ず先だつ所の道德的發達は如何なる時代にも如何なる人によつてゞも自發的に發達せられなかつた。生物學に於て生命は其前に在りし生命よりのみ來り得る如く、文明と道德的發達は已に前に之等を所有せる人種よりのみ來るのである。生命に自發的起源がない如く、文明にも自發的發生の例がないのである。

三

バベルに於ける言語の複雜なる發生につける聖書の記錄を確めるための一事實は、五十以上の言語は其中の只二つの間にも何等の聯絡なき全然別種のものたる事である。進化論は地上の言語の一元的たるを要求するやうであるが、聖書は人類の一元的たるをいへども言語の複元的たるをいふのである。そして永き以前にウヰリアム、ドワイト、ホイトニー（William Dwight Whitney）氏は、人間の言語の一元的たる事を旣存の言語の事實より證明せんとするは『全く論外』であつて『最も甚しき望外事』であるといふた。

一つの言語が自然的過程によつて其自身の中より變化し出し、遂に其固有性を全く失ふて全然新しき異れる他の語體に變遷するといふ事は言語學の不變的法則より視る時解し能はぬ事である。單なる間間は問題の主要因子てはない。百萬年或は千萬年を以てしても一國語が自然的發達を以て全然異れる他國語に變遷せしめらるゝやうに途上に印せられし足跡を消し去る事が出來ないのである。人種によつては外部的境遇、

例へば征服とか優等民族との接觸或は併合などによつて、自國語を失ひ新語を採用したものはある。併し自發的に自己の中より全く異なれる型に變化せしが如き言語の一歷史的實例もないのであり、亦斯る事が如何にして起り得るかを諒解するに苦しむのである。しかも印—歐系言語の散在せる各自間の發生的關係を容易に示し得る事と而して之等を凡て一つの共同的祖先に歸し得る事とを思ふ時、世界の大言語系の間に存する根本的にして相反對なる相異を說明するに、漸次的にして內部的なる變化說を以てするは如何に困難であるかゞ知られるのである。凡て以上の事柄はたゞ言語の混亂についての聖書の記事を確めるのみならず、巴比倫の一著名なる銘『彼（神）は命を出して彼等の言語を不通ならしめたり』及び他の古書板即ち『かのボルシッパ Borsippa の最古の紀念碑』にある『人々は遙か昔より其を捨てゝ、秩序なく各自の言を出せり』との古記錄を實證するものである。(Maclintock and Stone's Encyclopedia, Art. "Tongues, Confusion of.") （レノルマントの『マニウアル』("Manual" Lenormant

第一卷第一章、第四項を見よ）

余が之等の二事實を提出せしは之を以て只今論究せる各々の點を證明せんとする爲ではない事を申して置きたい。文明がつねに一民族より他民族に智的遺産として傳達せられたといふ事實は其自身ではあながち人類が此地上に生活を創めた狀態が遙か動物的また野蕃的狀態よりは優等なものであつた事を證するものではなく、亦世界言語の複元的起源を指示せる故を以て、之が聖書のバベルの記事を證する證據だといふ事は出來ないのである。されど之等の事實は其等の記述を裏書するものであつて傍系的證據として十分なるものである。之等を擧げしわけは、永い間民衆の注意を集めた通俗的著述家によつて一般に信ぜられ來つた如く、議論は決して反對の側にばかり有利であるのではない事を示すためである。之等の事實は其自身では聖書の最初の數章の記錄の正確を證するには十分でないが、然し之等は著しく聖書の記錄と一致するのであつて、現在一般に行はれて居る發達說とは全然調和せざるものである。

四

されど我等は今や之等の事實よりもなほ遙かに確實に斷言し得る問題に近かんとして居るのである。我等は今や文明及び言語なる問題外のもので、或事物の起源に關する幾組かの事實につきて考究せんとして居るのである、之等の事實は過去の或一點に於て、即ち元始と稱ふる時に於て、文字通の創造があつた事を實證するものである。實證するといふのは其時代の人間記錄を有せざる過去に於ける出來事の眞實性に關し人間科學が提出し得る範圍に於てのことである。

之等の事實を講述する豫備として、先づ究めたき事は『創造といふ言によつて我等は何を意味するや』である。も一つは『聖書が宣言せる如き、元始に眞實の創造が必ずあつた事の證據として何が役立つか』である。時間の問題は主要なものではない、幾何時前であるか、亦創造に何れ程の時間が要したかの問題は本題に對しては重要では

ないのである。之等の二問題は問題の本旨即ち、世界と其中にある植物及び動物は我等の世界に現在行はれて居る所の過程と法則と同一なる過程によつて出現せしものか？或は其等は我等の現在世界にもはや行はれて居らない所の方法と過程によつて元始に發生せられしものか？　といふ點に對してはたゞ附隨的の問題たるに過ぎないのである。されど近代科學の之等の問題に對する答は非常に明白且斷定的であつて、化學、物理、及び生物學の基礎につき智識を有せる人にとりては之等は單なる修辭學上の問題となるが如くである。

ハックスレーは彼のいつもの明断なる理解と正直さを以ていふた。彼にとりてはサートチャーレス、ライエルはダルウキンのために先驅者となつて道ぞなへをなした。終始一貫せる一様性説は有機世界に於ても無機世界に於ても必ず進化説を假定におくものであると。

進化論の主要觀念は一様性説（ユニフオーミテー）である。即ち現在あるがまゝの世界を支持し之を永續

せしめつゝある所の法則と過程は、過去に於て作用した法則と過程其ものであつて、我等が過去の或一點を指して、こゝに創造があつた。事物の現在の秩序の元始があつたといひ得る時がないのであるさ。

反對な側に於て、此點に關する聖書の主要觀念は過去の或一點に於て神が萬物を生起せしむるため働いた、現在の秩序を永續せしむるための方法とは異れる方法で萬物の秩序を開始したといふのである。言を換へていへば、創造の實際的事業は過去に於ける或一定の時期に完成せられた、そして斯て創造の事業は今は進行して居らないといふのである。神が所謂普通の自然的過程によつて世界を造り得なかつたといふのではない、たゞ聖書には神はそうしなかつたといふのである。併し今我等の論じて居るのは事實の記錄であつて蓋然性の問題でも、我等が斯うあるべき筈であつたと考へる事でもないのである。

永年の間之等の主要問題が等閑に付せられ或は曖昧に付しておかれた。聖書を信ず

る者でさえも創造說と進化論との間にある凡ての差異を和らげんとして、創造の業もやはり今日見る自然的法則の働きとは餘り變らざるものであつたであらう などといふた。然るに何ぞ知らんや、創造と現在秩序との間に存する主要的差異を示すは、創造が過去の或時期に於ける特別の作用であるを證する事であつて、斯の如き證明は神の默示を外にしては、人間心智の悟り得る最も偉大なる眞理の一である。

此問題に對し切なる聖書の確實なる記述の幾つかを研べて見たい。希伯來書の著者はいふ『われらは信仰に由て諸の世界は神の言にて造られ如此みゆる所のものは見るべき物に由て造られざるを知る』(來十一。三) 疑もなく之は元來世界の成分である材料に關していはれた言であつて、之に由り物質の永遠性を否定せるものであるが、併し其と同時に此等の言を有のまゝとり之が一般に創造の方法を說けるものと解する事が出來るのである。之と同樣に同書に亦『地の基を奠し時より其工(創造)はみな成り』(來四。三)といはれてある。實にイエスは『わが父は今に至るまで働きたまふ、我

もまた働くなり』（約五。十七）といはれた。併し此イエスの言は創造の業が今もなほなされて居るといふのではなく、神は世界を造りて之を造り放しに自縛するやうにしておかれたのではなく、神は今も其造りたまひし世界に御心を注ぎ、之が救のため働いて居給ふとの意味である。神が今働いて居給ふ方法は世界が最初造られし時の方法とは全く異なれるものである。

しかし此問題に關して最も有力なるは安息日制度の設けられし事に關する事實である。そは此制度たるや天地創造が如何なる方法でなされたるかを紀念する目的のためにに與へられたものである、即ち之は完成せる創造の記念として、又凡ての異教的創成説と近代の一樣性説に對する抗議として與へられたものである。

凡て以上の考察より進んで、我等は今や我等の採用せんと目論める所の實證法を記述する事が出來るのである。若し我等が萬物の起源は我等の周圍の世界に今日行はれつゝある自然の過程と稱ふるものとは程度に於てのみならず種類に於ても異れる、根

本的に異れるものたる事を種々なる反對し難き科學的事實より證明することを得ば、我等は聖書の創造の記事に對する不可抗的證據を發見したものといふ事が出來るのである。

されば今、物質、勢力(エネルギー)、生命及び生命の種々なる型(タイプ)の起源に關して我等の有せる智識を點検しやう。

五

一、物質の起源――殆ど古代の哲學者等は物質の永遠性、即ち之には始なく又終なき事を信じた。此說は前章に於て示せる如く異敎的觀念であつて、基督敎の凡ての基本的敎理に對して相背反するものである。されど近代化學は其物質不滅の學說を以て時代を壓倒したる結果、多の人々は今日汎神的觀念の廣汎なる流行によつて知らるゝ如く、物質の永遠性を信じて居るのである。されど凡てこれは、新しき物質が不斷に

或は時々今もなほ生起せられつゝある事實につき彼等の科學的無智を示す十分なる證據である。されば若し我等が自らを有神論者と稱し、物質の永遠性を信ずる事を抗まんとならば、亦或は電子（エレクトロン）や原子や分子をして大なるエホバの永遠の對抗者たらしむるを抗まんとならば、我等は過去の或時期に於て、それが何時であつたとはいはぬ、我等の宇宙を構成する所の材料が、我等クリスチャンが我等の神として禮拜する者によつて生起せしめられた事を信せねばならぬのである。そして物質不滅なる科學の法則は此事實の紀念に過ぎないのであつて、亦創造と我等の近代世界に於ける通常の過程とは到底同日に論じ得べからざるものである事を示すものである。

分光器によつて我等の太陽系も空間中に散在する他天體の系統も甚しく類似の物質で出來て居る事が明かになつても、我等は別に驚くに及ばない、なぜかといふに萬物は同一なる無限の造主の作であるから。併し其等が凡て同樣なる材料で成立つて居る事は、星雲說の假說が想像するやうに、其等の材料が同時に出來たといふ證據にもな

らないし、又我等の太陽系は既存の宇宙間の一根源より造られたものであるとの證明にもならないのである。どんなに反對論を稱へても、我等の太陽系の材料は特別に今彼等が占むる所の位地のため造られたものたる事は眞理に近いのである、されど此點について我等は斷言する事が出來ない。併し唯一つ斷言し得るは、之等の材料は或時期に於て、もはや我等の周圍に作用して居らない或る方法と方式で造られたものであるといふ事である。『元始に神天地を創造りたまへり』

余は物質の創造論を終る前に、物質の同質論即ち原子或は電子は凡て本質的に同一なる最後的單位より成立つて居るとの説につき數言を費す必要を感ずるものである。斯の如き説は唯物論の精髓ではないか？　否決して然らず。反對に之こそ有神論と創造説とに一致せる議論だと考へるのである。斯てこゝにも近代科學的研究の有力なる傾向の一つ、即ち其が基督教の基本的眞理を確實にするものたる證據を見せらるゝのである。

古き原子論（物質を構成する原初の單位をいかに名づくるにしても）は内質的且つ不變的『特性』を說きしもので、之は我等をして其等の特性が物其自身に固有なるものと考へしめたのであつて、之は實際に唯物論である。近代哲學なる前章に於て見し如く、此說の近代的反動として一種の神秘的にして汎神的唯心論が生じた、しかし之も比較して前者に優らざるものである、されども唯物論（普通の科學說）は之等種々なる原子間に存する相異の理由を探究せしめて止まない、之によつて彼等の種々なる動作の說明を得んと欲したのである。併しいくら我等の研究を進めても、我等が其單位に於て固有的に相異せるものを取扱ふて居るのであると考ふる以上、我等の態度は唯物論的である。

されど若し原初的單位が凡て同一なるものであつて、物質は其等の單位の複合に過ぎないとなればどうであるか？ 然らば彼等單位はどうして互に相異して活動するのであるか？ 我等は其相異的活動を十分明白確實に說明し得ずとしても、動植物構成

の單位たる細胞の活動より殆んど完全に近き類似點を見出す事が出來るのである。

之等有機的物質の構成的單位は、他のところで述し如く、物理學的に又化學的に見て相互の複合である、勿論形體の大小は免れないのであるが。何故それらがあんなに異なれる活動をなすかは、その固有の性質の中に其理由を見出す事は出來ない。科學は已に永い間此途を探したが、何等の説明をも見出さなかつた。科學的觀察點よりいへば、原形質が何故そが動ける如く動くものであるかを説明することが出來ない。又原形質の或群が一樣の活動をなし、また其と同じ他の複合が他樣の活動をなすかは決して説明し得ざる所である。されど若し我等が他の物質觀を懐きて、物理或は化學の世界を超越し、發生學のまことしやかな説をも超越して考へる時、我等は之等の變化ある活動を不眠不休なる全智の神の働の結果として容易に説明する事が出來るのである。生活細胞の活動を説明するに之以外の説明はみな不十分である。

物質の最後的單位、（其を我等が何と稱へやうと、或は電子、微分子、又は電氣の

單位と稱へやうと）につき我等は之と甚だ類似したる觀念を懷かしめらるゝに至つて居るのである。若し各物質が同一單位の複合に過ぎないとならば、其等が同樣なる境遇下にありて同樣に行動すべき筈なるに、其をそうなさしめないのは物質以外の或る活物(ビーイング)の支配に外ならないのである。言換ふれば、物質固有の屬性の一般的觀念より見て、若し物質が根源に於て同質であるとせば、酸素、鐵、ソヂウムの如き化學的元素が如何にして全自然界を通じ、遠く距りたる星界に於てまでも、我等の知れるごとく其固性を維持する事を得るのであるか？　物質の同質論は唯物論を破壞する反對說である。之はとりもなほさず人格的神の存在を證するものであつて、神は同一單位の複合を以て成立せる各種の元素の上に『製品』といふ印を押して居給ふのであつて、永き以前にヘルシエル（Herschel）及びクラーク＝マクスウエル（Clerk-Maxwell）によつて指摘せられし如く、之は物質の永遠性と自己存在の觀念を全く驅逐し去る所の檢證刻印である。

六

二、勢力(エネルギー)の不滅。──近世の科學的發明の最大なるものと多の人によつて考へられる事は第十九世紀の中葉ゼームス、プレスコット、ジュール（James Prescott Joule）及び其他の人々によつて、如何なる化學的或は物理的、又或は生理學的變化に由つて起される結果でも、其は必ず其を生せしめる爲めに用ゐられたる勢力と同等のものであるといふ事が證明せられた事である。他の言でいへば、我等の世界に於けるエネルギーの分量は一定量のものであつて、空間に飛散せられつつあるは事實であるが、同時に不斷に太陽より補給せられて居つて、我等の世界に在て恒に其種々相に於て平均を保ち、何等の損失なしに一より他に變化し得るものである。一八九六年輻射能的(ラヂオアクチーヴ)物質の發見せらるるや、或方面ではエネルギー不滅の法則が之等物質の驚くべき運動によつて覆されはしないかとの懸念が懷かれたのであつた。併しなほも進んで實驗を重ね

し結果、其懸念は全く取り去られた。之は豫期せらるべきであつた、何となればエネルギーは我等が自然的と稱ふ如何なる方法に由つても造られ能はぬといふ此偉大なる法則は宇宙の構成に於ては引力の法則よりも一層確固不拔のものである。

同等の仕事を共に加へずして仕事が不斷に流出づるが如き機械を發明せんとの徒勞の努力に己が生涯を費した人々は何時の時代にも絶えなかつた。併し合衆國特許局では此の如き不斷の運動なる觀念を土臺としたる發明品に對する特許申請には飽き飽きして斯の如き理論を明白に含有する特許申請に對しては決して許可を與へぬことに永い以前に定めたのである、そして多分他國の政府當局も同樣な態度に出でゝ居る事であらう。其理由如何?――外ではない、エネルギーなるものは今如何なる巧妙なる手段に由るも決して創造し出されるものでない事を彼等は明かに知つて居るからである。そして彼等はエネルギーの製造が可能の如く見ゆる如何なる計畫にも參加する事を拒むのである。

併し凡て此事は永き前になされたる宣言『世の創より御業は既に成れるなり』を褒﨟するものにあらずして何ぞ。我等の不斷に使用せるエネルギーは太陽より我等に來るやうである、然し記憶せねばならぬは事は太陽と太陽系の全系類は、此地球をも含めて、すべて同時に造られたのであつて、すべては一の不可分的全體の部分として互に相關聯せるものである。されば我等の太陽系の創造時に當つて存在を始められしエネルギーの總量は現時に於て附加せられつゝありと誰も言ふ事は出來ないのである。兎も角、近世科學の此問題に關する判斷は、我等の世界のため用ゐられ得るエネルギーの總資本は一定量のものであつて、其量と之が人のために用ゐらるべき條件とは決定せられてある事、即ち『世の創より成れる』ものたる事である。此に關係して見出す一の驚歎すべき事實は、太陽熱の物理學的資源に關する種々なる想像説があるにもかゝはらず、太陽より不斷に我等に流出でて居るエネルギーが如何にして補給せられて居るか或は維持せられて居るかに對する滿足な説明は未だないといふ事である。

七

三、生命の起源――數十年前、生命の自然的發生論がなほ喧しかつた時、ハックスレーは其反對論なる生命は唯生命より來るとの說の始終優勢なる事を認めると共に、宣言していふに、若し我等が地質學的時代の深淵の先を眺めることが出來たならば、生命が『大なる單純』なる形式で自然的に發生するのを見得たであらうと。併し彼は特に注意して彼の聽衆(及び其讀者)を警戒して、彼の言ふ所は只彼の『哲學的信仰の一の働』に過ぎないのであつて、決して現存の證據に依つて其存在を證明し得るものと考へてはならないといふた。そして生命が我等の地球上に永遠に存在したと信ずる者は誰もないのであるから、過去に於ける生命の出現は哲學的にしろ或は宗教的にしろ、之は信仰の問題たるべきもので、自然的經過と稱することと能はざるものである。

我等の知れる生命は或る先きに存在せし生命よりのみ來るとのハーヴェイ(Harve-

と）の格言程に、廣汎なる範圍の觀察の上に土臺を置ける生物學的事實、亦これくらひ容赦なき檢察を受けし事實はないのである。原形質の一片たりとも既存の原形質よりでなくして、他の方法で地上に出現したといふ直接なる觀察し得る證據は未だ一もないのである。しかも此證據を提供せんとして近代科學者中最も熟練せる人々の無數の實驗室裝置と學問とは傾注せられたのであつた。

古代希臘及び羅馬の賢人達は我等が今知れる如くに生命の不可創造性の大原理につきて知る所なかつた。當時の自然科學的智識の總體を一身に具備せしが如きアリストートル（Aristotle）は明かに敎へていふに、蚤類や、蚯蚓類の如き、又或は鼠類や蛙類の如き下等動物は濕地より自然に發生したのであると。彼はいふ『凡て乾燥せる物體で濕つて來たもの、及び濕つたる物體で乾燥して來たものは動物生命を生起せしむ』ヴアジル（Vergil）によれば、蜂は若年なる牡牛の腐敗せる內臟より生れるのである。斯の如きものが古希臘及び羅馬人の敎ふる所であつた、のみならず宗敎革命前の科學

者ですら斯る言説をなしたのである。併し彼等の或者は動植物に關して少からざる智識を集めたものであつた。

ルイ第十四世 (Louis XIV)の華麗なる時代に於ても世界は餘り其以上に進んだものでなかつた。其時代の有名なる醫師であつたヴァン、ヘルモント (Van Helmont) は書いた『沼澤の底より來る臭氣が蛙や、蛞蝓(なめくじ)や、水蛭や、草や其他のものを生ずる』鼠の一壺を生ぜしむるための彼の處方書は少しの小麥を入れた壺の口に汚れたシャツをつめて置くことである。二十一日程經てば汚れたシャツより生ずる醗酵が、小麥より出づる臭氣と調合して、小麥を變へて鼠と化するのである、しかもドクトルは自ら其變化するのを目撃したと嚴かに宣言したのである。彼はいふ『鼠は大きくなつて生れる。牡牝ともにある。其種(スペシース)を生ぜしむるには只二つを番へしめればよい』と。――『ルイ、パスツール 其生涯と事業 "Louis Pasteur: His Life and Labors"』八九頁一八九六年版。

かの有名なる『雁と鵞』との譚は　此の時代の科學的智識の狀態を示すに　十分である。倫敦ローヤル、ソサイチーの最初の卷の一に彼等の有せし自然科學の智識を示す譚が載つて居る。ある海岸に生長せる一の樹の蕾より雁が生れる。海に落ちた蕾は鵞となるといふてある。

しかしフランセスコ、レディ（Francesco Redi）のなせし實驗を基礎としたる　もつと正確なる實驗が之等の妄誕を沈默せし時に當り、顯微鏡的細菌の發見は再び戰爭を捲起した。こゝに生命はたゞ生命よりとの法則に制せられざる如く見ゆる生命形式の新しき世界がある、こゝに無生命が生物に進化する最初の階段を暗示するが如き自然發生の無限の淵源があるやうに思はれたのである。聖書の創造說の敵である此の僞說を科學世界より驅逐するためにチンダル、（Tyndall）デリングル、Dölinger）或は　バスツール（Pasteur）の偉大なる著作につき喋々する必要を認めない。生命はたゞ生命よりとの眞理の上に病菌の取扱と其豫防及び近世外科學の進步と勝利が基して居るの

である。此の大法則の實際的眞理を信ずるが故に我等は防腐劑や殺菌消毒や蝿除などを用ふるのである。

我等に對して此敎訓は曖昧なものでもなければ又決して輕い價値のものでもない。地球上に於ける生命の發生は、自然界の現在の秩序に於て科學が知れる所の如何なる方法或は過程よりは全く異れる方法と過程とによつて生ぜしめられたるものたる事は明かである。事物の創始の前に當りて、そこに最も驚くべき出來事、我等の近代科學的智識にとりて全く超自然的出來事——即ち有機的生命の創始があつた。そして之は聖書のいふ所其まゝの實際の創造でなくして何ぞ？ 此結論を避くることは出來ない。そして又ハックスレーがいふが如く、地球が不思議なる獨特の經驗（其は成人が再び其幼時を呼び返し得ざるが如く、再び通過すること能はざる經驗である）を通つて居つた此の重大なる時機に於て、生物が無生物より生ぜしめられる事がたゞ原形質の一小粒のみに限られたと、科學或は哲學上或は常識上どうして想像する事が出來や

うか。否寧ろ聖書の教ふる如く其事が地球上に亘つて同時に廣く起つたと想像する方がどれ丈容易であるか知れない。

創造主が生命を創造したと認め乍ら、此創造を地上のこゝかしこの僅少なる數の原形質にのみ限つたといふことは甚だ非論理的で且矛盾せる論である。生命を無生物より創造する能力（及び其願望）は、聖書の第一章が宣言せる如く、草木、鳥獸、人間などの成長せる見本を持てる有機的生命の世界を創始せんとの、造物主の側に於ける能力（及び其願望）をあらはせるものである。生命の眞の創造を信じねばならぬといふ事實は、聖書に記されたる創造に關せる他の事をも信ぜしむるに至るのである。

八

四、種（スピシース）の起源。――我等は前章に於て此問題につき已に論ずる所があつたので、こゝでは餘り多を言ふを要しない、殊に我等の自由にし得る紙數では此の多角形なる

問題の現在の事情を只總括的に列べる外は望めないのである。此問題に關しては前世紀の後半に於て幾つかの書庫を充す程の著書がなされたのであつた。然し概括論に於ても、我等の知れる事實は文字通りの創造說に對する有力なる確證となることを示すに十分である。

前世紀の最後の二十年に於てヴァイスマン、(Weisman)及び他の新ダルウキン派(Neo-Darwinians)の人々は後天的性質は決して子孫に遺傳するものでないと說き始めた、同時にスペンサー(Spencer)及び他の新ラマーク派(Neo-Lamarckians)の人々は自然陶汰のみにては有機體の中に如何なる變化をも生ぜしむるに全く不適當であると論じはじめたのである。之等の二否定說は今や殆んど普遍的に生物學者の間に受入れられて居るのである。併し如何に其變化を說明するにしても、種(スピシース)はやはり變つて居るのである。そしてメンデル法(Mendelism)が發見せられ、其變異法則の數學的正確さと不易性とが實證せらるるに至つて、明白となつたのは此の變異の經過は別々

に遺傳せらるゝ單位的性質（ユニツトキヤラクター）の分解と再結合の方法に過ぎないといふ事で、或性質は優越となり、或ものは退嬰的となり、或ものは全く除外せられるのである、然し先祖の中に現存せるか或は潜在せるものゝ外何ものも新しく附加せられないことである。

『凡ての物は其儘放擲して置けば退化する』とサー、ウキリアム、ドオソン（Sir William Dawson）の言ひしは至言である。そしてベートソン（Bateson）は今やなほ一歩進んで、進化は性質の新附加或は新獲得によるよりは寧ろ其損失に由つて行はるべきであるといふ。自然陶汰は單に此固有の退化傾向を延期せしめ、其環境に適應するより高等なる狀態に保持するために役立つのみである。然し明白なる事は其が決して何も新しき生物を造り出すのではない、亦人爲的或は自然的の撰擇產生の方法に由つて實際新種の生物が近代に造り出されたといふ直接なる化學的證據はないといふ事である。却つて、メンデリズムの理論より證明し得るのは、單位的性質を新しく組合せても全然新種を生ぜしむる事は出來ない、たゞ祖先に現存し或は潜在せし所の如き種

を生ずるのであつた、そして再び相關聯せる單位的性質を組合せて原形に復せしむる事が出來るのである。

終りに、新しいと考へられる如何なる種類或は形體或は『スピシース』に對する科學的試驗としては（一）其祖先が有たなかつた或性質が附加せられた事、（二）そして此性質は其自身を維持し又變らずして殘存し、雜種になつてもメンデル法によつて單位的性質として分離して仕舞はない事、を證明すべきである。併し近代生物學的智識を有せる者はみな知れる如く、デヴリース（De Vries）及び他の人々の擧げて居る僅少であるが大そうに評判しておる所の『新種（スピシース）』の一つだに未だ斯の如き嚴密なる試驗を通過して居らないのである。メンデルの試驗は之等の『新種』と想像せられてあるものが新種ではなくて、同種の中の單なる變異に過ぎない事をあらはすのである。

確にメンデル法は事物の起源に關する決定的眞理を探究する人類の渉々しからざる道程に一の里程表を立つるものである。といふ理由は、我等の新らしき智識の光に於て

或は自然的或は人爲的方法に由り動植物の眞の新種が、科學的觀察の下に生せしめられし事あるか、と尋ねるならば、科學はいやでも斷乎として『否』と答へねばならぬのである。適當なる實例を見出さんとて生物の世界は隅から隅まで探索せられた、併し實例は出て來ない、たゞ實例だと想像せられた言ふに足らない少數のものは權威なきもので、嚴密なる檢査に堪えないものであつた。

之等の事實より來る只一つの道理に叶ふ結論は、植物も動物も生物は今なほ元始に與へられたる神の命令、即ち各其類に從ひて繁殖せよ、との命に從ふて動いて居るのであるといふ事である。趨異は今も行はれ、且今迄も行はれて來た、そして其趨異の甚しきものを分類學的別種に編入した程である。併し近世生物學の判斷は、之等の趨異は絶對的法則に服して居り、且又之等の趨異の起り得る範圍の制限も自然界の他の法則と等しく確定せる法則に服せるものであるとの事である。

加之、新しき種が今自然的方法によつて生じて居らぬといふ事實は、前章に擧げ

た地質學の事實の光を以て視れば、恰も數學のQ、E、D、（Which was to be demonstrated. 既に證明せられし問題）の如く證明せられるのである。前章地質學を論せし所に於て明かにせし事は、特別の順序で生物の連續的形體があるとの說は客觀的事實に於て何等の支柱を持たないものであつて、歷史的にいへば此說は一の未熟の早まりたる臆說に過ぎずして、今や多の事實によつて反駁せられて來た事は周知のことである。つまり此說はかの『熱素說』（"Caloric"）や『燃素說』（"Phlogiston"）やトレマイ（Ptolemaic Astronomy）の天文學や其他の廢棄せられし臆說と同類に屬するものである。相似的地層順（Conformable Stratigraphical Sequence）の法則は廣き範圍に行はれて居るのであつて、所謂『新』とか『舊』とかいふ化石の一集合は、他の『より新き』又は『より舊き』化石の集合と共に相似的に存在せる事が發見せられることをいふのである。それで如何なる化石の種も本質的に又必然的に古いとか新しいとかいふ事を得ないのであつて、從つて下等生物が高等生物より先に生存して居つたと

いふことを、科學的と稱ばるゝ價値ある方法で證明する事は出來ないのである。凡て之等の事實より證明し得るは、種（スピシース）が今も他の種に變遷するものだとの事がたとへ示され得るとしても、生物の進化即ち發達の系統ある順序を示す事は出來ないのである。ハックスレー（Huxly）がいふた如く、ライエル（Lyell）と彼の一様性說（Uniformitarianism）は『ダルウキンのため道を平坦ならしむるに與つて力あつた』のである、さればライエルとキユヴヱー（Cuvier）の此準備的事業の全然間違である事の明かとなつた今、ダルウキンと其弟子の繼承的事業も亦全く害はれて來たのである。

エネルギー不滅の原理の傍系として、も一つの事實が注意に値するのである。我等は之をかの大法則の生物學的側面と呼ぶことが出來る。

我等はエネルギーを創造することも亦之を滅消することも出來ない、たゞ此世界に關していへば之を失ふことがある。太陽より我等の地球に流れ來る大量のエネルギー

は無數の方法で種々なる勢力に變遷せられておる、其が少しづゝ空間に流失しておるのであるが、それが再びかの充滿せる淵源より新しく補充せられるのである。丁度其と同じやうな事が、しかも其よりはも少しく理想的に、我等が生命エネルギーと稱するものに於て行はれておるのである。細胞、有機體、全種族其ものまでもが退化と廢頽に歸せしめられる傾がある。彼等は漸々其持てるものを失ふことはあつても、新しき、より高等なる力を獲得することは出來ない。水は山を流下する事は容易であるが其自身で、自分の力によつて流れ上る事は出來ない。有機的生物のタイプに於ても同じである。

メンデル法の辯護者としてベートソンはいふた、進化(若し其が起る場合には)は獲得によつてゞはなく損失によつて行はれるのであると。されば、科學は親の持たない性質を如何にして其子孫に遺傳するかを説明しないといふたのは、たゞ單なる頓智ある一佛人の戯弄辭ではなかつた。己の持てる自然の賜物の悉くをも遺傳し得ぬのであ

る。サー、ウヰリアム、ドーソン氏のいへる如く『其自然の儘に放擲しおけばすべての物は退化する傾がある』のである。元始に我等の世界に賦與せられし生命力(ヴァイタリチー)の賜物は、放射エネルギーの如く、漸々と之を與へし神に歸つて行つた、しかし放射エネルギーとは異つて、造物主は外部より不斷に之を補充する道を付けておかれなかつた、動植物界に對する生命の不老藥(エリキシール)を用意しておかれなかつた。個々の生物が老齢となり死する如く、種族(スピーシース)も退化して死滅するのである。世界の創始に於て最も豊滿に注がれし生命力(ヴァイタリチー)の大洪水も、だん／＼退水して來たのである、有機的自然界が低いものより高いものに漸然上りつゝありとの説の如きは、永久自動機によつてエネルギーを創造せんとの昔の考の如く兒戯に類したるものであつて、同じ種類の過失である。兩者ともエネルギー不滅の大原則に矛盾するものであつて、其大原則たるや先に述し如く、我等の世界に關しては創造の業は完成せりとの聖書の記録を科學的に言ひ表したものに過ぎないのである。たゞ『罪の値』として死が個々生物の上に宣告せられ、退化がす

べての有機物の上に印せられてあるのである。

有機界を全體として斯の如く見る見方は岩石を檢査するによつて絶對的確實なるものとなるのである。我等が『近代』の化石より古いすべての化石を全體として研べて視、之を其退化せる倭小なる後繼者（或は軟體動物・爬蟲類、哺乳動物、或は植物の如何なる種族であつても）と比較する時に、退化が洪水後すべての生物の歴史を印して居る證據にいやでも應でも遭遇するのである。そして若し我等がかの世界の朝に於て、造物主が其快心の造物を眺め、之を歡びて『甚だ善（よし）』と宣ふた時の原形を見得たならば、化石そのものも退化の跡を示しておらぬと誰が保證出來やうか？ そしてたゞに種族（スピシース）が形體に於て（又疑もなく壽命に於ても）又其組織の均齊に於て退化しつゝあるのみならず、無數の種族は一つも後繼者を殘さずして全然死滅して仕舞ふたのである。

'From scarped and quarried stone

She cries; 'A thousand types are gone;
I care for nothing, all shall go'."

『直斷せられ切出されし岩石より
彼女は叫ぶ「千百のタイプは既に逝いた、
何の思煩ふ事もない、一切は亦逝くのである」と。』

有史時代に至つてさへも、景色を美化し、天の自由なる空氣を享樂せしめんがために造物主が地上に置き給ふた美しき植物や動物の種類で人間の貪慾と殘酷性のため其跡を絶ちしものすら少くない。過去の化石も近世に於ける吾人の實驗も共に、創造は已に完成せられし業であつて、今なほ引續いて行はれて居るのではない事を確證するのである。彼等滿場一致の證言は、退化と廢頽が植物と動物の凡ての生物の歴史に印せられてあり、此一般的結論を否定すべき一實例すら植物學或は動物學に於て見出され得ない、といふのである。個々の生物が老齢となり死する如く、種族も退化し遂に

死滅するものである。

九

以上擧げし四大事實より唯一の概論を得るのである。物質は我等の自然的と呼ぶ如何なる方法によつても今創造せられておらない、エネルギーは我等の世界に關していへば、今創造せられて居らない、生命は今たゞ前存の生命のみより來る、ワイズマン及びメンデルの法則より植物及び動物の純粹なる新種は他の異れる種類より今出來せぬ事が明かとなつた。

されど我等の宇宙の物質は何時であるか知らねど必ず其起源を有した筈である、我等の世界と太陽系の中に斯くも振動せるエネルギーは必ず其始を有した筈、生命も元始を有した筈、生命の種々なる型(タイプ)も始を有した筈、そして地質學の道理的にして眞質歸納的組織に從へば生命の各種は次から次へと系統的順に創造せられたとの想像を容

るゝ少しの餘地をもあたへないので、却つて其反對に、世界のかの誕生日に當つて、之等凡ての種族が、彼等の屬する世界と共に、今其權(ちから)の言を以て萬物を保持したまふ神の命令に由つて同時に生せしめられたものなる事を信ずべきすべての理由を我等にあたへるものである。之は宗教の第一にして最も基本的なる教理に關して科學の言ひ得る最後の言である。

科學は此の創造の經過に要した時間に關し、又或は其がどれ程以前に起つたかを確實に知らんと望むとも其は不可能事である。併し若し化學、物理學、生物學に於ける我等の全發見の總和が何等かの價値ありとせば、其は物質、エネルギー、生命、及び生命の種類は、現在地球上、何處にも行はれておらない所の法則と方法に由つて元始に生起せしめられたものであるとの證明である。一樣性說でなく、進化論でなく創造說を近代科學は、新しき發見に由つて覆される見込なき確定せる多の事實を以て我等に教へておるのである。其理由は物理的及び生物的科學の領域に於て發見せられし新

しき法則は、萬物の創始に行はれし經過は今日自然界の秩序が維持せられておる所の『自然的』經過とは、たゞに程度に於てのみならず、種類に於ても異なれるものたるを證する累積的證據を一層確實たらしめた故である。

これだけ論ずれば、あとは新宗教改革者にとりて容易なる事業である。其後はたゞ創世記に於けるかの最も驚嘆すべき記錄を辿ればよろしいのである、そして其記事たるや人間の想像とか硏究とかの達し得る遙か以上のものであつて、此記錄を其額面通の價値で取るとせば、近代世界に行はれておる科學的又哲學的觀念に對して注意すべき數個の問題がなほ殘されるのであつて、之等の問題に關して數言を費すべき必要を感ずるのである。

十

創世記によれば安息日は、神が世界と其中にある生命とを第七日即ち安息日と同じ

長さと同性質の文字通の六日に創造なし給ふた事實の紀念としてのみならず、神が人を聖く、たゞ「天使よりは少しく劣れる」者として造り、全世界は其造られし時に於ては完全であつて、今日の如く七大洋を以て圍まれたる全地が悲慘事の塊の如きものでなかつた事の紀念として、人類にあたへられたものであつた。人間は今墮落せるものとなつた、然し彼がエデンより携へ來つた安息日はかの永く失はれた幸福なる家庭(ホーム)の紀念物であつて、人間は今我等が見る如くには創造せられたのでないとの不斷の抗議である。そして其が人間の聖く、神の像に似せて造られし紀念であると共に、其は之等の幸福なるエデンの樂園的環境が再び我等の罪に荒されたる世界にも回復せられる時が來るとの豫言であり又約束である。

そして聖書を通じて贖罪はつねに再創造であるといはれてあるので、我等は安息日を人が神の像に似せて造られた紀念であるとすると同時に、之を人間靈魂の再生即ち彼の新生の記念と採つても間違ではないと考へるのである。安息日は聖書に實際かゝ

る意味で示されてあるか？　或は之は我等の牽强附會なる神學說の發明せし單に美しき想像的比論であるか？　エゼキエルをして答へしめよ。

『我また彼らに安息日を與へて我と彼らの間の徵となし、かれらをして吾エホバが彼らを聖別しを知しめんとせり』（結二十。十二）

併し此美しき思想はエゼキエルより幾世紀か前のものである、といふのはモーセによつてイスラエルに與へられた次の詞に由つて其が知られるのである。

『汝等かならず吾安息日を守るべし是は我と汝等の間の代々の徵にして汝等に我の汝等を聖からしむるエホバたるを知しむる爲の者なればなり』（出三十一、十三）

聖別するとは聖くする事である、それで安息日は神自ら我等を聖め給ふ事の徵として、最初我等を生せしむる爲に創造的にして且超自然の力を要したやうに、我等を更生して神の像に似たるものとなす爲に同じ創造的力が必要であるとの徵として與へられたものである。そして安息日は世界の起源に關する異教的或は進化論的凡ての學說

に對する不斷の抗議であると見做さるゝ如く、其は今や救が敎養（カルチユーア）や發達に由つて遂せられるとの考、（之は今日非常に廣く行はれて居る）つまり人間は自己の衷に自己を罪と其結果より救ふ能力を有して居るとの一切の敎說に對する抗議となつて居るのである。

斯て安息日は我等にとりて二重の意味で今日尊いのである。其はたゞに業による救（salvation by works）といふ歷史的の天主敎的說に對する警告及び抗議であるのみならず、又近代の所謂『高等』神學者達によつて說かるゝ發達或は進化による救（salvation by developement or evolution）の敎說に對しても同じく警告であり且抗議であるのである。罪と稱ふる狀態に對し、救濟を與へるには非常なる犧牲を要する事であつて、此事それ丈でも人は發達や敎育に由つては決して其中より救出されるものでない事が證明せられるのである。そして安息日は此の血を以て買はれし贖罪の紀念又徵として、神が人類に與へし最も甘美なる制度の一であるのである。

實に、古希伯來の先見者等が神の創造的能力を彼の救ひ且贖ひ給ふ愛と能力とによく結び付けて說いたのは確に事物の本質に關する神的洞察力であつたと考へらる。イザヤのかの特徵的宣言を見よ。

『ヤコブよなんぢを創造せるヱホバいま如此いひたまふ、イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言給ふ、おそるゝ勿れ我なんぢを贖へり、我なんぢの名をよべり、汝はわが有なり』(賽四十三。一)

我等は神によつて造られし者なるが故に我等は神をわれらの創造主として之を愛し之に事ふる無限にして不斷の義務を負ふものである。此の被造物が其造物主に對する固有の不可避的責任といふ事の中に、倫理と道德の最後的にして不變の基礎が置かれてあるのである。されば安息日は此關係の不斷の徵或は紀念として、凡ての道德的義務の徵或は紀念――造物主を拜する我等の義務及び、我等と同じく同じ父によつて造られし我等の隣人を愛する我等の義務の紀念となるのである。されば神は今日此の進

化論の時代に次のやうに呼びかけてゐ給ふのは最も適當なことであると我等は知る。

『神を畏れ榮を之に歸せよ蓋神の審判し給ふとき既に至ればなり、天地海及び水の源を造り給ひし者を拜せよ』(默十四。七)

いつまで神が我等をあのやうに造り給ふた事、神が我等の造主であつて我等がその被造物たる事を記憶して居る價値があるのか？　我等の存在する限りは、すべての永遠に亘りて。併し贖罪が全人類のため完成せられ、罪と其悲慘なる結果が過去の夢物語の如くなり、創造の御力が再び『萬物を新たにし、』新天地が其獨子をも被造物の幸福の爲に犧牲となすを惜まざる神の不變的愛の見得る證據として狂喜せる宇宙の前に展開せらるゝ後、いつまで贖はれし人類は此完成の贖罪を紀念すれば宜しいのであるか？　いふまでもなく贖はれし者の存在する限りは、無限に亘りて。斯て安息日は永遠に亘りて、一は元始の創造と、も一は其再造、贖罪、宇宙の此部分の更生の紀念として、即ち人類と宇宙の他の部分に對し創造に於ける彼の智慧と能力、贖に於ける

彼の愛との永久の紀念として、すべての更新せる地上の忠義なる住民によつて感謝の中に憶えられることであらう。

『エホバ宣給くわが造らんとする新しき天とあたらしき地とわが前にながくとゞまる如くなんぢの裔となんぢの名はながくとゞまらん。……安息日ごとによろづの人わが前にきたりて崇拜をなさん』。（賽六十六。二十二。二十三）

十一

最後に、以上舉げし事實の手前、安息日が現代に於てそれが有るべきやうに理解せられ又尊重せられて居ないと考へる少數の人々があるといふてもあながち贅言ではあるまい。彼等は考へるのである、少くとも聖書と文字通りの創造を信ずるすべてのクリスチヤンは安息日のうちに我等の先祖が知つたよりも、もつと以上の意味を認識すべきであると。形勢が一變したのではないが、文字通りの創造に關する之等の事實と、

今や殆んど全世界が文字通りの創造説を信じないとの事實の手前、彼等少數者にとりては殆んど立場が一變したかの如き觀がするのである。

勿論、之等大多數の人々は安息日といふても單なる週間的休息日といふ外何の意味をも認めないのである。彼等は自分等が一の兒戲的不道理なる、もうとうの昔に廢棄したと誇りがに言ふて居る創成説なるものゝ紀念を、どうして宗教的に遵守すべく期待せられやうか？ 然し若し人間の性質なるものが今も昔と餘り變らざるものとせば、近き將來に於て此點に關して抑壓し難き爭鬪が生起することを先見するのは困難ではない。此の壓倒的大多數が再び不寛容（イントレラント）となり、其教理を以て彼等が好まざる所の少數で見る陰もないやうであるが、しかも熱心なる、そして少數黨の甚だ頑固なる確信に對して干渉を試んとする場合爭鬪は必ず避ける事が出來ないであらう。しかも其干渉たるや調和と一致統一の名により、『全體の利益の爲め』といふ名目の下になされるであらう。

我等は進歩と文明とを誇る。我等は宗教上の不寛容や少數者を其問題について彈壓するが如き時代は已に過去のものとなつたと考へて居る。併し我等が丁度此と同じ樣に世界は戰爭と人種的憎惡の時代は已に過ぎたと誇つて居つたのは數ヶ月前の事ではないか、（譯者、此文は世界大戰中の執筆）事實は悲しむべきであるが、言はずにおけない。更生せざる人心は過去のそれと比べて少しも善くなつておらないのである、されば卑しめられたる少數者側に於て、眞實使徒的熱心と献身の精神が復興し來るならば、眠つて居つた不寛容の精神はすさまじい勢で喚醒され、其結果は最近の世界大戰の勃發の如く眞に驚くべきものがあるであらう。人間の心は、かの『彼を獅子に投げよ』との叫聲がローマの浴場或はフォーラム（市場）に於けるものうげなる遊民を醒まし、或は『反抗者《プロテスタント》（宗教改革者等）共をヤッツケロー』との同樣の叫喊が流行と文化の中心なるパリの街頭に響き渡つた時と少しも變つておらないのである。

暴徒の殘忍にして非理性的行動につきては誰も知れる所、一揆の中には見えざる惡

靈の力が働き彼等を敎唆して、とても個人では夢想だもせざる事を仕出かさしめるのである。そして遠隔の人民間に於ける交通の便は今や迅速なる勢を以て全人類を驅つて（最後には世界をそうするであろうが）彪大なる一揆暴民と餘り變らざる如きヒステリックの行動に出でしめんとして居るのである。されば世界の此の『集合的意識』（"Collective Consciousness."）が一朝宗敎的崇拜の目的物と祟めらるゝに至る時はどんな事が起るであらうか？

ハックスレーはコント（Conte）が暗示したやうな說、即ち人類歷史が人間禮拜に適應する抽象概念を提供するものだとの說に對しては余り信用を措かなかつた。彼はいふた、若しそんな概念があつて其を祟む程ならば寧ろ『山野の猿』の一般概念を祟む方がましだと。しかるに、有難い事に唯心的直觀哲學のお陰で、近代の進化論者等は彼等の大指導者の嫌忌せし事を通り過し、彼の生物學說の一般傾向を辿つて遂に今日では人類の『集合的意識』或は『絕對理性』なるものが、崇拜の最好適目的物と化

せられ、人類の最も安全なる指針、善惡の唯一の誤なき標準として其が神性化せられるに至つたのである。そして法律化せられたる此の『集合的意識』の意志に屈服するを拒む所の憐れむべき見る陰もない少數者は如何なる取扱を被るであらうか？

此の恐るべき世界的危期を非常なる速力で醸成しつゝある所の政治的及び社會的傾向につきては後章に論ずることゝする。

第十章　來らんとする奴隸制度

"The spirit of the times may alter, will alter. Our rulers will become corrupt, our people careless. A single zealot may commence persecution, and better men be his victims. It can never be too often repeated, that the time for fixing every essential right on a legal basis is while our rulers are honest and ourselves united. From the conclusion of this war we shall be going downhill It will not then be necessary to resort every moment to the people for support. They will be forgotten, therefore, and their rights discarded. They will forget themselves, but in the sole faculty of making money, and will never think of uniting to effect a due respect for their rights. The shackles, therefore, which shall not be knocked off at the conclusion of this war will remain on us long, will be made heavier and heavier till our rights shall revive, or expire in a convulsion."

—Thomas Jefferson, "Notes on Virginia," XVII.

『時代の精神は變るかも知れぬ、多分變るであらう。我等の支配者階級は腐敗し、人民は無頓着になるであらう。一人の熱狂者が迫害を起し、より善良なる人々が其犧牲となるやも計られない、次の事は幾度繰返しても過ぎたりといひ得ない。一切の重要なる權利が律法的基礎の上に樹立せられるのはたゞ支配者階級が正直であり且我等が一致して居る間だけであると。此戰爭の終結後我等は下り坂となるであらう。其時には民衆を毎度後盾とする必要がなくなるかも知れぬ。隨つて人民は忘れられ、彼等の權利は無視せられるに至る。人民も自己を忘れ、たゞ金儲に忙しく、彼等の權利に對し正當なる尊敬を獲得する爲に團結せんとは考へないであらう。されば此の戰爭の結末後拂落されざる枷は我等に纏ひ付き、いよ〳〵重くせられ、其結果遂に我等の權利が再び復活するか、さもなくば動亂の中に消滅するかである。』　トーマス、セッファーソン（ヴァージニヤ註十七）

一

古今に卓越せる大政治家の一人の之等の語は、個人の權利、即ち我等の先祖か非常に尊い代價を拂ふて買ひし政治的及び宗敎的自由なるものは『時代の精神』に於ける急激なる大變動によつて脅かされ得るものなるをいふたのである。そして之等の語を最初に聞いた改革者等の剛健なる子孫の精神を何人も又如何なる事情も之を再び奴隷

の軛に束縛し、或は其等が彼等の享有せる權利を縮少するを得なかつた事は明白である。されど自由は（米國に於て）人民自身の品性に於ける根本變化が『時代の精神』に變化を及ぼすに至つて再び脅かされるに至つたのである。

前章に於てかゝる變化が既に起つておる事を見た。次に我等の爲さんとする事は、之等の道德及び宗教の根本原理に關する變化した理想と變化した觀念とが、ゼッファーソン（Jefferson）、ワシントン（Washington）、ピム（Pym）、ハンプデン（Hampden）、ミルトン（Milton）、クロムウェル（Cromwell）、等が彼等の子孫たる我等の自由たらんために戰ひ、且其爲に死んだ所の社會的且政治的制度の上に如何なる感化影響を已に齎らしたかを研究することである。過去數十年に亘つて熱心に進化論を敎へ込んで來た結果として『時代の精神』は非常に變化し來り、かのゼッファーソンがいふたやうな『動亂』が速かに近づいて來ておる事が識り得らるゝのであつて、此敎說の中に含畜せられたる害惡を他の點に於て認識することの遲き讀者も、社會學と政治

學の領域に於ては此等の教說がどれだけ有害なるものなるかは認められるてあらう。

二

今日の子等は過去の勞力に對する嗣子である。世々の智的集積物は我等に傳はり、我等の利用のため表にし目錄にせられて我等の前に置かれてある。我等の宇宙に關する智識（或は其最も廣大なる概念に於て又或は其最も微細なる特異性に於て）は我等に敎へて我等が如何にして我等の手を海や空氣や空の電光そのものにさえ按いて、之を我等の命のまゝに來り且往かしめて利用し、我等の疲勞を輕くし、我等の骨折れる仕事を手傳はしめ、我等の意に隨ふて時間と空間を短縮せしめて來たのである。

然し誰もが近代文明の箔と外飾とに眩惑せられたわけではない。誰もが此の一時的にして物質的なる進步を眞の德性と品性との進步と取り違へたのではない。一九一四―一八年の大戰前には人類は已に戰爭及び人種的憎惡の如き『原始的』本能を離脫し

たものとの說が專らであつた、併し世界の他の各國が暴れ廻つて居る一大强國――其强國は文化の第一模範國と永い間考へられて居つた――を取り押へ其武裝解除を行はしめねばならぬやうになつた光景は、永い間人類進步の夢物語に喜んで耳傾けておつた多の人々の迷を醒したのである。

此時代は智的又道德的特別の發達時代でない事はずつと以前より明晣な頭腦の所有者には知られておつた。單なる智識は德性の方面に於ての能力でない。智識の播布は之と並行する德性に於ける進步によつて伴はれなければ個人にとりても亦社會にとりても餘り保存的價値あるものではない。他の言でいへば、我等が五感や記憶や理性を敎育しても、若しも我等が心と意志と良心とに觸れないならば、若し靈の秘れたる動機が潔められないならば、此の『敎育』の普及は個人をしてより一層廣き舞台で彼を支配せる動機を展開せしむるに役立つのみである。智的敎育或は『文明』又は『文化』と一般的に稱ふるものは一層の力、一層の機會を個人に與ふるに過ぎない。そし

て其實際的結果として我等の周圍に見る所のものは、民衆の側に於ける一層の滿足、一層の自己抑制でもなければ、又『階級』の側に於ける一層の非利己心でもない、否却て其反對の現象を見るのである。

しかし智的に論じても現代は古代希臘人の如き人々と同等の程度におるとの自負心を懐くべきではない。時間と空間とを短縮せしむるための或種の機械的仕掛(しかけ)に對する我等の少しばかりの智識が現代の虚榮心を過度に脹れ上らしむる手傳をした、併し斯る智識は物の眞性質に一歩も我等を近寄らしむるものでもなく、又其が我等を必ずしもより善き男子或はより善き婦人となすものではない。或は又斯る智識を有する事が現代人をして昔のアテネ人等よりは優れる且より訓練ある心靈の所有者であるとの證據にはならないのである。昔のアテネ人等は我等が爲せる如く存在の大なる永久的問題と相撲を取つたのである。(註。――ガルトン(Galton)はいふ、アテネ人の平均能力は最低に見積つても現代人よりは二階段高くあつた、即ち我等がアフリカ黒奴より

は高い標準である如く高くあつたと。フリーマン（Freeman）とマハフイ（Mahaffy）とはいふ、一般アテネ市民の平均智識は近代立法會議として最も威嚴あるものと普通に許されて居る英國衆議院のそれよりは高くあつたと。）彼等の文學は二千年の間美學と模倣との標であつた、彼等の彫刻と建築は其以來各時代のアキラメであつた、そして彼等の文明は羅馬人の世界帝國に於て其頂點に達したものといふ事が出來るが之亦我等の誇れる進步の世界よりは少くとも六倍大なる、我等の未だ越すことの出來ない法律と秩序の發達せる文化であつた。

人類が肉體的にも智的にも亦德性的にも全體として進步しつゝありといふが如きは甚だ皮層の觀察である。國民の單位は家庭（ホーム）であり個人の品性である、そして之等の點に於て『時代の精神』が殖民時代の標準或は數十年前のそれと比較して如何に墮落したことであるか？　高き文明の物質的快樂は人間の道德的脊骨を强め或は社會の道德的土臺を堅固にするため役立なかつた事は歷史が證明しておるのである。生物學に於

て後天的性質は子孫に遺傳せない事を見た。それと同樣に我等は祖先の心の修養或は藝術に於て成した進步は生理的に遺傳するものではないのである。そして我等の知る所は此後者に於て現代は甚しく低下して居る事である。人の心を讀み給ふお方は我等の德性について同じ事をいふて居給ふ。聖書は『末世に難の日きたらん』といひ、其時には『惡人と人を欺く人は益惡に進み』敬虔の貌を有てど其德を棄つる人々の品性を列擧して居るのである、そして其眞實と正確さは各國の日々の新聞紙が其悲しむべき恐ろしき證となつておるのである。

道德的腐敗の歷史的類似例は枚擧に遑ない。之程普通の現象は他にない。其等の歷史的篝火の一としてかの希伯來預言者の美しき辭を擧げるだけで十分であらう。

『汝の妹ソドムの罪は是なり彼は傲り食物に飽きその女子らとともに安泰にをり而して難める者と貧しき者を助けざりき』(結十六。四十九)

フロード(Froude)の言を以てせば『我等は進步と文化の時代に生活して居り、自

然は各方面に彼女の智識の庫を開いた。しかし自己征服に至らしむるための『開門（オープン）の呪文（セサメ）』は供へなかつた』――(バンヤン論三十四頁)

道德倫理に於ては藝術に於けると同じく、我等の模範と規矩は凡て朦々たる霧深き過去にあるのである、そして我等を其等の輝ける理想的時代より隔つる罪と悲の暗黑なる世紀は、我等の道德的判斷と決斷力を弱め、智的道德的及び肉體的腐敗の遺傳的汚辱をして一層醫え難きものとなしたやうである。」

三

斯の如く若し皮層的觀察をすれば暗黑時代以後今日に至るまで一千年間に人類は驚くべき進歩を遂げたやうである。然し二千年或は三千年以前に溯つて考える時には觀察は全く變つて來るのである。余の供しつゝあるものは決して心地よき描寫でない事は余も知つて居る、然し眞理は余にとりて人氣よりも大切であり、余は流行見たらん

よりも正しくありたいのである。そして何故近代に於て斯く外面的進歩があつたかに對して、聖書は他の問題に於けると同樣、眞の說明を供しておる。御使はダニエルに『終末の時に』衆多の者は忙しく往來し、『而して智識增すべし』と告げた。(但十二。四)此節を註して約二百年前サー、アイザック、ニウトン (Sir Isaac Newton) は其正確なる事に對する彼の信仰を發表し且之はなほも實現せらるべきであるといふた。彼はいふた『何時か一時間五十哩の速力で旅行するやうになつても余はあやしまない』と。其より半世紀後にヴォルテーヤ (Voltaire) はニウトンの此言を取出して、預言の研究はさすがの哲學者の王をも馬鹿者にして仕舞つたと論じた。然し二千年以上前に一希伯來捕虜にあたへられし此預言が世界的に應ぜられつゝある今となつて見ればどちらが馬鹿者であつたか明白である。

然り、自然界の勢力を制禦する上に顯されたる人智の驚くべき近代的進歩は人類自己の進歩の結果ではなく、之は聖書に宣言せられてある如く、特殊の目的の爲に神の

干渉があつた結果である。若し之が人類固有の進化の結果たりさせば、之はもつと漸次的に來た筈であつて、僅か過去百年間かそれ程の——人類歴史よりいへば一片時の如き——短時間に積め込まれ、しかも其が多の文明の連續的廢滅の後に來る筈がないのである。

之と同時にすべての科學的大發見は、其仕事に於て彼等を導きし神の手を認めて居る事は注意に値するのである。遊星の楕圓形的運動の大原理を默示し給ひし事につき全能者に感謝して、『我は今汝に從ふて汝の思想を思索して居る』と言ひし敬神なるケプレル（Kepler）の時より、『余は實驗室に於ける仕事に取かゝる時つねに祈るなり』といふた信仰深きパスツール（Pasteur）に至るまで、又其他我等と同時代の科學者にて其の發見が世界を喜ばしめ且祝福した所の、眞に偉大なる科學者等は、彼等の發見に於て彼等を導きし一の力を意識して居るのである。

啻に其のみならず、彼等の中の多數の場合に於て、發見は祈禱の直接の應答として

なされたのである。かの『哲學者の王』といはれし大ニウトンは彼の引力説の發見に關して恒に其事をいふて居つた。論ずるを要しない十九世紀の最大科學者たるケルヴィン卿（Lord Kelvin）の次の言に耳をとめよ。

『余が生涯中の最も價値ある發見はイエスキリストが 余の救主たる事を余が發見せし時なされたと思ふ。彼は余の生涯の事業に於ける不斷の友且補助者であつた、そして余が成せる發見で人類幸福のた寄與せし發見は悉く祈禱の應へとして余にあたへられたものであつた。』

過ぐる世紀間になされし科學的發明及び發見の此特異なる示顯の神的目的を今や悟り始め得たのである。世の終は近づいて來たのである。罪は其最後の收獲をなさんとして居り、最後の世界的大背教が生じて、人類は自己の儘に放擲せられなば何を仕出かすかを宇宙に示す時が近づいて來たのである。神は世々の暗い涙に曚つた通景（ヴイスタ）より眺めて、人間の才智が其廣く集めし自然の智識を弄してエタイの知れぬ創造譚を作り

出し、人生の指針として我等に與へられし唯一の書を一つの時代遅れの文學として塵と蛛網の棚に放り上げてしまふ事を御存じであつた。それで神は終末の前に神の忠實なる民をして特別の改革を世界に與ふべく時を定めて、此の進化論者の時代に『天と地と海と水の源泉とを造り給ひし者を拜せよ』(默十四。七)と呼びかけて居給ふのである。それで教會の長く怠つて居つた仕事を急がし、今の時に之を完成せしむるため、迅速なる旅行、急速なる交通の機關を人の手に渡し給ふたのである。

四

されど眞劍に考へる科學者、アルフレッド、ラッセル、ウオレス(Alfred Russel Wallaco)の如き宿命論者は現在の狀態が此儘發展して行けば如何なる結果となるかにつき誰にも劣らず心配して居るのである。實に歷史の梗概でも知れる者ならば、今日社會と世界との前途を望んで慄然たらざるを得ないわけである。そして來らんとせ

る世界破滅と社會革命の氷河的接近、ゼツフアーソンが遠い以前に見た所の『時代の精神』が變化するより惹起される『動亂』の前に無力なる世の政治家等は一時の彌縫策を弄して、たゞ其大洪水が自分等の時代に來ない事を庶希して居るやうな次第である。已に人種と人種との戰爭、國民と國民との戰爭はあつたのであるが、それらよりも層一層眞に世界的範圍に於て階級と階級との戰爭を見る時にはどうであらうか？

ゴルドウイン、スミス(Goldwin Smith)は嘗ていふた、近代教育制度は一般に生活の向上に對する慾望を增進せしめたが、しかも其結果は一般民衆に失望と不滿を與へるのみであつたと。眞教育ならば不滿と嫉妬を生ぜしむるが如き結果に至らないのであるが、併し過去半世紀に亘つて行はれて居つた種類の教育、即ち進歩は、それが個人にあつても、階級にあつても、又人種にあつても、適者生存の原則によつて遂せられるものであるとするが如き教育、隨つて生存競爭と他の者を犧牲に供しても自己の生存を全ふするを一般生物界と人類社會の變態狀態でなく、之を常態となすが如き

教育は、人間性個有の利己心を未だ嘗てあらざりし程に煽り立て、人生の各方面に於て人と人と、階級と階級との闘爭を激烈ならしむるものである。サー、ウイリアム、ドーソン氏（Sir William Dawson）の至言の如く、此教說は『其運命を以て不滿なる時代には有勝なる社會的不安を非常なる程度に刺戟し、……斯て現在の社會組織を根抵より覆さんと脅すのである。』――『進化論の近代的意義』十二頁

確に現代の『時代精神』をして凡て其以前のものより特異ならしむる源因及び結果は茲に今擧げたものが其最大なるものである。今迄夢想だもせられなかつた物質的快樂と今日の智的機會は、一般的平和と幸福とに貢する代りに、更生せざる人には其享有する福祉が大なれば大なる程其心の不滿と道德的墮落が大なるものであるとの原則を證明したに過ぎないのである。全世界に亘りて思慮ある人々の懼るゝ所は、永い間壓へ閉されてあつた社會革命の諸勢力の爆發が再び社會を顚覆して廢頽的無政府狀態に陷らしめるのではないかといふ事である、そして此度の慘狀はそれが全世界的であり

文明の一切の施設に及ぶ點に於て層一層怖るべき不幸事ではないかと考へられるのである。ハーバート、スペンサー（Herbert Spencer）は其死する少し前いふた『余の憂ふる所は、此逆行的運動が追々其勢力を增して議論や勸告にては喰止め得ざるに至らん事である』と。

我等の眼前に迫れる危機の重大なる事につきては萬人が之を認めて居り、少くとも駝鳥の如く其頭を進化論的樂天主義の迷想に突込んで居らぬ凡ての人の認める所である。然し其危機の特徵は色々に解釋せられ、又其救治策も種々提出せられてあるのである。そして今の立塲を如何に處理すべきか、脅迫せる害惡を如何に防ぎ或は之に對抗すべきかにつきて論じ始めると、いつでも進化論の有毒なる感化が擡頭して來るのである。例へば狂人、低能者及び多の不治的病氣の繼くべき增加に對する對抗策として唱へられたる、實に粗末なる懸賞品評會の如き優生運動の如きは元々論理的に進化論哲學に基礎を置ける世界的運動の唯一のものではないのであるが。斯の如き理論

が近代世界を全く占領する以上は、其が我等の社會的及び政治的理想と方法とを激發せしめずばおかないのは當然である。

五

現今の弊害に對する對策が二の方面で探究せられてある、一は宗教的他は律法的及び政治的方面である。

一方に於て、兩親の訓育が悲しくも怠たられ其がため基教的(クリスチャン)家庭生活が速かに破壞せられつゝあり、亦簡易に離婚が出來ることや、腐敗せる新聞雜誌、淫蕩的演戲場などによつて罪惡が挑發せられつゝあるはいふ迄もなき事であつて、其結果遂に昔のクリスチャン、ホームの如きは已に一般的には過去の夢となり、肉慾、犯罪、不法は日々增加し、自制の如き德は一般人にとりては失はれたる技術の一のとなりつゝあるのである。されば之等の事及び他の多の有害なる惡感化は今日幾百幾千の善意の先進宗

敎家等をして社會道德の矯正復活のため宗敎的或は半宗敎的法律の制定を叫ばしめるに至つたのである。此事を可能ならしめ、之等宗敎家の感化を有効ならしめるためには、敎會が政治に關與し、種々と個々別々になつて居る宗派が一致し或は提携して共同の目的に當る事が必要とせられるのである。それで亞米利加に於ける新敎各派の聯合運動（プロテスタント「新敎と普通に譯すれど反抗派の意味」の名に耻づべきもの多けれど）が促進せられ、羅馬敎會、即ち斯る仕事には永い經驗を有し『もはや再び歸り來らぬ喜悅』と想はれし政治的權力の回復を夢みし羅馬敎會の側に於ても一致と提携の氣運が著しくなつて來たのである。

他方に於て、現代の弊に對する純粹政治的及び律法的救治策は二つの相反する、互に相容れざる如く見ゆる方向に發展しつゝあるのであつて、しかも不思議なることに此二つのものは一つの同じ方向、即ち國家と國民にあつては中央集權を一層强大にする事と、遂にはすべての有力國家を聯合せしめて世界國家（World State）或は世界

聯盟 (Federation of the World) の如きものを造り出さんとする方向に進展して居るのである。我等は之等の二傾向を來らんさする世界國家に於ける保守黨と急進黨の胚種と稱する事が出來る。といふ理由は、一方に於て、今日もなほ大多數の意志は至上のものと考へられ、一般の愛好する所のものが義と不義との最終の試驗石の如く考へられて居るが、他方に於ては、或者は人民の政治即ち民衆政治(デモクラシー)は失敗である、『民衆は機會があたへられた、然し彼等は無智、邪惡で腐敗せるものたるを證したのみ』とある最近の記者と偕にいふて居るのである。

之等の保守派の人々は、近代の脅威たる『恐怖政治』("Reign of Terror")を持來らするものは無政府主義者やI、W、W、の如き人々の側における個人自由の濫用であると考へる。彼等は智識及び自由は其自體に於て何ものをも更生せしむるものでなく、それらは唯個人の手に置かれたる力の形式に過ぎないものであつて、之を以つて其個人が自己本來の動機を時に或は隱蔽し、又或は之をより廣き範圍に實行するため

に役立つものであると考へるのである。それで今多の指導的位地にある米國人の考へる所は、永年の間米國に於て過激なる社會主義者や其他道德的及び社會的煽動者等をして道德的不都合や階級的憎惡心や社會革命等の彼等の宣傳を自由に許容して居つたのは重大なる過失であつたといふことである。

過去半世紀程に亘つて多數者の道德的及び宗教的訓育は顧られなかつた、のみならず反つて凡ての德性と宗教性とを涸渇せしむるが如き教說によつて害せられたのであつて、遂に人生の指針としてたゞ便宜主義と我利との外は何も殘らぬまでになつた。斯る基礎の上にあつて、しかも九十九パーセントの人々が自分等は他の一パーセントによつて壓へられ欺かれて居るのだとの自覺に燃て居る時。如何なる社會か國民か、或は世界かが强大有力なる中央集權なくして、其崩解分裂を免れ得やうか？

塹壕內の階級即ち保守派の人々の手にある唯一の手段は言論の自由と個人自由とを强制的に取締り、斯て强力なる抑壓手段に由つて來らんとせる動亂を抑制せんとする

のである。エドモンド、バーク（Edmund Burke）のいふた如く『社會は人間意志と慾望との上に何處かで抑制力を置かなければ存在し得ぬものだ、其抑制力が內部に少ければ其だけ多く外部に必要となる』と。歷史は之を證して居るのである。何時でも同じやうな形勢に到達せし場合、卽ち人民が公義正道を愛する個人的愛によつて動される自由人として自分等を支配し能はぬに至つた時、いつでも其仕事を代つて爲さんと熱望せる者が一人或は一組待つて居つたやうに出現して來るのである。そして之等の抑制力が（或は內部的にか或は外部的にか）失敗する時、早晩無政府狀態と革命が到來するのである』。

されど多數の人々は民衆政治（デモクラシー）の失敗を未だ承認せんとはしないのであつて、各種の彌縫策を構じて此立場を切り脫けんと努力して居るのである。例へば撰擧權を婦人にも與へ、民衆がもつと直接に其意志を發表し得るやうにしてはと計つて居るのである。彼等はいふ、民衆政治（デモクラシー）の弊害に對する救治策はもつと民衆政治（デモクラシー）を持込む事である

と。しかし他の者等は幾年か前にサリスベリー卿（Lord Salisbury）がいひし如く、之等の事の中にたゞ失敗と失望の豫感を感ずるのみである、『如何なる政府たりとも其權能をいよ〳〵教育程度の低き者と文化の低き人々の手に讓らないわけに行かぬやうになるのであらう、そして世界の多の國に於て其人々が、いよ〳〵益々國事を處理するに至るであらう』

此の最後の敍述は眞實であり、『實際的』政治家がいよ〳〵政治商賈人と化し大向の喝采を博せんと努めて居る以上、斯る傾向は反對の側に於て避くべからざる反動を惹めるのは當然である。されば生れ付き保守的階級の人々、大學の經濟學又は社會學の教師等及び最も有力なる記者等の或人々の如き獨立的思索家等は今やフキヒテ（Fichte）やヘーゲル（Hegel）の如き唯心哲學者の精神を掬んで、政治は被治者の同意によらねばならぬとの舊觀念に反對なる强力なる運動を起しつゝあるのである。そして斯る指導者等の今日提唱する所は、明日は幾百萬人の注意し且實行する所となる

のである。

一方に於ては勞働組合と階級意識の急速なる發達があると同時に、他方に於ては政府が凡ての產業と商業との活動をいよ〳〵統率せんとせる傾向あるより觀て、今や個人主義(譯者註、善意の)は速かに其跡を絕ちつゝあるものといはねばならぬ、そして之は啻に米國に於てのみならず、歐州に於てもそうである。今や歐米諸國を通じて大勢は個人の權利より、國家の強大といふ點に移動しつゝあるのであつて、斯て人間の權利は共同體の進歩なる超越的觀念に征服せられんとして居るのである。そして國際主義の急速なる發達と共に、人類の統一、世界が『普遍的法律に包まれ』るといふ代々の夢が實現しそうである。英國の一記者が最近いふた『種族の心配が國家の心配に先立ちし如く、國家の心配は世界聯合の心配に先立つて居るのではあるまいか』と。世界大戰の反動はやはり同方向に於て強力なる感化を與へるものと考へられるのである。

併しながら此の世界聯合が確立せる事實となり、個人の權利が全然所謂全體の利益

に併呑せられ、『普遍的意識』("Universal Consciousness") 或は『絶對理性』("Adsolute reason") なるものが道徳に於ける至上權を探るに至る時、少くとも良心を有ししかも其良心が法律を以て發表せられたる集合的良心と異なれる場合に於て、かゝる良心の持主たる少數者は、之等大仕掛の世界的なる靈魂破碎機の中にある一小粒の如く最も憐れむべきものとなる。誰か歴史を讀みし者で、斯の如き自由を剿滅せんとする暗雲天を閉すが如き暴壓の大膽なる進出に對し反抗なくして默視し得やうか?

之等の反動的傾向は他國に於けるよりも米國に於て一層著しいかと思はれる。誰か二三十年前に於て『神聖視せられたる誤謬』と題して其一八九九年十二月號に掲げしが如き論文を北米評論("North American Review")の如き有力なる雜誌が掲載せんと夢みしぞ? 其『誤謬』と汚名を被らす所の觀念は何であるかといふに、かの人間の生來的權利を主張せし獨立宣言書(Declaration of Independence)にある歴史的文章に對してゞある、即ちアングロサクソン人の六世紀に亘る苦鬪の結果結晶せし產物に對

してである。之等の眞實神聖視せられて居る文章に關して其記者は論じて云ふに、

『萬人は如何なる意味に於ても平等に造られてゐない。……人間は進化の徐々たる過程によつて造られたのである、彼等は永い時代に亘りて地球の各所に出來したのであつて、固有の差異と不平等とを以て出現し、しかも其は其以後の發達がより差異あらしめ且より懸隔せるものとなしたが、決して固有の差別不平等は滅消せられなかつた』と。

之等の文章は南北戰爭前の奴隷制度の擁護者たるダグラス（Douglass）や其他の人々（彼等に反對してリンカーン（Lincoln）は獅子吼したのである）の辯說集より掘出して來たものでない。彼等の横柄なる議論は已に國民の撰良の血の犧牲によつて沈默せしめられたものと思はれておつた。然るに今日の資本的寡頭政治は其同じ議論を再び大膽に宣傳し出しておるのであつて、そして至る所に彼等の議論の正しき事を證せんとして一般に信用ある進化論に訴へておるのである。

又誰か二三十年前に於ては紐育獨立紙（New York "Independent"）の如き新聞が、生來の權利なる大中心的眞理を一の單なる『學說』として卻け、『其に對する反抗が速かに發達して』來た事を悅ぶと說くを夢みたであらうか？

アウトルック（Outlook"）の主筆であるライマン、アボット博士（Dr Lyman Abbott）は、永い間の熱心なる進化論者として期待せられる通り、人間は國家も侵害する事を許さない生來の權利を有するとの亞米利加共和國の建國者等の教說に反對して今や十字軍を起しつゝあるのである。少時前アボット博士は、政治は被治者の同意の上に其根抵を置くものでなくして、自己と自己の財產と自己に屬する者等を保護する各人の權利の上に其基礎を置くものであると宣べし後、博士は政治に定義を下して次の如くいふた。

『政治とは何か？――之は一人の意志を他の一人の意志を以て支配する事に外ならない。……。政治の基礎に關しての眞問題は之である。即ち如何なる時一人の人が自

己の意志を以て他人の意志を支配し、其上に權を執り、自らを他人の行爲の指揮者となし、自己の人格をして他人の人格を壓倒せしめる權利を有し得るかである。そして此問題は我等が已に到達せしさ同じ結果に我等を導くのである。——即ちいつでも他の者が彼の意志の行使によつて、其隣人の權利を侵害する時、人は彼に對して以上の事を爲す權利を有するのである」

我等はアボット博士の此の怪異なる政治定義の中に含まれたる陰險なる半分の眞理を分解し、或は斯の如き定義は嘗て地上に行はれたる最も絕對的の暴政に適應せるのみならず、亦行はれ得ると想像せられる如何なる暴政にも適する定義である事を指摘したい。此論文の一評論家は次の如くいふた。

『政治は人間の意志を制禦するのではない、人間の權利を保護するものである。其は人の意志に關するものでなく、他人の權利を侵犯する人の行爲に關しての事である。……政治は一人の意志を他人の意志で制禦するが如きものでは決してないのみな

らず、之は双方に於て意志の問題ではない、即ち意志の强制でも又意志の屈服でもない、此點について法律書の權威を考證する必要はない。アルフレッド王（King Alfred）以降のアングロ・サクソンの歷史と政治の年代記を驗べて見よ、其處にあたへられたる壓倒的答辯は意志の支配は必ず暴政の支配である、との事である。」

斯の如く急進派も保守派も兩方とも昔の立場、即ち義と不義との一定せる標準、米國の基礎となれるかの歷史的大記錄の中に示されたる標準を有せし立場を放擲したのである。兩者とも進化論より引出したる新しき觀念を以て議論を樹てんとして居るのである。兩派の眼中では、萬事が變遷狀態にあり、未來の暗黑なる迷路の間にありて吾人を導くものは、實驗と、そして階級意識、利己心、及び便利主義の如き一般に認められたる勢力より索引し得る僅少なる光の外に、何もないのである。文字通りに、如何なる社會的實驗であつても一應之を試み且つ全國的に强制して見ねばならぬやうな立場に居るのである。其理由は兩方とも濃霧の中に其途を失ひ、彼等自らの內的意

識より放出する自家製造の光を追廻して居るのである。

六

以上の引用句は殆んど手當り次第に採つたのであつて、英米の時文より幾らでも増加せられ得るのである。我等の近代世界に亘つて起つた所の急激にして其範圍の廣汎なる變化は此問題につき研究せざる人々には想像も及ばぬ程のものである。かゝる變化は、世界の起源と人類の起源に關する變化せる觀念の一般的播布に伴ふ必然的結果である。フキヒテ及びヘーゲルの一元的哲學より借用せる彼等のお得意の論法は、之は米國に於けるよりは寧ろ英國に於て一層行はれておる論法であるが、然し兩國には速かに流行を來して居るのである）國家或は社會全體を一の有機體に比し、個人を其有機體の小部分の一、或は一細胞と見做すのである。有機體全部を國家或は國民と同一視するので、此觀念を進めて遂に全人類が一大有機的統一の中に含有せらるるので

ある。茲に至りて個々の細胞は全體としての國家或は社會と比較して甚だ價値少なきものとなり、なほ其上に其凡ての權利と特權は悉皆、之を國家或は社會に隷屬するものとなすのである。斯の如きは國家社會主義者の議論であつて、彼等の説に從へば國家或は社會全體は個人の上に絶對至上權を有するものである。之はハーバート、スペンサーが彼の時代に將に起らんとせるを見、そして『來らんとする奴隸制度』と稱したものである。彼は熱心な進化論者であつたが、しかし同時に個人主義者であり得る點に於ては自家播著して居つたので、彼は個人を犧牲にして國家を高揚せんとする時代精神に強く反抗したのであつた。

國家社會主義の説はルソー(Rousseau)及び百科全書派(the Encyclopedists)の學者等によつて敎へられたる國家の神性説と殆んど同一である、——其説は恐怖政治時代に佛蘭西革命を支配した説である。其時佛國は幾世紀間未曾有の最惡なる暴政の下に苦しんだのである。(其時の暴政は群集のそれであり、且つ最初は一般の意見によ

り支持せられ且裁下せられたものであつたのであるが）

英國の一著者で國會議員たるゼ、アール、マクドナルド（G. R. Macdonald, M. P）氏は此說を說明していふた『國家の眼中には個人はそれ自身では目的でなく、「かの萬物が向つて進みつゝある遙か遠方にある神的出來事」に對する手段である。或は此思想を次の形であらはす事が出來る、國家は元來個人を權利の所有者と視るのではなく義務の遂行者として視るのである』他の所に於て此著者は、國家はたゞ『其目的を遂行するため』以外には如何なる權利をも個人に許すべきでないと宣言した。

此說に關してダブルユー、イ、ウオリング（W. E. Walling）氏は甚だ適當に次の如くいふた。『個人はその義務を記憶し、而して其權利を忘るべきであると敎へられた、――此言辭は今迄幾度も凡ての善意の專制家によつて用ゐられたものである』――『社會主義大觀』（"The Larger Aspects of Socialism"）頁二一、

社會主義者であるが、ウオリングのいふ所は正しいのである。今非常なる速度で蔓

りつゝある此種の說は人類を奴隷にし、之を壓制の鐵腕下に沈默せしむるために用ゐられたる最も危險なる敎說の一であるのである。『かの七丘の上に坐し、その美しき寶座より世界を支配せし』ローマは丁度斯の如き敎說の上に建てられたのであつた。併し次章に於て見る如く、ローマの鉄的壓制ですら、ギボン（Gibbon）のいへる如く其が全世界を壓し、『之に反抗する事は死であり、其より逃るゝ事は不可能』であつた盛時に於てすら、近代世界が遂に造り出さんとせる壓制の頂上、（即ち世界に亘れる連帶的人類が大歷史家の此言をして單なる形容となさずして、世界が文字通り、其壓制と宗敎的に且政治的に一致せざる憐れむべき個人、微小な人間細胞にとりて『安全ではあるが退屈なる牢獄』となるが如き暴壓）と比較する時にはローマのそれは恰も孱弱なる幼兒の如き觀がするのである。

國家を有機體とし個人は全體の中に全く埋沒せられ去るが如き此殘忍なる說——生物進化論の政治的產物の一である此說に對し、ゼツフアーソン（Jefferson）や、ワシ

ントン（Washington）や、リンカーン（Lincoln）は如何にいふであらうか？　彼等は烈火の如く怒つていふであらう、彼等が惡戰苦鬪したのは再び此地に巨大なるジャガーノート（Juggernaut=The Lord of the World; a title of Krishna or Vishnu, as worshipped at Puri, in Orissa.）（暴政の府と意譯す）を建てゝ人の權利と自由とを再び假想の全體と進歩てふ事のために蹂躙せしめるためではなかつたと。又其等と類似せる說即ち或人々或は階級は劣等なる位地に、劣等なる權利を以て生れたのであつて其等の人々の權利はもつと惡まれたる人々或は階級が彼等の權利と同等なるものと認めるを要しない、との說に對して、彼等は何といふであらうか？　ゼッファーソンは時代精神が變化するを十分預期して居つた、しかし彼の後一世紀も經ぬ中に斯の如き說、彼と其同僚が其爲に奮鬪せし理想信條のすべてを全然顚覆するが如き說が廣く且何等の非難なしに行はれて居るのを聞いて如何に愕く事であらうか！　最善の努力も一代では其子孫等の權利と自由とを保護するに如何に無力であるか！

七

國家社會主義の凡ての計畫に特有の如く見ゆる壓制政治の潛在的可能性は、カールマルクス(Karl Marx)派の多數者をして他の極端に走らしめたのである。即ち無政府主義のそれであつて、『組織せられたる無政府（アナーキー）』と稱せらるゝ所のサンヂカリズム（Syndicalism）を含めるものである。無政府主義（アナーキズム）の名は、如何なる政治形式も惡であつて又不必要であると教ふる政治學或は社會學の一體系に付せられたものである。之は歴史に關するカール、マルクスの經濟的解釋の一產物である、そして無政府主義者にとりては國家は大敵であり、國家社會主義は現今の資本主義下に於けるよりもより惡しき壓制を造り出すものと考へられて居るのである。彼等の抱懷せる考は、人間は本質的に善良なものである、しかし人間を惡しくなすものは何かの形に於ける恐怖——法律の恐怖、或は何か外部的勢力の恐怖である、されば何故人々は凡ての政治的律法

及び人間自身の意志以外の凡ての抑制を廢棄するために努力しないのであるかといふのである。そして露西亞及び獨逸の極端なる過激派の間に敎へられてあるが如き無政府主義は、激烈なる狂的宗敎のすべての特質を具へて居るのである。

無政府主義はピエル、ヨセフ、プルードン（Pierre Josepf Proudhon）（一八〇九―一八六五）を以て起つたものと認められておるが、彼は此名詞を其近代の革命的意味でなく、社會の自由なる發達の結果遂に到達すべく熱望せられたる一到達點を指して斯く稱したものである。彼は、人間は若し十分の機會を與へらるるならば本質的に善良なるもので、人類の道德的進歩によつて何時かは律法的政治の一切の形式が不必要となるものであると敎へたのである。彼の財產、勞働、及び資本に關する學說はマルクス及び彼と同時代の他の獨逸社會主義者の學說と本質的に相違せるものではなかつた。今日に於ても無政府主義者は社會主義の連中の極左翼と普通に考へられておるのである。

プルードンは進化論がすべての社會主義的學說の眞基礎として通俗化せられし前に生き且死んだ。併し進化論の生物學的方面が高調せられるに至り、永い間獨逸大學に於て敎へられて居つた歷史的方面が力說せられるやうになり、其結果凡ての形式の社會主義は强烈なる刺戟を被つた、そして之等の變幻極りなき形式の中にありて無政府主義は近代に至つてミカエル、バクーニン、(Mikhail Bakunin) ピーター、クロパトキン、(Peter Kropotkin) レオ、トルストイ、(Leo Tolstoy)――みな露西亞人――の如き人々によつて一の完備せる人生哲學に編上げられたのである。そして露西亞に於けるボルシエヴイキ (Bolsheviki) の『政治』(余は此言をこゝに用ふるに當り引用符を用ゐないわけに行かない) は過去二三十年間、ロシヤの智識階級(インテリゲンチヤ)の聖書と目され し之等の敎理體系の自然的結果と認められ得るのである。

過激なる革命的無政府主義者の團體は一八七二年のヘーグ會議より其紀元を有するのであつて、其後エム、バクーニン(一八一四―一八七六) は無政府主義者の恐怖黨

（Terrorist Party）を組織したのである。最近紐育に於て露西亞情報局よりとして發行せられし『露國民衆政治の誕生』なる標題の書物にバクーニンは『露國に於ける革命運動の靈的指導者』の表の第一に置かれてある、しかし此書の著者及び其出版者等はレニン（Lenine）及びトロツキー（Trotzky）及び現在露西亞の大部分を支配せるボルシエヴイズムの指導者等によつて執行せられたる特別の運動方法に對しては烈しく反對して居るのである。

次のバクーニンよりの引用句は宗教及び倫理の基本的觀念の或ものに對する彼の態度を示すに役立つであらう。

『此の憐れなる世界を奴隷の狀態に打ちのめして居つた虚僞の最初のものは……神だ。君の心から神の存在の信仰をひきむしつてしまへ。之をするまでは君は自由が如何なるものであるかを知り得ないであらう。最初の虚僞は神だ。第二の虚僞は正義の觀念だ。そして君が君の心から神の畏敬と正義に對する小供誑しの尊敬とをかなぐり

捨てたならば、君を束縛して居つた他の鎖――文明、財産、結婚、道徳、公正、などと稱せらるゝ――は細糸のやうに眞二つに切斷して仕舞ふのである。君自らの幸福を君自らの法作とせよ。君は所謂善も惡と共に、一切を破壞するやうに習慣付けねばならぬ。舊世界の一微分子でも殘つておつては、新世界は創造せられないのである。我等の滅亡に付さんとする此舊世界の一微分子をも方舟を造つて救ふやうな事をしてはならぬ。』

之に關聯して何等余の註解を加ふる必要を認めないのである、たゞボルシエヴイキ等は此注告を文字通り、忠實に實行せんと熱心に努めて居るやうに思はれるといふておくのみである。

クロパトキンは永い間何でも露西亞に關係した問題では權威と認められて居つたのである。彼は大英百科全書の露西亞の問題に關する論文の大部分の寄稿家である。彼は職業が科學者であつて、百科全書の『無政府主義』なる論文の中にいへる如く、彼

の生涯の仕事は『自然科學の近代哲學（と彼のいふのは生物進化論のこと）と無政府主義との間に存する密接なる論理的關係を示し、現在社會に現れたる諸傾向を研究して無政府主義を科學的基礎の上に置き且社會の將來の進化を指示し、又無政府主義の倫理の基本を編上げる』事であつた。各國に於ける極端なる社會主義者間の彼の名聲は偉大なものである、そして彼の教は今日の露西亞に於ける狀態を持來らす上に大感化を及ぼしたと結論し得るのである。併しこゝで一言彼のために辯じておかねばならぬことは、彼は革命的露西亞と聯合軍との間に强固なる同盟が存せねばならぬと主張し、過激派の遣方には反對したのであつた。

我等の擧げし露國革命の祖等は、なほ枚擧し得る多の者等と共に、みな丸出しの無神論者である、併しレオ、トルストイ伯に於て我等は、自らを無政府主義者とは稱ばないが、國家と財產權に關しては無政府主義者の立塲を取つた一人を見るのである。彼の後年の著作は悉く組織せられたる敎會と、國家及び凡ての內治的律法、殊に現在の

財産法に對する酷評で一杯であつた。

『彼は國家を獸的勢力に出つて支へられたる惡人の支配であるといひ、又十分組織せられたる政治よりも强盜の方が比較的遙かにより危險少ないものであるといふ』―(大英百科全書、卷一、頁九一八、題『無政府主義』)之は純然たる無政府主義の敎であつて、彼がキリストの敎訓を引用し、其後半の著作は社會問題に關してはキリストの模範を文字通り追從せんと努めて居るかの如き觀を著しく呈せしめた故を以て、トルストイの敎說と感化は一層危險性を帶びて來るのである。

トルストイの宗敎はすべてキリストの敎訓の外面を模倣せんとの人間的努力の一種である。しかも其中には之等の敎訓と不可分的なる超自然的分子を一も含有して居らず、又基督敎の本質である神、罪、代價的贖罪等の如き基本的敎理が一もは入つて居らないのである。『近代人で其同胞の心智と良心を刺戟し、其言說により、我等は手を拱いて進化の來るを待つて居るのではなく、自ら立ちて黃金時代を齎らすために奮

闘努力せねばならぬと我等を感ぜしめた者はトルストイが第一人者であつて、殆んど第二に來る者を知らない程である。』と 最近の彼の傳記記者がいふたのである。序ながら注意すべきは、社會的變革に由り普通に謂ふ所の黄金時代を促進せしめんとする人間努力はつねに必ず狂熱を伴ひ、最後には迫害を伴ふものである。しかも其迫害たるや社會の最惡階級に對してゞなく、却つて最善なるもの、最も良心的なる人々に對して行はれるのである。

過去に於てはたゞ一二回の特に紀念せらるべき機會に無政府主義の如き教説が唱かれたのであつた。パリに於ける恐怖時代の時 ヤコビン黨が 此教説に類似の事を説いた、しかし其時に於てすら丸出の無政府主義が今の如く『科學』の白痴威の裁可を後盾とせる、眞面目腐つた教説として宣傳せられたのではない。然れども恐怖時代にパリ及び全フランスを擧げて修羅の巷と化した事は、人民が一切の法律を放棄する時は、乃ち暴君中の最も殘忍なる者即ち最初の大無政府主義者たるサタンの支配に服するもの

なる事の一實物教訓として十分であらう。しかるに今此の末の時に於て、地獄より出たばかりのホヤホヤの之等の教說が全文明世界の殆んど各大都市に於て教へ說かれて居るのである。露西亞は前は他の諸國と同じく帝王神權說に由つて支配する人々の苛政の下にあつた。然し過激派（ボルシエヴイキ）の現在の支配は生物進化論の法則の權威に由つて支配すると稱する人々の政治である。つまり昔の聯句を其まゝ實行したものである。

『"That they should take who have the power,

And they should keep who can."

『力のある者は取たい放題で、

又力のある者は貯めたい放題だ』

此二種の暴政の中一を撰ぶとせば、凡ての思慮分別ある者は必ず前者を撰ぶであらう。神權に由つて支配すると主張する一人（或は一組の人）の場合に於ては、我等は少くとも其人を反省せしめ、且彼の主張と彼の政府の方針とを神の正義公道の既知の

標準と比較して示す事が出來るのである。しかし一組の人々が、自ら已に權威の地位を占領して居る故を以て自分等が支配するに『最適者』たりとして支配せんと要求する時、誰か彼等と議論し彼等を反省せしむる事が出來やうか？　若し其途ありとせばそれは彼等が遵奉せりといふ森林岩窟の法則を以て彼等に報ゆるに外ならないであらう。（譯者いふ、議論ではなく腕力で行く事）斯の如く露西亞に於て今日實行せられたるが如き無政府主義の世界的實驗のため今や途が開かれたのである。我等は國と國との戰爭が終つたと思へば、亦其あとに階級と階級との戰爭に直面せねばならぬやうな狀態である。前の戰爭は其暴れ狂ふ渦中に殆んど全世界を吸引したが戰爭の現場は比較的小區域に限られて居つた。併し階級戰は其範圍がより大となり、全世界の各都市の街路と廣場はみな其實戰場となる可能性が十分あるのである。

八

進化論を許容する自然的にして論理的なる結果はも一つ、國家が個人の上に絶對の至上權を有つに至る事である。

ハックスレーは敎へた、社會或は國家が形成せられるに由り新しき社會秩序が生起せられる、そして其新しき社會の法律と倫理は『世界的秩序』(“Cosmicorder”)——生存競爭或は必要ならば他を犠牲にして生存を許らんとする動物的爭鬪の理を指して斯く稱す——に全然敵對せるものであると。其意味は協同と利他主義の行はるゝ所の社會的秩序に於ては、其の法典は必ず從來人々が利己的個人主義に生活し來つて居つた所の法典とは全く相反するものたるべしとの意である。ハックスレーも他の箇所で人間が野蕃狀態より首尾よく向上して來るためには『彼は猿と虎と等しく共有する其等の性質に主として負ふ所があつた』といふて居るのである。

ジョン、フィスク(John Fiske)も、之等の同じ性質を奮鬪的に働かした事が原始時代に於ける人類進步の源因であると同じく正直に明言して居るのである。彼はいふ

『原始時代の最も成功せし人々、即ち彼等より文明人が出來した所の人々は機智と意志の力に於てのみならず、詐欺と殘酷性に於ても他に勝れて居つたと思はる』と。社會に於て人を支配する所の倫理的秩序は『世界的秩序(コスミツクオーダー)』とは正反對なるものである事を認むる點に於て、多數の進化論者はハツクスレーの說に從ふて來たのであるがしかし何故に此倫理的トンボガヘリがあるのか、何故個人的單位がこれまで進步して來た最も有效なる手段が逆轉したのであるかを論理的に說明するものは一人もなかつた。たゞ我等の知れる所は、社會に於て若し他人が利己心の代に利他心を實行して吳れるならば、其は我等にとりて最も氣持好きものであり、最良の市民、社會に於ける最良の單位とは他人の幸福のため無我の生涯を過す人であるとの事である。基督者は勿論此の利他人を論議するのではないが、併し彼等の生物進化論の教說より利他的社會學體系を誘導せんと試みるハツクスレー及び其他進化論者の論理を疑ふのである。過去幾十年かに亙りて獨逸國民の政策を形成するに與つて力あつたニイチエ、(Nie-

tzsche）トライチケ、（Treitschke）ベルンハルディ、（Bernhardi）及び其他の者等は彼等の生物學の前提に對しもつと論理的で且もつと一貫せる説を有して居つた。ニイチエはいふ、

『主我心（エゴイズム）は高尙なる靈魂の第一の特質である。』斯て彼は明らさまにかゝる『高尙なる人々』に其『權勢的意志を無條件』に大膽に行使すべしと敎へた。彼の著名なる『道德の系圖』に彼は人類をたゞ二種類に分類した、――主人と奴隸――そして道德に於ても『主人道德』と『奴隸道德』とがあるのである。

彼の宣言に曰く『オゝ我が兄弟等よ、こゝに余が汝等に傳ふる新しき誡命がある。强硬たれ！すべて創作的精神は强硬たるものである。そして汝等は恰も柔かな蠟の上になす如く、汝等の手の記號（マーク）と、汝等の意志とを幾千また幾千の人々の上に强壓印刻せしむるを以て最上の愉悅を感ずるやうでなければならぬ』と。

之等の忠告は個人に、主人階級に該當すると同時に、國家が他の國家に對する場合

にも該當するのである。そして生物進化論の此の教說を斯も明らさまに亦終始一貫して應用する時、國家が單に權力を有するとの理由のみによつても、其が個人を全く奴隷の狀態に置くものであるは見易き事である。そしてトライチケに隨へば、個人或は國家にとりて『一つの赦さるべからざる罪は其權力を行使するを怠る事である』と。

再びニイチエはいふ、

『恩惠、憐憫、慈悲の如き觀念は有害である、之は權力を强者より弱者に移す事を意味するものである、弱者の仕事はたゞ强者に奉仕するにあるのである。記憶せよ、自己犧牲とか友情とか愛とかいふものは眞の道德的本能ではない、之等は單に汝等をして眞本領を發揮せしめざるために製造せられたる無理押付に過ぎないのである。人間は本質にては利己的なるものたるを忘るな！』

若しハックスレーが其說である所の、『世界的秩序（コスミックオーダー）』即ち最も狡猾であり最も無遠慮なるものが適者生存の利で殘留するとの法則が何故社會の形成と共に逆轉するので

あるかと問はれたならば、彼は多分他の人々のなせし如く、細胞と其形成する所の有機體との關係を比論として舉げたであらう。或は化學より、水素と酸素の如き其特質に於て全く相異せる二元素の化合物（水）の例などを比論として舉げたであらう。然れども之等の比論は二つとも過ぎたるはなほ及ばざるが如きものである。之等は兩者とも論理上、國家が個人の上に絕對の主上權を執る事、即ちさきに國家社會主義につきて論じたる如く國家を『絕對理性』の化身として神聖化するに至るものである。

なほ進んで考ふれば、社會を形成する前に個人が他の隣人に對し『世界的秩序（コスミックオーダー）』に由つて全く支配せられしものとせば、一國家が他國家に對する場合に於ても同じ法則が適應しないであらうか、否之が唯一の法則でなからうか？　最も成功ある原人とは『機智と意力と共に黠詐と殘忍性とに勝れたる』ものであつたとならば、何故國家も同じ方法によつて成功する事が出來ないであらうか、即ち國家的存在のために同じ世界的（コスミック）方法により奮鬪すべきでなからうか？　余は最も力を込めて次の如くいはんと

欲するのである、『若し進化論が眞實とせば、斯る國際的强盜主義を不正とし又叱責すべきものと證し得る論理はないのである』と。

獨逸の操觚者等は斯る議論を公に辯護する丈の勇氣と、之を彼等の生物學說に基礎づけるだけの終始一貫せる精神を以て居つた。同國の一有力なる雜誌の一九一四年九月號に載つて居つた次の文章を見よ。

『人種に、主人人種と劣等人種の二種類がある。政治的權利はたゞ主人人種にのみ屬し、戰爭に由つてのみ獲得せらるべきものである。之は科學的法則、一生物學的法則である。』

我等は斯の如き國際倫理の法則が實行せられ、所謂ダルウイン派の生物學的法則によつて辯護せられたる最近の恐怖すべき鬪爭より少くとも一の敎訓を學ぶ事が出來ないであらうか？　斯る學說の本質的害惡を示し、又其がどれだけ基督の宗敎に對してはいふまでもなく道德の正しき觀念にも背反せるものであるかを示す上に、斯の如き

實物敎訓は百の議論にまさつて有力である。

九

斯の如きは過る半世紀に亘つて進化論が廣く流布せられしために生じたる社會的又政治的結果である。之は勞働階級には宗教輕侮、嫉妬的不滿、不法——舊世界に於けるサンヂカリズムとアナーキズム、新世界に於けるI、W、W、などを醸生したのである。そして又贅澤階級には之が貧しき者の顔を磨する彼等の壓制に對する正當理由、暴壓に對する似而非科學的公認權の如くに使用せられるのである。然し之は上下一般に人間權利と法律的政治に關し激變せる觀念を懐かしめたので、やがて此近代的背敎（アポスタシー）が其抱懐せる考に從ふて立法するだけの十分の感化を持つに至つた曉には、之は政治上及び宗教上に世界的の一大壓迫政治を出現せしむる下地となるのである。そして來らんとする闘爭に於て、過激的民主黨が勝つにしても或は帝國主義者や國家社會

主義者が勝を制するにしても、必ず損をするのは個人である。其理由は人間權利及び政治的、宗敎的義務に關する其等の變化せる理想は、必ず我等が過去四世紀に亘つて其等の問題に關して習得した所の一切のものを覆滅せずにはおかないであらうと思はるゝ故である。

チユードル(Tudors)家及びスチユアーツ(Stuarts)家以後の英語國民の歷史は聖書がたゞに宗敎のみならず、法律に於ても、人間自由の眞の憲章である事を明かに證して居り、凡ての羅馬公敎(ローマンカトリツク)の國々の憐れなる狀態は我等に煌々たる燈臺の如く我等をしてアングローサクソン人種偉大の眞源泉を棄てゝはならぬと警告して居るのである。

併し現代の人士は概ね進化論と高等批評の空氣の中で敎育せられたのである、聖書に對する信仰は小學校、中等學校及び大學と公の刊行物によつて組織的に且根氣よく覆されて來たのである、一切其等の機關は中世暗黑時代の無智が爲したと同樣に、人

々の心と生涯より神の言の贖罪的救濟の感化を全く奪ふために作用したのである。かの智的暗黑時代にありては、生命の燈火が一般民衆より奪はれて徽かに死文字の墓場の中に搖れて居つたので、此時代はあらゆる醜惡なる迷信の發生と、背教的教會が人の靈魂を壓碎する暴制を擅にするには都合がよかつた。されど永き以前に預言せられた如く、大なる智的光明の時代も聖書の光なしには、其が同じく馬鹿氣た迷信を發生せしめ、且政治的又宗教的暴政の準備となされるものである事が現に我等の目前に展示せられんとして居るのである。

基督教と自稱する背教的教會によつて支配せられる暴壓政治は進化論の論理的產物である、之が勝利は時の問題である、そして其强さと廣さとは、萬物の起源に關する異教的教理、及び其結果人間行爲の最上標準としての聖書を否定する事を過去半世紀間に亘りて教へて來た熱心と範圍とに比例するものである。

個人を大なる全體の取るに足らざる一部分として蔑視し、又其と關聯せる考である

が國家は國内法によつて宗教と倫理を規定する權利を有すとなす所の『善意的』なれど無制限の專制政治！　若し彼等の子孫が斯る制度の下に生活すべく强制せられるのであらうと暗示せられたならば、其事はゼッファーソンやワシントン、ミルトンやハンプデン及び其他アングローサクソンの自由のため戰ひし勇士等をして顏に朱を注がしめ怒らしめた事と考へらる。以上擧げし二つの考は、罪の中に生れたる双子の惡鬼で、神を離れたる背教の中に育てられ、迷信と虛僞のお伽譚で養はれ成長したのであつて其が今日再び、永遠に葬り去られたと思はれて居つた壓制政治の分離せる四肢五體を一つに纒めて之に生命を吹込みつゝあるのである。この永い世紀に跨つて敎會の足跡を附纏ひ、其途を彼女の子孫の最も善良にして高尙なる者の血を以て彩らしめた此等の惡鬼共は、今日再び血走つた眼を以て、默示錄に預言せられたる如く敎會の長く待望せる救主の最後の救援を待ち且祈るため荒野に逃れんとせる殘りの敎會を窺ふて居るのである。

先頃西に沒せし世紀は、人類の輝ける希望に笑みながら明けたのであつた。デモクラシー（民衆政治）は萬物を贖ふべき英雄として迎へられた。しかし自由と物質的繁榮は神を忘却せし、其世紀の臨終をして其夢の空なりし事を目撃せしめた。人間は自己を救ふ何物をも持つて居らない。救はるゝ者は僅かであつて、人類は全體としては救はれないであらう。其傷は不治である。今日、未曾有の好機を有し乍ら、人類は歷史が示せると同じ道を辿つて居るのである――昔の殉教者の碑を建て之を飾りつゝも現在の不人望なる英雄等を火刑にする薪に火を點けんとして居るのである。

第十一章　世界聯盟

"Extensive religious combinations to effect a political object…… always dangerous…… All religious despotism commences by combination and influence; and when that influence begins to operate on the political insititutions of a country, the civil power soon bends under it; and the catastrphe of other nations furnishes an awful warning of the consequences." ——Senate Report, Jan. 19, 1829.

『廣大なる宗教的聯合を作つて政治的目的を達せんとするは……つねに危險である。……凡ての宗教的壓制は聯合と強大より始まる、そして其感化が一國の政治的制度に及びかける時、俗的勢力は間もなく其下に屈服するのである、他の幾多の國家の遭遇せし大破裂は其結果の怖るべき事を警告しておるのである』　（一八二九年一月十九日議會報告）

一

人類の統一、人類の結合なる思想、軍旗が『人類議會、萬國聯盟』の上に飜される
といふ思想は永い間人を魅惑して來た理想であつた、そして我等の偉大なる詩人や散
文作者等が彼等の天才を傾けて其美しさを寫し出さんとしたのである。之等の可愛ら
しい夢想は歐洲大戰の光景より甚しい打撃を受けたとはいへ、時が經過して世界が其
慘劇の結果を考ふる餘裕を有するに至らば、反動の感情の波が人類の聯合てふ運動に
打ち寄する事であらう、かのナポレオン戰爭の後、善意の露帝アレキサンダー第一世
によつて神聖同盟の形で此運動の第一の企がなされたやうに。しかも此度は前よりは
より大なる熱心を以て此運動は遂行せられるであらう。歐洲の諸君主がかの神聖同盟
につき如何に悲しき失敗をなしたかは我等の熟知する所、そして人民のため、より大
なる權利と自由とを獲る代りに、より大なる壓制に終つたのであつた。併し王達の時
代は過ぎて、人民の時代が來た。近世の理想家達によつて叫ばれる如く、此の世界聯合
のための運動は實に人類に對する進軍喇叭の音であつて、此響に應じて懦夫も起たさ

れ眠れる者も醒され、幾億の民は血を沸かせ肉を躍らせて此の神秘的なる喊聲に奮ひ起たしめられるのである。全人類が此運動に參加する如く見ゆるに至るのである。されど若し此未來の『神聖同盟』が、アレキサンダー一世を威壓せしかのフォン、グルュトデネル伯爾夫人(Baroness von Krüdener)のそれよりは一層熱狂的なる精神によつて支配せられるならば如何?

二

幾個かの物質的因子が世界聯合への此企を成就なさしめんとして居るのである。

一、先づ第一に擧ぐべきは迅速なる國際交通機關の近世的發達である。鐵道、汽船自働車は結果に於て距離と時間とを省略せしめ、遠方も接近せしめられ、いはゞ人は互に誰とでも隣人となつたのである。其上に、電信や電話や新聞紙は世界を帶の如く其急速なる通信を以て包み、國語上又地理上の境界線を撤發せしめ、世界を擧げて之

を一つの巨大なる共和體となし、共同利害と共同慾望と一統せる自己意識とを有するものとなす上に大に寄與したのである。

二、近世の經濟的及商業的諸企業はもうずつと前から國家的又は地理的境界線で止まるやうな事を止めたのであつて、彼等の利害關係はいよ〳〵國際主義への强い動機を發達せしめて來たのである。物質的發達、經濟的繁榮は個人或は國民或は人類にあつても、いよ〳〵益々唯一の傾倒的事業、人間的努力と熱心さに値する唯一の企業であると考へられて來たのである。人類の向上は產業的及び經濟的狀態の改善と、プロレタリアの側に於ける生活の物質的幸福の獲得に對するより勝れる便宜によつて實現するものであるとの信念程廣く行亘つた信念はないのである。そして全世界に亘れるプロレタリアの分離散在せる單位が一致結合して行動する事が斯る結果を價値ある程度に齎らす上に必須のものと考へられて居るのである。

たゞに現時の產業的及び經濟的競爭狀態が不公平と冗費的奢侈の源因たるのみなら

ず、最も大なる冗費の源因の一は國家間に於ける破壊的競爭である、之は平和時に於ても壓碎的重荷であつたが、所謂基督教國の巨大なる激戰より後世に遺さるべき遺產として其が幾層倍過重のものとなる事であらうか――しかも之等凡ては殘存せる人種的憎惡心と國際主義の壓倒的感情の缺乏と統一せられたる世界意識の缺乏とが其源因であると見做れておるのである。

斯の如く種々なる方面より、世界的國家、統一せられたる人類の實現は資本階級とプロレタリアトの兩者の目的を達成するに必要と考へられて來たのである。之に加ふるに國際調定裁判や世界平和への廣き範圍の運動は、少くとも永い間世界の人種國民を隔離しておつた憎惡心と排他心の障壁を打破するに足る程の世界統一の理想に近きものを實現するであらうと大そうな費用と組織をかけて宣傳せられたものである。

三

我等をして此概念に對する進化論哲學の感化を注意せしめよ。スペンサーとダルウヰン、ウオレースとハックスレーは彼等の進化論的概念を嚴密に人類の社會的發達に適應する事を遠慮した。スペンサーの定義、即ち社會的有機體は『其統一體の生命を其部分の生命に服事せしむるもので、部分の生命を統一體の生命に服事せしめる』ものではないとは一時代前、個人の權利がなほ神聖視せられし時の第一流進化論者の說を例示するものである。之等の人士は其中年に於て進化論を採用するに至つた、彼等は基督敎的環境裏に生れ且敎育せられたので、全然其若年時代の敎育を振ひ落す事が出來なかつた。又或は人々が一般に此の新哲學に自已を適應せしむるに未だ至らなかつたのである。

然し近世の社會學者の多は彼等の聖書を愛好せし先祖より受けし斯る良心の囁には一切耳を藉さないやうになり、同時にマルクス及びラサールの考、即ち社會的發達は人間意志の干涉を用ゐずして、運命的に又必然的に生ずるものであるとの考もはや時

代遅れのものとなすのである。かゝる今舉げしが如き方法は余りに遲々たる經過であるとなし、多の者は斯る進化論の運命的見方は全く特權階級の利益のためのものであつて、之が種々なる形式で革新運動の前進を阻碍したといふのである。此の最後の見方が正しいか否かは兎も角として、今日人類の發達を畫策し、支配し、促進するための熱病的活動が、深き次の如き自覺の下に行はれて居るのである。卽ち人生に關する萬事は、それが信條及び宗教系統であれ、倫理或は哲學であれ、——一切は等しく人間の指揮と統制の下に來るべき筈のものである、そは一切は等しく過去に於ける進化的經過の產物であつて、今は全體の幸福なるものに貢献すべきやう形成せられねばならぬ、たとひ其指導と制禦とが個々の單位を犧牲に供することになつても、といふのである。

前章に論じたる今日流行の社會を有機體と見る說は個々の細胞を其全體としての有機體と比較して甚だ價値少なきものとなす說である。斯て今日の社會學の教ふる所卽

ち進化論哲學の成熟せる果實は、スペンサーの定義を顚倒せるもので、個人の生命は全體の生命に服事すべきものであるとし、勿論其最後の結論は人類全體の統一化であるとするのである。

このアメリカに於て我等は同じ感想が他の方角より達せられたるを見るのである、之に由つて如何に社會主義的宣傳が其根を單なる社會的及び產業的狀態よりはもつと深い處に下して居るかを知るのである。余は民衆主義的觀念の近世的擴張と其力の增大とを指すのである。民衆主義とは少くともアメリカでは內治立法問題にのみ限られていはれたのである。然るに其意味が近代に至つて擴大せられて、人生の萬事は、倫理及び宗敎體系に至るまで、一般通俗的希望と其指揮に從ふを要すとなつて來た。此の觀念、徹底的民衆主義（Ultimate Democracy）と稱ばれてある所の、人生に關する萬事は等しく全然慣習と便宜とによるものである、道德とはたゞ化石せる習慣に過ぎない、人類は一切の外的束縛より絕對に自由なるものである、倫理或は宗敎に於て

も自ら課するもの丶外に何等の束縛制限をも受くべきものでないとするのである。此の基礎の上に於て我等は今日最も顯著なるすべての社會的及び政治的問題に關せる非常なる興味を諒解する事が出來る、亦之等の社會的及び政治的活動が地方的又國民的問題より國際的問題にまで擴大し、世界の政策と標準とをして人民の意慾を反映せしめ且具體化せしむるやうに形成しつ丶ある事を諒解し得るのである。そして若し國家が神聖視せられ、『絕對理性』の化身として崇拜せられんとして居るとせば、絕對の最高發表としての世界國家は如何にぞや？

我等は種々なる形式の壓制政治を過去に於て有つた、王たち君たち、寡頭政治、金力政治などが色々な時に其臣民の個人性を壓碎した。そして極めて少數の場合であるが、暴民が權力を得て壓制者の位地に坐するを見た、然し人間歷史の慘膽たる單調裏に於て、多數の意向が一種の宗敎にまで祭り上げられ、其が一切の制禦的規則と束縛とを蹂躙して實現せられた時期程に悲しむべき又戰慄すべき光景を現出した時はなか

つた。すべての暴政中に於て多數のそれの如く怖るべきものは有り得ない、其多數が人間權利と自由との一切の外部的根據を認めず、一切斯る事を單なる慣習に歸し、たゞ稅金或は關稅の如く民衆の意向にのみ由つて左右せられるものとなす時には。しかるに今や此の徹底的民衆主義の議論が印刷物より、高壇より、大學の講座より盛んに鼓吹せられて居つて、遂には萬國的の大仕掛で恐怖時代の教說と方法とを再現せんとして居る事は明かである。彼等は『一書(聖書の事)の奴隷』たるより解放せられんとあせつて居るが、丁度佛蘭西革命の怪物共がやつたやうに。しかし乍ら『セイン河を赤に染めた馬鹿騷』が再び世界的の大仕掛で演出せられんとせるを阻め得るものは何か?

四

なほ我等をして此の徹底的民衆主義の正體を解剖せしめよ。

此の說の根抵に橫たわつて、すべて此の世界の害惡は人間環境の惡に因るとの考があるのである。生物學で今最も確實だとして認められて居る法則の一は、環境の變化のため誘導せられし後天的性質は子孫に遺傳せらるるものではないとの法則である、しかるに社會學では未來のすべての希望が一に以て、環境の變化により人間の性質に激變を惹起せしめんとの假想的力に懸つて居るのである。いふといはざるとに關せず、若し人間の惡しき環境が改良せらるゝならば、人間はそれによつて自動的に又自發的に改良して行くものである、すべての人類の要するは公平なる機會である、若しそれら一切の障碍が取除かるゝならば人類は必ず進步する、そして今や人類は世界的自己意識に到達したのであるから民衆は自ら一切の人間環境を改造する此大事業に着手せねばならぬ、宗教生活或は家族生活の如き、最も大切に惟はれて居る理想をも除外せずに、何となれば之等は實に其善にもあれ或は惡にあれ孰れかの可能性に於て最も有力なる因子であるが故に。と宣言して居るのである。一有力なる社會主義の記者

が書いた通りである、『我等が嘗ては見えざる非肉體的活動（即ち神・キリスト、及び基督教の靈的活動）より期待せし所の助を、今は人より之を要求するのである。社會が人間を救はねばならぬ』

勿論宗教と結婚の神聖までが人種改良のプログラムの中につねに含まれて云々せられて居るわけではない。形式一片の社會主義者等はよく宗教と結婚につき云々したものであつたが、しかし彼等の言ふ所は餘り未來に對して希望を與へるものでなかつた、それで今では人間の周圍とか環境とかいへば一般には其物質的狀態、即ち生產と富の分配とを指していふやうである。つまり若し我等が快樂、便利、機會を萬人の容易に達し得る距離に置き得れば、人類は之等の變化せる狀態に自働的に適應して、萬事は善くなるといふのである。

此の觀念は亦人類の完全の可能性に基礎を置いて居るのである。人を神となす事、人道敎（ヒユーマニズム Humanism）の最後の勝利なる思想は、人類の完全可能性或

は進歩性なる思想の系論（コロラリー）である。之はエマーソンの直覺說が變貌せしめられて、人類運命の主裁者、指導者たる最高位地に高められたるものである。此進歩は人類の自己倚賴により、人間の團體的力量に於ける意識的努力、即ち全世界に亘る徹底的民衆主義によつて齎らしめらるゝとなすのであつて、之は論理的に見て決して世界國家、世界聯盟、政治學の領域に於ける絕對の發表以下を以て滿足するものではない。

人間は恒に宗教的動物である、恰も彼が社會的動物である如く、そして世界國家は世界宗教を含有するのである。其は如何なるものであるだらうか？　此の徹底的デモクラシーの下にあつては宗教も亦必ず全然民衆の意向に從ふべきもの、眞に人類全體の聲によつて指揮せら決定せらるべきものとなる。此の種の考方によれば、既成宗教は自然的方法で成長して來たもので、他の一切の人事と同じく進歩の餘地あるものである、そして此の進歩は人間自己の努力により、人間自己の意向に從ひ、『人類意識』の集合的にして變化する理想の標準に向つて、進めらるべきものである。すべて

此等の事はネロ帝の時にある一老人のなせし預言，即ち時至らば人々『健全なる教』に堪えず、『耳痒（かゆ）くして私慾のまゝに』己がために教師を増加へ、たゞ己に都合よき話のみを聞かんとす、との言を見事に實現せるもののやうに聞ゆるのである。（提後四。三）

心靈教（スピリチュアリズム）（Spiritualism）は其精洗せられ又威嚴をつけられたる形で、此の近世の樂天的神秘主義即ち人道主義と提携して來らんとする世界宗教に於ける大因子の一となる事は疑なき事實である。人間の神性（ディヴィニティー）を信ずる教は其中に『かなたに行きし』人々は彼等が生前知りしよりは優りて、亦なほ肉體に在る人々よりは勝りて、宗教上及び心靈上の事柄につきて多く知つて居るとなす説を含んで居るのである。人道主義は何か超自然の因子を有つ事を必要とするのであるが、こゝで手近にその必要を滿すものが待つて居るのである、無制限の可能性をもつて。或は亦此の人道主義の宗教は大なる歴史的ローマ教會の因習的力を無視するわけには行かぬ。ローマ教會では、其が眞教會

の確かな休徴として奇跡を誇つて居るのであるが、心靈敎の行ふ不思議に對し、其がずん〳〵流行して行く時には、其に反對しないであらう。ロマ敎會も此の人道宗と同じく普遍的ならんと熱望して居るのである。斯てこゝに我等のあはれなる混亂せる人類に平安と調和とを持來らすに十分足る如く見ゆる三重の一致（譯者、人道敎及び心靈敎及びロマ敎）がある、そして其三者とも此の一致に於て『世界の回心への大運動、永く期待せられし千年王國の到來』があるとなすのである。

五

然し此のプログラムに對し最も嚴重な反對論があるのである。聖書基督者（バイブルクリスチヤン）即ち新宗敎改革者は直にいふ、此の人道敎及び徹底的民衆主義の考は罪の實在を無視するものである。人類は萬民共同の運命を持てる一單位であるのではなく、二つの大部分に分たるべきものである、一群はキリストに由つて神と平和をなせるもの、他は其を未だ

なさなかつたもの丶大群である。そして何故此僞の自由主義が此の基本的にして最も大切なる區別を我等に何時まで見えざらしめんとするのであるか？ と。

害惡と悲慘事の最後的源因は人間の惡き環境にあるのではない、人自らの惡き性質にあるのである。されば世界救濟のための一切人間的計畫は、如何にそれらが他の根據に於ては賞讃すべきものであつても、個人の救と新生の絶對的必要とをくらまし又上手に其を否定するものである。彼等は源因よりも兆候にかゝはつて居るのである。彼等は人性に於ける罪其ものより離脱せんとせずして、罪の結果より脱せんとせるものである。そして若し彼等が人類の一般幸福のため何かを寄與し得るとしても、所謂一般幸福のために個人の權利と自由とを侵害する事を防止し得ずば、彼等は個人と彼が其造主に對する直接の責任との間には入り込まんとする點に於てやはり惡であつて、善ではないのである。そして聖書基督者は此の人道教は默示錄第十三章に指定せられたる所のものであつて（本書第一章にいへる如く）、人々をして『獸の像』を造ら

しめ、地の凡ての民をして獸と其像との命令に服從せしめ、『天と地と海と水の源泉とを造りし』者を禮拜する事に反對せしむるものに非ずやと考へるのである。

斯くいへば讀者の或者は余が幻想か幽靈を呼出して不安なる人心を驚嘆せしめんとして居るといふかも知れない。然し余は單なる想像や亦余自身の推量を茲に提出したのではない。余は單に既に十分明かにせられて居る傾向を述たまでであつて、讀者は勝手に自分の結論をなし得るのである。余の亦知れる所は、聖書は多の方法で今我等の將に臨まんとせる時代に關して警告を與へて居るのであつて、時の休徵は既に幾分か實現せられ、聖書の之等の預言を現代の立場に我等が當篏めんとすることに對し嘲笑する人々をして立止らしむるに十分であるのである。

六

若し人ありて、『此の世界國家は如何なるものであらうか』と問ふ者あらば、余は

たゞ知らない、と答へる外はない。過去に於て未だ類似のものが現はれなかつたので我等はたゞ想像をめぐらし得るのみである。自分としては、人類の散在せる集群が密接なる有機的結合をなすであらうとは思へないのである。若しも彼等が其の共有するが如き、社會組織、倫理、宗教に於ける進歩觀の如き基礎の上に結合し、其觀念に基いて人類の進歩を模塑せんとせば寔に禍である。人間の權利を保護する爲に設けられたる政治、其下にあつては委任せられざる凡ての權利は個人或は小集群に殘されてあるのであるが、斯る政治の代りに近世進化論の說は、全體は部分よりは遙かに〳〵偉大なるものであり、そして集合體が人類進步の眞源泉であるを以て、其は倫理及び宗教の如き有力因子を見逃すわけには行かない、それ故『民衆』は其集合的資格で斯る問題に對して自由の手腕を振ふ事を許され、斯て人類の進步を欲む所の方向に導かねばならぬとなすのである。

余は余及びわが同僚の新宗教改革者等の立場が或は誤解せられん事を避け度く思

ふ。凡ての榮譽は、此國及び其他の國々に於てすべて正しき手段により壓迫せられたるもの及び蹂躪せられたる人々のために、より大なる程度の『社會的公正』を求めんと努力しつゝある人士の上にあれ、又凡ての榮譽は慘憺たる戰爭と軍國主義（ミリタリズム）の憎むべき濫費と壓碎的重荷とを撤廢せんと勉めつゝある人々の上にあれ。其等は飢たる世界が憐むべき勞働者を其足下に蹂躪せし一つの方法であつた。併し歴史の光に照して、斯の如き世界統一は、必然的に所謂全體の幸福のため個人の權利を屈服せしむる集合的努力を含むものであつて、之は必ず早晩極端なる壓制政治となるのである。數百年の間『ロマの鐵的王政』(ギボンの古典的名句を用ふれば)は全體の假想的安定のため個人の宗教的のみならず法律的自由までも壓碎したのであつた。されど全盛時のロマ帝國も、已に我等の時代の地平線上に擡頭し來り、幾百萬の聲が樂しげな喊呼を以て歡迎しつゝある所の此の大なる世界的壓制政治の可能性と比ぶれば單なる赤子、人形の如きものである。

されど聖書基督者、新宗教改革者は斯の如き世界的暴壓に決して屈するものでない、それが彼の神に對する彼の義務に干渉せんと試みる時。彼の主はこの地上に在しゝ時根氣よくいつも此等の政治問題にかゝはる事を拒絶せられた『我國は此世の國にあらず』と宣ひ乍ら。又他の場合に彼はいふた『人若しわが言を聞きて信せずとも我は彼を審判す。……わがいひし言、終の日に彼をさばくべし』と。亦他の場合に彼は世界の諸の國々の獨уの支配權を提供せられた、然し彼は最も斷乎たる決心を以て之を却け給ふた、斯て世の終まで彼の敎會に對する手本を殘されたのである。されど此世の國々の提供は凡て其後の背敎的敎會にとりては非常に羨望的のものとなつた。それで其主によりて足蹴にせられし提供を自分に利せんとする敎會は其事によつて自らキリストの眞敎會に非ざる事をあらはして居るのである。政治的權力(それが國家的であらうと民族的或は世界的であらうと)と結合する所の敎會は背敎の敎會であつて、其故必ず不寛容なものである。されど斯の如き權力に對して眞敎會は決して屈せ

ないのである。すべての過去の道德的英雄の如く『我等は人に從ふよりも神に從ふはなすべき事なり』と叫ぶのである。

七

此の世界聯合を最後の目標として、意識的にか或は無意識的にか、全人類が確乎たる氷河の如き流を以て動きつゝあるを見るが、しかしもつと間近の問題が我等の前に横たわつて居るのである。社會主義者の中の急進派、勞働組合、I、W、W、――一言にてプロレタリアトの全體は、彼等の野望を遂する眞の第一歩として問題を起しつゝあるのである。そして之等の問題はアメリカに局限せられてゐない、其等は國際的問題、世界大の爭闘を形成するもので、小ぜり合は既に始まつて居るのである、そして其鎭壓のため未だ如何なる平和協會も組織せられず、『神の和平』("Truce of God") は宣せられて居ないのである。

一方に於て現代文明の富が次第〳〵に僅少なる者の手に歸しつゝあり、彼等は私かに世界の經濟組織のみならず政治をも支配せんとせるが如き傾向あると同時に、他方に於て社會主義者や組織せる勞働の指導者等は所謂基督教國のあらゆる大都市の街頭に於て之等の問題のための學校を開いて居るのである。講堂は不滿、絶望的なる聽衆ですし積になり、彼等は夜な夜な、又日曜日毎に事實に根據を有せる彼等にとりて尤もらしく聞ゆる議論に耳を傾けるのである、そして其が人心の最も强力なる動機の或ものを深底までも昂奮せしむるのである。郵便は此種の印刷物を以て重荷を負はされてあるのである。余はこゝで此等の宣傳の可否を論じて居るのではない、たゞ事實を直觀して、科學の公平なる精神を以て、旣にすべての國民的又地理的境界線を越えて、世界的問題とならんとして居るのではなく、已になつた所の一つの狀態、一つの立場を研究せんとして居るのである。

富の追求が人類の思想と努力とを占領するに足る最も價値ある目的とせられて居る

時社會主義者の提示する其等の問題が何故政府の注意を占領すべき最も大切なる問題たり得ないであろうか？　極めて僅少なる者のみがソロモンやクローサスの夢想だもせざりし程の富と權力とを有し、民衆の大部分は比較的極めて小分配しか有たず、たゞ不斷の苦闘によりて稅吏や執達吏の厄介にならずに暮し得る狀態、又合衆國に於ては一千萬人が、他國に於てはもつと大なる比例で、やうやく窮乏の境界線上に居り、度々次の食事はどうして喰べやうかと思案せねばならぬ狀態に居る時、社會主義の煽動者等は何の點からでも說教出來る大演題を持つて居り、聽衆を得るには骨析を要しない立場にあるといはねばならぬ。

我等は石鹼箱上の辯士の感化を見くびることが出來やう、されど電話と印刷の此時代に於て世界は一つの廣き路傍となつたので、之等の火の如き經濟的福音使等、近世のツルバン、ピーター、ベルナルド等は彼處より新しき十字軍を說いて居るのである、そして其十字軍は長い困難な行軍を要しない、何となれば彼等の夢想のエルサレムは

たゞ數丁隔つて居るばかりで其處には一抔に積まつた倉庫、摩天閣、褐色石の邸宅があるではないか。されば今や凡そ理性を具有せる人ならば偏見と議論を放擲して現實の事實に直面し、最近の日日新聞よりはもつと新しい歴史を藏し、すべての智者の智よりもいや勝れる人生の完全なる指針である所の聖書の中に、之等の狀態と其結果とに關して眞の記述をあたへられたるお方と偕に自己の立場を採るべき時が熟して來て居るのではなからうか？

八

余は此の世界聯合の計畫が何處まで實現せられるかを知らない。余は一事を知る、即ち人類は其衷にかゝる企業を成功せしむるに足る丈の保全性と粘着力を有して居らぬ、たゞ一時的に、しかも或る靈道的熱狂（スピリチユアリスチツク）か或は魔襲の刺戟の溫室に於てのみ、其等の互に相容れざる異分子を混合する事が出來るかも知れぬ。其等の異分子のため過去

の世界統一の一切の計畫が攪亂せられ且破壞せられたのである。凡て單に人間的方法、即ち人を神と祭り上げ其成果の上に建てられたる世界平和及び世界統一の計畫は悉く失敗と破滅の運命を有するものである。そして斯の如き世界聯合の企業が普遍的仕掛で永い間休止して居つたバベル建築を再び試みる時は、之は地上に於ける背教の頂點（クライマックス）、罪の永き支配の終末的閉止、人間に對する試驗時の終局、而して支配し給ふ權利を有するお方の來臨を喚び來すべき時機の到來せるものと、天に於て、種々なる理由より認められるであらう。

如何なる光景か、世界が其の惡の時を閉され、永く忍び給ひしヱホバの正義によつて其の自ら撰びし道に捨てられ、邪慾と情慾と憤怒との激しき情熱が遂に全く制御を失ひ、手綱も轡もなく自由に暴れ廻るに任されたる時の光景の如く怖ろしきものがあろうか？　國民も都市も機會が十分あたへられた、彼等の試練の終が來た、しかも血と破滅の奔流の中に、外の暗黑に出で行いたのである。何故全世界が斯く如くはなら

ないといふや。かの非運の猶太人がローマ軍隊の旋風的侵略に空しくも對抗せんとて、彼等の美麗なる都に群集せし時彼等は同士打を始めた。若しローマ兵が都を略奪せなかつたとしても、叛徒は互同士殺戮し合つて自滅した事であらう。佛蘭西の華かな主都が、幾世紀かに亘つて、神の言を抹消し、敏捷にして感情的なる人民を輕薄且無神なる哲學と背教教會の壓制と僞善との惡感化に露したる自然的結果を實驗せしめられし時、世界は全國民の狂氣的慘狀に魂消たのであつた。視よ、都市が、國民が其の自ら蒔きし種の悲しむべき收獲を刈らされて居るを。しからば全世界が遂に其の試煉の時を終り、斯の如く全く禍惡にわたされ、惡魔的憤怒の幽閉せられし諸勢力が全地に、エルサレム或はパリの上に降されしよりも尙一層怖るべき破壞を下す場合はどんなであらうか？

わが靈は斯の如き繪畫を凝視するに堪えない。しかし昔の預言者と共に、われわが頭を水となし、わが眼を淚の泉となさんものを、斯て夜晝世界平和、世界聯合てふ夢

の悲しき終を泣かんものを。僞の預言者、不忠實な望見者等は斯る平和が歷史によつても、科學によつても、社會學によつても、或は神の言によつても保證せられて居らないのに、平和、平和と說敎して永年の間人類を欺いて來たのであつた。

かの著名なる作家で猶太人なりしハイネは約一世紀前にいふた、社會大革命が來る時には『佛蘭西革命は無邪氣な短歌の如きもの』であるであらうと。

第十二章　結　論

"Christian life without Christian doctrine has never yet appeared. Those who claim to show it in Christian lands are simply cuckoos in nests of Christian doctrine which they built not, but whose warm environment makes them what they are."　　——The Stone Lectures, 1896

『基督教的教理なくして基督教的生活は未だ現出せず。基督教的國土にありて之を示し得ると主張する者は、自ら造つたのではない基督教的教理の巣の中にある郭公の如きものである。其巣の暖い環境が彼等を其の有が如きものとなすのである』　（一八九六年、ストーン講演）

一

科學は管理（コントロール）・實驗（エキスペリメント）に慣れて居る、そこでは附隨する條件が二つ或は其以上の試驗せらるべき題目と共にすべて豫め配列せられ得るのである、斯て若し結果に於て差

異があれば其は一層正確に比較せられ、そして之等の差異の正確なる源因が確實に測定せられるのである。

されど科學的研究の多の部門に在りては我等は豫め自然界の作用を管理する事が出來ない、たゞ我等の爲し得る所は自然が出來合に備へて吳れた種々雜多の作用を、勿論事物の原因に關する我等の好奇心に關係なしに、まあ最善を盡して撰擇する外ないのである。我等は二つの噴火山を取つて、水の供給及び空氣又は周圍の酸素を含有する岩石よりの酸素の供給を管理按排し、斯て之等火山は大なる鎔鑛的中心と聯絡せるものか、或は比較的淺い、他と別離せる衣囊の如き地中に生ずるものであるか、そして其熱はウエルネルによりて嘗て敎へられ且今多の者が敎ふる如く石炭層堆積の燃燒によつて供給せられるか或はデヴィ（Davy）及びゲイールサク（Gay-Lussac）の說の如く主として化學的作用によつて供給せられるものであるかを實驗的に測定する事は出來ないのである。

歴史に於ても亦我等は事物を其有の儘に採らねばならぬ。人間は兎や豚鼠の如く管理的條件の下において實的驗に我等の學説を試驗する事が出來ない。たゞ一個の歴史的實例では如何なる原因が觀察せらるゝが如き結果を生ぜしめたのであるかを正確に定めるには種々複雜なる事情があつて困難である。しかし時の流は長く多の曲折を有して居る、代表的實例は澤山あり、之に由り例へば國家民族の興亡盛衰に主として寄與した原因に關して疑問の餘地なきまでに正確に知り得るのである。今日の流行は一社會或は一國民の狀態を主として經濟的源因に歸する事である。然し代々に亘つて、如何なる倫理的又宗教的理想を抱懐したか或は之を缺いたかといふ事が個人なり民族なりを其有りしが儘のものとなしたのであつた。

二

余の記憶を遡つて此大陸の殆んど東端の一地にしばし逍遥するを許せよ。そこに愉

快なる百姓の小さき社會を見るのである。立派な建物の學校があり、毎日曜一杯に滿される教會がある。酒屋はなく、大ビラに不品行な人は少なく、ドン底の貧民もない。青年男女は教育と剛健なる道德をもつて成長しつゝあり、或者は昔ながらの農場に殘り、或者は政府や又はマックギル、(McGill) ハーバート、(Harvard) 或はプリンストン (Princeton) の如き大學に於ける責任の位地をみたすため、又或は自營の職業に從事するため、そして其所にて眞の愛他的精神を以て其同胞に仕へるため出で行くのである。

此田舍の一代表的ホームに一人の矍鑠たる尊老があり、其人の子孫や親戚で其界隈が出來ておる。原生林の中に一地をトし、彼は手づから彼のホームを造るため廣い場所を開拓した。彼は誰をも欺かず、誰をも壓迫せず、却つて彼の仕事の多樣なるため此世に乘出さんとせる多の青年は仕事が與へられ、彼の家庭はいつでも疲れたる旅人のため開放せられ、又彼の忠告は一般の幸福に關する問題ではつねに求められた。彼

は其社會にありて彼の義務を盡し、神と人とに對し平和の中に生活した。

妻たり母たる者は亦國の如何なる家庭をも飾るに足る婦人であつた。其夫よりは幾らか若かつたが、それでも中年を過ぎて居て、やさしい同情ある、しかも永年他人のために犧牲と克己の聖徒的生涯を送つた事に對する榮冠の如くに與へられてあつた智慧ある婦人であつた。かよはい優雅(デリケート)なたちで永年病人のやうであつたが、しかし一人或は二人の下婢が家の事は面倒を見たので彼女は專らその二人の小供のため精を出して盡した。

彼女の聖書智識は深いものであつた、たゞ朝夕の家拜で之を讀んだのみではなかつた。幾章も幾章も暗記して居り殆んど全一書を記憶して居る書も幾つもあつた。子供等はじようだんに一句を讀んで何章何節か當てさんせとするやうな事が時々あつた。

しかし彼女の親しかつたのはたゞ聖書のみではなかつた。アディソン、(Addison) ワッツ、(Watts) クーパー、(Cowper) ウエスレー、(Wesley) ミルトン、(Milton)

ヤング、(Young) 又ポロク (Pollok) の詩文などは家庭でのお氣入りものであつた。子供はかゝる文學や聖書の中で大きくせられた、彼女自身も子供の時こういふ風に訓育せられ、彼女の前の彼女の兩親もそうであつたのである。子供等が少さかつた時は彼女の誦せられたる詩文の音樂的韻律(リズム)に合せて眠らせられた、小供等が少しく大きくなつてからは彼女は仕事をしながら其を暗誦して聞かせ、亦彼等が遊び疲れた時には彼女はバンヤン、(Bunyan) やウエスレー (Wesley) やムーデイ (Moody) の散文を讀んで聞かせた。之等の子供等が大きくなつても文學と道德的敎訓の最善のものに親しく、之が彼等の性質の一部分となつた事に何の不思議があらう？

　彼等には山も河も、浮ぶ雲も、輝く星も、智慧と稜威に無限なる造物主を語つた。幼時より親しかつた自然に對する直(なほ)に得たる智識は彼等に造物主の慈愛の保護を告げた、そのわけは此の神愛が人間愛に化身して彼等の生涯を地上におけるかの小形の天國—基督家庭(クリスチヤンホーム)で包んだからである。斯の如き解釋に習はせられ、斯の如き實物敎訓を

あたへられ、其政治は天のものに縮をとりし家庭に大きくなりし之等の小供等は神の愛は同時に罪を憎み、虚僞と不正と暴壓を憎むものであるとの觀念に何等の矛盾をも見ないのである。かゝる雰圍氣にあつて、彼等の耳に自然も默示も同じ言を語るを聞くは如何に自然的の事ではないか！　そして兩者とも如何なる僞哲學の詭辯も決して曖昧にし或は消去ることの出來なかつた記憶と理想とを以て彼等を靈感（インスパイヤ）せしめるのである。

著者は此寫生で單に彼の想像に耽つて居るのではない、又彼は此記述を受賣する必要がないのである。しかし又之は他に類のない現象ではない、たゞ一寸土地さへ換へれば、かゝる愛と智に滿ちたるクリスチャン、ホームは英國や蘇國の聖書に訓育せられたる民が其祖國より移住せし所では何處にても多く見出される所のものである。併し我等にとりて興味の點は、斯の如き型の品性を造り出したる原因は何か、何が之等の民をして斯の如きものとしたのであるか？　である。何が彼等に其等の精神と心靈の

資性をあたへたのであるか、其に因て現代の誇れる進歩が可能となり、其なくしては我等の近世文明、そして特に我等の大共和國に著しき政治及び宗教の自由なるものは全く不可能であつた事と考へられるのである。一巻の聖書を阿弗利加の老酋長に渡して、其書が英國の偉大なる眞原因であると告げたヴヰクトリア女皇はやはり間違つては居なかつたのである。

三

我等をして約二百年餘前に溯りて、暫らく彼等の智的及び靈的先祖を眺めしめよ。ピルグリム、フアーザース（Pilgrim Fathers）が王なき國家、法王なき教會を建設せんと求めた所の荒涼たる周圍に圍まれたる花崗岩の露出せる國に長く滯留する必要はない。彼等の出來りし國に於て彼等があとに殘せし從弟達は之等のピルグリム等の失望の中に放棄せし事業、即ち王等の壓迫と宗教的不寬容（イントレラント）に對して中止を命ずる事に成

功したのである。

王政復古（一六六〇年）時代のきらびやかなる庭臣等は其輕佻浮華なる頓智を以てピユーリタン（Puritan 淸敎徒）の名をさへ嘲笑の標としたのである。しかるに近世のほゞ同樣なる時代も淫蕩なる惡漢どもによつて培はれたる此偏見を脫しきれずに居るのである、彼等は一世紀前に法王の壓制と帝王神權說とを蹴飛したるかの屈從せられ難き愛國者等の最微なるものゝ從者たるにも適しない輩である。之等のピユーリタンは單なる熱狂的なる度量の狹隘な、陰氣なる偏屈漢ではなかつた。彼等はアングロ・サクソンの自由人であつた、最近に開放せられたる聖書の硏究が彼等を覺醒せしめ彼等の才能を神よりの賜物と尊び、個人の自由をすべて神の像に造られたる者の離すべからざる權利と重んずるに至らしめたのである。彼等は時代と國民の危機の聲に應じて英國敎會より、極端なる分離派（セパラチスト）より、カルヷキン派（Calvinists）より、コヷエナンター派（Covenanters）より、又羅馬公敎會の中よりも起り立ちて『世界が其後見たこ

とのない程の自由と正義とに對する情熱を以て』集まつて來たのである。そして彼等をして斯の如きものとなしたのは、聖書研究と基督者家庭生活の神來的（インスパイヤリング）教養より生れたる、神に對する個人的責任の强き自覺であつた。

ピューリタンがメイポール（Maypole）の舞踏や競馬を禁じたるが如きは何ぞ　いふに足らん。彼等の高き事業は世界に自由と正義との新しき實例をあたへる事であつた。彼等が壓制を覆し、人間の生命、財產、及び良心を支配階級と僧侶階級の暴壓より自由にせんと取かゝりし時、彼等は凡て他の者が、其前に於ても其後に於ても、犯した所の過失を避けたのである。他の者等は其壓制者を廢し之を殺戮したのである。或る僅少なる者、フランス革命のヒステリカルな愛國者等の如きは、宗教的抑制より全く自由にならんと勉めたのである。ピューリタンは歷史上唯一の實例を殘した、即ち彼等の王と其僧侶の暴壓者等を法律の適法により裁き、法律的公正の靜かなる精神で彼等に宣告を實施したのである。斯の如くして人間の權利と自由とを無政府狀態と

革命の變調時に乘じてでなく、凡ての政府より前にあり且凡ての憲法を超越せる道德と正義の永遠の原則の上に樹立した之等の人士の上に祝福永遠にあらんことを！

ピム(Pym)、とハンプデン(Hampden)、エリオット(Eliot)、とミルトン(Milton)、は清敎徒でなかつたか？　されど何處に於ても自由人の安らかに眠れる町、カナダでも南阿弗利加でも、オーストラリヤでもカリフォルニヤでも、之等の名は最も高い榮發の中に記憶せられるのである。クロムウエル(Cromwell)も亦凱旋的淸敎主義の化身の如く、宗敎の自由のためには巖のやうに立つたのである。コンネクチカットで最初の文章にせる憲法を世界に與へたのは一人の清敎徒トマス、フッカー(Thomas Hooker)であつた。其憲章の中で彼等自由人は彼等の撰ぶ政府の代表者に對し其職權の制限を嚴格に規定したのであつた。

聖書が之等の人士によつて信仰の指針、自由の憲章、神と人とに對する義務の指南車とせられた故に、彼等が未だ嘗て見なかつた程度に英雄的素質を養成したのであつ

て彼等の法律的、智的、又産業的所産の上に大國民が成長發達するやうになつたのではあるまいか？　彼等が骨折をなし、そして我等は彼等の骨折の實を食して居るのである。併し我等の現代は我等が如何にして之等の祝福を繼承したかを忘れ、我等の尊敬する其等の性質に對して正しき原因を附與するを忘れんとする大なる危險に瀕して居るのである。

神よ願くは我等をして個人の價値、人間の永遠の權利に關する大原理の眞の原因を忘るゝことなからしめ給へ！　其等の原理は一切の社會組織に先つものであつて、之は我等がかの『剛健なる昔の偶像破壞者（アイコノクラスト）』等

"The dead but sceptered sovereigns who still rule our spirits from their urns."

『死せりと雖もなほ王笏を携へて其墳墓より我等の靈を支配する者等』

より繼承したのである。

四

なほ此の祝福の流を昔に遡り、淸敎徒より約三百年前の一點に立留つて、宗敎改革の先驅であり、ルーテルに先つ殆んど二世紀前、活版の發明前約一百年の頃、英國民に聖書を與へたウキクリッフ（Wycliffe）の生涯を研究するも價値ある事である。そはウキクリッフはたゞに宗敎改革者の第一人者の一人であつたのみならず、彼の品性は彼の愛好せし聖書の敎育的、改造的力の證として特別に價値あるものであるからである。

されどなほ我等をして遡り、暗黑時代の眞夜中に這入つて、かのアルプス山脈の邊鄙なる隱家に立籠れる貧しき百姓等の事を暫時默想せしめよ。彼等はたとへ永い幾世紀かに亘つて其周圍の邦國より狩り立てられたとはいへ、彼等の有せし唯一の寶、即ち神の言を代々に傳統して少しも之を曇らすことはなかつた。マルクスやラサールの

徒、人間の品性をたゞ冷たい經濟學の法則によつて解釋せんとするが如き謬をして、世より隔離せられ、其家畜や岩地の葡萄園の間にあつて名狀し難き困難なる勞作に從事せねばならぬ立場に居つた之等の百姓達を訪問せしめ、而して彼等聖書愛好の自由民が來る世紀も來る世紀も伊太利や佛蘭西の最優良の騎兵の兇暴なる進擊を擊退したる此の不斷の奇跡を如何に說明せんとするかを見せしめよ。眞の說明は彼等自身の標語、『光は暗(くらき)に照る』("Lux lucet in tenebris")に見出される、それは上よりの力が彼等の生命を保護したのであつた。彼等の信仰も亦新しく受けたものではない。彼等は自ら其等の偉大なる眞理、彼等の周圍にありし盲目なる獨斷說や迷信とは雲泥の相異である眞理を造り出したのではない。彼等は彼等の宗教の所產であつて、彼等の宗教的信念は亦彼等の先祖よりの古い遺產であつた。

　我等近代人は我等がいかばかり之等の人々に對し負ふ所あるかを忘れて居るのである。彼等は聖書を日常語に譯せし歐羅巴最初の人々であつた。

"E'en then who kept God's truth so pure of old,
when all our fathers worshipped stocks and stones."

『我等の先祖がみな木や石を拜んで居つた時、あんなに純粹に昔ながらの
神の言を守つた人々』

たとへ地上の快樂や此世の便宜は何も持つて居らず、いつ恐しき死に遭ふやも計られない生涯であつたとはいへ、彼等はそのために自分の不幸を嘆きつゝ徒に生を過すやうな事はしなかつた。毎節、毎章、其等の貴重なる寫本を、かくれて寫記し、其多の部分を暗記するやう努め乍らも、彼等は之等の寶を利己的にたゞ自分の谿谷にのみ閉込めて置くに忍びなかつた。來る世紀も來る世紀も他の歐洲の諸國が羅馬の凱旋車に迷信の鐵鎖もて縛られて居つた時に當り、ワルデンス（Waldenses）人は其聖書販賣人や訓練と教育ある宣教師達をひそかに其附近周圍の國々に派遣する事を斷えしめなかつたのである。洗足で、彼等の主と同じやうな粗末な旅に汚れたる衣を纒ひながら

彼等はその敵のたゞ中を通つて遠隔の地にまで侵入したのである。しば〳〵眞理の使者はその山間の家庭に歸つて來なかつた。彼は或は遠い國の寂しい牢獄で呻吟しておつたか、或は薪の積まれたる火刑柱の側で其骨を露したのである。この運命は故國の者も多く遭遇したのであつて、彼等は『冷たきアルプスの山にあちこち横つて居るのである。しかし彼の生命の樹よりの生命をあたふる葉を撒き散らした其途よりは教會が生れ出で、『地が其血を暴露し　もはや其汚を隱さぬ』に至る時にはじめて測量し得るが如き感化を幾百の土地に殘したのであつた。

五

併しも一つの、暗黑なる測面をも眺むる必要がある。我等は聖書が國民に對して何を爲し得るかを見た、我等は亦之を却ける事は如何なる結果を齎らすべきかをも暫時見る必要がある。警告として著しく目に立つ一つの邦國がある。其歴史は誤解せんと

しても得べからざる程明白で、たゞ此一實例だけでも我等の時代に對して一の教訓甚だ必要なる教訓をあたへるに十分である。そしてこゝでも學ぶ事は、國民の品性と運命を形成する第一原因は現時しば／＼提唱せらるゝ所の經濟的のものでも又社會的のものでもなく、之は道徳的又宗教的のものであるといふ事である。

改革の事業は早く佛蘭西に起つた。ルーテルがウキテンベルグに彼の論題(シーシス)を釘揭せし前、聖書は同國の首都に於ける大なる大學にて學ばれ尊ばれて居つた。後、國民の最要路にある人士の或者等は改革の信仰を受容れ、殆んど全國が聖書の宗教に從ふかの如く少時見えたのである。しかるにフランシス第一世は遂に福音主義の教理に對し斷乎たる反對の立場を採り、將に起らんとせる改革を破壞し盡すためには、自ら學問と文化の保護者(パトロン)を以て任せし身でありながら、佛蘭西全國に文字の活版印刷を禁ずる禁令を出した程であつた。かくて惡はゴールの地に勝を占め、不幸なる國民は彼女の悲しむべき撰擇の避くべからざる結果を收獲せねばならなくなつた。惡の熱力は時を

戰慄すべき收穫を示したのであつた。

此の兇暴る慘劇に寄與せし社會的且經濟的因子は非常に顯著であるため、皮層的思索者はなほ進んで原因を探らんとはしないのである。斯の如き見解の淺薄なるは恰も殺人の原因を銃内火藥の爆發作用に歸するが如きものである。之は第一原因の代に第二次的原因を舉げることである。フランス革命の眞哲理は我等を導いて、其は永い幾世紀間しかも非常なる成功を以て營まれし聖書に反對なる長き戰爭の結末であつたといふ事を見せしめるものである。聖書と福音主義の宗教を全然禁壓せし羅馬の勝利こそは、フランス革命慘劇の第一眞原因であり、亦其が勃發するや恰も全國民を舉げて狂氣せるが如き光景を呈するに至らしめし理由である。

若し迫害は決して眞理を禁壓し又改革事業を阻止するに成功するものに非ずとの見解を保持する者あらば、フランス革命に先つ長き爭鬪に於ける勇悍なるユゲノー

(Huguenots)の運命を研究し見よ。危險を冒して夜陰、山腹や寂寞たる沼地に持ちし集會を龍騎兵に追はれ、或者は跪きて祈れる姿勢で擊ち殺され、或者は引かれて漕刑罪人とせられた。國民の最も純潔なる者、最も教養ある者等が其殘生を强盜や殺人者と共に辛苦酷刑の鎖につながれたのである。セント、バルトロマイ祭(the Massacre of St. Bartholomew)の全國的殺戮も完全に功を奏せず、獸的にして放縱なる龍騎兵が新教徒の家庭に駐屯し、彼等の憐むべき人身御供をして其信仰を棄て、改宗せしめる爲にはたゞ其生命を斷たざる限り如何なる事でも其好む所をなすべしとの命令を與へられた時、最も有効に彼等の目的が功を奏したのであつた。そしてヴォルテーヤや其徒輩の皮肉な機智が、新教の拔去られた後國に殘りし唯一の形の基督教に對して放たれるや、不信と不法の勝利は必然となつた、ロマ教の祈禱書や彌撒祭の不合理な事がどうしてヴォルテーヤに對抗して立つことが出來やうか?

佛蘭西王や、及び支配階級はロマ教司祭等のため欺かれて改革的信仰の教理は王位

を顛覆し、王の權力を弱めるものであると信ぜしめられた。斯の如く聖書研究の當然の結果を誤り傳ふるにより羅馬は眞理を破碎するため佛王國の全權力を武裝せしめる事に成功した。されば王位を支持し貴族の威嚴を保護せんとの空しき目的のために先づ最初佛國に於て迫害の劍が拔かれたのであつた。しかし何たる盲目的且狂暴なる愚擧ぞ！　聖書こそは人民の心と國家の安泰と隆盛さを確實にする所の眞理、節制、公義、及び慈愛の原理を植付けたであろうに。しかるに欺かれ迷はされし民は聖書を禁じ其弟子を破門した。其頭はなさけ知らぬ暴風に露されながら、『荒野の教會』は彼女の牧者等が潛刑罪人さして苦しみ、火刑柱で燒かれ、或は土牢の中で腐れ果て行くさまを見せられた。彼女の家庭生活は破壞せられ、彼女の立派な學校は解散せしめられ彼女の記錄と文學は廢滅に歸せしめられ、其最後に殘されし子女は迫害者の狂暴を免れんため亡命して逃げ廻つたのである。

之等の亡命者が後より後よりと幾時代に亘つて國外に流出し、そして其到れる國々

に彼等の秀でし智能、藝術、工業及び剛健なる道德性を齎らしたことであつて、ユゲノーの亡命と共に國民的全身痲痺が不幸なる國民を襲ふたといふに何の不思議があらうぞ？　又繁榮せし製造業の都市が荒廢に歸し、豐饒なる土地が再びもとの荒野と變じ、或は道德的及び智的衰退が所謂『大王』の燦たる時代に繼いだといふのに何の不思議があらう？　ルイ第十四世の死後半世紀の中に國民が革命の深淵に向つて急速なる落下をなした事に何の不思議があらう？

新約聖書の宗教は國家の最も偉大なりし人物の理解以上であつた所の其等の社會的及び政治的問題を解決した筈であつた。然るに其等が未解決のまゝ殘つて遂に恐怖時代の無政府狀態と破滅を持來したのである。人民は福音書の福なる教訓を國民生活より忘却し去り、人間生來の我利心が一方に於ては改革を執拗に抗み、他方に於ては社會の根底其ものを食ひ破り、遂に全伽藍は人民の頭邊に瓦崩したのである。既成教會は富者を勵して貧民を無情に壓迫せしめ、貧民は彼等の暴虐と頽廢的感化より逃れん

さして空しく踠いた。數世紀に亘る貴族の貪慾と放縱と法律化せる壓制が百姓連中を鎖付の奴隷よりも低い狀態に落した。かくて富者は貧民を壓迫し彼等の前に放縱と罪惡の不道德な實例を誇示した。貧民は富者と彼等の榮華とを羨望し、彼等自身の範圍に於て一生懸命其の惡行を眞似た、そして遂に彼等が自己の能力を自覺し、洋の彼所より新しく建設せられたる自由の雄叫を聞きし時、道德的及び宗教的抑制なき彼等は最も狂暴なる極端に走るを禁じ得なかつた。

惡魔的奸智と無情なる心を以て羅馬は王と支配階級の嫉妬心に訴へ、彼等を刺戟して民衆を奴隷狀態に壓伏せしめ、斯て凡ての階級に生せしめられる一般的衰弱の中に彼女の支配は一層不可抗のものとなり堅實なるものとせらるゝと考へたのである。余は羅馬が之を爲したといふ、併し多分之は彼女の僧侶等の意識的目的で有り得なかつたであらう、我等は彼女の採りし方略を幕の背後なる惡の靈に歸すべきが本當であらう。されど人間を有効的に奴隷化するためには、手枷足械を彼等の靈に置かねばなら

ぬ又彼等を其の奴隷狀態より逃げしめざる最も確實な方法は彼等をして自由を享樂するに堪えざる者となす事であるとは、羅馬及び其他の暴君の等しく認識した所であつた。何となれば斯る仕事に於ては道德的腐敗は單なる經濟的及び政治的壓迫より幾百千倍も有效であるのである。聖書を取上げられ、たゞヴォルテーヤ又は百科全書派等の嘲笑と下劣なる頓智の如きもので養はれたる國民が幽靈教(スピリチュアリズム)や幾百の迷信のおもちやとなり、自治に對して全く不能となつたのは怪しむに足りないのである。

飢餓に瀕せる百姓等のあはれなる喊聲が彼の宴會室と其議事堂の戸や窓を通して響き來つて居るに、大ルイの後繼者は其大臣逹に向ひ『余の生ける間兎も角も車を廻して行け、死んだ後はどうなるとも我關せずだ！』といふのみ。そして後、死の床に横りながら、外部の喊聲が王の耳に達するを防ぎ得ざりし時、彼は其寵妃の口より『我等の後(うしろ)に洪水が』といふを聞いた。そして洪水は來たのである。

併し何故此の恐怖時代の胸惡き詳細を述ぶる必要があるか？　此の普通では立派な

る國民が精神錯亂に陷入る時の兇暴なる慘劇につきては誰でも熟知せる所である。併し最も大なる事實につきて我等はそれ程には知つて居ないのである、其事實は或る著作家等が近世の讀書社會より蔽はんとして非常に努力して居る所のものであつて、即ち其は聖書を全國民より奪取るにあの樣に成功せし羅馬敎の勝利と、一切の支配と一切の統禦とに反抗せる幾百萬人の原始的情熱の此の兇暴なる勃發との間に存する論理的聯絡である。

六

これ程適切なる敎訓は我等の時代に對して他にない。といふわけは多の道で全歐米諸國が順序よくフランス革命の恐怖時代に至りし足跡を、今再び辿りつゝあるのである。

再び懷疑論が流行して來出した、そして次の時代には昔ながらの基督敎の聖なる眞

理は歐米の全學校組織を通じて青年達の感受性に富んだ心の前で嘲笑と輕侮の標的となるであらう。再び講壇も印刷も我を爭ふて一般民衆の信仰を此の唯一の有效なる障壁に於て破壞せんとの不埒なる仕事に取掛つて居るのである。此障壁とは不法、迷信及び罪惡に對する障壁として世界の認めしもので即ち神の言である。そして再び我等は西洋諸國に蔓延して來た所の東洋的迷信と種々雜多なる異教的崇拜の疫病より生ずる避け難き結果を見るのである。

再び幾百萬の不滿なる者、死物狂の者より起れる苦惱の叫聲が四方の風より我等の耳朶を打つのである。眞に近世勞働者の運命は多の點に於て佛國農民の其に勝るものがあるのである。併し我等の近世的富と贅澤とに比較すれば兩者は殆んど同一である。兎も角も近世のラザロは彼とダイヴスとの間に橫はる淵が一層廣く又深くなり行くを眺めて居るのであつて、其を彼がなして居る以上、彼は自己の狀態の改善の進步を自覺しないのである。彼が彼の目前でほのめかされる無制限の自己滿足の有樣を眺

むる時、貧民の不足賃銀の勞働が富者の富の源であると二代に亘つて敎へ込まれたる結果彼の頭腦は混亂し『賃銀奴隸』("Wage slave") と自らを呼ぶやうに敎へられたる彼は自分の運命の如何にも悲慘にして堪え難きを感じ、もはや斯る運命を忍ぶべきにあらずと其同輩等と盟約を結びつゝあるを我等は聞くのである。そして基督敎の耐忍と慈悲の福なる敎訓が蔑視せられ或は忘れられ、通俗的敎師の幾千の者が絶えず彼に彼の權利と政治的權力とを自覺せしむるやう敎唆しつゝある時、有り得る結果はたゞ一つである。たとへ其が如何に遲延するとも。ヘンリー、ジョージ(Henry George)が力強く言ひあらはした如く、自由言論と政治的權力とを貧困に由つて頽廢し且不公平に由つて氣を腐らして居る人々の手に委ねる事は、恰も盲目にせられたるサムソンを神殿に導き其兩腕を國民生命の柱に卷き付かさしむるが如きものである。

二三代前の貧民は今よりは物質的幸福に於て一層乏しかつた、然し彼等は今よりは遙かに滿足と幸福とを感じて居つた。其差異は主として近世の民衆は宗敎の最も眞實

なる慰安と節制、克己、及び勤儉の道徳的訓練を失ふた結果であるといふ事が出來る。しかし不節制と近代生活に附物である不斷の刺戟、殊に其は都市に於て激しいのであるが、之等のために父も母も其子女を彼等自身の父母が訓育せられたやうに訓育する時間も持たなければ亦其意向をも有つて居ないのである。彼等は斯る事を日曜學校か或は普通學校に任せて居るのである、其間に青年達の眞の有効な教育が街頭の煙草店や、活動小屋や、日々新聞の三面記事や或は娯樂競技ページ、附錄として不信なる科學や社會學の論文でなされつゝあるといふ有樣、其の不可避の結果として民衆は巴里の農民や職工等があつたと同樣に異質異教徒であり又革命主義者であるのである。疑もなく、家族の訓育、習慣、信條、法律、日常の慣習や接觸、之等が國民品性を決定する大なる因子である。之等はあらゆる階級の中に發生し凡ての個人を包圍せる空氣の如く――ハーバートスペンサーの『超有機的環境』の如く包んで居るものである。

そして凡て之等の事の中に於て我等は自己の立場を守つて決して下り坂を急速度で落

つるが如きことをして居らぬと誰がそゝつかしく言ふを得んや？

着々として、しかも靜かにではなく、我等の近代文明の表面下に、所謂『社會のドン底』に於ける恐怖すべき勢力は時々刻々擴大しつゝあつて今や將に張り裂けんとする點にまで達して居るのである。若し其が破裂する時、其の兇暴を矯るに足る道德的及び宗敎的抑制力は何處にあるか？

七

歷史の敎訓は我等の爲である。舊世界はたゞに我等の祖先の墳墓を有するのみならず、死滅せる帝國、死滅せる文明の墓で一杯である。或ものは例へば埃及や支那の其の如く化石化した、或ものは外部より暴力を以て覆された、又或ものはローマ帝國の如く、そして其に我等の世界は最もよく類似して居るが、自己の足で立つて居る間に內部より腐敗した、北方の蕃族はたゞ間に合ふやうに來りて腐爛しつゝあつた死骸を

恰も世界的健康方法の如く片付けて見れたのである。オーガスタス帝が煉瓦の都を大理石の都と化しつゝあつた時に於て已に、其の文明は我等の知れる如何なる人力も之を救ひ或は其壽命を延し得なかつた程に國民的腐朽の黴菌に犯されて居つたのである。羅馬は死ぬのに長くかゝつた、其理由は其國民は嘗ては潔く又自由であつた故である。そして羅馬人又はアングローサキソン人の如き人民の上には靈魂を萎微せしむる壓制も徐々にしか手を延すことが出來ない。

しかし天が再び斯る代々に亘る長き悲劇をこゝに繰返す事を許し給ふとは余の信じ能はぬ所である、近代的疫病は已に殆んど全世界の國民に蔓延し、墮落の兆候は日にいよいよ明かとなりつゝある今、瓦解は急速に來らんとせるにあらずや、電氣と蒸氣の此時代の精神に適應して。

然れども余はこゝに預言者の口吻を用ふる事を止めん。若し我等の聖書が我等の前に開かれてあるならば、何ぞ此以上の警告を與ふることを要せん？　聖書は常に過去

を照して、我等に唯一の理性的にして眞なる歷史哲學を與ふるのみならず、又其が個人と國民にとりて同じく、現在に對する唯一の安全なる指針であるのみならず、其は未來の暗黑なる道を照す唯一の光明である。そして我等の前に臨める危機、人間歷史の怖るべき斷末魔が聖書の預言的部分總體の非常に大なる部分を占めて居る事實は甚だ意味深き事である。若しも人自らの怠惰と偏見我執と誤れる誇のため之等の預言を信せず、之等の警告に耳を傾けないならば、しかも其成熟が地平線上に大入道の如く現出し大なるバビロン自身の運命が風前の燈火の如くなれる今の時に於て、彼は憐憫ある神が彼を敎え且警告するために與へられたる最後にして唯一の手段を放棄るものである。

八

「若モーセと預言者に聽ずば縱ひ死より甦る者ありとも其勸を受ざるべし」

結論として余がさきに新宗教改革者と稱へた人々に是非告げたき注意が數個あるのである。之等の注意のあるものは警告の性質を有しており、或ものは勸告の性質を有つて居る。

一、現代の最も陰險なる危險の一は、同胞を愛する人々に襲來する所の一つの誘惑であつて、立法的改革を企てんとして時間と勢力とを徒費せしめ、進んでは無意識的なれども實際積極的害惡を流さしめんとする事である。社會に瀰蔓せる不法的又無宗教的狀態の故に、教會は教會として其聲を國家の立法部に聞えしめんとする誘惑が益々增して來るのである。我國の立法部は年々歲々熱心なる善意的の男女によつて殆んど包圍攻擊せらるるのである、彼等は法律の中に或る宗教的又は半宗教的なる項目を加入せしめ、之に由つて社會の道德を改良し且は國家をさし迫れる無政府狀態と破壞より救はんと欲するのである。

余は禁酒運動の人々を指していふて居るのではない、何となれば酒類販賣は純然た

る法律の問題、犯罪の加擔であつて、全く罰せらるべきものである。併し多の者は憐れむべき人類の罪惡と弱點の上に資本を置ける有害なる商買を禁ずるといふ以外に進出して、宗教の領域をまで侵入せんとして居るのである。其は我等の先祖が賢こくも永久に法律の支配以外の事たるべしと宣言しておいた所のものである。之等の善意的なれども困惑せる改革者等は、彼等の爲しつゝある事は羅馬敎會の前衛として働いて居るに過ぎない、彼等が適當なる先例を樹立した時には羅馬敎會は我もの顔には入り込んで來て之等の先例を全く利用否惡用するであらう。そして宗教的法律が舊教徒によつて立てられても其が所謂新敎徒によつて立てられても余り差異はないのである。筒様刑具（罪人の脚を入れ其間に楔を打込みて拷問せしもの）拇指絞、及び拷問臺（手足を引張り責めしもの）は新敎の操作者の手にかゝつても天主敎徒の手にかゝると同様に危害損傷を與へた事であらう。新敎のスチユアーツ（Stuarts）家の下にあつた高等法院（High Commission (court of)）もスター、チニンムバー法院（Star Cham-

ber (count of) も法王黨のアルヴァ侯（Alva）やトルケマダ（Torquemada）の下における異端糺門所（インクヰジシヨン）と同じく暴虐極まるものであつた。そして若し我等が宗教的聯合を以て立法的政治の問題に干渉せんとせば必ず其處には我等の高き價を拂つて買ひし自由を犠牲に供せねばならぬ事が生じて來るのである。其理由は人間性は十六世紀或は十七世紀より二十世紀に移るに際して變化したといふ徴は少しも見えないのである。

二、又我等は如何なる社會的或は經濟的改革よりも餘り多を期待せざるやう注意せねばならぬ。我等が我等の最善を盡して勞苦者の肩の荷を輕減せんとし、又彼の甕耙（クツカヰ）より彼の頭上高く懸れる智的且靈的修養の冠冕にまで昇るべき他人と同等の機會を彼に與へんと努めて見るもよい。そしてラマ（Rama）の如く我等も未來の海面を遙かに眺め、水天相接する地平線のかなたに輝くが如く見ゆる欝蒼たる椶櫚樹や招くが如き菓樹園に到達する堅き道路を人類のため建てんと望んで見るもよい。然しながら斯の如き道路を建つべき堅固なる土臺は人間の性質中にはないのである。かの代々の美

しき夢、幸福と平和の約束の地は蜃氣樓の如くに我等の前に後退して仕舞ふのである。我等の時代は前にまされる速力で此幻影を追ふて居る、がしかし早晩民衆は目を醒して悲しき失望に遭はんとして居るのである。そして其覺醒たるや怖るべきものであるであらう。我等をして民衆をたゞ失望に終らしむるが如き道に誘ふ人氣取り政治屋の群に伍せしむる勿れ。

人類を救ひ、之を更生せしめ得る力は唯一つある。お一方のみ生命を與へ得るのである。電氣裝置や何かで一時死せる筋肉組織を活動せしめ、或は腕や脚を動かさしむる事も出來るであらう。しかし只生命のみ能く生命を生せしめ得る、そして罪と悲慘事に對する福音の救治法は人々に對して個人的に適用せられねばならぬ。キリストが地上に在せし時やはり暴虐、壓迫及び暴政の叫聲に圍まれたが彼は何等の法律的改革をも企てなかつた、そして又彼の敎會に地上の政治を純化せよとの命令も遺されなかつた、――彼が人類の禍患に對し無頓着な故でなく、救治法は決して外部の條件や或は

人間的手段に於て見出さるべきものでないが故であつた。有効なるためには治療は人々に個人的に施されねばならず、又心を改造せねばならぬものである。

三、余の第一の積極的勸告は單純生活への叫である、個人と家庭生活に於て。我等は人工的な時代に住んでゐる、世はいよ〳〵複雜に且人工的となつて來た。讀者の多數は或は同感でないかも知れぬが、其にもかゝはらず余は敢て斯く言ふ。余の勸むる所はかのルソー（Rousseau）やクーパー（Cooper）が多くの欺瞞的感傷辭を以て讃いた『自然の狀態』へ歸れと叫ぶのではない。余の規則的生活に對する理想は斯る出所より出たのではない。恰も肉體が極地の極寒にも或は熱帶の酷熱にも堪え得る如く、靈的意味に於て基督者は外部的條件には獨立し、ハンムラビ（Hammrabi）と同時代の希伯來人の天幕内に於ても或は近代の首都に於ても、露西亞の監獄内に於ても或は自由なる亞米利加に於ても同じく何處でも主の精神を發輝せしむる事が出來るのである。併し彼が人工的なると眞實なると、一時的なると永久的なると、品性を強固にす

る感化あるものと反對に之を弱め墮落せしむる陰險にして包圍的なる感化とを十分識別するを要するのである。

何故余がこゝに特別の風習慣例を名指して論ぜねばならぬか？　ネロ（Nero）或はマーカス、オーレリアス（Marcus Aurelius）時代の愛國的羅馬人は閾をまたぐにも、友人に挨拶するにも、馬車に乘るにも、湯に入るにも、其手や頭を敬虔に動かして自分が國家の神々を記憶せる事を示したか、然らずば斯る動作を愼みて自らのクリスチャンたることゝ及び他の國の市民である事を表白したのであつた。同樣に我等の人工的生活の陰險なる偶像崇拜が現代世界組織、近代的バビロンの全體に浸潤し來つたので之等に汚されぬやう自らを保持せんと欲する人々は長時間の勤務を取り道德的休暇なしでやつて行く覺悟を要するのである。競技場、流行服裝書、博戲臺、タンゴ踊、かるた遊び、活動寫眞、野球掲示板、自働車遊び――之等は國家的偶像中の僅かなものゝ名稱であつて、之等を現代の幾百千萬人が其搖籃より墓場に至るまで禮拜すべく敎

へられて居るのであつて、之等に何等の供物を献げず香を炷かざる者あらば彼等は既に非社交的『非國民』的と考へられて居るのである。此點は昔時同様なる反抗のために生きながら松明とせられて皇帝の宮殿の庭を照し、或は演技場に於て獅子の餌食とせられた人々の運命と似通つて居るのである。我等は近代的偶像の幾つかを擧げたのであるが、然し彼等の背後にある守護神はロマ時代に於けるものと同であつて、其古たるとき今たるとを問はずたゞ形を異にせるのみで内容は同一である、さらば、わが子よ爾曹みづから愼みて偶像に遠かれ、との使徒の勸告は時代と共に消滅したものではないのである。

なほ他の意味で近代的複雜なる文明に伴ふ所の人工的狀態はいやまされる惡の源因であつて、すべての智慧ある人々に向つてもつと自然の狀態に歸るべく聲高く呼んで居るのである。そして、しかも之は個人〳〵の基督者に對する叫である、世は已に其行かんとする途を撰んだので、引返される事をしないであらう。

生活と幸福の必須品はつねに自然より、土地より來るのである。しかし文明が進むに從つて人々は層一層多く自然の富源との直接接觸より遠からんとし、個人と之等自然の源泉とをつなぐ人工的連結線は一層長く且困難となるのである。個人個人はより一層他人に依屬せねばならなくなり、生活の必須品に對して層一層一般社會に依屬せねば仕方がないやうになつて來た。

原始的百姓は、自由なる職師達のことはいはずとしても、獨立的生活と周圍の誰もと事實上同樣なる程度の幸福なる生活をなす力が十分にあつた。そして自然の供給を直に支配し得るとの此自覺は彼に屬する社會との一切の交渉に於て自由なる契約者の立場に彼を置いたのであつた。大多數によつて彼の智能が嚇されたり或は良心が曲げさせられたりはせない。然し進んだる文明に附物である勞働の分業化は、生活の必須品の爲にも社會上及び産業上の輪の一輪齒の運轉が凡ての他の輪齒及び凡ての他の輪の運轉に依屬せねばならなくせしめられて居るので、一事を有効に爲すために全訓練

が施され、そして其仕事の熟練者となる事はつねに彼の一般智識を犧牲にし、又彼の獨立を犧牲にしてなされるのである。そして中年後になつて彼は彼に襲ひ來る所の社會的又經濟的壓迫を感ずるのであるが、然し之を如何ともなし能はざるは恰も彼が潮の滿るのや遊星の運行を如何ともなし能はざると同じである。彼は勞働者の示威行列にも參加せねばならぬ、若しそうしなければ必ずや破滅に陷落せねばならぬ事を知つて居る、丁度野牛や牝犢が驚き逃ぐる時足を折つて倒れるやうなものである。そして此事を自覺することが彼をして一個の去勢せられし者の如く、奴隸の如き者となして彼の一切の行爲につきたゞ神に對し個人的責任を有する者たることを忘れしめ、一層他人に隷屬せしめ、又彼より永遠者の自由なる息子としての特權を奪ふた所の人工的條件に依賴せしめんとするに至るのである。

　ヘンリージョージが悲しくも指摘せし如く、之等の傾向は我等の進歩せる文明と不可分的に結合しておるのである。パン行列（貧民が施與にあづからんとして行列を作

つて立つて居る事）が近代進歩の自然的所産である事は恰も自働車がそれであると同じだ。ジョージは社會を教へて萬人夢想の殿堂に通ずる門戶を開放せしむる『開門の呪文（オープンセサミ）』を誦せしめんと試みた。然し大衆は愚鈍な學生であることがわかつた、よし彼等が此の呪文を學んだとしても、此新しき呪文の智識は人間性質の基本を變へるものではないのである。彼の救治策はエホバがイスラエルに對して與へられし土地法への復歸の如きもので、利已心と罪惡の世にありて一般に普及するには餘り過ぎたものであつた、いつになつても『白い口傘と威張りくさつた象』とは、衣とてはたゞ腕を包むもの、食器とてはたゞ木椀一つより持たない人々と一緒に同じ世界に殖えて行くのである。大理石の殿堂と摩天閣とは其補遺として汚（ムサ）くるしい長屋や搾取工場（スウエトショップ）を有するのである。そして人智を絞つた一切の恩恵的法律上の施設もたゞほんの一部分之等の狀態を輕減するに過ぎないのである。

教訓は近代バビロンの惡環境より遠からんと欲する個人、家庭に對してである。都

市より出で、土に還れ、天の自由なる空氣に還れ、そこでは男子も女子も他人に對する不斷の依賴心より免れ、そこでは彼等の子女を外部の惡環境より防禦して訓育する事が出來、又そこでは誰もが自然及び自然の神と顏と顏とを合せて交る事が出來るのである。之は近代奴隸解放の宣言であつて、彼と其神との間に何物をも立塞かるを許さない決心をなせる凡ての人に向つて鳴り渡つて居るのである。

四、もう一言だけ。最後に擧げたが然し決して最小なものでない我等の義務は、自然の書と默示の書との間に存する調和に關する之等の新しき且はげましの眞理を世に傳へる事である。敎會が今有てる如く、自然界の大眞理が轡を揃へて敎會の援助に出で立つた事は比較的新しき經驗である。之は新しき經驗である、敎會自身が地質學者や生物學者を拉し來つて彼等の寵愛せる敎科書（聖書）の文字其儘を少しも削引加減せず、亦翻譯の間違だ、後世の挿入句だ、記錄の不完全だなどの言譯を要せずして、之を支持せしめ得る順番となつて來たのである。しかしこれが現時の形勢である。今

度は進化論者が逃げ隱れねばならぬ番となつた。何となれば、代々に亘つて携え來つた神よりの案內書を外にしては、又個人と國民とに對し恒に成し來つた聖業の歷史的記錄を外にしては、此二十世紀の敎會は近代科學よりも勝りて有力なる保證、卽ち敎會の神より出たる事の證明、より眞實なる友人、より勇敢なる援助者且保護者を他に有たないのである。此の二人の姉妹の間柄は永い間おせつかいな人々が中に入つて互に一人を他人に惡様に誘つて離間策を取つたのであつたが、今は以上述べたやうな關係になつたのである。

時代の警鐘は打鳴されて居る。敎會の機會の門戶は廣く開かれた、そして千百の光に輝されたるプラットフォームから再び彼女の主の御言を耳そばだて、居る世界に宣ふる事を得るのである。空しく新用語を學ばんと努めたり或は彼女の福なる音信を近世ノースチシズム(ModernGnosticism)の術語や形式に飜譯せんと苦心する代りに、ペンテコステの言語がやはり彼女を待てつる群集には一番判り易い言語であり、人心に達

するに唯一の有効なる言語であるとの事實に覺醒するは彼女にとりて如何ばかり愉快な事であらうか！　そして凡ての人に福音を宣傳せよとの主の命令に服從して彼女が再び世界視環の焦點に踏み入るに當つて、主の御臨在の約束は其の命令と偕に廣く且永きものたるを憶えしめよ。



附錄

附錄 A

著者は地質學的想像說を大に好まないのであるが、友人等の懇請に默し難くこゝに普通甚だ利益の乏しい仕事に其手を染める事となつたのである。併し或人々は今なほ如何にして世界的大洪水が起り得たかにつき思ひ惑ふて居るやうに見ゆるを以て、次の事實を擧ぐれば斯る事件は決して不可能でなく否寧ろそうありそうな事であることが判明するであらう。此より以上に我等は進むことが出來ない。玆に擧た事實は科學的に立證せられたるものであるが、しかし讀者は之を以て聖書にある洪水の源因或は方法が論證せられたものさいふてはならぬのである。本著者がその『地質學基本』に示した如く、大なる世界的異變があつたさいふ一般的事實はカルタゴの滅亡或はモス

クツの火災と同じやうに十分立證せられたのである。然し此の事件の正確なる源因と方法とは臆説に屬する問題である。

地軸は其軌道面に對し垂直でなく、垂直より約二十三度半傾斜して居るのである。此位地の天文學的源因は不明である、併し地球の此の天文學的習慣が一度確定するや、之を變化せしむるに足る源因は、之を確定せし御方の直接意志の外に之有りとは考へられないのである。そして若し斯る變化が可能であると假定し、又地軸は先には垂直であつたか或は今よりは傾斜が少かつたと假定し、そして或る外的源因が之を現位地に變へた、しかも急激に變へたと假定せば――其の變化は考も及ばぬ程大なる、我等の問題が要するよりは遙かに大なる地質學的仕事をなすに十分なる勢力を放つた事となるのである。

以上擧げし最大限度(マキシマム)より遙か少さき變動を想像し、之を土臺として計算がなされた。地球は巨大な獨樂(こま)のやうに『ヨロヨロし始め、そして獨樂が廻り止まんとする時

になすやうに地球はなほも續いてヨロヨロし」（ホートン Houghton）遂に其新しき回轉位地に自らを確立したのである。そうする間に其の表面は想像以上に打碎かれ又轉位せしめられたであろう、そして日に二度宛大洋は大海嘯（tidal wave）を地球の上にのし上げ、百五十日目に其が最大限度に達し（ツキスデンの計算による）即ち赤道に於て高さ約六哩に達したのである。そしてラッセル（Russell）及びホプキンス（Hopkins）が最初説明せし如く、海嘯は眞の轉移波であつて、水の全部が底まで如何に深くとも、移動するのである。そして其潮流は赤道に於て一時間一千哩の速力で動くに至るとせられて居るのであつて、再びこゝにも我等の問題に要するよりも遙かに以上のエネルギーがある事となる。流動せる水の運送力は其速度の六分の一に比例す、されば若し速度を二倍にせば、潮流或は移轉波は六十四倍の重量の物體を動かすに足るのである。一時間百哩の速度で相當な量の潮流は山々を根こぎにするであらう。一時間一千哩の潮流が何を成し能ふかにつき想像を回らす必要はないのである。

今地球上の水の量を考察するに、地球表面の約七十二パーセントは水であり、二十八パーセントが陸である（ワグネル）(Wagner)。大洋の平均深さは最初ムレー（Murray）が計算せし如く約一萬三千呎であると今考へられて居るが、陸地の平均高さは僅かに約二千二百五十呎である。其故に海の深さは陸の高さに約六倍して居り、そして海の面積は陸の其に比して約二倍半大なるを以て海面下の水の分量は其上の陸地よりは約十五倍大であるのである。それで若し現在の陸地が全部水面下に沒するものとせば其ために水は僅かに數百呎丈高まればよい、現時往々にファンディ灣（Bay Fundy）に起る所の高潮の約五六倍の高さに達すればよいわけである。なほ考ふるに、若し地面が平均に一樣の高さに平にならされるならば、水は其全面を九千呎即ち約一哩半の平均深さで覆ふこととなるのである。

此問題を圖で示さんとせば黒板に直徑七十九吋の圓か或は其圓の一部分を引く。そして此圓は地球をあらはしたものとせば、最高の山は極めて輕微なる・〇五五吋の高

さの突起であらはせられ、最深海は・〇六吋の窪みであらはされるのである。そして陸地の平均高さの如きは白墨の如き粗末なものよりはもつと〳〵正確緻密な機械でなければ書きあらはす事困難であつて、普通の室の一隅からは見別けがたき程度のものである。

之に由て觀るに、如何に僅小なる動搖が此の均勢を破つて大洋を陸地の上に漲らす事が出來るかを知るのである。實際、有史以來大洋が其境界線をあのやうに守つて陸を侵す事が稀であつたのは不斷の奇跡の一といふ事が出來る。『此までは來るべし此を越べからず、汝の高浪こゝに止まるべし』

サー、ウヰリアム、ドオソン（Sir William Dawson）の著書の一に（余は確實な箇所を指摘し得ないが）此の碩學の創世記八。三『是に於て水次第に（欽定譯聖書の餘白に「行つたり來たりして」とある）地より退き百五十日を經て水減り』に對する註解があつた、ドオソン氏のいふに、こゝの原文の意味は海嘯的運動をさしたものである

と。そしてこゝの關係にある『大淵の源』とは大洋を指していふたものとなすのは決して彼一人ではないのである。されば之が聖書にある洪水の重なる源因と見得るのでノアは勿論天より注がれし瀧の如き大水を一層感知したであろうが。そして創世記に二度も載せられてある百五十日はホートンやトウキスデンの計算せし海嘯的運動の最長時期の光に照す時、甚だ有意義なるを思はしめるのである。

海嘯的運動の與へた結果に對する此部分の臆説は、我等が岩石土壤に於ける記錄を驗ぶるに當りていよ〳〵其確實なるを證せられる。といふのは邪曲なる學說に催眠術をかけられたる者でなければ、相當なる觀察者であつて大なる地質學的堆積の殆んどすべてより、海嘯的運動の記錄を讀み得ない者はないと考へられるのである。斯てノヴアスコシヤ(Nova Scotia)の南ジョギンス(South Joggins)には石炭の七十六連續層がある　英本國では八十七の石炭床があり、南ウェールスでは百以上、其中七十は巳に開掘せられ居り、大陸のリエージュ(Liege)では八十五、ウエストフアリヤ(West-

phalia）では百十七床ある。之等の地方のすべてに於て、之等の連續床は各々同一のものゝ重なり合ふたものである、少くとも其化石内容に關してはそうである。そして之等の層は或は板泥岩、或は砂岩、或は石灰岩、しかも屢々甚だ極似せる性質のものを以て交互入れ雜つて居るのである。之に由つて知る所は各々特別の種類のものは其自身の地域より出でたもので、聖書にいふ水の『行つたり來たり』する前後の交互運動が之等の堆積を生ぜしめたものであるとの事である。余は地水火風の近世的作用につき知れる光に從ひ、又一樣性說が十分なる機會と殆んど一世紀に亘る獨占的立場を占めしにもかゝはらず全く破産せし結果より見て、以上の考案は其地方に於ける岩石記錄の最も明瞭なる讀方であると大膽にいふのである。

洪水の蓋然的源因につきては之で止めておかう。併し世界がかゝる大破壞より如何にして恢復し得たかは、先きにも逃し如く、一層困難な問題であつて、奇跡的干渉を想像せしむるものである。されど今日なほキリストの復活や受肉の如き奇跡を信ずる

者の幾多ある事は感謝である。そして此の洪水をも彼等は其信ずる奇跡の一に加へる事を躊躇しないであらう、石さえも叫び出して居り、近世科學も亦いや〳〵ながら其認定をあたへて來た時であれば。幾百萬の殉教者等がためにて生命を捐てし所の信仰は、單に『非科學的』と嘲らるゝを怖るゝよりはもつさ〳〵ヒドイ迫害に堪えて維持せられて來たものであるのである。

附録 B

余の讀者の或者は余の著である『地質學基本』を未だ讀まれなかつたであろうとの想像の下に、こゝに地質學的時期の問題に關し一言述べて置く必要があると認めるのである、斯くして或は陷らんとする誤解を防ぎ、或はやはり同じ危險のある批評又は誤說を遮りたく欲むのである。

著者が他の所で指摘せる如く、眞の歸納的地質學體系は地質學的變化の如何なるものについても或は其全部についても、決して其が幾許以前に起つたものであるとはいはないのである。其と共に其等の變化はみな同時に起つたのであるといふが如き分りきつた不合理な事をもいはないのである。コロラド河の峽谷の最底床は明かに其頂上にあるものと同時に堆積したものではない。又一方に於て、其化石の故を以て同年代のものと分類せられてある岩床の或ものは、地質學的意味でいへば、同時代のもので

ない事がまた明かである。例へばペテログラード附近のバルチック沿岸にある寒武里（カムブリアン）亞床は、そこでは『岩石は原形の垂直堆積狀をなほも保持し、埴土はまだ硬まつて居らず砂礫もなほ凝結して居らぬ』のであるが、（第十一版、大英百科辭典 五卷八十六頁）此岩床が、殆んど原形を認識し難きまでに變形せられ、他の岩石の山の下に深く埋沒せる所の他の岩床と同時代のものであるとは、どうしても時代の常識的證據が許さないのである。此の岩床に關しては此科學の初代に於てセヂウヰク（Sedgwick）とモルチソン（Murchison）との間に激論を生じたものであつた。しかし今行はれて居る説は之等の岩床を同時代のものとなすのである、其反對の常識的證據が一杯であるにかゝはらず。そして又現今の學説はいふのである、カリフオルニヤ及び英蘭土の軟性第三紀層、海上に隆起して未だ餘り時期を經過したものでない物理的證據が十分にある所の數百哩に連れる表面堆積が、アルプスにある其等の山嶽的片岩（シスト）と同時代のものであること。此の片岩の發見はウエルネルの洋葱皮説の妄誕を第一に動搖せしめしも

ので、又其發見はチッテルのいひし如く、『凡ての片麻岩と片岩』との 太古代或は寒武果亞前代說を懷きし地質學者にとりては『甚だ大なる打擊であつた。』

又眞の歸納的地質學は、珊瑚或は海百合の石灰岩の一見不動搖の山嶽が一夜の中に其原狀で出來たものとはいはないのである。余は化石其物が化石堆積の或種は他のものより一層古いとか或は一層若いとかいふ證據にならぬといふ事を示し得たとしても時代を識別するための他の常識的試驗がなほ存する事を希望するのである、實際キユヴエー（Cuvier）やライエル（Lyell）の催眠術に永い間かゝつて居つたため之等の常識的機關までが退化して役に立たなくなつて居ないのであれば。之等の試驗法は我等に殘されてあるのである、それで地質學の仕事はも一度新しく、地質學的出來事の系統を立直す事である。しかも此度は理論を少くして、もつと客觀的事實に隨ふて、そして結果として若し我等が、此の大なる世界異變（大洪水）に明かに其起源を歸し得る所の其等衆多の地層堆積を、其前の『不確定』なる時期間に堆積したと考へらるゝ

地層より、或は其以後に起つたものより區別し得ば、之を以て滿足する程度で取掛る必要があるのである。併し若し我等が之等の問題に關して確實でないならば、少くとも我等は根據なき推測を下すが如き過去の悲しむべき愚擧を敢てしてはならないのである。若しも之等或は他の岩石に關する問題が我等の解決し得る以上のものであるならば、少くとも我等は正直にそう言うてはどうか。我等は我等の有限なる心を以て宇宙の謎の凡てを解く事を要求せられて居ないのである。

多の現象は單獨に考へる時、此の大なる世界異變は餘程遙か昔に生じた事を示して居るやうに見えるのである。そして連續せる地質學的出來事の間に存せる中間證跡の多くも、之を一つ一つ一樣性說の根據に基いて考へるならば、やはり永い時期を想像せしむるのである。然し我等は斯る問題を科學的方法で其近接點に於てでも決定する事は望まれないのである、過去の失敗の悲しむべき經驗は我等に謹愼と警告とを敎ふるものである。**眞正なる地質學の斷言し得る所は、此の世界異變は人間及び動植物の**

生命ある種（スピーシース）の衆多が地球上に出現した後に起つた筈である、といふ事である。考古學と聖書年代學とは各々其立場に立て或は近似的年代表を立てんと勉めるであらう、併し地質學は單に相對時を取扱ふのであつて、岩石より絶對時を讀まんとせし過去の如何なる方法も其等は少しも科學的價値あるものではなかつた。

それにもまして地質學は岩石の中に化石となつて發見せらるゝ動植物種の起源に關しては何もいふ事を得ないのである。地質學は世界の廢墟について語るのであつて、其元始につき語るのではない。若し我等が化石の如何なる種類も他のものより本質的に且必然的により古いとかより若いとか證し得ざる事を知り、そして此事よりすべて種々なる生命タイプは多分同時代に一緒に生ぜしめられたものであると推定しても、（之は科學がいひ得る限りの凡てであるが）我等は科學の名を以て此問題に獨斷說を下さぬやう注意せねばならぬ。若し我等が只自然界のみより世界發生の全歷史を讀み得るものとせば、我等は創世記の最初の數章を必要としなかつたかも知れぬ。

併し之等の問題は余の『地質學基本』の中に詳しく論述しておいたから、余はこゝで此問題をこれ以上引延す必要を認めないのである。

附錄 C

地質學は人類の初代に於て如何なる環境が人類を圍んで居つたかの問題に對し多の光明をあたへるものである、しかし未だ其當時人間自身の肉體的習慣或は社會的風習につきては殆んど何等知る所はないのである。

先づ氣候の事を考へやう。サー、ヘンリー、エイチ、ハウアース（Sir Henry H. Howorth）の紀念的著作の光に於て、之は氷河說を反駁したものであるが、又確定的なる連續年代說の失敗に關する余の著作の光に於て、もはや種々なる化石層の間に存するといはれた年代の無稽なる區別に關しこゝに何もいふ必要を認めないのである。大洪水は人間の生活せし世界を前後に分つ所の大なる不滅の境界線を劃したのであつた。そして洪水前の世界は不斷の春の如き氣候を享樂したのであるとの地質學的證據は孰れも一致して居り且疑問の餘地なきものであつて、其狀態は氣候的にも又大氣的

にも眞に驚くべきもので、若し客觀的證據がなかつたならば、我等は其の可能さへも信じ得ない程で、ましてて其源因を探る事などは到底出來ないのであつた。棕櫚や他の熱帶的植物が英國に繁茂し、常春藤や木蘭屬の如き常盤樹が（他の半熱帶或は溫帶植物につきてはいはないでも）北極圈内にまで成長して居り、其等の植物より成りし厚き石炭層が其地方全體に散見せられるのである。珊瑚や他の溫帶海生物が地球の同じ部分に豐富に見出されるのである、それと同時にシベリヤに於ける象及び他動物の『木乃伊』は彼等の繁盛せし時の氣候が『急激に停止せし』事（ダナのいふ如く）及び『急に冬の一夜の如く嚴寒となり、其後少しも其が回復せざる事』を示して居るのである。之は事實である、想像ではない。

此の溫暖にして平均せる春の如き美しき氣候は、鬱葱たる植物の繁茂に便利であつた。ミルトンが描寫せる最初の夫婦が其の元のホームより追出されし荒野とは斯の如く美しき又豐饒なる所であつたゞいへるに對し別に科學的に反對すべき理由は何もな

いのである。其エデンのホームと比較すれば世界の他の部分は對照で荒凉たるものと見えたのであつた。

"Some natural tears they dropt, but wiped them soon;
The world was all before them where to choose
Their place of rest, and Providence their guide;
They hand in hand with wand'ring steps and slow,
Through Eden took their solitary way."

『自然と涙は流れしが、それも直に拭去られ、
全地は彼等の前に其撰ぶに任せられ
彼等に安息の地を供した、天は彼等の案內者となり、
彼等はよろめく足もとはかどらず、手に手を取つて
エデンを逼つて彼等の寂しき途にいで行つた。』

殆んどエデンの園の如く、自然が食物とあらゆる快樂とを豊かに注げる斯る樂しき環境裏に最初の人類は、なほ暫らく天使との交通を有し、其等天の教師等の靈感的來訪を享樂し乍ら、約二千年間増殖且生活し來つたのである。然るに僅少者を除く他のすべての者のいやまさる罪惡が、自然の豊富な賜物を却つて禍と化し、彼等の人間性を放肆安逸の中に又殘忍暴虐の中に墮落せしめ、斯て大なるヱホバをして遂に凡て此等の樂しき環境を變へしめ、食物の豊かなる供給を取除き、人生をして生存のための惡戰苦鬪場たらしめるに至つたのである。斯て人類となほ生れざる子孫に對する眞實にして賢こき愛より、彼は——

"Called for a cloud to darken all their years,
And said, Go, spend them in a vale of tears."

「雲を呼びて、彼等のもろもろの年を曇しめ、
行け、行きて彼等を涙の谷に埋めよ、とのたまふた。」

彼等の元の環境とは全く異れる氣候と植物の周圍の中に、洪水より生殘りし僅少者は浮べる避難所から出て行つた、外では地水火風の激戰が美しき世界を變て之を寒熱の恐しき兩極端をもてる荒涼たる荒野と化しつゝあつた間、神は彼等を其避難所にかくまはれたのであつた。此の變化せる世界にありて彼等は不斷の勞苦に服するか、若くは實際の餓死に遭ふかいづれかを撰ばねばならなかつたのである。火の用法、動物の馴養、種々なる穀類の有用など、つまり農業と建築との實際的學問全體に關してどれ丈の智識を人類が携へ行つたか知る由もないのである。されど最近まで天使等と交通し、彼等の教授で自然界に關する大事實と理論を學んだ者であれば、其の新しき不慣れなる境遇下にありても全く途方に暮れるやうな事はなかつたであらうと想像しても無理ではない。併し一事はおのづと明かである、彼等は今や之等の事柄に關し知れる丈の凡ての智識を用ゐて、荒廢せる土地よりやつと生活を支へるに足るものを搾取せねばならぬ狀態に置かれて居つたのである。

やゝに彼等は增殖し、其不休の勞作に由り漸くもつと安樂になつた、然るに洪水前の人類に神の審判が降下せらるゝに至らしめたと同樣の特徵が再び現はれて來た。そして再び同じ權力が人類未來の幸福に對する親切なる配慮より、彼等の中央集權と人類個々の單位の凡てを支配せんとせる計畫を無効ならしめたのである、即ち彼等を地の面に散らし、異れる國土に於て別々の國家を創めしめたのであつて、其等の國々は其後『鐵と泥土との相合せざるごとく彼と此と相合することあらじ』（但二。四十三）

斯の如く彼の第二のホームから無理強に外に追出されたる初代人の驚嘆すべき製作物は現今殆んど全世界に亘つて發見せらるるのであつて、現在退化せる子孫等が其先祖等の嘗ては如何なるものなりしか或は何を成せしかにつける一切の智識を失へるが如き土地に於てさえも發見せられるのである。そして之等初代人の製作物は凡の大陸に散在して居つて、其等は最も著しき類似を表はして居るのである。其の類似たるや

實に顯著なもので、之等人類の散在せる破片が斯く散される前に建築或は文明の他の技術に於て甚だ著しき進歩をなして居つた事は疑ひなき結論の如く見ゆるのである。

彼等は如何にして斯の如き驚くべき建築物を建てる事が出來たか、器械さては岩石や鑛物より各々造り出した粗末なもので、兎も角も或る時期までは、忍ばねばならなかつたであろうに。又彼等が如何にして斯の如き仕事を工案計畫し、且其上に之を完成にまで忍耐を以て實行し貫く崇高なる勇氣を有せしかは我等凡にとりて謎である。確に、英國に於けるストーンヘンジ、(Stonehenge=supposed ruins of a Druidical temple.) 或はイリノイス州に於けるカホキヤ塚、(mound of Cahokia) 又は舊新兩世界の大部分に散見する岡宮や神殿など、巴比倫のニムロデ、バース (Birs Nimrud) や 埃及のスフキンクス (Sphinx) や ピラミッド (Pyramid) の事はいはずとも、之等を築造せし人々に比ぶれば スエスやバナマを掘つた人々は 餘り誇る所がないといはねばならぬ。又約四五千年前諸所方々に散つて居つた、かの自然の觀察者等はそんな古代

に於てすら天文學の主要な原理の凡てを解して居つた、(地球の球狀說をも含めて)又其の驚嘆すべき製作品に於て彼等は普通工學や機械工學の重な法則の凡てに通じて居つた事を示して居る――之等の人々と比較して余は近代の誇張に對して餘り理由を見出し得ないのである。助となる便宜をもたずして彼等は不思議を行ふた、あらゆる便宜を持ち乍ら我等は餘り彼等以上に出でない、否多の點に於て遙か以下である。我等は發達に由つて彼等より進化したのか、或は退化したのであるか？

科學と聖書信仰　終

科學と聖書信仰

（奥附）

昭和二年四月一日印刷納本
昭和二年四月六日發　行

定價金貳圓
送料金十六錢

著者兼發行人　東京府下淀橋町柏木三九一
一宮政吉

印刷者　東京府下西巣鴨町池袋一、一四三
青野郎本

印刷所　東京府下西巣鴨町池袋一、一四三
使徒行社印刷部

發行所　東京府下淀橋町柏木三九一
東洋宣教會出版部

大賣捌所　東京市麴町區飯田町二ノ五三（九段坂下）
向山堂書店
電話九段33　三二九〇番